ゲームの世界で第二の人生！？

シェイフォン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゲームの世界で第二の人生!?

【Ｎコード】
Ｎ４７０９Ｗ

【作者名】
シェイフォン

【あらすじ】
目が覚めると俺はゲームに良く似た世界にいた。
それだけなら別に構わないが、薄汚い路地裏で寝転んでいた浮浪児からスタートだなんてどんな上級者プレイだ?
まあ、良いだろう。
おれはこのゲームをかなりやり込んでいるからこの程度で心が折れることはない。
さてと、ログアウト出来ないのは放っておいてまずは生活できるほどの環境ぐらいは整えるか。

人物紹介（前書き）

これからどんどん加筆していく予定です。
書き込む順は私の気まぐれですが、主要キャラは全員書き込むのでご安心を。
ネタばれを含みますのでご注意ください。

２０１１年１２月７日更新

人物紹介

ユウキ＝カザクラ
本編の主人公。
突然訳も分からずゲームとそっくりな世界に飛ばされたにもかかわらず慌てなかった。
これは本人は夢だと考えていることが起因している。
そのため己の行動に対する責任というのが曖昧で、キッカ達浮浪児と同居するなど常識では考えられない行動を取る。
技術や調合がチートであり、材料さえ揃えば作り出せないものはない。

第1章登場

ティータ＝エルマライ
主人公が足を向けて寝られない人物。
主人公が生活の糧を得るために訪れた薬屋のお姉さん。
栗色の髪の毛をポニーテールにして眼鏡をかけている。
気さくな性格からか交友関係は驚くほど広い。
エルファとは旧知の仲である。

キッカ＝カザクラ
主人公が拾った浮浪児その1。
活発な性格でそのエネルギーを表し、髪も瞳も燃える様に赤いのが特徴。
気安い性格をしており、誰にでもフランクに接することが出来るので人気者である。

主人公に拾われる前は４人組のリーダーとしてスラムを生き抜いていた。
冒険者を志望しており、将来は前人未到の地を踏破することが目標。
アイラ達を仲間と表現するなら主人公を親と考えている。

アイラ＝カザクラ
主人公が拾った浮浪児その２。
キッカとは正反対の冷静沈着な性格をしているが、思い込みが激しいのでたまに暴発する。
青い髪と切れ目が特徴で、周りに油断ならない人物という印象を与えている。
諜報や謀略の類を好み、合理性を追求するので容姿にはそんなに拘らず、髪も短く切り揃えている。
主人公に拾われる前は、４人組の頭脳として活躍していた。
主人公を主として捉え、絶対の忠誠を一方的に誓っている。

ユキ＝カザクラ
主人公が拾った浮浪児その３
無口な少女で何を考えているのか本人以外誰にも分らない。
浮浪児なので何の教育を受けていないにも関わらず王国最高峰の魔法学校に入学出来た。
ある意味主人公以上のチート能力保持者。

クロス＝カザクラ
主人公が拾った浮浪児その４
大柄な体格と優しい性根の持ち主。
その体力はどう学年でも飛びぬけており、一人だけ成人年齢が受ける訓練をこなすことが出来る。
主人公はクロスを成人だと疑っているが、キッカ達は主人公や自分達と同じ年齢だと言い張っている。

攻撃よりも防御に関心があったので主人公はクロスにファイアーエムブレムに登場するアーマーナイトに近い鎧を装着させた。

第2章登場

エルファ＝ララフル
主人公のメイド
鮮やかな緑色の髪と白磁の肌、そして顔のほりが深いので人形のような印象を与える。
主人公に対しては結構厳しく、辛辣な言動を行うことが多々ある。
元暗殺者で現在は人を殺せなくなったのでメイドをやっている。
今の居場所を大切と考えており、それを守るためなら手段は問わない。

サラ＝キュリアス
主人公を師匠と呼ぶ鍛冶屋の娘。
主人公が作成した武器に感銘を受けて自ら弟子入りを願った少女。
くすんだレンガ色の髪や同年代と比べてやや長身で筋肉質なことから年上だと見られる場合が多い。
天才型の人間で、鍛冶に関しての才能は底知れないが、それ以外になると全く駄目である。

ヒュエテル＝クーラー
いつも優しい笑みをたたえる貴婦人。
全てを包み込むような包容力を兼ね備えている。
彼女がスラムを解体しようとしていたので、主人公が協力を申し出て現在に至る。
人物を見る目があるらしく、ヒュエテルが目を付けた人物にまず外

れはない。
そのため単身ジグサールへ向かった主人公の護衛を選んでいる。

第3章

フィーナ＝レグリアス＝ツバイク
ツバイク伯爵の双子娘の姉。妹のレアと違って奔放な性格なのだが、相手の警戒心を解かせる雰囲気を持っている。だから主人公はフィーナを外交兼営業に当てている。
体型は妹と全く同じで、ここまで酷似している双子は珍しいとのこと。
海の様な青い髪と深い色の瞳を持ち、顔立ちは綺麗にまとまっている。胸はあまり無いが、それを欠点だと思わせないほどしなやかでスレンダーな体つきをしている。

レア＝レグリアス＝ツバイク
ツバイク伯爵の双子娘の妹。姉とは正反対の物静かな性格で何でもそつなくこなす器用な人物である。特に事務系が得意なので主人公は都市の内政全般をレアに任せている。たまに実の姉にする言動ではないことをしてフィーナと主人公を驚かせることがある。

間章

ククルス＝フォンテジー
竜騎兵軍団副隊長
キッカの頭脳。
人を動かす能力に長けており、浮浪者を兵に仕立て上げた手腕を持つ。

栗色の髪の毛と大きな愛らしい瞳から小動物の様だが中身は腹黒く、キッカ以外の人を陰で罵倒しているがかなりのドMであり、キッカに苛められることを心の底から喜んでいる。
想像できない読者は恋姫無双に登場する桂花を思い浮かべてくれれば良い。

オーラ＝ユクエリス
諜報部隊副主任
「鬼がアイラなら仏はオーラ」と呼ばれている。
加減出来ないアイラのブレーキ役を務める。
金色の髪と堀が深い顔立のため人形の様な美貌を持ち、気さくで誰にでも分け隔てなく接するが、一番になることに固執し、陰でアイラを虐めていた過去があるが、色々あって今ではアイラの一番の理解者となっている。アイラが容赦なく弾劾して傷心した隊員をよく慰める。
薬のせいで体が小さくなってしまったが、オーラはあまり気にしていない。

ミア＝キャストウイッチ＝ヴァルレシア
魔導騎士団副団長
ヴァルレシア侯爵の長女
ユキは口数が少ないので代わりにミアが魔導騎士団を纏めているので実質団長。
幼少から男として育てられたため男勝りなボクッ娘。性格も社交的で紳士なため女性から人気がある。ユキの様な可愛い者を愛でるのが好きという困った性格をしている。
モデルはアイドルマスターの菊池真。

レオナ＝カリスリン
ジグサール騎士団副官

クロスの元教官で現在恋人
用兵術は天才的で昔はエリート部隊である王国第２騎士団を率いていた。
常に礼服を纏って金色の髪を腰まで伸ばし、ある事故が原因で右目に眼帯をしている。特徴的なのはその豊かに突き出た胸であり、それがあるから彼女が罵倒をしても兵隊は喜んで従う。
ヘヴィーオブジェクトに登場するフローレイティアに金髪＋眼帯を付けた姿。

第４章

ベアトリクス＝シマール＝インフィニティ
シマール国第１王女
腰まである見事な銀色の髪を持つ少女で儚げな印象を醸し出し、次の瞬間には折れてしまいそうな雰囲気を持つ淑女然なのだが、気に入った相手には不快にする言動をよく取る。一種のツンデレと言えるのだが、やられている方は堪ったものでない。相手の嫌がることをするのが大好きという最悪な性格だが、知略や謀略においては右に出る者はいない。

シクラリス＝バルティア＝ライソライン
バルティア皇国第２皇女
プラチナ色の髪と病的なほど白い肌を持ち、物憂げな表情を常に浮かべ、何気ない動作の１つ１つが気品に満ち溢れている。男尊女卑のバルティア帝国の教育方針によって彼女は他人を尽くすことに生甲斐を感じ、主の幸せが自分の幸せだと考えている。そのため普段は主人公のメイドをしている。

ヴィヴィアン＝リーザリオ＝トルツエン
リーザリオ帝国第３皇女
光り輝く金髪と女神のような容姿から彼女に心酔しているものは後を絶たない。指揮において知略においてもリーザリオ皇国随一で、まさしく完璧なのだがそれら全ては非凡の努力で手に入れたものである。実力があるため、無能な者が自分の上に立つのが許せない性格である。

エレナ＝グランシリア＝イーズルブル
シマール国貴族　爵位は子爵
２０代後半の女性で、１８０ｃｍを超える身長にボリュームのある赤毛。すっきりと通った目鼻とそして燃えるような瞳を持つ。性格も容姿の通りで直情的であり、臨機応変に対応することが苦手である。しかし、貴族としての能力は立派であり、自身も清貧を心がけているので領民からはすこぶる評価が高い。

キリング＝トリアエル
エレナ子爵の片腕
エレナと同年代で、肩口に切り揃えた亜麻色の髪そして片メガネをかけている知的な女性である。エレナ子爵が足りないところを彼女が補っており、暴走したエレナ子爵を無理やり黙らせることがあるなど２人の関係は上司と部下というより親友と呼んだ方がしっくりくる。

無一文から始まる（前書き）

始めまして、シェイフォンです。
経験を積んだ主人公というチートな能力を使って襲いかかる不合理から必死に抗おうとします。
剣術から裁縫まで全てＭＡＸレベルにまで上げた経験のある主人公がどのようなセカンドライフを歩むのか。
それを楽しんでいただければ幸いです。

無一文から始まる

気が付くと俺は子供になって薄汚い路地で倒れていた。

いや、冗談じゃないよ？

一応自己紹介しておこう

俺の名は火桜優喜。フルダイブ型ＭＭＯＲＰＧにどっぷりハマった高校二年生だ。

一応学校は通っている。ゲームが大好きだが平均点はクリアしている。

本音を言えば学校を辞めてずっとゲームをしたいのだが、それをやると確実に家を追い出される。

比喩じゃない、マジ話だ。

何せ内の親はやると言えば必ずやるタイプ。

どれだけ理不尽な約束でも絶対に履行するのだ。

……ヘタレと嘲っても構わない。

俺も自覚しているから。

閑話休題

俺の時代にはフルダイブ出来る機械がある。

ん？　それは何だってか？

それはヘルメット状の形をしたもので、脳からの電気信号を受け取り、そして逆に変換した信号を流すことによってあたかも現実に存在しているよう錯覚させる機械だ。

洗脳されそうで怖いと感じるだろうが、正直俺達にはこれが無いとまともに授業についていくことが出来ない。

何せ高校二年の授業で不確定性原理を応用した問題を出されるんだぜ。

教科書だけで解けるか。

機械に頼らないと出来るわけがない。

そして俺は文系だ。ついでに言えば理系はもっと恐ろしいぞ。

数字の羅列を見ただけで何を意味しているのか理解できるんだ。

スパイ養成課か、と思ったよ。

まあ、その機械のおかげで俺達は限りなく全能に近づいているがな。

普通の俺でさえ過去の名医と同程度の執刀が出来る。

また話が逸れた、すまん。

とにかく、俺はそのフルダイブ機械を使ってＭＭＯＲＰＧをやっていたわけだ。

まあ、やっていることと言えば、パーティを組んで魔物を討伐するのではなく、ひたすらにアイテムを作ってそれを売り捌いていたわけだけどな。

ダンジョンにはレア素材を探すために潜る程度だった程度だから国関連のイベントなんてほぼノータッチ状態だったな。だから今俺が街どころかどの国にいるのかすらわからない。

……国関連のイベントには現実のお金が必要なんだよ、貧乏高校生に払えるわけないだろ。

そのゲームはユーカリア大陸物語。

各プレイヤーは望みの職業になって冒険者になったり国を興したりと色々と自由度の高いゲームだ。

ここからが本題だ。

俺はいつもの通り学校へ行き、いつもの通り帰宅していつもの通りゲームを起動させた。

普通なら俺は拠点としている工業都市ジグサールから始まるはずだった。俺は大富豪で、その都市に対して影響力がある。顔もイケメンで背の高いハンサムなキャラクターだったはずなのに、俺は気が付くとどこか訳の分からない街の裏側で倒れていた。

さあ、どういうことだ？

眼が覚めた俺はまず始めにウインドウを開いて見た。

ウインドウに表示されるのは名前とステータス、持ち物や装備の他にゲームを終わらせるログアウトがあるはずなのだが。

「……ない」

その欄は空白になっており、目をこすっても変化が無かった。

どうやら不本意なバグが起こったのだと考える。

「仕方ない、しばらくここで生きるか」

喚いたり叫んだりしても意味は無い。それならば一度初心に帰ったつもりで始めからプレイしてみようと決めた。

「まずは何を持っているのか」

俺はもう一度ウインドウを呼び出して己の状態を確認する。

名前：　ユウキ＝カザクラ
装備：　武器　なし
　　防具　ボロの服
　　頭　なし
　　足　擦り切れた靴
　　装飾品　なし

持ち物：　なし
お金　０Ｇ
ステータス　なし

「……何だこれは？」

その惨状を見て愕然とする。

良いところが一つも無い。普通ならお金も３０００Ｇぐらいはあり、ステータスも幾らかは自由に設定できるはずだ。

ステータスというのはスキルの別称で、例えば剣を振るうとステータスに『剣』という項目とレベルが追加され、そのレベルが上が

るごとにＳＴＲやＤＥＦなどが上昇する。

ちなみに『短剣』のスキルが上がると『剣』と比べてＳＴＲよりもＡＧＥが上昇する。

そして、スキルが１から２に上がると能力の上昇は２または３程度だが、スキルが２０代だと能力の上昇率は２桁まで上がる。ゆえに満遍なくスキルを伸ばすよりのと、一つのスキルを伸ばすのではあまり大差ない。

閑話休題

これだとボーナスポイントを使わず、さらに所持金を全てどぶに捨てた状態だ。

そして、それ以上に驚いたのは。

「この容姿は何なんだよ」

見た感じ五年前の俺である。年齢は１２歳前後と言ったところか。

「まあ、上級者の俺にはちょうど良いかな」

初心者なら間違いなく匙を投げているが、生憎と俺はこのゲームをやり込んでいるマニア。だからこれくらいのハンデなど物の数ではない。

「とりあえず最初の目標は一軒家を持つことだな」

家さえ持つことが出来れば行動範囲がグッと広まる。薬を大量に調合出来たり鍛冶を出来たりとメリットは計り知れない……まあ、月々に税を納めなければならない欠点があるがそれは仕方ないだろう。

「さてと、じゃあ始めますか」

俺はそう呟いた。

しかし、俺はこの時、これから先に起こることなど想像すらできなかった。

手頃な空き地に移動した俺は簡易な調合台を作成する。

「まずはポーションの調合から」

ポーションとはＨＰを回復する薬の中で最も安価で親しみやすい類のだ。値段は一個５０Ｇと安いが、材料となる草はそこら辺に生えているので原価はほぼ０。まさに初期に作る物としては打ってつけだ。

「そういえば序盤の頃もこうしてポーションを調合していたよな」

何世代前のゲームとは違って材料を揃えてボタンを押せば完成という代物ではない。そして、このユーカリア大陸物語というゲームはフルダイブ機能を駆使してリアルを極限にまで追求した結果、現実と同じように調合の匙加減で成否が分かれるのだ。

まさしくリアル志向。

現実と何一つ変わらない。

ゲーム製作者に殺意を覚えるほどリアルだ。

「確かポーションの調合法は……」

俺は頭の中からポーションの調合法について引っ張り出す。

ああそうだ、確かああいう作り方だった気がする。

捨ててあった竈と槇を拾ってお湯を炊く。

沸騰するまでの間に材料の草をすり潰しておこう。

「……子供だから力がない」

普段ならシャシャシャとやってしまう作業が渾身の力を込めて行わなければならなくなっている。だからいつもの倍の時間と労力を費やしてしまった。

「さてと、次はこれらの材料を手順通りに放り込んで混ぜると」

まずアカイロ草をすり潰したのを加えて混ぜ、色が淡くなってき

たらアオイロ草を加える。ここから激しくかき混ぜて完全な薄紫にした後キイロ草を加えて今度はゆっくり混ぜて完成。

「まあ、上出来かな」

ポーションを調合しているうちに体が思い出してきた。俺の経験から言うとこれは良い部類に入るだろう。

確認のため出来たポーションを少し飲んでみる。いつも俺が作っている上質なポーションと比べれば劣るものの、市販品よりかは味も効果も高いと判断。

「さすがは俺、弘法筆を選ばずとはよく言ったものだ」

うん、満足。

そして俺はそのポーションを持って薬売りの店に行く。ここは様々な種類の薬を取り扱っており、その中にポーションが含まれている。

そして俺はその店の番人をしているお姉さんに声を掛けた。

「こんにちは、おねいちゃん」

ニッコリと、キッズスマイル全開で話しかける俺……気持ち悪い。

「あら、ボク。どうしたの？　お使い？」

まあ、そうだろうな。俺もお姉さんの立場ならそう判断するだろ

う。しかし、俺はお使いでは無い、営業をしに来たのだ。

「おねいちゃん、このポーションをどう思う？」

そう言ってガラス瓶に入ったポーションを見せる俺。

「あら、それは……」

お姉さんの瞳に真剣見が宿る。やはりそこはプロなのだなあと実感した。

光に透かしたり、振ってみたり味を確かめた後にお姉さんはホウッと感嘆の吐息を洩らす。

「ボク、これは凄いわよ。少なくともこの街にいる調合師じゃあ一個一個丹念に作ってもこのレベルは作れない。一体どこの調合師が作ったの？」

そう聞いたので俺はにこやかに自分を指差す。

「え？　ボクが作ったの？」

「うん、そうだよ。なら目の前で実演してあげようか」

お姉さんが頷いたのを見た俺は予め用意してあった原料を取り出す。

「それってそこら辺に生えている雑草じゃないの。もっと質の良い草を使用しないと飲めたものじゃないわよ」

忠告してくれるは有り難かったけど、俺は首を振った。

薬売りの店の奥には調合台が備え付けている。やはりこのお姉さんも調合師の端くれなのだろう。

「じゃあ、作るからよく見ておいてね」

そう宣言して俺はポーションを作り始めた。

昨日と手順は似ているが微妙に違う。今回はアカイロ草と一緒にアオイロ草を加えたり、薄紫からさらに透明になり始めた所でキイロ草を追加したりしていた。

お姉さんの言う通りに、これらの草は生えているのよりも栽培した方が手順の変更がなくて楽だが、その分お金がかかる。

と、言っても一草3、４Gなのだが、それでも今の俺にその出費はきつかった。

どうせ俺はこれ以上の難易度を誇るエリクサーを何度も調合しているし。

あれはきつかった。ほんの少しでも力加減を間違えると失敗。しかも嫌らしいのが、エリクサーは失敗した時点には現れず、完成してからその失敗に気付く点だ。

あれで何人ものプレイヤーがエリクサーの調合を諦めたか。

「はい、完成したよ」

そう昔の思い出に想いを馳せている内にポーションが完成したようだ。それをコップですくってお姉さんの前へ持っていく。

お姉さんは目をまじまじと見開いた後、それを口に含んだ。

「素晴らしいわ」

しばらく咀嚼した後にそう吐息を洩らすお姉さん。

「これはすごいわ。私の人生の中でもこれほどのポーションにお目にかかったことはない、これなら５０Ｇと言わず、１００Ｇでも売れるわ」

早口に捲し立てるお姉さん。それを見た俺は手応えを感じて切り出した。

「ねえ、おねいちゃん。提案だけど、このポーションをここで売ってみない？」

博打よりも安定的に収入を得られるのを優先する。確かに露天商は利益が相当出る代わりに、ならず者による強奪が考えられるし、また売り上げ代をいくらか取られる可能性がある。今の時点で闇の者と関わるのは避けた方が良い、今後の活動に大きな支障が出る。

「ええ、いいわ。むしろこちらからお願いしたいくらい。ところでボクの名前はなんていうの？」

「ユウキ＝カザクラだよ。おねいちゃんの名前は？」

「私の名はティータ＝エルマライよ。これからよろしくね」

交渉の結果、俺はポーション一つ分につき３０Ｇの利益が出ることになった。もちろん、この俺の正体を隠すというのが条件付きで。

「とりあえず今日宿に泊まる分のＧは確保できてよかった」

ポーション二個で６０Ｇ。今回はおまけとして２００Ｇ余分にくれた。

よし、これなら今日は宿に泊まれるな。

俺は人知れず安堵した。

今日の収穫

収入元を確保できた。

無一文から始まる（後書き）

フルダイブ機能という設定について説明不足でしたので修正しました。

１１／４設定を変更しました。

俺は仲間を得た

合計して２６０Ｇ。１００万Ｇ以上持っていた俺にはこの金額が物足りなく感じるがまあ良いだろう。

何せ全くの無一文からこれだけのＧを得たんだ。

さらにこれからポーションを売ることによって安定的な収入を得ることが出来る。

「いやいや、お金のありがたさを感じるねえ」

俺は十二歳の少年とは思えないセリフを吐いた。

クルルルル

宿屋に向かっていると突然俺の腹から鳴った。

「お？」

「ん？　ユーカリア大陸物語に腹が減るなんてことはあったっけ？」

酒場などで食べ物を食べることはあるが、必ず食う必要はなかったはずだ。

ぐーーっ

「……とりあえずは腹ごしらえだな」

腹の虫には勝てない。

俺は腹が減る、減らないについての考察は後回しにして近くのパン屋へ向かった。

「毎度ありがとうございます。お釣りは五（S）シルバーと二（B）ブロンズです」

適当なパンを見つくろって俺は代金を払った。

そして手元に残る銀の硬貨と銅の硬貨。

この世界の通貨は１Ｇで１０Ｓ。そして１Ｓで１０Ｂとなっている。

まあ、食料品や安物の素材の単価に付けられるＳやＢなんて使うことは最近だと滅多にないから忘れていた。

何せ俺がＧを使うと言えば何千Ｇ単位だから。

「さてと、食べるか」

俺は近くのベンチに腰を下ろし、ついでに買った飲み物もすぐ横に行く。

出来立てらしくパンはまだ熱い。

ふわふわとしている。

「さてと、いただきまー……」

俺が大口を開けてかぶりつこうとした瞬間目の前の少女と目があった。

「……」

少女は何も言わないが、目はしっかりと訴えている。パンをくれと。

年代は俺と同じぐらいだろう。

服装は俺と同じボロの服を着て金色の髪はぼさぼさ、顔も薄汚れている。

元は良いのに台無しだと感じる。

見た感じ小動物という印象を受けた。

「……すい」

試しにパンを右から左へ移動させると少女の目もそれに続く。

グルグルと回転させたら同じように少女の目も回転した。

「きゅー」

どうやらやりすぎて目を回してしまったらしい。

俺は調子に乗ってしまったと反省した。

「悪かった。ほら、これをやるよ」

お詫びに俺は手に持ったパンを差し出す。幸いにもまだ口を付けていないからセーフなはずだ。

「……くれるの？」

途端に少女の目が輝き出す。

本当に素直だなと感心しながら俺は頷いた。

「……ありがと」

「って、おい！？」

少女は差し出したパンでなく、俺の隣にあったパンの袋を掴んで一目散に駆け出して行く。

「ちょっと待て！　ドロボー！」

俺は叫ぶがもう遅い。すでに少女の姿は見えなくなっていた。

「はあ、相手がＮＰＣとは言え腹が立つな」

俺は毒づきながらもまたパン屋に赴き、同じパンを注文した。

店員に不思議がられたが、俺が少年口調で事情を説明するとパン屋の店員はクスクス笑い始めた……値段を安くするとかちょっとはサービスしてくれよ。

そして俺はまた同じベンチに座った。

キョロキョロと周りを見渡し、また同じアクシデントが起きないか確認する。

前方良し、左右良しそして前方良し。

俺はパンを手に持った。

そして食べようとしたその時。

「本当に申し訳ありません！」

後方から突然大きな声で謝罪させられて俺は引っくり返ってしまった。

俺の目の前には四人の少年少女がいる。女子三、男子一の比だ。

しかもその女子の内の一人は俺からパンの袋を奪っていった無口女だった。

「ほら、謝りなさい！」

「……ん」

そのリーダーらしき女の子に小突かれて先程の無口女が頭を下げる。

リーダーらしき女の子は凛としていて口調もはきはきとしている。薄汚れているが、髪を洗えば燃えるような赤毛を見せるだろうと想像した。

俺は手を振りながら。

「いや、もう良いよ」

と、答えた。

「盗みを働き、本当に申し訳ありません。ユキは本当に良い子なんです、感情表現が下手ですけどそれは生まれつきなんです」

無口少女はユキという名前なのか。

「申し遅れました。私はキッカ、後ろにいる切れ目がアイラそしてなよなよしている奴がクロスです」

「よろしくお願いします」

「よ、よろしく」

同時に頭を下げるアイラとクロス。アイラの方は髪が藍色であることも相まって冷たく、鋭く切れるような印象を与えそしてクロスの方は俺と同じ黒い髪と瞳から真面目で実直なイメージがある。

「何度も言ったように僕はもう怒っていないから。だからもう消えてもいいよ」

何度も言っているのだが四人組の少年少女はこの場から去ろうとしない。そして謝り続けている。

「……ああ、そういうことか」

再三言っても謝り続けるのを見て俺は得心した。

彼らは単に謝罪しに来たのではない。それ以上のものをせびりに来たのだ。

「これで良いか？」

俺は観念して財布から１０Ｇ硬貨を取り出してキッカという少女に渡す。

「き、金貨だ」

「……きれー」

クロスとユキが１０Ｇの光具合を見て感嘆のため息を漏らす。

「ねえ、ここでやめちゃう？」

「そうですね……」

そしてキッカも動揺して後ろのアイラに相談を始める。

「やれやれ、いい勉強になったな」

俺はため息を吐いてその場を後にしようとした。これ以上関わっても仕方ない。

「お待ち下さい」

が、少女に似つかわしくない氷の様な冷たい声音が俺を引き止める。

「ええと、確かアイラだっけ？」

俺が振り向いて尋ねるとアイラはコクリと頷いた。

「僕はもう話すことはないのだけど」

俺は声音を低くして問う。これで俺が苛立っていることが相手に伝わるだろう。

「あ、アイラ、もう止めようよ」

「アイラさん、ストップストップ」

「……怖い」

事実、後ろの三人も怯えているようだ。

しかし、アイラは意にも介さず言葉を紡ぎ始めた。

「私達を買ってくれませんか？」

「は？」

突然の申し出に俺は呆気に取られる。

「アイラ！？　何を言ってるの？」

「そ、そうですよ。いきなり何を」

「……おー」

後ろが困惑しているのが伝わってくる。

「あなたは私達と同じ浮浪児の格好をしていますが中身は全く違う、一人で自立できる能力と自信を持っています。あなたは必ず瞬く間にこの最底辺から抜け出すでしょう」

「ほう……」

俺は感嘆のため息を漏らす。

アイラの言う通り俺は違う。薬の調合も出来るし鑑定の目聞きも出来る。さらに鍛冶も出来るため、あっという間に駆け上がるだろう……チートだし。

「ＮＰＣにしては洒落た誘い文句だな」

「ＮＰＣ？」

アイラが首を傾げるが俺は気にしない。

「まあ、面白そうだから仲間にしてみるか」

どうせこのデータはバグであり、エラーから復旧すれば消えてしまう運命にある世界。

それなら付き合ってやろう。

俺は彼らをもう一度まじまじと見つめる。

「どうですか？」

目の前のアイラは間違いなく抜け目がないだろう。ユキがパンを持ってきたところからここまで持ってくるのは並大抵のことではない。

キッカは決断力というか思い切りが良い。俺に声を掛ける時もそうだが、彼女は竹を割った様な潔さがある。

クロスは大柄な体格だから力もあるだろう。これなら暴漢に襲われても大丈夫かもしれない。

ユキは確実に何かを持っている。ユキがいなければ俺達は出会うことすらなかっただろう。

「よし、ついてこい」

「え？　つまり受け入れてくれるのですか」

確認するようにアイラが尋ねると俺は苦笑しながら。

「その通り、だから俺について来てくれ」

俺は仲間を得た（後書き）

２０１１年９月１３日に一部改編しました。

紺屋の白袴

「どこへ行くのですか？」

「まあ、ついてくれば分かる」

俺は疑問を口にするアイラにそっけなく答える。

「急に乱暴になりましたね」

「否定はしないな」

猫を被るのは疲れるんだよ。

確かここら辺りに文房具屋があったはずだ。薬屋から宿屋へ向かう途中で見た気がする。

「ああ、あった」

お目当ての店を見つけた俺は文房具屋へ入って羊皮紙とインクとペンを購入した。

「さて、洋服屋へ行くか」

「……買ってくれるの？」

目をキラキラさせるユキには申し訳ないが、さすがに五人分の服を購入できるだけのGは無い。だから俺は首を振る。

「それはまたいつか今度だな」

不満顔を隠そうとしないユキに苦笑しながら俺は洋服屋へと歩を進めた。

「ここはお前らが来る所じゃない！　帰れ帰れ！」

案の定、店員に入ることを断られる。

まあ、そうだろうな。

浮浪児の集団など洋服屋に縁など無いからな。あったとしても万引きか。

「はい、これ」

俺は店員に断られるのを想定済みだったので動揺なく１０Ｇを店員に握らせる。

「え？」

突然の出来事に驚いたものの、店員は得心が言ったように後ろへと下がった。

「さあ、入るぞ」

後ろで所在なさげにうろうろしていた四人に俺はそう呼びかけた。

「気に入った服があれば俺に見せてくれ。ただし、絹を使っている服は駄目だ」

変な指示だと思ったのだろう、代表してキッカが尋ねる。

「どういうこと？」

「レベル上絹素材で服を作成するのは無理だからな」

木綿や麻、布は今の俺でも作れるが、絹になるとレベルが二ケタ必要だ。

「もしかしてあんた、服を作れるの？」

「ああ、それが何か」

店で装備を買うのは中級者まで。上級者になると装備は全て自作になる。

何せ一人一人のプレイヤーに個性が出るため店のものでは対応できなくなるのだ。

俺も最終的にはドラゴンアーマーなどを普通に作っていた。

「……どうした？」

ユキを除いた全員がポカンとした表情で俺を見つめる。

ＮＰＣが戦闘以外で驚くことなんてあったっけ？

俺が内心で首を捻っている間に四人が集まってコソコソ話し合っていた。

「ちょっとアイラ、私達ってすごい人を見つけたんじゃないの？」

「ええ、私もここまでとは思いませんでした」

「夢なのかもしれないよ」

「……それなら殴ってあげる」

興奮しているのか全然内緒話になっていない。

俺はため息をついて先を促した。

「おーい、早く決めてくれ」

洋服屋から出た俺達は布屋へと向かう。

上質な布は４桁Ｇもするが、生憎と今の俺達には用が無い。あるのは値段がＢ単位の布だ。

「ええと、緑色と青、そして赤色の麻と黒と白と黄色の綿だな」

羊皮紙に書いた字を眺めながら俺は注文する。

お金を払って商品を受け取った。

「荷物持ちは任せて」

後ろの方で控えていたクロスが俺の代わりに受け取る。四人分の布だから結構重いはずだが、クロスは顔色一つ変えなかった。

「力が合って羨ましいな」

ポーション一つ作るにもしんどい俺がそう漏らすとクロスは困ったようにはにかんだ。

その後には雑貨屋へ行って糸と針とボタンを購入した。

「一人一泊２０Ｇです」

「分かった」

俺は頷いて五人分の代金を支払った。

俺達がいる場所は宿泊街の一角にある宿屋だ。

本来なら薬屋のお姉さんが勧めた宿屋に入る予定だったのだが、出費が増えたのでお金が足りなくなった。

困っていた俺にここら辺の地理に詳しいキッカがいい宿があると助言して今、ここにいる。

「悪くはないな」

キッカ推薦の宿屋に入った第一印象がそれだった。

『マミエルの夢』という名の宿屋で、一階が酒場そして二階が宿屋のオードソックスな冒険者の宿だった。

三人部屋を二つ借りて俺とクロス、そしてキッカとアイラ、そしてユキに分かれた。

本来なら俺とクロスの2人だから2人部屋なのだが、これから作業するので手広い部屋が欲しかったのだ。

俺は主人に別料金として石鹸とお湯の代金を支払って四人に入るよう促す。

もちろんレディーファーストだ。

三人部屋に五人は多過ぎだろうと考えたが、俺達は子供だったので十分スペースがあった。

全員集まったところで俺は買ってきた布で服を作りながら話を切り出す。

「ここは何という街だ？」

俺の質問にアイラが答える。

「シマール国の王都、カルギュラスです」

「カルギュラス……」

俺は口の中で反芻させる。

ユーカリア大陸においてカルギュラスという名の場所はあった気がする。

しかし、俺が知っている中では少なくとも街じゃなかった。

「廃墟じゃないのか？」

ゲーム上の設定ならばカルギュラスは魔物の大進行によって滅びているはずだ。俺が昔クエストでその場所へ向かったのだから間違いない。

「何を言っているのですか？」

アイラが首を傾げる。そうだろうな、俺がアイラの立場でもそう言うだろうな。

気になった俺は今日の年数を尋ねてみるが。

「さあ？」

と、返された……まあ、浮浪児に年数など知っているわけないよな。そこら辺りは明日薬屋のお姉さんに尋ねてみるか。

「ほい、一着完成」

ユキの服が完成した。白をベースとしたワンピースでアクセント

としてリボンが付いている。

「……ありがと」

そっけない返事だが、内心は大いに喜んでいるのが分かる。だって耳たぶが赤いもん。

「明日からはどうする予定ですか？」

アイラが明日からについて聞いてくるので俺は正直に話した。

「明日の午前中はポーションの材料となる草を取る予定だ」

「ポーション？　草？」

アイラが疑問符を浮かべるので俺は苦笑して訳を説明する。

「実は今日薬屋の主人であるティータさんと交渉してポーション一個につき３０Ｇで引き取る取引をしているんだ。だからポーションの材料となる草を集めるわけ」

俺がそこまで言うと、他の四人はまた隅っこで集まって内緒話を始めた。

「ねえ、聞いた？　あいつは安定的な収入があるのよ」

「これならもうゴミ漁りしなくて済みそうですね」

「これは夢だ、きっと夢だ」

「……可愛い服」

若干一名会話に加わっていないように見える。

しかもやはり声が大きいので内緒話になっていない。

「ほら、出来たぞ」

俺はアイラが選んだ黄色のブラウスと青色のロングスカートのセットを横に置いた。

無論、アイラがすごい勢いで取りに来たのは言うまでも無い。

こういう所はやはり女の子で子供何だなあと、外見子供の俺が微笑ましく思った。

「あの、お手伝いできませんか」

次の服の作成に取り掛かっているとクロスが口火を切った。

「ん？　どういうことだ？」

手の動きは止めないまでも俺は返事をする。

「アカイロ草とアオイロ草、そしてキイロ草を集めているんですよね」

「そうだな。ポーション作りにはその三つが不可欠だ」

「それらの草は雑草でどこにでも生えています。だから自分達がそ

れを集めるというのはどうかな？」

「そうしてくれると助かるな、手間が省ける」

俺がそう答えるとクロスはパッと顔を明るくして。

「そうですか、ありがとうございます」

「礼はいい。そして、キッカの服が出来たぞ」

赤を基調としたこの世界のオードソックスな服装なのだが、スカートでなくズボンとしているのはキッカは動きやすい冒険者が着るような服を選んでいたからだ。

キッカがそれをうっとりと見つめているのを見ると俺も嬉しくなる。作った甲斐があった。

「ああ、それなら作業用の服を作るための布を買ってくるんだったな」

俺は失敗に気付く。

雑草を拾うとなれば当然服は汚れてしまう。そして、俺がさっき作った服は彼らのお気に入りであり、機能性は重視されていない。

「……大丈夫」

さて、どうしたものかと悩んでいると、それを察知したのかユキが慰めにくる。

「何が大丈夫なんだ？」

「私達は雑草取りをしない。その代わりにユウキが作った服を売る」

「なるほどね、そういうことか」

俺の技能はポーション作りだけでない。今、実演しているように裁縫も得意だ。だから服を作ってそれを売ればいいとユキは提案していた、が。

「それは止めた方が良い」

露天商は俺もやろうとしたが、リスクが高すぎて止めた。ショバ代とか言って金を取られるならまだしも変な奴らと関わり合いたくない。

「言い方は悪いが君達から俺の情報に辿り着く奴らが現れないとは限らない。俺はまだ目立ちたくないんだ」

いずれは関わり合いになることだろう。

しかし、それは今でない。

何の力も無しに闇の者と関わり合うと待っているのはゲームオーバーだ。

「……残念」

ユキは不満そうな顔をしていたが、俺が絶対に折れないことを悟るとしぶしぶ引き下がってくれた。

俺はそんなユキの頭をポンポンと叩いて。

「アイディア出してくれたことは嬉しい、だからそんなに落ち込まなくてもいいぞ。そして、クロスの服だ」

クロスはTシャツに短パンと少年らしい服装を好んでいた。アクセントとしてポケットが四つも付いている。

全員の服を作り終えた俺はウーンッっと一伸びした後彼らに言った。

「君達全員にお小遣いを上げるから明日は街で遊んでおいで。けれど明後日からはちゃんと働いてもらうよ……って、聞いていないな」

四人は俺が自作した服を眺めるのに頭が一杯らしい。全員が興奮した面持ちで服の見せあいをしている。

俺はその様子を眺めながらベッドへ横になる。

ふかふかの感触を楽しみながら今日一日の出来事について思いを馳せた。

いきなりログアウト出来なくなったり、ステータスが貧弱だったりするが、今日の行動は悪くなかったな。

明日からはティータさんの所へ行ってポーション作りだ。これでしばらくお金を稼ぐか。

そう言えば靴を作るのを忘れていたな、明日も雑貨屋さんへ行っ

て材料となる皮でも買うか。

頭がぼんやりしてきた。どうやら本格的に寝るらしい。

いつも思うけどゲームの中で眠るというのは不思議な感覚がするんだよな。

そう言えば大事なことを忘れていた気がする。

確か、何だっけ？

俺は睡魔によって使い物にならなくなった脳をフル回転させ、次にキッカやアイラ達が持っている服を見て思い出した。

あ、自分の服のことを忘れていた。

紺屋の白袴（後書き）

次の話の内容は半月ほど時間が飛んだ時点から始まります。
四人が素材を集めて主人公のユウキがポーションを作る。
そんな日々が続いていたのですが、ある日にクロスがお願いをユウキにすることになります。
さて、その内容とは。

魔物退治（前書き）

すいません。
予告通りの内容にはなりませんでした。
内容が長くなり過ぎましたので二分割します。

魔物退治

カンカンカンカーン！

ジューー！

「うん、まあまあかな」

俺は先程製造が終わった青銅の剣にそう評価を下す。

この武器はキッカが使用するので市販の青銅の剣よりも細くして軽さを上げていた。

けど、強度まで下げたわけじゃないから。むしろ2倍以上の耐久性がこの軽い青銅の剣に宿っている。

キッカは「大人と同じ武器を扱いたい～」とか駄々こねていたけど、どれだけ粋がっていても俺達は１２歳の子供だからね、大の大人が使う武器を軽々しく振りまわせないから。

「さてと、後はアイラが使うボウガンの矢じりとユキが使うロッドだけか。おじちゃーん、まだ使わせてもらって良い～？」

俺が店に奥にいる職人にそう尋ねると「あいよ～」という返事が返ってきた。

良かった、これで今日中に作れそうだ。

何せクロスは力があるので普通の武器と比べて一回り大きいのを作る予定だった。サイクロプスやキングアリゲーターなど大型モンスターとの闘いを想定した武器で、例え鎧を着ていても、鎧ごと一刀両断するのを作ろうとしたが、それが想像以上に大変だった。

俺はこの時ほど子供であることを悔やんだ経験は無かった。

何せ重い。

ハンマーを打つのにも水で冷却するのにも既存の武器と比べて倍以上の負担がかかる。

たった2倍程度の負担ぐらいどうってことないと考えた時期が俺にはありました。

もし、過去に戻れるのならばその時の自分を殴ってやりたいです。

手を抜くと失敗してしまうから休めません。正直最後の方は意識が朦朧としていました。

どうやって宿屋に帰ったのか覚えていません。

気が付いたら朝でした。

筋肉痛で腕がえらいことになっていましたが、納品であるポーションを作成しなければならないので根性でやり遂げました。

ちなみに俺が作った『鋼の大剣』をクロスは軽々と振り回していました。

……俺は持つことすらできないのに。

勉強とは大事なものだ。

それを怠ると最悪死へと繋がる。

だから俺は心を鬼にしなければならない時がある。

「もう勉強嫌～」

そう、例えキッカを鎖と手錠で机に拘束させてでも知識を叩きこむ必要があるのだ。

「だから何度でも言っているだろう。字を覚えろと、それが出来なければ何も始まらないぞ」

「字を読めなくても、勉強できなくても死なない～」

「死ぬから言ってんだろうが！」

俺の一喝が部屋に響き渡った。

「ったく、キッカ以外はすでに魔物特性の勉強に入っているのに、お前だけは机にじっとしていることすらできないよな」

浮浪児としての生活が長かったのか、最初の内は全員椅子に座っても5分すら持たなかった。まあ、浮浪児として行動しなければ死んでいたのだからじっと出来ないのは大目に見よう。

「放して～、自由にさせて～」

が、それがいつまでも続くとさすがの俺も堪忍袋の緒が切れそうだ。なので俺は仕置きを兼ねてある紫色の液体を取り出した。

「そ、それは？」

キッカの動きがピタリと止まり、視線が俺の手に持っている液体へ釘づけになる。

「そう、精神安定剤入りポーションだ。これを飲めばキッカも大人しくはなろう」

ポーションにリラックス草加えると、飲んだ者を落ち着かせるという効力を持つ。アイラ達にも最初の内は椅子に座らせるためにこれを飲ませていた。

「いやー！　苦いのいやー！」

ただこの薬、相当苦い。俺も一舐めしたが体が壊れるかと思った。例えるならゴーヤの中身の部分を5倍に濃縮した苦さと言うべきだろうか。

もしかするとアイラ達が素直に座ったのはポーションの効能なのではなく、二度とこの薬を飲みたくない恐怖観念からゆえだろうか。

「さあ、口を開けておけよ。でないと鼻から入れるぞ」

「た～す～け～て～！！」

キッカの悲鳴が宿屋中に響き渡った。

昼前

外へと繋がる門の前に４人の少年少女が整列し、その前に１人の少女が剣を掲げていた。

俺、キッカ、アイラ、ユキ、そしてクロスが装着している武器防具は全て俺の手作りだ。

ユウキ
青銅のダガー
革の鎧
革の小手
布の靴

キッカ
青銅の剣
プレートメイル
青銅の楯
革の靴

アイラ
青銅のボウガン
プレートメイル

ガントレット
革の靴

ユキ
ファイアロッド
絹のローブ
革の小手
布の靴

これだけ装備が充実していれば死ぬことはまずありえないだろう。どんなゲームにも最も装備は重要な位置を占める。装備を侮る者に勝利などありはしない。

その問いに否と答えるならば序盤から装備を一切変えずにラスボスまで行ってみてほしい。大抵の人は挫折するだろう。つまりそれだけ装備は大事だということだ。

俺が作った装備のおかげでキッカ達はレベルこそ一だが、そのステータスはレベル１０程度にまで引き上げられている。近辺の魔物の生息についても確認したが、レベルが５もあれば集団で襲われても戦えるほどの難易度らしい。これなら負けることはないだろう。

ただ……

クロス
鋼の大剣
鋼の鎧
鋼の楯
鋼のすね当て

はい、１人だけ別格がいます。
おそらくクロスのステータスはレベル１５にまで引き上げられています。
一度キッカがクロスを羨ましがって鋼の楯を装備してみたけど、腕すら上げられない有様でした。
本当にクロスは俺と同じ１２歳かと疑ったよ。
クロスが１２歳と言うのは俺以外全員が主張していたけどね。
ああ、それとユキは魔法の才能があるらしいので魔法の扱い方について多少レクチャーした。
まだ火の玉が出る程度だけど、この辺りの敵だとそれで良いだろう。
ユキはもっと火力を望んでいたが、危ないので教えなかった。
ちなみに俺の現在のスキル。
剣　６
魔法　５
斧　７
採取　８

弓矢　５
料理　８
鍛冶　１０
調合　１５
裁縫　１０

ポーション調合やら草採取やら武器作りやら４人に戦い方を教えるやらでこの半月の間に相当上がりました。

裁縫がこんなに高いのは俺が毎晩簡単な服を作っているからだ。作成した服は４人を通して無料で配って歩いている。

これは利益度外視で行っている。

裁縫というのは後々になってから重要になる。

極論を言えば剣や魔法などよりも重要。

何せ状態異常を防いでくれる防具を作ろうと思えば裁縫が必須だからね。

裁縫をめんどくさがって上げなかった俺は後でどれだけ苦労したか。

一ヶ月ぐらいずっと裁縫していた記憶がある。

おかげで学校の家庭科でＳを取りました。

「皆、装備は持ったわね？」

一番張り切っているのが剣を掲げているキッカ。

聞くところによると昨日は興奮して眠れなかったらしい。

アイラとユキが眠そうに目を擦っている。

「ユウキ、ポーションは大丈夫？」

確認することは良いことだが剣を俺ののど元へ突き付けるな。万が一があったらどうする。

「ポーション、ポイズンボトル、パラライアウト、スリープブレイクなど近隣のモンスターが使う状態異常に対する対策は整っている」

「そう、上々ね」

キッカが当然とばかりに頷くがこれらは高いんだぞ。

もし俺が作った薬を一式買おうとすれば３００Ｇは普通に飛ぶという事実を忘れてはいまいか。

と、ここでユキがクイクイと俺の袖を引っ張った。

「……お弁当は？」

「全部ユキの好物にしている」

「ん」

俺の答えに満足したのかユキは満足そうに頷いた。

「思えばここまでの道のりは長かったわ」

外に出た俺達はキッカを先頭にして進んでいると、不意にキッカがそう口火を切った。

「この瞬間を私はどれだけ待ち望んでいたか」

「感動するのは勝手だがキッカがちゃんと俺の教えた通りにしていればもっと早かったぞ」

今は青銅のダガーしか装備出来ない俺だが、前のデータの時は剣術もレベル９３あった。だからその経験を生かして戦いの基本を教えていたのだがキッカは全然聞いてくれなかった。

「あんな型に嵌った動きじゃ意味無いわよ」

このクソガキめ。

アークドラゴンやジェネラルオークなど一級モンスターを相手にしていた俺に言うか？

畜生、少年の体が憎い。

そうこうしている内に近くの草むらが動き、ついでモンスターが飛び出してきた。

相手はワームやビッグアントなど雑魚モンスター。

これといった特殊攻撃も無いので落ち着いて対処すればいいのだ

が、いかんせんこちらは初めての戦い。

クロスも顔がこわばって大剣が震えていた。

仕方ない、ここは経験者である俺が先手を出てや――。

「うりゃあ♪」

「――ふっ」

「……ファイアボール」

俺がクロスを案じている間にすでに戦闘は始まっていたようです。

それにしても内の女性陣は容赦無いなぁ。

キッカは喜々としてモンスターに斬りかかり、アイラは冷静にモンスターの目など急所を射抜いている。そして感情の表現の乏しいユキでさえ正確に魔法を詠唱・発動していた。

モンスターも抵抗とばかりに攻撃を仕掛けてくるが俺の作った防具に阻まれてダメージどころか足止めにもなっていない。

「ふっ、口ほどにもないわね」

最後のモンスターを切り捨てたキッカが軽く決めポーズを取った。

「俺の出番はなしですか」

俺は呆れ調子で呟く。

これならばもう少し装備を弱くしても大丈夫なのではないだろうかと考えてしまうほど一方的だった。

その後は祭り状態に近かった。

モンスターを発見すると俺を除く全員が突撃してあっという間に息の根を止める。

それが単体だろうが集団だろうがお構いなしに突撃して刈って刈って狩りまくった。

「見て見て！　『剣』のスキルが5よ。随分上がったと思わない？」

「私は『弓矢』が6ですけどね」

「何で私よりアイラの方が上なのよ！？」

「私の武器はこれですからね、当然です」

「ボウガンは卑怯よ！」

モンスター狩りに一息ついた俺達は持ってきた弁当で昼食を取っていた。

キッカとアイラはお互いのレベルについてやいのやいの言い合っている。

「本当に彼女達の元気は底なしだなぁ」

クロスがそんなことを言うが、あんな重装備で軽装備の俺達と同様の運動量にも関わらず、息一つ乱さないというのはどういうことだ？

「……美味しい」

具が気に入ったのだろう、黙々と弁当を食べるユキ。

その様子は小動物みたいで可愛らしい。

「ほら、これも食べろ」

だから俺は自分の分から一つおかずをユキに差し出す。

「……くれるの？」

するとユキは目を輝かせて俺に尋ねてきたので「ああ」と答えると。

「……ありがと」

「って、おい！？」

あろうことかユキはおかずでなく俺の弁当箱をひったくった。

アハハハハハ

草原に軽やかな笑い声が響いた。

魔物退治（後書き）

次こそがクロスが主人公にお願いする場面です。
約束を破ってしまい、申し訳ありませんでした。

魔物退治についてどうして子供達が魔物を相手にできるのか説明が不足していたため追加しました。

目標達成

ゴリゴリゴリゴリ

「よし、これでノルマの３０本完成」

俺はいつもの通りに薬屋でポーションを作っていた。

「お疲れ～」

薬屋のお姉さんであるティータさんが、俺が終わったのを見計らって出てきた。

「そう言えば今日は友達と一緒にいなくて良いの？」

ティータさんは俺達が外へ出て魔物の討伐をしているとは信じていない、だから俺はその問いかけに苦笑して。

「最近は僕抜きで遊んで（戦って）いるんだよ」

最初の数回は全員揃って出ないと街外へ出なかったが、最近はソロでも行くようになった。

俺はソロで行くのは大変危険だと懸念したのだがそれは杞憂に終わった。

キッカ、アイラ、ユキそしてクロスは長い間浮浪児としてスラムを生き抜いている。

そのため野生の勘が研ぎ澄まされているのか危険に関しては敏感だ。

先日、苦労しそうなキングワームに遭遇した時も一人で突っ走らずに俺を含めて5人が見事なコンビネーションを発揮して敵を沈めていた。

だから大丈夫だと俺は判断している。

「あらら、はぶられちゃったの？」

こちらの状況を誤解しているティータさんのセリフに俺は苦笑を深めてしまった。

そして話題を切り替えるためにポーションを渡す。

「はい、これが今日の分」

「いつもいつも御苦労様。ボクの作ったポーションは常連さんからも評判が高いわよ」

ティータさんはいつまでたっても俺をボクと呼んで子供扱いする。それがたまに不愉快だと感じる時があるけど、それを責めてもティータさんは決して改めようとしないことが分かっていたから俺はもう諦めている。

「明日もポーションだけで良い？　何ならポイズンボトルやパラライアウトも作るけど」

「お生憎様、そちらは事足りているの」

「残念」

俺は肩を竦める。状態異常回復系はポーションより高く売れるが需要が少ない。

俺がポーションに拘る理由の一つだった。

最も、ティータさんに言わせると。

「状態異常回復系の調合の方が難しいんだけどね」

らしい。

まあ、調合レベル９８だった俺から見るとポーションもポイズンボトルも一緒なんだけどな。

「そう言えばボク、結構稼いだんじゃないの？」

「うん、僕は今１００００Ｇ以上持っているよ」

ポーションは一日３０個と決まっているが、たまに予約買出しなど大口取引が三、四回あった。

大口取引一回につき大体ポーション２００個ぐらい頼まれるから相当稼いだものだ。

大口取引は契約外として大目に一個４０Ｇで買い取って貰えたからこちらはホクホクだ。

「で、それがどうしたの？」

「ボクって何でお金を集めているの？」

「それは家を持つためだよ」

家を持つことが出来れば大型の調合台や鍛冶場などが創設できるので、これ以上誰かの場所を借りなくて済む。

この調合台もポーション作りのみ認められていて、それ以外の使用は料金を取られていた。それが無料になれば今後の活動がぐっと広まることは予想できる。

「ねえ、ボク。提案何だけど、そのお金を担保にして家を手に入れない？」

「どういうこと？」

「近々郊外に空き家が出来るのよ。で、その家の持ち主は色々なことをやっていたらしくて調合台や鍛冶場は勿論のことキッチンや畑まで完備しているのよ」

「へえ」

俺は感嘆する。もしこの話が真実ならばそれは非常に嬉しいことだ。

俺が家を持った暁にはそういったものをいずれ作る予定だったから、それが省けて非常に助かる。俺にとっては非常においしい話だが。

「まずその家を見たいのだけど」

ティータさんが俺を騙すことなんてないが、確認のため聞いておく。

するとティータさんは唇の端を吊り上げて。

「そう言うと思ったわ、この店が閉店してから向かいましょう」

閉店になった時刻に俺は薬屋の前で待機していた。

しばらくするとティータさんが現れる。

「お待たせ、待った？」

「いや、僕も今来たところだよ」

ここは社交辞令。

本当は1時間ほど待たされていた。

「ここがそうよ」

馬車で揺られること30分、目的の場所へと辿り着く。

まず始めに俺は立っている場所と紙で示されている場所とを示し合わせて誤りがないことを確認した。何せ他人の家を案内されちゃたまらない。

「ボクって用心深いわね」

ティータさんが感心と苦笑の入り混じった表情をした。

それはアイラから口を酸っぱくして言われていたからな。

この2ヶ月アイラは俺に詐欺師のテクニックについて何度もレクチャーしてくれた。

アイラ曰く俺は騙されやすいのだから、詐欺師がどのようにして人を騙すのか方法ぐらいは知っておきなさい、らしい。

「ほう……」

俺は感嘆のため息を零す。

中の様相は俺が家を買ったらこうしようかという想像を具現化したようだったからだ。

ちょっとした屋敷になっており、執事やメイドがいてもおかしくない。

そして外には広い畑もあって離れには鍛冶場も備え付けられている。

家の中を拝見してみる。

一階は大きな広間となっており、ドアを隔てた先には調合台やキッチンがある。そして二階へ続く階段を上がると、部屋がいくつもある。

これなら一人ずつ部屋を割り振ることが出来るだろう。

「これは本当に良い物件だね」

心なしか俺は興奮していた。

ここでティータさんが切り出す。

「で、この家なんだけど、おそらく３００００Ｇで売りに出されると思うわ」

「３００００か……」

俺は考え込む。

今あるお金がとてもじゃないけど払えない。しかし、この家は絶対に欲しい。

「これは提案何だけど、今のお金じゃボクが家を買えないから、私も一緒に出してあげる。そして２００００Ｇはボクが返してくれれば良いよ」

「え？　どういうこと？」

「だから私が残りの２００００Ｇを払うということ。ボクには結構

お世話になっているからね。これまでの利益を考えるとこれぐらい安いものよ」

ティータさんは俺の作ったポーションを１００Ｇで販売している。

つまり少なく見積もっても３００００Ｇはあるのだ。

「けど、それは悪い気がする」

「何言っているの、ボクは家が欲しかったのでしょう。あの時、私から今日の年数を聞いた時から人が変わったようにお金を集め出したわ」

現在はイルヴァナス歴４５８年。

そして魔物による大進行によってこのカルギュラスが廃墟となるのが４６３年。

つまり後５年でこの都市は跡形もなくなってしまうのだ。

それを聞いた瞬間俺は今までの戦略を見直す必要が出てきたと感じた。

本来ならばこの都市を拠点としてゆっくりと力を付けようと考えていたが、それは諦める。

俺は前の住み家だった工業都市ジグサールに移り住み、そこで力を付ける計画へ変更した。

しかし、工業都市ジグサールの周辺にはここと比べ物にならない

強大な敵が徘徊している。

当然ながら今の俺にその都市へ辿り着くことは不可能。

だから俺は一年以内に家を持ち、そこで各スキルのレベルを上げるのと並行して自分のレベルを上げることにした。

そのための第一歩として必要だったのが家だったのだ。

俺が黙りこんでいるのを見て何を思ったのか、ティータさんは腰を下ろして目線を下げ、俺の肩を掴んで語りかける。

「ボクが何を考えているのかお姉さんに分からないけど、ボクが焦っているのは伝わってきているよ。一度力を抜いて深呼吸して。ほら、少なくともお姉さんはボクの味方だよ」

俺は我知らず赤面した。

ティータさんは俺の母親に似ている気がする。

そう言えば母さんも今の様な恥ずかしいセリフを真顔で言っていた気がする。

あの時は何とも思わなかったが、今のように焦っているとこんなにも嬉しくなる。

そしてティータさんは立ち上がってニコリと微笑んだ。

「さあ、行きましょう。早くしないとこの家を誰かに取られてしまうよ」

それを聞いた俺は慌てて先へと進むティータさんの後を追った。

数日後、俺は驚かせたいものがあると言ってキッカ、アイラ、ユキ、そしてクロスを連れ出した。

「ねえ、どこに行くの」

初めて乗る馬車に戸惑っているのか所在なさげにしているキッカ。

それに俺は「着いたら解る」と笑った。

そして到着。

「ここは何だと思う？」

俺が４人に聞くと、しばらく考え込み、最初にアイラが手を上げた。

「立派な屋敷ですね」

「そう、立派な屋敷だ。で、これは誰のものだと思う？」

ここまで言うとアイラをはじめ全員が理解したらしい、目を丸く見開いてありえないというように首を振った。

「まさかこれは」

「そう、アイラの想像通り、俺達の家だ」

それを示すかの様に表紙には俺達五人の名前が記されていた。

「そして、さらにサプライズがある」

俺は隠していた小箱を目の前に持ってくる。

「家を持ったということは社会的地位があるということだ。どういうことだと思う？」

俺が尋ねると今度はユキが。

「……市民になれる」

「そう、その通り。これが俺達５人の市民証明書だ」

ティータさんに用意して貰った羊皮紙を一人一人に手渡す。

この市民証明書は『市民』になるために必須なものだ。

これで俺のステータスが『浮浪児』から『市民』に昇格できる。

『市民』になると出来ることがグッと広まる。

病院で診てもらえるし、図書館も利用できる。政治にも関わることが出来る。

そして何より俺は自分で作った物を自分で売ることが出来るのだ。

何せ『市民』だから。

人間と認められた証だから闇の者もおいそれと手出しが出来ない。

つまり、遠慮なく商売が出来る。

あ、もちろん薬だけはティータさんの所で売るよ。

そうするのが礼儀というものだろう。

はい、感傷終わり。

「さてと、入ろう。俺達の城――」

「待って下さい！」

俺がそう宣言して一歩踏み出そうとした時、突然クロスが大声を出した。

俺はつんめのってしまう。

「これさえあれば自分達は市民なんですよね」

「まあ、そうなるけど」

ぶつけてしまった鼻頭を押さえながら俺は答える。

すごく痛いし、それ以上に恥ずかしいぞ。キッカもクスクスと笑

っているし。

「学校にも通えるんですよね」

「市民だから当然の権利だな」

「だったら、お願いします！」

クロスは両膝をついて地に頭を擦りつけ始めた。

この出来事には俺を含めて全員が驚く。

「自分達を学校へ通わせて下さい！」

そしてクロスは思いの丈を語り始めた。

「僕は昔から騎士に憧れていました。将来は騎士となって国を守りたいと考えてきました。けれど僕は市民権を持たない浮浪児です。騎士になるための試験など受けることが出来ません！」

普段は温厚なクロスがここまで熱く語るとは。

よほど騎士への思いがあるに違いない。

さて、どうしよう。

学校へ通うとなるならばそれだけお金が必要となる。しかも騎士の養成学校となればなおさらだ。どれだけ低く見積もって通常に３倍はかかるだろう。

「けど、まあ良いか」

あのクロスが自己主張しているんだ。

普段から我がままを言わないことを鑑みればそれぐらい良いだろう。

幸いにも『市民』になったから金策のあてはあるし。

「分かった、学費は俺が何とかしよう。だから君は学校に行ってくれば良い」

俺はそう言って立ち上がらせようとしたがクロスは頑として動こうとしない。何故かと燻しんでいるとさらに言葉を紡いだ。

「僕だけじゃないんです。キッカやアイラ、そしてユキも一緒にお願いします」

「く、クロス!?」

「何を言っているのですか!?」

「……」

それにはさすがにキッカとアイラ、そしてユキが反応した。

「キッカは冒険者に、アイラはレンジャーにそしてユキは魔法使いになりたいのです。ですから、僕だけでなく彼女達も一緒にお願いします!」

「ふむ、それは本当か？」

俺がジロリと視線を向けると、３人はバツが悪そうな顔をするが、イイエとは答えなかった。つまり彼女達は学校に通いたいのだろう。

「しかし、まあ揃いも揃って学費が高い所ばかり」

どれもこれも全部学費が通常の学校と比べて高い。

そして最も高いのが、ユキが希望する魔法使いのための学校で、これは通常の学校の学費の五倍はする。

４人全員にかかる学費を合わせると、通常の学校に１４人送り込めるほどの莫大な金額が掛かる。

これはさすがの俺も躊躇してしまう。

この家も２００００Ｇの借金があるし。

俺は４人を見ながら思案する。

果たして４人にそれだけの投資をする価値があるのかどうか。

それらの学校では良い教育を受けられるから、もし４人全員が付いてきてくれるのならば工業都市ジグサールまでへの道のりは楽になるだろう。

ジグサールさえ辿り着ければ何とかなるから俺についてくるなり別れるなり好きにして貰っても構わない。

しかし、それはあくまで順調に事が進んだ場合だ。

もし俺に何かあれば学費の支払いは不可能になり、彼らは学校を辞めてもらうしかない。そうなれば今までの投資も水泡に帰してしまう。

逆に彼らが問題を起こしてしまっても水泡に帰す。

ここは重要な分岐点となる。

学校に行かせるか否か。

投資をするか否か。

考え、考える。

キッカ、アイラ、ユキ、そしてクロスを順に眺めながら俺はどうするか思考をフル回転させる。

２０分ほど経ったのだろうか。

その間誰一人声を出さなかった。

その様子を見て俺は四人の覚悟を知った。

「Ｂｅ　ａｍｂｉｔｉｏｕｓ　大志を抱け」

俺はそう口ずさんだ。

誰かが言ったのかを忘れたが、とても良い言葉だった気がする。

よく考えると俺は現実世界でも目の前の彼らの様な友人もいなかったし、将来はこうなりたいと考えることも無かった。

ただ、ゲームをしてさえできれば何も要らなかった。

だからこそ俺は彼らが眩しく映る。

俺に持っていない何かを持っているキッカ、アイラ、ユキそしてクロスが羨ましい。

「良いだろう」

俺は呟く。

「そこまでやりたいことがあるのなら、全てを出し切れ」

「では」

クロスが目を輝かせたので、俺は深く頷いて。

「自分が望むままにやってこい」

「「「「あ、ありがとうございます」」」」

４人全員が感激した面持ちで同時に頭を下げてきた。

「さてと、これからが大変だぞ。お前達は字が読めるか。それが出来ないと話にもならん。だから明日から特訓だ」

俺は照れくさかったので踵を返し、これからしばらくお世話になるであろう家に歩を進めた。

柄にもないことを言ったと自覚している。

今の俺はきっと変な顔をしているだろう。

このまま何事もなく自室に閉じこもって暴れたい衝動に囚われて集中力が疎かになった結果。

「大好きー！」

「必ず応えます」

「……一生忘れない」

「ありがとうございます！」

「――おわあ！！」

キッカ、アイラ、ユキそしてクロスから抱き付かれてもみくちゃにされた。

目標達成（後書き）

予告通りクロスが主人公にお願いしました。
けど、失敗した感が否めません。
慣れないことはするものではないと痛感しました。

これで第一部は終了です。
無一文から家を持つまでの流れでしたが、流れが速過ぎたのではないかと反省しております。

第二章入る前に番外編としてアイラ視点でこれまでの流れを紹介したいと考えています。

番外編　アイラの視点（前書き）

番外編です。

ですので読まなくとも小説の流れに差し支えはありません。

主人公が拾った四人組の一人であるアイラ視点で第一話から第五話まで進みます。

アイラが主人公の活躍を見てどのように感じたのかを想像して頂けると幸いです。

番外編　アイラの視点

それは私を含めた全浮浪児が持つ願いであり叶わない夢であった。

『市民』になること。

私、アイラは親の顔を覚えていない。

物心ついた時には既に浮浪児としてその日その日を生き抜くのに必死だった。

ましてや私は女の子。

一人だと喰われて終わり。

だから生きるための知恵として私は仲間を組んでいた。

思い切りは良いけど猪突猛進なキッカ。

天然不思議系のマスコットキャラクターであるユキ。

気は弱いけど力と体格は規格外のクロス。

そして常に周囲の気を配って策謀を張り巡らせる私。

この四人で徒党を組んで過ごしていた。

盗みは日常茶飯事、詐欺や置き引きも普通にやっていた。

基本的に計画の立案は私で実行するのがキッカ。

たまに他の浮浪児グループと一触即発状態になった時はクロスの出番。

あいつは気が弱いけど力が強いから大抵の浮浪児は彼一人でどうにかなる。

ユキは……何でいるのか私も分からないわね。

いつの間にか私達の仲間に加わっており、気が付けば行動を共にしていたみたい。

邪魔にならないようだからチームのマスコットとして置いている。

それだけ。

それだけのはずだったのに、ユキがあいつを見付けてきたのは驚いたわ。

ユキは珍しくパンの入った袋という戦利品を手中にして戻って来たとき、私はパンの持ち主について興味を持った。

このパンは浮浪者専用のパン屋でしょう。

ならば必然的に持ち主は市民証を持っていない浮浪者ということ

になるわね。

ユキが言うにはこのパンを一人で持っていたという。

この量のパンを一人で？　仲間もいないのに？

少なくともただの浮浪者じゃない。

身元の知れないユキにあっさりとパンを奪われたことも相まって私は会ってみたいと感じた。

よほどの大馬鹿者かそれとも……

「提案があります」

久しぶりのまともな食事ではしゃいでいる三人に向かって私はある考えを披露した。

結論的に言えば、ユウキという少年は想像以上だった。

あの時の「私達を買って下さい」発言は吊り橋を目隠しで渡るぐらい危険な賭けだったけど、その分見合った報酬――きれいな服とお金を手に入れたわ。

今、ユウキはベッドで熟睡している。

私達にきれいな服を作ってくれたのに、ユウキはボロの服を着ているのは多分自分の分の服を作り忘れたのだろう。

可愛いところあるじゃない。

ユウキはしばらく食べられるだけのお金を置いてくれたから、私はここから逃げ出そうかと提案したけど反対多数で却下となった。

いつもは賛成してくれるキッカが反対するとは珍しい。よほどユウキが作った服に感動したのね。

私の考えは却下されたけど、不思議と腹は立っていなかった。

それは無意識の部分で彼について行ったほうが良いと訴えているのかもしれない。

まあ、今すぐに離れる必要はないわ。

幸いにも明日は貰ったお金で色々と遊べるから思いっきり楽しもうかしら。

その途中で他のグループと会ったらどうしようかな。

洋服を着てお金を持っている私を見た彼らはきっと悔しがるだろうな。

思いっきり自慢してやろうかしらね。

……自慢した結果、私は毎日服や靴をスラム街の入口に置く約束をさせられたわ。

どうやら舞い上がっていたみたい、反省しなくちゃ。

そして、驚いたことにユウキは毎日服や靴を作ることを快諾したのよ。

いえ、良かったのよ。

でないと私達のグループは全浮浪児の敵になっていたから。

ありがとうございます、ユウキ。

どうやらユウキは私達を驚かせるのが大好きなようね。

いったいどこの世界に銅貨や金属ゴミから武器防具を作る浮浪児がいるのか。

Bの銅貨と錆びた水道管から青銅の盾を製造したのも十分驚いたけど、鋼の大剣まで作ってくるとは私の常識の範疇を超えていた。

確かに、鋼の大剣を作る設備が鍛冶屋にあるとはいえ（王都だから）限度というものがあるでしょう。ここまで運んできた鍛冶屋の若い職人が呆然としていましたよ。「俺ってまだまだ井の中の蛙だったんだなあ」とブツブツ呟きながら帰っていったわ。

ユウキはそれどころじゃないくらい疲労してベッドに倒れたから

知らないでしょうけどね。

それに、鋼の大剣を普通に買おうとすれば２０００Ｇは下らないわよ。

どうやってそれを一個五Ｓ以下の屑鉄から製造できるの？

ユウキに尋ねると「俺はもっとすごい武器を作っていた」と、冗談なのか本当なのか判断に悩むセリフを吐いたわ。

「い～や～、た～す～け～て～！」

キッカが叫んでいるけどこればかりはどうしようもないわ。

だって勉強しないキッカが悪いんですから。

知恵を働かすには知識が必要。

知識を蓄えることを怠れば芳しくない結果が待っているわ。

さて、私達は外で飲み物でも飲みながら一服しましょうか。

鬼の居ぬ間に洗たく。

ユウキがキッカに構っている間は存分に休めるわ。

キッカの要望通りユウキは全員分の装備を作ってきた。

キッカは当然のことだけどクロスも重装備に身を固めて満更じゃなさそうだったわ。

そう言えばクロスは最近騎士になりたいとか呟いていたわね。

浮浪児だったあの頃はそんなことを言わなかったけど、やはり衣食住が安定すると夢を追いたくなるのかしら。

キッカも前よりまして行動力が上がっていたわね。

前々から底なしのエネルギーの持ち主だったけど、近頃は輪をかけてその傾向が強いわ。

あんなにも快活で活き活きとしたキッカなんてしばらく見てなかった気がするわね。

そして、ユキに魔法の才能があることは素直に驚いた。

ユキは前々からユウキと何をしているのか分からなかったけど、どうやら魔法を教えられていたらしいわね。

後でユウキにそのことを追及するとユウキは「ユキが黙っておいてくれと言うから」とユキが口止めしていたみたい。

あの子にも誰かを驚かせたいと思う所があったようね。

まあ、そんな私も皆を脅かせようと密かにユウキからボウガンの扱い方を学んでいたけど。

けど、その驚きの半分はユキに取られちゃった。

少し悔しいわ。

後でお礼として詐欺師が使う人の騙し方について教えてあげるけど、少々厳しめにレクチャーしようかしら。

ユウキがブチ切れる可能性があるけど、しばらく一緒に暮らしたからある程度怒りの境界線は判断できるわ。

ふふ、こんなところで浮浪児だった経験が役に立つとは思わなかった。

今日も私は一人で魔物を狩る。

始めの内は四人揃ってから魔物を狩っていたけど、段々とそれがじれったくなったので各自がバラバラに行動しようと提案したのよ。

ユウキは「それは危険だ」と難色を示していたけど、私から言わせればスラムより百倍安全だわ。

武器もあるしポーションも持っているからそうそう大事にならないわよ。

スラムで培った危険を察知する能力を舐めないでちょうだい。

そういった説得の結果、渋々ながらもユウキは単独行動を認めてくれるようになったわ。

私は街の外にある森に身を隠し、気配を絶ってあるポイントに魔物が来るまで待ち続ける。

そして、魔物がそのポイントに入った瞬間に矢を放つ。

ユウキの作ったボウガンの糸は鋼糸を使用しているので、通常のより何倍も強い。

至近距離ならばベアー程度の頭蓋骨を貫通する程よ。

全く、本当に危険な代物を作ってくるわね。

急所を貫かれて絶命した魔物を確認した私は愛用のボウガンをコツンと叩いた。

「あら？」

私は肉が焦げる匂いが漂ってきたのを感じた。

「どうやらユキもやっているようね」

ユキも積極的に狩りを行っているわ。

順番でいうとキッカ＞私＞ユキ＞クロス＞ユウキね。

ユウキはポーション作りがあるから仕方ないにしても、クロスはもうちょっと頑張れないかしら。

あれだけの重装備に身を固めているならばちょっとやそっとのことで死なないから思いっきり戦っても問題ないはずなのに。

私はクロスの臆病さは騎士としてやっていけるのか憂いた。

「っとと、今はそれよりもユキね」

ユキは魔法使いなので、私達より打たれ弱い。

万が一があったら困るので私は様子を見に行くことにしましょう。

誤解の無いように言っておくとポーションのための材料は日替わりローテーションで個人個人が集めてユウキに渡しているわ。

さすがに材料集めを行わないほど私達は恩知らずでないと自覚しているわよ。

どうやら私も三人に感化されたようね。

ユウキがいない時に私達が集まると、決まって話すのが将来についてだったわ。

どうも私は隠密行動を好む傾向があるから、将来はレンジャーとして活躍したいわ。

キッカは冒険家、ユキは魔法使いでクロスは騎士。

ちょっと前の自分達が今の私達を見たら絶対驚くわね。

そして、キッカは魔物狩りをこの近辺だけでなく、隣街の周辺にまで足を伸ばしたいみたい。

けど、そこまで行っても私達は浮浪児だから通行証がない。

通行証があれば一度自分が行った街だと一瞬で行ける装置が使えるのだけど、市民しか貰えない。

ユウキがいてくれれば問題ないのだけど、生憎とユウキはポーション作りで忙しい。そしてユウキ抜きで外で一泊できる程私達は自惚れていないわ。

そして、魔物狩り以上に私達は独学の限界を感じ始めていたわ。

もちろんユウキが教えてくれるのだけど、ユウキは体一つしかなく、食い扶持を稼ぐために私達に構ってあげる時間がない。

私達が満足するまで教えてくれる場所は学校にしかなかった。

私が行きたいのは弓など隠密行動を主とするレンジャー育成学校。

ここはレンジャーの登竜門と呼ばれるほど徹底的に教える学校。

ここを出れば私の夢へまた一つ近づく。

けれど問題が一つ。

学校に通えるのは一部を除いて市民以上の称号を持つ者のみ。

残念ながら私達は市民じゃないので学校に通えないわ。

もしかしたらユウキなら何とかしてくれる。

一瞬その思考が頭によぎったけどすぐに打ち消したわ。

おそらく皆もユウキに頼むという選択肢についてはあったのかもしれないけど、誰も言い出さないでしょうね。

何せユウキには非常にお世話になっているわ。

私達四人を養うために毎日ポーションを作り、暇を持て余した私達に武器や防具、そして戦い方まで教えてくれる。

そして最も凄いのが、それらのことに関してユウキは全く文句を言わずに平然としていることよ。

私ならユウキの様な対応は無理だと断言できるわ。

「まさかこれは」

「そう、アイラの想像通り、俺達の家だ」

……もしかして私はとんでもない人物に出会ったのかもしれない。

ユウキは買った屋敷の前で得意げにしているけど、普通の常識で考えて１２歳の子供が家を持つことなんてあり得ないのよ。

今更ながらにあの時の選択について考えると寒気がするわね。

もし、あの時パンの持ち主に興味を持たなかったら。

金貨を貰って引き下がっていれば少なくとも私は今この場にいなかった。

匂いすら感じさせずに通り過ぎ去る。

本当にチャンスというものは分からないものね。

あら？　まだ何かあるのかしら。

ユウキが小箱を持ってこちらへ向かってきます。

そしてそれを目の前で開け、入っていた物は。

「そう、これが市民証明書だ」

もう説明は不可能ね。

私が。いえ、私達があんなにも望んでいた物が目の前に出てきたのだから。

本当にユウキは何者なの？

今なら私はユウキが神様だといっても「ああ、やっぱり」と納得するでしょうね。

そんなユウキは気を良くして屋敷へと向かう。

と、ここでアクシデントが起こったわ。

普段は物静かなクロスが大声でユウキを引き留めたのよ。

ユウキがつんめのって扱ける様は失礼だけど笑ってしまったわ。

「ふむ、それは本当か？」

普段とは全然違うユウキの気迫に私は生きた心地がしなかったわ。

ユウキ、あんな目もできたのね。

まあ、あれだけの力量を持っていればたかが浮浪児ぐらい黙らせるのも訳ないわね。

およそ２０分の間ずっと黙っていたけど、私の人生の中でこれほどの威圧を経験したことはなかったわ。

たった一言、「学校に行かない」と言えば良かったのかもしれないけど、それは言えなかった。

目の前のユウキから発する『恐怖』よりも『願望』の方が強かっ

たのよ。

それは皆同じ。

だからこそ、誰も言葉を発さなかったのよ。

「Ｂｅ　ａｍｂｉｔｉｏｕｓ　大志を抱け」

ユウキが呟きました。よく聞き取れませんでしたが、ユウキは一つの決心をしたようです。私達は息を殺して次の言葉を待ったわ。

「良いだろう」

その瞬間、周りの空気がふっと軽くなったわ。

クロスも「では」と言葉を紡げていたから、それは錯覚じゃない。

「自分が望むままにやってこい」

ユウキはそう紡いだ後、ふっと微笑みました。

その笑みは遠い記憶の中の顔も知らない両親を彷彿させるような慈愛の表情。

「「「「あ、ありがとうございます」」」」

いつの間にか私達は自然と、心から頭を下げていたわ。

よく師匠に弟子が頭を下げる場合があるけど、その時の弟子の心境がようやく理解できたかもしれないわね。

敵わないのよ。

自分のためにこれほど多大な労力と時間を割いてくれる存在がありがたすぎて何も言えない。

だから私はこのままユウキ、いえ、ユウキ様がいなくなるまで頭を下げようと考えていたけど隣のキッカが震えだし、そして突然奇声を上げてユウキ様に突撃し出したわ。

よく見るとユキやクロスも駆け出している。

これは遅れるわけにはいかないわ。

ユウキ様ごめんなさい。

最後のわがままです。

感謝の気持ちを表現させて下さい。

「必ず（ユウキ様のご期待に）応えます」

その後の私達は学園の筆記試験のためにユウキ様自らが字の読み書きについて教えてくれました。

これ以上ユウキ様のお手を煩わせたくないという想いは全員が共通していたようで、あのユキでさえ真面目に勉強していたわ。

その甲斐あってか私達全員が試験に合格。来月の入学式に参加できるようになったわね。

しかし、最難関と名高い王立魔法養成学校にユキが合格できるとは予想できなかったわ。

噂によるとユキが唯一の市民だとか。

いつの間にか私達の仲間に入ってきたことといい、ユウキ様を見つけてきたことといい本当にユキは何者かしら。

「もう準備はできたか？」

ユウキ様が私の荷造りについて心配してお声を掛けてくれました。

私達が通う学校は全寮制で寄宿舎暮らしです。

そのため昨日は全員で下着や制服の素材やらを買いに出かけ、ユウキ様が徹夜で全て仕上げてくれました。

「はい、もう少しです」

私は努めて平静に答えます。

本当はユキのことを考えて全然進んでいないことは口が裂けても言えません。

ああ、そうだ。約束を忘れていたわ。

「申し訳ありませんがユウキ様、少々時間を頂けませんか？」

「そう言ってもそろそろ馬車が来るぞ」

「はい、承知しております。しかし、これから先しばらくキッカ達と会えなくなりますから最後に言葉を交わしたいのです」

「ああ、そういうことか。それなら仕方ないな」

ユウキ様は一つ頷いてこの場を去っていきます。ありがとうございます、ユウキ様。

大急ぎで荷造りを終えた私は集合場所へ向かったわ。

その場所は屋敷の裏側にポツンと生えた木。

「急いで急いでアイラー」

「……遅い」

「転ばないよう気を付けて」

どうやら私が最後のよう、本当に恥ずかしい。

さてと、気を取り直して私は木の前で円陣を組みました。

これから先はしばらく会えない。

だからこそ、最後に皆の心を合わせるために円陣を組もうという提案をしたわ。

ここが第二の人生。

ユウキ様の目となり手となり、そして足となって動くための生活が始まる。

キッカやユキ、そしてクロスの様子を確認すると皆固い意志を瞳に宿していた。

うん、満足。

私だけじゃないみたい。

全員でユウキ様を守り抜く決意が満ち溢れている。

まず始めにキッカから。

「私達は」

「「「「一心同体」」」」

次にユキ。

「……最後まで」

「「「「信じぬく」」」」

クロス。

「後悔は」

「「「「ありえない」」」」

最後に私です。

「この命を誰に捧げる」

「「「「ユウキのために」」」」

番外編　アイラの視点（後書き）

稚拙な駄文を最後までお読み頂きありがとうございました。

普段の生活　（前書き）

大幅変更しました。

普段の生活

１４歳になった俺は以前と比べて大分力が付いた様に思える。

身長も伸びたしやれることも増えた。

だが、俺の心は未だにあの時から動こうとしない。

ベッドに寝ていた俺は何となくステータスウインドウを開いてみる。

名前、装備、スキルなどが並んでいる枠の中に一つだけ空白が存在していた。

「やはりログアウトできないか」

その項目は夢から覚めるための必須場所。

それが無いということは、覚めない夢と同じこと。

覚めない夢＝現実と置き換えることはできると考える。

つまり俺はこの世界は仮想空間でなく、現実ではないのかと疑い始めていた。

いくらゲームが好きな俺とはいえ1年以上ゲームの世界に浸ることなど出来やしない。

精神はともかく体がもたないのだ。

だが、今のところ俺の体に変調はない。

つまり体は元気そのものだということになる。

「この世界は妙に現実感があるんだよな」

ゲームの世界ではありえなかった空腹や病気などの異変。

現実ではありえないステータスウインドウの出現。

「……胡蝶の夢」

俺は何ともなしに呟く。

胡蝶の夢とは中国の荘子の偉人が思想であり、ここが現実か否かを論ずることよりも蝶なら蝶で、皇帝なら皇帝でその場を精いっぱい生きれば良いということを説いていた。

次に俺は自分のステータスを確認する

名前：　ユウキ＝カザクラ
装備：　武器　ミスリルダガー
　防具　風のマント
　頭　ミスリルヘルム
　足　軽業師の靴
　装飾品　厚手の手袋
お金　５４６００Ｇ
ステータス
剣　３５

魔法　２０
採取　２５
料理　５
鍛冶　４５
調合　５６
裁縫　４３

アイラ達と別れてからもう2年が過ぎ、昔と比べて相当スキルが上がった。

特に鍛冶や調合等はもうそれで食べていけるレベルだ。

「あいつらの学費を稼ぐために相当頑張ったからなあ」

俺は過去を振り返る。

４人が学園に向かった最初の一年は特に忙しかった。

入学金やら学費の支払いやらでお金がどんどん飛んでいく。

必要な金を稼ぎ出すために俺はポーションのほかに武器や防具を作って売っていた。

始めは正体を隠すつもりだったがもうそんなことを言っていられる状況じゃない。

これまで封じていた露天商まで行って金を稼ぎ出さなければならなかった。

幸いにも露天商を行っていた期間で闇の者が絡んでくることは無

くてホッとする。

半年ぐらい続けると俺の作った物は出来が良いと評判が出来て、次第には俺の家まで押しかけて来る冒険者が現れる始末。

商売も軌道に乗ってとりあえずは金の心配はなくなったのが1年前。

今はわざわざ売りに行かなくとも待っていれば客が来る状態だ。

だから俺はボーっとしていて良い

していて良い……はずなんだけど。

「いつまで寝ているのですかこの怠け者が」

罵声とともに俺は文字通りベッドから叩き起こされた。

「さっさと起きなさい。今日の分の仕事は山のようにあるのですよ」

「エルファさん、一応俺は主だよ?」

俺が涙目で抗議するがエルファさんは素知らぬ顔をしてさっさとベッドメイキングに取り掛かっていた。

俺を罵倒するのは最近雇ったメイドさんのエルファ＝ラフルだ。

年は17歳前後。きめ細かい白磁の肌と鮮やかな緑色が映えた腰まである長い髪と瞳が印象的な少女。例えるならフランス人形、ただそこに佇んでいても絵になる美しさを秘めていた。

しかし、エルファさんは謎が多すぎる。

名前：　エルファ＝ララフル
装備：　武器　アサシンダガー
　防具　メイド服
　頭　カチューシャ
　足　ニーソックス
　装飾品　薄手の手袋
ステータス
小剣　８５
　隠密　６９
　料理　７５
　裁縫　５６
　音楽　６５
　鑑定　７５

「……一体何だこれは？」

顔合わせした際にエルファさんのステータスを見せてもらった感想がこれ。

どれもこれも高レベルだが、いかんせん方向性が色々とおかしい。

隠密ってなんだ？　どうしてそんな特殊スキルがここまでのレベルになっている？

小剣と隠密がここまで高くなるのに思い当たる職種が一つあるが、それはあまり考えたくない。

何故ならそれはアサシ――

「主、さっさとして下さい」

エルファの催促に俺をぎくりとしながらも頷く。

まあ、人の過去など詮索しても仕方ないからここは聞かないでおくのが正しいか。

ティータさんが推薦したんだ。警戒しても仕方ない。

そのステータスから想像できる通り、食事も掃除も文句の付けようはないが、主を主とも思わない言動が玉に傷の、扱い難い困った人だった。

本人いわく、ちゃんと主らしく振舞えばこちらも誠意ある対応を取るらしいが、エルファが納得する主の振舞い方とは一体何だろう。

前に聞いてみると。

「人に聞く時点で主失格です」

……一言で切って落とされた。

言っておくが俺にM属性はない、貶されて喜ぶという特殊な性癖は持っていないぞ。

どうしてエルファさんがここにいるのか。それは2年前に遡る。

俺は4人を見送った後、屋敷が広すぎてとても1人では管理出来ないと悟った俺は誰かを雇うことにした。

そのことをポツリとティータさんに漏らすと「じゃあ良い人を知っているわよ」と人を紹介された。

ティータさんの紹介なら何かと大丈夫だろうと判断した俺はろくに面接もせずに採用した。

しかし、それが運の尽き。

ご存じの通りエルファさんは俺に対して人間扱いしてくれません。

ティータさんは「愛情表現よ」と笑っていましたが、どこの世界に愛情をサドな言動で表現する輩がいますか。

「なにボサッとしているんですか、朝飯が冷めるからさっさと起きてください」

はい、分かりました。すぐに下へ向かいますから毛布でバサバサしないで下さい。

俺は高速で着替えた後、逃げるように下の食堂へ向かった。

食堂には人20人が座れるほど巨大な長テーブルが置かれている。で、入口から見て最も遠い上座の位置に俺の朝食が用意されていた。

パンに牛乳、季節のサラダやベーコンエッグで、デザート付きなど、普通の水準から見れば豪華な部類に入る料理が並んでいた。

俺はまだ湯気を立てているパンを齧ってみる。

パンは出来立てらしく口に含んだ瞬間にほっこりとした。

「うん、美味い」

食堂は清潔が行き届いており、敷いてあるテーブルクロスも皺一つなかった。

綺麗なことは綺麗だが、アイロンもない時代にどうやって皺を伸ばしているのか。

「失礼します」

その方法について頭を悩ませているとエルファさんが手にある物を抱えて食堂に入ってきた。

「何を聞きますか」

エルファさんはバイオリンを肩に乗せて俺にリクエストしてくる。

「そうだなあ、少し明るい感じで」

「了解しました」

俺の意向を聞いたのか、エルファさんが知っている中で楽しめの

ポップな旋律がバイオリンから響いてくる。

その演奏はとてもアマチュアとは思えないほどレベルが高い。

「しかし、まあ」

俺は演奏に集中しているエルファさんを眺めながら考える。

確かに言動は最悪だが、それを補って余りある程の長所を彼女は有している。

俺がエルファさんをここに置いている理由もそれだ。

料理も美味しく、掃除も行き届いてかつ演奏を楽しめるのであれば多少の言動ぐらいは我慢してやろう。

「次は悲しめの曲で」

そろそろ終わりそうだったので俺は新たなリクエストをエルファさんに注文した。

「師匠、おはようございます」

朝食も食べ終わり、紅茶を飲んでいるとその声と共に食堂に入ってくる人影。

親のお下がりなのか頑丈なつなぎ服に身を纏っている。しかし、それによって美しさが失われることはない容貌を持っているのは。

「ああ、サラか。おはよう」

俺がそう微笑みかけるとサラは恐縮したのかペコリと頭を下げた。

俺より頭一つ分高い身長と大人びた物腰ゆえに見た目２０歳実年齢１４歳という年齢詐欺を犯しているサラ＝キュリアス。親が職人で、幼い頃からの手伝いをしているせいか作業しやすいようにレンガ色のくすんだ髪を肩口で揃えており、体も同年代の女子と比べるとやや筋肉質だった。

「師匠、今日は武器を作るんですよね」

目をキラキラさせて尋ねてくるサラに俺は苦笑して肯定する。

サラは俺のことを師匠と呼ぶ。

サラ曰く、鍛冶屋である親の所に、武器の修理に訪れた冒険者がその武器を絶賛していたので、冒険者に頼んで試しにそれを奮ってみると雷にしびれた様な衝撃を受けたそうだ。

あれほどきめ細かい出来栄えなのに実践重視で作られている。形式美と機能美を兼ね備えたあの武器を作ったのは一体誰なのかを知りたくて探った結果、俺の家に辿り着いたらしい。

「師匠、見学しますから」

サラは俺と同レベルの鍛冶職人になりたいそうだ。しかしまた、女性で職人とは厳しい道を選んだものかと感嘆する。

鍛冶職人の中の暗黙のルールとして子供はともかく鍛冶場に女を入れないというのがある。よく分からないがそういう決まりがあるから、彼女が鍛冶職人として生きていくのは厳しいだろうと俺は考えている。

が、ドエスのエルファ曰く、常識無視の塊である主の弟子が職人達から村八分にされるわけがない、例え敵に回したとしても、あんたの腕前なら例え前人未到の場所でも武器を求めて買いに来る客が後を絶たないとえらく捻くれた褒め言葉を頂いた。

俺から言わせるとエルファさんの方が常識無視なんだけど。

小剣レベル８５って一体何？

閑話休題

実際問題として職人達から嫌われたとしても、サラが後悔せずに生きていけるんだったらそれで良い。

そう結論づけて俺はこれ以上考えるのを止めた。

「師匠、何の武器を作るのですか？」

離れの竈に向かって共に歩いているとサラがウキウキした様子で聞いてくる。

「鋼の剣に風属性である『風の石』を付加させてカマイタチを飛ばせる『風の剣』を作ろうと思う」

一般的に武器は鍛冶屋によって性能が若干異なるが、それでも俺の域までには及ばないだろう。鍛冶レベルが低かった頃にも同じ材料で重さや切れ味が数段上なのをいくつも作っていたが、鍛冶レベルが２０を超えると俺は本格的に独自路線を歩み始めた。

簡潔に言うと武器に属性を付与。

常に高熱を発する槍や帯電している斧などを作って売っていた

俺の武器は既存の概念をひっくり返すほどの衝撃を与えたらしく、鍛冶職人の間では俺のことを鍛冶職人の始祖であるメテルギウスの生まれ変わりと持て囃された。

まあ、呼び方なんてどうでもいいので、俺のことをなんて呼ぶかは自由に任せている。

とにかく、俺は武器に属性を組み込める唯一の鍛冶職人として評判を得ていた。

そう、俺は武器に属性を付与させるという困難な技術を習得している。

経験がある今でこそ簡単に出来るが、ログアウトが可能なプレイヤーの時は難しかった。

属性付与は豪快な腕力と繊細な技術の２つが必須である。

その相反するものを両立させるにはどれだけ困難か。

繰り返される失敗に心が折れかけたことは一度や二度でない。

さらに付与させる属性を増やすとさらに難易度が上がる。

『火』『水』『風』『雷』『土』『闇』『光』7種類全ての属性付与ができたときは冗談抜きで死んでもいいと思った。

鍛冶に関しては俺と肩を並べるプレイヤーはいなかった。

つまりすごいわけ。

だから、そう。

「師匠、1つの属性付与なんて言わずにもう2、3個属性を付け加えましょう。私は『風』と『雷』を付け加えた『風雷の剣』を作れますから」

出会ってから一年にも満たないのにここまで出来るのは天才を通り越して異常だぞ。

サラ曰く、師匠のやり口を真似ているだけですからすぐに覚えられたのであって、もし独学なら1つの属性付与さえ無理ですよ。と、言っているが鍛冶は見て出来るものでなく、経験が重要なのだから、やはりサラは天性の何かを持っている。

だってステータスが。

名前：　サラ＝キュリアス
装備：
武器　なし

防具　丈夫なツナギ
頭　なし
足　火モグラのブーツ
装飾品　力の指輪

ステータス
鍛冶　１０５

そのステータスを見たとき俺は目を疑ったよ。

ハンマーすら握ったこともないサラが鍛冶レベル３桁。

しかもそれ以外は全く使えない。

難しい剣の製造方法は一発で理解できる癖に、本を読むとなるとどれだけ優しくとも３行で眠ってしまう。

エルファさんとは別の意味で驚いた。

「それもいいが生憎と材料がない。だから今日はこれで我慢してほしい」

「えー、何で材料が無いんですか？」

「キッカ達の試験が近いからな素材を取りに行く余裕がないんだ」

最初の１年はともかく、２年目に入るとキッカ達も学校に慣れてきたのか４人は冒険に出かけて魔物を倒し、その際のドロップアイ

テムを俺に届けるようになってきた。

俺としては素材が格安で手に入り、キッカ達は小遣い稼ぎそして学費返済と双方ともに利益があるので結構長い間続いている。

「一応キッカ達の名誉のために言っておくが、この風の石は市場に出回らない非売品だぞ」

一般に流通しているのを市販品なら、闇市や冒険者から直接買わないと手に入らない素材が非売品である。

で、属性付与させるための素材の大半が非売品だからキッカ達の存在がどれだけありがたいか。

いやいや、本当にキッカ達を拾って良かったと思う。

「はい、わかりました」

俺の言っていることが通じたのか、しぶしぶながらも引き下がってくれるサラ。

もっと強くなりたいという向上心は称賛に値するが、感情をストレートに出すことをもう少し抑えてくれないものだろうか。

まあ、そこのところは壁にぶつかれば改善するかと思っている。やはり人間には挫折というのが必要だということかな。

そして俺は頭を切り替えて原材料の鉄鉱石と風の石を手元に並べる。

どのように配分すれば出来上がりの剣に風を付与できるのか、俺はゲーム内での記憶にある精製法を引っ張り上げた。

「うん。よし、これでいくか」

頭の中で一通りまとまった俺はハンマーを持つ。

「サラも近くで見ておけよ。こういうのは基礎だから反復させても損はない」

サラが頷き、真剣に見ているのを気配で感じた俺は灼熱に溶けた鉄鉱石を打った。

カーンっ！　っと、小気味の良い音が辺りに響いた。

武器の生成は一日に一本。

今回は単純に一属性だけ付与するので二時間あれば完成するが、もし全ての属性を付与するとなれば今日だけでは間に合わない。少なくとも明日までかかる。

サラの体力上まだ5つは厳しいだろう、と、なればそこがサラにとっては壁になるかな。

俺はそんなことを考えながら、完成したばかりの『風の剣』を振ってみる。

軽く振ったつもりだったのだが、発生したカマイタチは一般の魔術師が放つウインドと同威力だった。

「ほら、振ってみろ」

サラが試し切りしたそうだったので渡す。

「さすが師匠、私が作ったのと比べても段違いに強いし軽いです」

するとサラは大喜びでカマイタチをあちこちに放った。

サラの実家は鍛冶屋のためたまに俺から材料を貰って作ることがある。完成品を俺に見せてくれるのだが、いかんせんまだ俺の領域にまで達していないとみる。

「まだまだサラには負けないつもりだ」

サラが放つカマイタチを避けながら俺はそう言い放つ。

「さすが師匠です。これだから越えがいがあります」

剣を俺に返しながらサラは喜色と闘志を混ぜ合わせた感情を瞳に浮かべてニッコリと笑った。

「完成しましたか、そろそろ昼食ができますのでそれまでに汗を落としてください」

レディーファースト。だからまず始めにサラを水場へ行かせる。

サラは「師匠より先に入るなんてとんでもない」とよく分からない所で恐縮していたが、俺が入るよう命令すると従ってくれた。

俺に対する敬意を持っているのは構わないけど、その使う場面が間違っているのではないかと考える。師匠の言葉に嫌な顔を浮かべて「えー」は無いだろう。

そんなことを考えているとサラが上がったらしく、次に俺が入る。

屋敷の一角に備え付けてある水道は特別製で、常にお湯が出るよう改造されている。この発明はエルファも嬉しかったらしく「たまには良いこととしますね」と呟いてくれたのが印象に残っていた。

「サラ、先程の工程は覚えているか？　昼食を食べた後はサラが同じのを作るんだぞ」

「はい、バッチリです。師匠の作品を超えた逸品を作り上げてみせます！」

その意気込みは素晴らしいが、空回りしないようにな。何せ後始末は俺がしなくちゃなんないから。

エルファさんが昼食を用意している間に俺は午後の予定を確認する。

「エルファさん、ティータさんから頼まれごとか何か無かった？」

「そろそろポーションが切れそうですので納品してほしいとか」

パスタとスープを乗せた盆を運びながらそう受け答えするエルファさん。

「うん、分かった。サラの鍛冶が終わり次第ポーション作成に取り

掛かるから準備をよろしく」

「畏まりました」

エルファさんはそう述べた後、定位置に座ってバイオリンを響かせ始めた。

「そろそろかな」

「その通りかと」

来客室に備え付けられている椅子に腰かけていた俺の呟きに控えていたエルファさんが答える。

サラはいない。

と、いうのも昨日に「明日は修行なしだから実家で自己練習しろ」と言い含めていたから来るはずがないだろう。

「主、お客様です」

「本当に、よく分かるな」

エルファさんは気配を感じ取れる性質らしく、呼び鈴が鳴らなくとも来客が訪れることを察知できた。

「さてと、お迎えいたします」

エルファさんは音もなく歩いて玄関に向かった。

派手な装飾が好かない俺は屋敷のそれを必要最低限に抑えている。

簡潔に言うなら揃えるのがめんどくさかっただけ。

だから生活必需品以外の家具はろくに買い足さなかった。

が、エルファさんはそれが嫌だったようだ。

お金がない時は自制していたみたいだが、余裕が出てきても装飾品に金をかけなかった俺に業を煮やしたのかエルファさんは俺の許可なしに絵画や美術品を購入した。

その際に一悶着あったのだが、ティータさんがエルファの擁護に回ったため俺が悪いということになった。

「ボクは他人の目というのをもう少し気にした方がいいわよ。ここに来る人の相手をしているエルファの心情をくみ取りなさい」

と、逆に説教されてしまった。

で、そこから反省した俺はとりあえず来客室くらいは見られるようにしようと頑張った。

そして、頑張った結果が。

「こんにちは、何度訪れても豪華な部屋ですね。金で出来た彫刻にプラチナの甲冑。まるで王宮にいるみたいです」

来客室に訪れる人が異口同音にそんなことを漏らすようになってしまった。

「やりすぎです。掃除する身にもなってください」

そんな陰口を叩かれた覚えがある。

「お褒めいただき光栄ですヒュエテルさん」

目の前の人物はヒュエテル＝クーラー。

俺が設立し、援助している孤児院の園長で、保母さんという表現がピッタリくる人だった。

２０代後半の貴婦人で豊かな胸が特徴の、全てを優しく包んでくれそうな雰囲気を持つ人物だった。いつもニコニコと微笑んでいるのは母性からくるものなのだろう。そして、この笑顔こそがささくれた孤児を癒してくれていた。

「ユウキ様のご尽力によって多くの孤児が悪の道に走らずに済みました。このことは感謝に堪えません」

そう言ってヒュエテルさんは頭を下げる。

金に余裕が出てきた俺はあのスラム街を何とかしようと思索していた。

キッカ達が何かをやらかしたので、俺は靴や服を作ってはスラム街に届けていたのだがスラムの環境が酷いこと酷いこと。

暴力や無関心が横行し、路上で人が死に、悪臭が漂っていることが日常の光景としてそこにあった。

そして、何よりも一番衝撃を受けたのは俺やキッカと同年代の子

が盗みや暴行を働いているのを目撃したことだ。

「仕方ないわよ、ああしなければ生きられないんだから」

キッカが慰めてくれたが、平和な日本で暮らしていた俺には衝撃が大きすぎる。

この現状を何とかしたい。

と、言っても後数年で滅びる都市なので腰を落ち着けてやれることはできない。

さんざん悩んだ末に出た答えが未来ある子供たちだけでも救おうということだった。

だから俺は小規模ながらスラム街を何とかしようとたまに炊き出しを行っているヒュエテルさんと接触し、彼女に孤児院の管理を任せた。

「いえいえ、僕のやっていることはお金を渡すことだけですから、実際に活動しているヒュエテルさんには敵いません。むしろ私が頭を下げたいぐらいです」

始めはヒュエテルさん1人とおんぼろ建築一戸なので、10人も世話できなかったが、次第にヒュエテルさんの心情に共感してくれる人が現れ始め、さらに孤児達のリーダー格の人が協力してくれたので、今では4ケタに迫る孤児達を保護できている。

そのことが可能になったのはヒュエテルさんが孤児を救うために奮闘し、職員の増加や建物の増築など孤児院に関する責任を一手に

引き受けてくれていたからなので、俺としては頭が上がらない。

目の前のヒュエテルさんは笑顔だが、その裏に壮絶な戦いがあったのだと想像すると本当に申し訳なくなる。

「ご謙遜を、資金がなければ何も始まりませんでした」

そう言って貰えるのはありがたいが、俺は資金を渡しただけなので大した活動はしていない。

「いえいえ、私でなくとも他の人が援助したかもしれません」

「ユウキ様ほど多額の、そして安定して援助してくださる方は他にいませんよ」

属性付与させた武器と言うのは相当高値で売れる。何せそれを製造できるのはこの世界でも数えられるほどで、さらに俺以上の品質を作れる職人がいないからその値段を具体的に言うと風の剣一振りあれば大人１０人が１年遊んで暮らせるほどだ。

その金を資金として流していたから、普通の孤児院よりも数段立派なモノができるのは道理。

下手すれば貧乏な市民よりも豪華な生活を孤児達は送っていた。

「ヒュエテル様、そろそろ本題に入りませんか」

ちょうど良いタイミングで紅茶と菓子を運んできたエルファさんが次を促す。

傍目から見るとエルファさんの態度は無礼かもしれないが、これがエルファさんなのでお互い何も言わない。

そして、ヒュエテルさんは居住まいを正すと徐に切り出した。

「ユウキ様のご尽力によってスラム街に巣食う孤児はほぼ一掃されました。孤児達も施設での生活に戸惑っていましたが、現在は落ち着いています」

「それは良かった。スラム街の治安も良くなったんじゃないかな」

俺の問いにヒュエテルさんは頷く。彼女曰く、まだ暴力は残っているものの1年前と比べると大分ましになってきたそうだ。

「で、私としては次の段階に進めたいと思います」

「次の段階？」

俺が聞き返すとヒュエテルさんはゴクリと唾を飲み込み、意を決して話し始めた。

「スラム街の大改造を行いたいと思います。具体的に申しますと給金を彼らに払い、彼ら自身の手でスラム街を解体させるのです」

「……なるほどねぇ」

ヒュエテルさんの提案に俺は考え込む。

スラム街に集う連中が全員悪の道に走るわけではない。中にはやむに已まれず故郷を捨ててそこに落ちぶれた人間もいる。

そして、彼らを更生させるに一番手っ取り早い方法は職を持たせること。

もちろんそう上手くいくとは限らないが、それでもあそこで腐らせるよりかはずっと建設的だろう。

が、ここで問題が出てくる。

それはこの都市があと3年ほどで滅びるということ。

つまりそんな大規模政策を行ったとしても効果が出る前に終わってしまう可能性が十分にある。

もしそうなると金をどぶに捨てるのみならず、何よりもヒュエテルさんの願いを踏み躙る結果になりかねない。

「……僕的には孤児院に常勤教師を招き、孤児達全員に高等教育を施したいのですが」

そこから離れられない住居と違って人なら移動できる。彼らがどこに行っても生きていられるよう訓練するのなら俺は金を出すと提案するが。

「しかし、私はスラムを何とかしたいのです」

「おそらく3年後には全てが消えますよ」

「万が一そうなるかもしれませんが」

「……信じてほしいのですが」

実はこれまで何度も近いうちに国が滅びると訴えているのだが、誰も彼もが信じてくれなく、挙句の果てには胡散臭い人間が寄ってきて寄付を迫ってくる始末。

「なら、こうはどうですか？　その大規模工事は3年後に行うと、それまでの期間は区画整理や住民の説得などを行うというのは」

「それなら納得です」

信じてもらえないのであれば妥協案を提示しよう。

どうせヒュエテルさんの構想は一朝一夕で出来るものではない。行うにしてもここまで大規模になると国の許可が必要だろう。そして何よりも大金が必要なのでこの提案には頷いてくれた。

「では、積立金として毎月これくらいはどうでしょうか」

「そうだなあ……」

ヒュエテルさんが予め試算してあった金額を見て俺達はこのことで少々議論し合った。

「さて、ではそれまでの間、僕としては孤児達に高等教育を施すために教師を招きたいのですが、伝手はありますか」

「ボランティアの内数人が私塾の講師を行っています。あの人達に

声をかければ了承してくれるかもしれません」

「それは良かった、早速お願いします。で、給金の方は一般学校の教師より1割増しだということを打診して下さい」

「分かりました。しかし、給金1割増しという公表はまだ控えます」

「どういうことですか？」

俺が聞き返すとヒュエテルさんは少し笑って。

「そのことを示すと単にお金に惹かれた輩が集まりかねません。それはなるべく排除したいので、まずはその事実を伏せておきます」

ヒュエテルさんは孤児院の経営も兼ねていたので金勘定の力量が大いについていた。おかげで巷では『金庫番』という2つ名までつけられている。

俺としてはそこまで徹底的にやってもらうつもりはなかったのだが、ヒュエテルさんは貰うだけでは申し訳ないと言っている。

まあ、払う分が減るに越したことはないけど。

その後、孤児院の現状や備品の過不足など細かい協議を終えたヒュエテルさんは席を立ち、俺は玄関まで見送る。

ヒュエテルさんが来訪したのはまだ日が高いうちだったのだが、いつの間に完全に帳が下りている。

「実りの良い会合ができました。私達にここまで目をかけてくださり本当にありがとうございます」

と、礼を残して屋敷から立ち去っていった。

「変わっていますね」

2人きりになるとエルファさんはそんなことを切り出し始める。

「普通孤児なんて見捨ておかれる存在ですよ。ですから国も知らぬ振りをするにも関わらず主は彼らを救おうとするのですね」

エルファさんの問いに俺は背伸びをしながら頷く。

「これは俺の心によるものだな。俺のいた国では見捨てられる命なんてなかった。だからこの現状を見ると何とかしたくなるんだよ」

理屈ではない。

ただの感情であり、自己満足だということは己が一番身に染みて分かっている。

「しかし、今のところは問題がありませんので目を瞑ることにします。ただし、やりすぎには注意して下さい。いくら手を差し伸べたいとしてもそれで主が潰れるようでは本末転倒です」

「ああ、そこは分かっているよ」

「本気で危なそうでしたら私が無理やりにでも止めさせますから」

エルファさんなりの忠告なのだろう。俺はそれに大きく頷いた。

「さて、そろそろ夕餉ですので主は少々お待ちください」

エルファさんは1つ完璧な礼をして屋敷の厨房へと歩を進めていった。

浅はかな考え

「さて、次はどうしようか」

夕食を食べながらそんなことを呟く。

「師匠、決まっているでしょう！　私にみっちりと教えることですよ！」

「……本当に元気だな、サラ」

俺はげんなりした眼でサラを見つめるが、サラは俺の感情などどこ吹く風でフフンとばかりに胸を張る。

「当たり前です。何故なら始めて５つの属性を付与させた武器の製造を目の当たりにしたのです。これが興奮せずにいられますか！」

そう、俺はつい先程まで７属性の内光と闇を除いた５属性を付与させた武器を製造していた。

簡単に見えるが実際は言語で語り尽せないほど難しい。

何せ火と水、雷と土と言ったように属性の相性というものがあるために各属性を相殺させないよう絶妙なバランス感覚が必要になる。

で、どうしてそんな俺は作ったのかというと、そろそろサラに壁というものを経験させるためだった。

最近サラは天狗になってきたのか遠慮もせずに多くの属性を付与

させた武器を作ってほしいと催促し、それがあまりにしつこいと感じた俺は不可能な課題を出してやった。

サラの力量ではせいぜい3つの属性を付与させるレベル。

おそらく成功しないだろう。

が、不安というものもある。

何せサラは天才だ、凡人たる俺の思惑など易々と裏切ってしまう展開が頭から離れない。

「……まあ、それでもいいか」

俺を追い抜く風景が一瞬頭をよぎったが、俺はそれを認めることにする。

その時は7つの属性全部付与させた武器でも作らせれば問題はないだろう。

閑話休題

「で、とりあえず今日は飯食ったら寝ろ。今日は親に連絡しているだろうから問題ない」

早朝から製造を始め、完成したのがつい1時間ほど前。その間は気を抜くことが許されず、つきっきりで打っていたため、身体も精神も疲労がヤバい。今すぐにでも倒れたい気分だ。

「むー、師匠。つれないですねぇ。ちょっとぐらい先程の鍛冶につ

いて教えて下さいよ」

「頬をふくらませて剥れて俺を萌え殺させるつもりか？」

「師匠？　何を言っているんですか？」

「……忘れてくれ」

どうも疲労によって思考能力が変になっている、俺は何て戯言を口走ってしまったのだろう。

「明日だ、明日サラに同じものを作ってもらうから今日はよく寝ておけ」

「しかし、私は興奮で眠気など起きないのですが」

「そうなのか？」

「はい、今にでもそこら辺を笑いながら走りたい衝動に駆られています」

どうやらサラは疲労が一線を越えるとテンションがハイになるらしい、新たな発見に俺は何となく頷く。

が、そんなことをしている場合ではないので俺は課題を出すことにする。

「それなら宿題だ。今、エルファがベットを整えているからそれが終わり次第そこで5分近くじっとしていること」

「嫌ですよ、私は眠る気分じゃないんです」

サラがそう言ってごねるので俺は新たな言葉を紡いだ。

「5分間ベッドで横になっていれば今すぐ5つの属性を付与させた武器を作っても良いぞ」

「分かりました、約束は守って下さいね！」

サラはそれを聞くやいなや2階の寝室へすっ飛んで行った。

――20分後

「御馳走様」

「御粗末様です」

エルファさん曰く、サラはベッドに入ってしばらくは目がギンギンに冴えていたようだが、突然スイッチが入ったかの様に眠りに入ったようだ。

あまりに予想通な展開に俺は苦笑するしかない。

「さて、俺も寝させてもらうぞ、戸締りは任せる」

欠伸を一つした俺は食堂を出ていった。

鍛冶場には俺とサラの2人しかいないが、その場は和気藹藹とした雰囲気でなく悲壮感に充ち溢れていた。

「サラ。もう分かっただろ、今のお前には無理だ」

もう何回言っただろう、数えることすら億劫になる程繰り返した台詞を紡ぐのだが。

「もう一度だけ、もう一度だけチャンスをお願いします」

サラは付与に失敗し、跡形もなくなった剣を握りしめながら涙ながらに訴えた。

始めは驕り気味のサラに灸を据えるつもりで今回の提案を出したのだが、ハッキリ言って今は後悔している。

てっきり俺はあまりの難しさに諦めて素直に俺の教えを請うと予想していたのだが、まさかサラは困難にぶち当たるとボロボロになるまで挑戦するタイプだとは知らなかった。

「師匠命令だ、明日にでもやれ」

俺は溜息を吐くとサラにそう中止を命令する。

無論サラは抵抗したのだが、すでにハンマーすら握れないほど手がボロボロになっていることを指摘すると不承不承ながらも頷く。

「また明日やりますから」

去り際にその言葉を残していったのが印象的だった。

2、3の属性を付与させるにはともかく、4つ以上になると相反する属性を同居させるために一般の鍛冶屋には置いていない特殊かつ巨大な設備が必要なので俺の鍛冶場は一辺10mという広さを持っていた。

そこにポツンと一人残された俺は先程までサラが打っていた失敗作を拾い上げる。

それは付与された属性同士が反発して無残な形となった剣だが、前のと比べると僅かにだが出来が良い。この調子だといずれかは成功するだろうと思われる出来だった、が。

「その前にサラが壊れそうだな」

悲しいかな、今のサラは才能に肉体が追い付いていない。

この調子だとサラに致命的な何かが起こってしまうことは十分に予想できた。

一応俺はサラの師匠なので、弟子であるサラの面倒を見なければならない。

で、サラがこのままだと不幸な結果が待ち受けているのならやることは一つだ。

「俺はサラにしばらくここに来るなと言わなければならないな」

突然の禁止にサラは混乱するだろうし、もしかすると勝手に鍛冶

場へと侵入するかもしれない。

「言い訳かもしれないが鍛冶自体を禁止するわけじゃないぞ」

サラの身が危険なのはあくまで４つ以上属性を付与させることで２、３の属性付与させた武器の生成を禁止しているわけではない。

そして、４つ以上は俺の鍛冶場のような設備が無いと無理であり、この設備が置いてあるのは王宮公認の鍛冶屋か研究施設のみだろう。

「まあ、何を嘯ろうともこれは俺の浅はかな行為が招いた結果に変わりはないけどな」

全ては俺が５つの属性を付与させた武器をサラに作らせたことにある。

身を切り刻まれる悔恨に顔を歪めながら俺は自嘲した。

「今日で４日目ですね」

エルファさんの言葉に椅子に座っている俺はゆっくりと頷く。

俺はサラに療養を言い渡そうと表情を硬くして待ち構えていたのだが、サラはあの日以来一向に姿を見せていなかった。

自宅へ帰って頭を冷やし、今の自分では完成できないと自覚して体を休めているのなら好ましいが、おそらくそうではない。

あのサラの性格上自らの意志でここに来ることを止めることはありえない。

十中八九サラの容体を重く見た両親が止めたのだろう。

「迎えに行くのですか」

エルファさんの問いに俺は応える。

サラは未熟だが、いずれは世界最高の鍛冶師になる可能性を持つ逸材。

休養させるならまだしも、二度と鍛冶に触れさせないとされたら俺は悔やんでも悔やみきれない。

「馬車を用意してくれ」

俺の要望にエルファさんは「畏まりました」と礼をしてこの場を去っていった。

逢引き？（前書き）

サラの話は次で終わりです。
やれやれ、本来なら1話で終わらせる予定だったのに……

逢引き？

世界最高峰の鍛冶職人という名は伊達でない。

高名な冒険者も大富豪も俺の武器を求めに来るため俺はあまり外へ出られないし、所用があって外出するにしてもこの馬車のように外から中の様子が伺えない様カーテンで外部と遮断されていた。

「まあ、有名税といったところか」

俺はフフンと鼻で笑うことにする。

と、いうか笑うしかない。一体何が悲しくて屋敷の外から出られない実質軟禁生活を送らなければならないのか自問してしまうため、ここは優越感に浸っておくことにしている。

「が、今はそんなことを考えている場合でない」

ダークサイドに陥るのは後でいい、今はもっと大事なことがある。

灯りがランプしかない中で俺は帽子やマフラーなどで顔を隠して準備をした。

エルファさん曰く、サラの実家は中堅どころの鍛冶屋らしくそれほど人気があるわけではないにしろ、それでも客はいるので変装しておいた方が良いとアドバイスをされたから。

正直な話、この程度で騙せるかなと不安だったのだがエルファさんは。

「経験上、人なんて顔さえ隠せば大概何とかなるようなものです」

と、非常に説得力がある言葉を紡がれたため俺は観念して従った。

変装を終えた俺は腕を組んでこれから起こることを予想してみる。

サラからの情報によると、自分は一人娘で他に子供はいないことからサラの両親はサラを目に入れても痛くないくらい溺愛しているだろう。

そして俺はその愛娘に無理をさせてしまった。

サラの両親の怒りは相当なものだろうと予測できる。

「今日はサラ本人に会うことは出来そうにないな」

アポもなしに突然訪れたのだから当然として、多大な親の怒りをぶつけられることは覚悟しておかねばならない。

「まあ、それは俺の所業に対する罰として受け止めればいいか」

重要なことは如何にこちらの誠意を相手に分からせるかだ。

確かに今回俺はサラを傷つけたが、それはサラの才能が大きすぎたから。嫉妬の感情も交じっていたと正直に述べよう。その上でサラの素直さを褒め称えれば両親も理解してくれるだろう。

「よし、これでいこう」

俺が頷くと同時に振動が大きくなったのは、石畳が敷き詰められている地区に変わったからだろう。

「ご到着しました」

その言葉と同時に業者は恭しく扉を開ける。

その通りはティータさんが薬屋を営んでいる地区と比べるとやや活気が劣るものの、その場所に漂う空気は実戦向きというか緊張感が溢れている。

そこを行きかう人を眺めても、油断ない雰囲気を漂わせていることから熟練の冒険者達だということが分かった。

古びた石畳を通り抜け、少し奥まった場所にある年季の入った店の前で俺は立ち止まる。

『キュリアス鍛冶屋』

ここが俺を師匠と呼ぶサラ＝キュリアスの実家とみて間違いなかった。

「さて、入るとするか」

俺は己に発破をかけ、唾を飲み込んでから中へ入った。

入って2歩も歩かないうちにカウンターがあり、武器が壁に所狭しと並べられている。

少々狭いのではないかと感じたが奥から鉄を打っている音が響いてくることから売り場と鍛冶場、そして住居区がこの場所に詰め込まれているのだろうと考えると納得できた。

「あら、いらっしゃい旅人さん。今日はどのような依頼で」

そう店内を見回しているうちに奥から４０代半ばの物腰の良い年配の女性が出てきた。

よく見ると目の辺りとかサラの面影が見えるのでサラの母親ではないのかと推測する。

「あら、どうしましたか？　何か私の顔についていますか」

頬を撫でながらそう聞いてきたので俺は首を振った。

俺は気付かなかったが、長い間彼女を見つめていたのだろう。そこは反省せねば。

と、まあそこら辺は置いて俺は本題を切り出す。

「サラの師匠、ユウキ＝カザクラが参ったと伝えてください」

俺がそう述べると、サラの母親はビシリと硬直した。

「……」

これ以上言葉を重ねても意味がないだろうと判断し、俺は口を噤んで相手の判断を待つ。

1分、2分とお互い沈黙を保ったまま時が過ぎる。

「主人を呼んできます」

サラの母親は辛うじてそう告げるとそそくさとその場を後にした。

で、残された俺は扉にもたれかかって相手が出てくるまで待つことにした。

この間は非常に長く感じられる。緊張してのどが渇き、気持ちが落ち着かないので視線をあちこちに彷徨わせて気分を紛らわせる。一瞬外に出ようかと頭に過ったが、ここでそんなことをしてしまうと二度と来れないという確信があった。

そんな風に自問していると、奥からの音が止んで誰かがこちらに向かってくる足音が聞こえてきた。

「ここからが本番か」

俺は唇を舌で湿らせながらそう呟いた。

世の中には不条理というものが存在する。

こちらがいくら友好を訴えようとも、手を取り合っていこうと手を差し出しても相手がそれの聞く耳を持たなければ意味がないとい

うことだ。

俺は今、その不条理を心の底から味わっている、何せ。

「……問答無用で外に放り出されるとは思わなかったな」

俺は服についた土ぼこりを払いながら毒づく。

あの時、サラの父親が現れたので俺はサラが如何に素晴らしいか、今後このようなことは起きないよう宣誓しようかと口を開いたのだが、言葉が出る前に俺は胸を掴まれて外へと投げられた。

まさかサラの父親がいきなりそんな強硬手段を取ってくるとは思いもしなかったので俺はさしたる抵抗もできず、なすがままに任せしかなかった。

で、俺としてはこのまま終わるわけにはいかなかったので、もう一度中へ入ろうとしたのだが扉は固く閉ざされている。

なるほど、つまり俺と話すつもりは全くないということか。

「せめてサラとお話しさせてください」

俺は扉をガンガンと叩きながら訴えるが返事は全くない。

仕方ない、根比べと行くか。

俺が叩くのをやめるか向こうが俺を招き入れるのが先かと考えたのだ、が。

「おい、ドアを叩いている少年はもしかするとユウキ＝カザクラじゃないか？」

いつの間にか仮面が取れていたらしい。俺は慌てて装着するがすでに後の祭り。

このままだと取り囲まれて身動きが取れなくなると判断した俺は止めてあった馬車に乗ってこの場を後にする。

「……仕方ない、最終手段といくか」

乾いた唇を舌でペロリと舐めて俺はそのことの算段を始めた。

夜――この世界には電気というものがないため、必然的に明かりはランプなど油を使ったものになる。油は貴重なため、わざわざ街灯にするのは宿場街などよほど人の出入りが多いところだけ。

こんな一角など存在しているはずがないだろう。

明かりは外から漏れてくる光と月と星の光のみなので夜中遅くなると安全のため家に泊まらせた理由もこの暗さなら納得のいくものだ。

こんな場所で襲われたらおそらく完全犯罪が成立してしまうだろう。

「今はこの暗さがありがたいな」

で、俺はといえばその闇夜に紛れてサラのいるであろう2階の部屋のベランダによじ登っている。

フェザーブーツを使って己の体重が軽くなったとはいえ、この代物は空を飛べるわけではないので俺はフック付きロープを併用していたわけだ。

「これで見つかったら言い訳できないな」

俺の今やっていることはどう見ても犯罪、弁明など期待できないだろう。

「さて、エルファさんからの情報によると今がサラは一人の時間帯だな」

一体どこで調べたのか、エルファさんはキュリアス家の部屋配置はおろか全員のスケジュールまで割り出していた。

「これぐらい造作もありません」

素でそんなことを言ってのけたエルファさんにドン引きした俺を責められるものはいないだろう。

閑話休題

俺は一つ咳払いすると窓をコンコンとノックする。

「誰ですか？」

しばらくするとやや緊張気味ながらも返事をしてくれた。

今は少し張りがないが、その声はサラだろう。サラの両親でなくてホッとする。

「サラ、俺だ」

近所迷惑にならない程度でそう囁くと、突然カーテンを引かれ、窓を開けられた。

「師匠？　どうしたんですかこんな時間に！？」

サラは突然現れた俺に混乱しているのだろう、目を丸くしている。

「シーっ！　それを含めて説明する。だから中に入れてくれ」

俺の要望にサラは頷き、俺を中へ招き入れた。

「ありがとう、おかげで助かった」

サラの部屋に潜り込んだ俺はサラに一礼。もしあそこで叫ばれでもすれば俺は決死の逃避行を演ずる羽目になっていた。

で、サラの部屋を見渡した印象が。

「……独特の部屋だな」

俺は苦笑いするしかない。

俺の偏見かもしれないが、普通女の子の部屋というものは人形や服など可愛い物が置いてあるものだと考えている。

しかし、サラの部屋は。

「どうですか？　このブラックアックス！　これは師匠ほどではありませんが、有名なギルロティ＝イエスマンが闇属性を付与させた逸品です。さらにこのアイスランスは……」

部屋の壁一面に飾られているのは武器。

それもほとんどが属性付きという高価な物ばかりだ。

サラの両親の身なりや店の規模からあまり繁盛しているとは考え難いので一体これらの武器を買うお金はどこから出てきたのだろう。

「ああ、これは私が生成した武器と交換したんですよ。私はこの都市でナンバー2を自負していますから。あ、もちろん一位は師匠ですよ？」

どうやらサラは商品として販売できるほどの技術を身に付けていたらしい。俺は誇らしい反面寂しい気持ちになる。

「で、師匠は何故来たのですか？」

そんなことを考えているとサラはそんな質問をしてきたので俺は咳払いを一つして口を開く。

「今日の昼ごろに尋ねたのだがそれは知らないか」

その答えに首を傾げる様子からサラの両親は俺が来たことを伝えていないようだ。まあ、俺が来たことなんて知っても両親にとって

は面倒が増えるだけだから正しい選択かもな。

「まあいい。俺が来た理由は簡単だ、サラの様子が知りたくてな。あの日から来なくなって心配したぞ」

「アハハ、ありがとうございます」

俺の言葉にサラは唇を綻ばせるもすぐに俯く。どうやら両親との間で何かあったようだ。

「サラ、どうした？　元気がないぞ」

俺はさらに少し近づいて聞くと、サラはキッと眼を上げて俺を見上げた。

「師匠、私を連れて行ってください」

「は？」

思わず間抜けな声を出してしまった俺を責められる者はいないだろう。が、サラは続けて。

「両親は私に二度と鍛冶に関わらせようとしません。そこらの娘としての人生を歩んでほしいみたいです」

「まあ、両親からすればそれが一番だろうな。誰が子供に好き好んで苦難の道を歩ませるものか」

俺に弟子入りするといい、これら高名な鍛冶師の武器と交換できる腕前といい、サラの行動力と才能は常軌を逸している。

「鍛冶に関わる以上サラはまともな人生など歩めまい。下手すれば想像を絶する不幸が待っているだろうな」

「勝手に決めないでほしいです！　誰が何と言おうと、地獄が待っていようと私はこの道を選びます」

サラは脊髄反射の様に俺に跳びかかって胸ぐらを掴む。

「サラ、詰め寄る相手が違うだろう。俺に食ってかかっても仕方がない」

「ああ、そうでした。ごめんなさい、興奮しまして」

タハハと笑って俺から身を離すサラ。

先程までサラの瞳がすぐそこにあったので動揺を見せないようポーカーフェイスを保つのに苦労した。

「とりあえず俺は3日後にまた来るからそれまでに答えを決めておけ」

「何でですか？　すぐに行きましょうよ」

そう言って急かすサラを見て俺はため息が漏れる。

「サラ、今のお前は混乱している。突然親から鍛冶を取り上げられ、そして俺が現れたから冷静な判断を下せない状態だ。そんな状態で俺についてきてもサラが苦しむだけだぞ」

俺は窓に手を掛けて外に出る準備を整え、最後にこう言い残した。

「最後にだが俺もサラの両親もお前のことを気遣っている。だからサラが鍛冶を捨てても俺は引きとめたりはしない」

まあ、口ではそう言いつつも本心では3年後の魔物大進行が起こる前にサラを助け出して鍛冶に関わらせるつもりだが。

俺は個人の幸せのためなら才能を腐らせてもいいと唱える善人ではないぞ。

父親の偉大さ（前書き）

これを書きたいがために前の2話を書いたといっても過言じゃないですね。

ふう、ようやく次へ進めることができる……

父親の偉大さ

「……激しい雨だな」

夜――

自分の部屋でランプに明かりを付け、眠気がくるまで安楽椅子で揺られていた俺はふと外を眺める。

窓には大粒の雨が打ちつけ、外の景色は自宅の庭の全貌さえ見渡せないほどの土砂降りだった。

「おお、雷だ」

突然一本の閃光が走り、次の瞬間には山が崩れ落ちた様な雷鳴が鳴り響く。

くわばらくわばら、念じていると俺の口からあくびが漏れた。

ようやく眠気が来たようだ。

俺は蝋燭の明かりを消してベッドに潜り込む。

「結局サラは断ったな」

先日の夜――俺はサラの答えを聞きに行った時のことだ。

「すみません、師匠」

俺が窓から入るなり額に頭を擦りつけて詫びるサラ。

「まあ、サラが選んだ道なら仕方ない」

だから俺は肩を竦め、努めて何でもない風に演じる。

本心としてはかなり落胆していたが、それを表に出したところで誰も得をしまい。そう、サラに罵声を浴びせて弾劾しても、期待外れだと切り捨てても双方共に苦しくなるだけだ。

「確認するが、サラは鍛冶を捨てて一人の娘として生きると」

俺の問いにサラは頭を上げてコクリと頷く。

「両親を捨てるなんていう選択などできません」

よく考えてみればサラはまだ１４歳、親が恋しい年ごろだろう。

あの時は激情に任せて家出すると宣言したが時が経つにつれて心細くなっていったと想像する。

「師匠、何て言葉を申し上げれば良いか……」

「気にすることはない。俺は前にも言ったとおりサラの将来を案じている。だからサラがそう決めたのであれば俺からは何もない」

「しかし……」

俺の受けた教えを全て無駄にするという罪悪感からか弱々しい声。

「そんなに苦しいなら3年後にサラを招待するから受けて欲しい。それで償いになる」

サラが鍛冶を捨てようが捨てまいがどっちみちサラを救う予定だ。

そこでサラがハンマーを手に取るかは分からないが見殺しだけはしない。

「何せ俺の近くにいた人間だからな」

心が弱くても頼りなくても俺と触れ合ったのは何かの縁。

救いの手だけは差し伸べるつもりだ。

「それじゃあサラ。また3年後に」

「はい……」

やれやれ、最後ぐらいはもっとシャキッとして欲しいものだ。

サラと最後の別れのことを考えながらうとうとしていると、突然ドアがノックされる。

「主、起きていますか？」

「エルファか、入れ」

「失礼いたします」

ガチャリと開けられて三つ又の蝋燭台を持ったエルファが慇懃に入ってきた。

ティータさんに「メイドにさん付けはおかしいわよ」と注意されたから、今はエルファのことを呼び捨てにしている。

フランス人形の様な整った顔立ちと鮮やかな緑色の髪が蝋燭に照らされてよく映える。外見はこれ以上ないというぐらいメイドなのだが、いかんせん俺を主として見ていない節があるのが玉に瑕だった。

「で、どうした？」

俺は促すと、エルファは書類を読み上げるかのように淡々と語り出す。

「先ほど、玄関からドアを叩く音が聞こえましたので外を確認すると、サラが玄関先で蹲っていました」

「サラが？　どうして」

俺は眠気も吹き飛ぶような大声を上げたが、エルファは動じずに先を紡ぐ。

「詳しいことは本人に聞いてみないと分かりませんが、長時間雨に打たれていたせいか酷く憔悴しています。この状態では話すのを酷だと判断しましたので、濡れた服を着替えさせて温かい飲み物を飲

ませ、客間で寝かせました」

「そうか、御苦労」

サラがどうしてこんな夜中に来たのか、すぐにでも理由を知りたいが本人が話せる状態でないのなら無理させることはない。

「明日の予定は全てキャンセルすることにする。そして明日はサラの分の朝食も用意してくれ」

「はい、畏まりました。しかし、明日の予定といいましても実質予定なしなのですから格好付ける必要はないかと存じます」

そんなことを言う必要は無いだろう。

俺の無言の抗議が伝わったのかそれともいないのか。エルファの表情から判断することは出来なかった。

翌朝、サラの様子を気遣いながら俺はパンをかじる。

俺の向かいにいるサラは以前と打って変わって塞ぎ込む様子は痛々しい。

「サラ、食べないとスープが冷えるぞ」

俺は何とか会話しようとサラに話題を振るのだが、サラはずっと俯いていた。

一体どうすれば良い？

俺は無言で後ろにいるエルファに助けを求めるが、エルファはピクリとも動こうとしない。

……本当に薄情だなエルファは。主が困っているんだから助けろよ。

エルファはあてにならないので、俺はどうしたもんかと首をひねる。

「まあ、言いたくないのなら言わなくても良い」

出てきた答えが無難な言葉だった……まあ、俺は誑しじゃないからそれでいいと思い込もう。

「部屋もあるし食事も心配するな。好きなだけ滞在してもいいから、気が向いたら話してくれ」

「……」

本当に、何か反応ぐらいしてくれよ。この空気は居た堪れないのだぞ。

俺は頭をバリバリと掻き毟る。ああ、どうして俺はこんな朴念仁なんだ。これならもっと女性と付き合って経験を磨いておくんだった。

「主、それは方向性が違います」

え？　心の中を読まれた？

俺は驚愕の面持ちで振り返るのだが、相も変わらずエルファはそこに佇んでいた。

こうしている間にもこの気まずい雰囲気はどんどん進行していく。

仕方ない、あれを試すか。

俺はコホンと咳払いして立ち上がり、サラの隣にまで移動する。

「……」

サラは放心状態なので、俺が隣に来ても何も反応しなかった。

本当に、やって良いのか？

俺は最後の確認という意味でエルファに視線を送ると、エルファは微かに顎を縦に振った。

ええい、後は野となれ山となれだ。失敗しても知らん！

俺はサラの手を掴んで引っ張った。

突然手を引っ張られたサラはバランスを崩し、俺の方向へと吸い寄せられる。

「はっ、え？」

サラは俺より身長が高いが、今は椅子に座っている。だからサラ

の頭がちょうど俺の胸あたりに来た。

「ちょ、ちょっと待ってください師匠!?　何をやっているんですか？」

サラがバタバタと暴れるが、俺はサラを離さない。

体はサラと同じ１４歳だが、普段から武器作りで鍛えられた体はこの程度の抵抗でビクともしないぞ。

「大丈夫、大丈夫だから……」

俺はそう囁きながらサラの背中を優しく撫でる。そうするとサラは初めのうちは暴れていたものの、徐々に大人しくなっていった。

「ふむ、少々ありきたり感があり、さらに行動も遅かったですが及第点と言ったところでしょうか」

それら一連の行動をそう論評するエルファ。

……お前、本当に俺のメイドか？

この時ばかりはエルファに殺意を覚えた俺がいた。

俺はエルファを食堂から叩き出そうとした。が、エルファは俺が全力で押しても岩のようにビクとも動かない。それでも俺は諦めずに押し続けているとサラが「もう良いです」という形で仲裁に入って現在に至る。

「家を追い出されました」

サラはそう口火を切って昨日のことを話し始めた。

昨日の夕食時にサラが両親にもう師匠の家に行かない、鍛冶も辞めると宣言したそうだ。

サラはこれで終わりだと思った。これで今までギスギスした雰囲気が消えて元の暖かい空気が戻ってくると考えていたが実際は違った。特にサラの父親から発するのが剣呑になっていたのだ。

「父は本当にそれで良いのかと聞きました。だから私は頷いたのですが、父は嘘を付くなと怒鳴り、私を外へ放り出しました。そして私が呆然としている間にドアをピシャリと閉められたのを覚えています」

ごめんなさい、そこから先の記憶が曖昧です。私は家の扉を叩いていたはずなのですけど、気が付いたら師匠の家で寝かされていました。

そう言ってタハハと笑うサラ。無理にでも笑おうとしているのか顔がぎこちない。

「……」

俺はすべてを聞いてサラの父親が何をしたいのか考える。

俺が直接向かった時にはサラと話もさせなかったので、サラの父親はサラに二度と鍛冶をさせないつもりだろうと考えていた。

が、実際にサラが鍛冶を止めて家にいると宣言するとサラを勘当した。

「うーん……」

サラの父親は職人というものを体現した人物だ。

己の信念を貫き、決して外部の圧力に屈しない気質を持っている。

あの時もそうだ。

職人の間で女を入れることがご法度なのは周知の事実。

俺も当初のころにサラを弟子入りさせ、それを妬んだ俺の弟子入り志願者が職人組合に密告して相当叩かれた。おかげで一時は俺の武器を持っている奴はこの街の鍛冶屋は相手にしないとここに来る商人や冒険者に通知され、「ユウキ＝カザクラの作った武器は欠陥品」と誹謗中傷の連続だった。

彼らも鍛えればそれなりの鍛冶職人になるのだが、サラと比較するとどうしても霞んでしまう。

例えるなら人工の山と天然の山ぐらい違う。

どれだけ土を盛り、木を植えて景観を良くしようとも所詮は作られた物――天然の山のみが持つ雄大さには何一つ敵わない。

だからこそ俺は始めて訪れたサラのみを重点的に鍛え上げていた。

サラを育てていたから村八分による精神的な攻撃は辛くなかったものの、金銭面で苦汁を味わったのを覚えている。

本当に、ティータさんがいてくれて良かった……

幸いにも俺が属性を付加させた武器を生成できることが広まり、職人組合よりも俺の武器を選ぶ者が増えたのでそういった弾劾運動は潜んだはずだが。

「サラの父親はあの時でもビクともしなかったのだが」

危害はもちろんサラの自宅にも向かっていた。そこでも俺と負けず劣らずの非難を浴びたのだがサラの父親はサラがここに来ることを禁止しなかった。

「この無神経が」

どうしてエルファに毒づかれなければならないのか、全然わからん。

しかし、突然の出来事に戸惑っているのは俺も同じ。これは一度親父さんと話す必要がある。

よし、行くか。

俺は自分に気合を入れると勢いよく立ち上がった。

「サラ、俺はちょっと用があるから席を外す。何か困ったことがあればエルファに申し付けてくれ」

「え、ちょっと、どこに行く気ですか」

俺の突然の行動にサラは動揺した。ここでどこに行くのか話すのは得策でないと判断した俺は嘘をつく。

「日課の散歩だよ。だから心配しなくていい」

サラが次の言葉を述べる前に俺は背を向けて食堂を後にした。

「こちらでございます」

俺が来ることを予想していたのだろう。突然現れた俺にサラの母親は多少目を見開きながらも前回のような硬直はなかった。

前に来たときは店先で終わってしまったため、奥まで入ることはなかったが今回は違う、俺はサラの母親に案内されて小さい居間に案内される。

そこは年季が入っており、多少汚れているが、日ごろの掃除のたまものなのか見かけほど酷くは無さそうだ。

「主人はもうそろそろ来ると思います」

サラの母親は身長こそ俺と同じだが、横が俺の二倍ほどある。かといっても、それは不快に感じることはなく、逆に包み込む暖かさを内包しているように見えるのでむしろ安らぎさえ感じた。

「ありがとうございます、おばさん」

ふっくらした顔立ちの、笑顔が似合いそうなのだが昨晩の件が影響しているのだろう。多少やつれて見えた。

「……」

俺はサラの母親が淹れてくれた水を口に含みながら静かに時を待つ。

すでに賽は投げられた、オロオロしていても仕方ない。

二、三口ほどコップを傾けると、親父さんが奥からノッソリと姿を現した。

例えるなら岩。体は鋼のように鍛えられ、服の上からでも筋肉が盛り上がっているのを確認できる。そして、その瞳はギラギラと輝いており、生半可な覚悟ではその瞳の前にたちまち吹き飛ばされてしまうだろう。

「こんにちは、おじさん」

俺は背筋を畏まらせてまず始めに挨拶した。

「サラの師匠を務めているユウキ＝カザクラです。よろしくお願いします」

「キュリアス鍛冶屋のジド＝キュリアスじゃ。ユウキ殿の活躍は耳に届いている」

本人は何気なく言っただけだが聞いているこちらとしては体の奥

にまで響く重低音の響きがある。さすが長い間この店を守ってきただけのことはある。貫禄が滲み出ていた。

「サラについて伺いました。事情を聞いてもよろしいでしょうか」

「話す必要はない」

つっけんどんに突っ張られる。その言葉に俺はどう反応していいか困っていると、さらにジドさんが言葉を重ねる。

「あいつとはもう親子の縁を切った。もう赤の他人じゃ。ユウキ殿が煮ようが焼こうがわしには関係あるまい」

どうやらそれで話は終わりのようだ。ジドさんは立ち上がろうとしたので俺は慌てる。

「ちょっと待って下さい。サラは、サラは突然のことで混乱していました。せめてサラに何か言葉を掛けてあげてください」

「サラという娘は知らん。だからワシには関係のない話じゃ」

どうやらこれで話は終わりらしい。ジドさんは立ち上がって背を向けた。

「お前ほど自分勝手な人間は見たことがない！！」

俺は敬意をかなぐり捨てて腹の奥から叫んだ。ジドさんの足がピタリと止まる。

「サラを鍛冶から引き離すかと思えば勘当して家を追い出す！　何

をしたいんだ、あんたは！　サラを苦しませたいだけなのか！」

「そんなことあるわけなかろうが！！」

大地が揺れたと思うぐらいの一喝。俺はすぐにでも逃げ出したい衝動に駆られたが、ありったけの力を込めてジドさんを見返す。

「わしはな！　サラが赤子の時から知っておる！　サラが生まれてから今までの間！　サラのことを考えんかった日など！　一日もあるまい！」

こちらを見下ろしながら放つ一言一言が魂を抉り取るような衝撃を持っている。怖い、止めたい。そんな弱気な感情が胸の奥から出てきてしまう。

「じゃあどうしてサラを苦しめる！　サラがどれだけ憔悴しているのかわかっているのか！」

「黙れ若造！　青二才が知ったような口をきくな！」

人間は本当の恐怖を感じるとその場に凍り付くことを思い知った。ジドさんから発する冷たい怒りに俺は身動きすら出来ない。

「サラは貴様のことを話すたび目をキラキラさせよる！　いつかは貴様のような武器を作りたいと訴えておる！　そのために己の体を壊しても良いというぐらいにな！　娘が傷付いていく様子を眺めていたわし等の気持ちが貴様に理解できるか！」

ジドさんの魂の叫びに俺は狼狽えてしまう。サラの態度に辟易していた俺が悪意ある課題を出してしまったのは事実。そしてそのた

めにサラは己の身を省みずに鍛冶に打ち込んでしまった。

もし俺があんなことなどせず粘り強く接していれば今回のような事態にならなかっただろう。つまり事の発端は俺にあるわけだ。

「……これだけは言える」

だからこそ、俺は筋を通す。

殴られようが罵られようが言わなければならないことがある。

「俺とあんたはサラに対する対応を間違えた！　もう少しサラのことを考えていればこんな事態にならなかった。そして、間違いはやり直せる！　俺とあんたとサラの3人で話し合えばまたやり直せる！」

俺のミスはサラの欠点を知りながらも無理な課題を出してしまったこと。

ジドさんのミスはサラの性格を知りながら鍛冶から引き離してしまったこと。

この2つの間違いを正せば大丈夫だと俺は考えていた。

「……」

「……」

しばらくの間、俺とジドさんは見つめあったまま動こうとしない。

俺のほうはほぼ空元気だったが、ジドさんはどうなのか分からない。まだ底があるのかもしれないが、それでも俺は最後まで付き合おうと決めていた。

「……やはりユウキ殿は見かけによらず強いな」

ジドさんがそうポツリと洩らして目を瞑った。

「娘のような世間知らずに対しても目くじら立てず、それ以上に娘の身を気遣う。そんなユウキ殿のような方であれば安心して任せられる」

先ほどの剣幕が嘘のように消え、ようやく息が楽に据えるようなる。

「そらならサラに会って下さい。そして、3人で話し合うべきです」

俺はそう提案したが、ジドさんは寂しそうに首を振る。

「会えばわしはサラをここに引き留めてしまう。だが、それだとサラの夢を壊してしまうからそれは無理じゃ」

「そんな、それとこれとは別でしょう。鍛冶職人とジドさん、両立できる道があるかもしれません」

「はっはっは、ユウキ殿よ。今回のサラの態度を見たであろう。サラは弱い子じゃ。弱いがゆえに自分の夢よりもこの老いぼれを選んでしまい、弱いがために鍛冶職人への未練を抱きながら人生を過ごすことは容易に想像できる」

「それは……」

俺が何と言おうか言葉に詰まっているとジドさんは続けて。

「サラにこう伝えてくれ『生まれてきてくれてありがとう』と」

ジドさんは最後にそう言い残し、その場を立ち去った。

「お水をありがとうございました」

俺はしばらくその場で呼吸を整えた後に席を立つ。

もうここに来ることはあるまい。

何となくだが、そんな予感がする。

「待って下さい」

俺はそのまま立ち去ろうとしたが、その背に声が掛けられる。何だろうと思って振り返るとサラの母親が一抱えある荷物を両手に持っていた。

「サラの私物です。身一つで飛び出していきましたから、ユウキさんにさぞかしご迷惑を掛けているでしょう。少しでも軽くなればと思いまして」

その中にはサラの服といくらかのお金が入っていた。金は要らないと断りたかったのだが、サラの母親は頑として受け取ろうとしな

い。

こういうところは両親に共通しているんだなあと心の中で苦笑していたが、手荷物の奥の方にある一品を見て俺は目の色を変える。

「おばさん、これは家宝だ。さすがに受け取れない」

俺が突き返したのは一本の古びたハンマー。相当年季が入っているがそのハンマーの材質は史上最高の硬さを誇るオリハルコン。おそらくこれ一本で俺の屋敷が買えるほど高価な代物だ。

「道具は使ってこそ意味があります。主人はこれを使うほどの武器を生成する技術を持ちませんでしたが、サラならこのハンマーを使ってくれると信じています」

俺は思わず奥の方に目を向けると、ジドさんが背中を見せながら佇んで頷いていた。

「おばさん、サラについては安心してください。必ず後悔させません」

オリハルコンのハンマーを背負った俺はサラの母親の手を握りながら力を込めて訴える。

「本当に、本当にサラのことをよろしくお願いします」

サラの母親は腰を深く折り曲げて俺を見送った。

「おかえりなさいませ、主」

「サラはどこにいる？」

「サラ様は客間です」

自宅へと帰った俺はエルファにサラの居場所を聞いて客間へと向かう。

サラはまだ元気がなかったものの、朝から大分回復したようだ。

「これ、サラの母親から」

俺はまずサラの母親から受け取った荷物を渡す。

「……お母さん、お父さん」

サラはそれを見るとうっすらと涙が滲んできた。

「後、父親からの伝言だ『生まれてきてくれてありがとう』」

俺は居心地が悪くなったので背を向けながらジドさんからの伝言を伝える。

案の定、鼻をすする音が後ろから聞こえ、さらに嗚咽が漏れてきた。

これ以上この場にいるのは耐え切れない。

俺は早足でその場を後にした。

扉を閉めると同時に部屋から泣き声が聞こえてきたのは言うまでもない。

「やれやれ、今日は疲れた」

俺は歩きながらそう呟く。正直な感想、キッカ達を拾った出来事と並ぶほど忙しかった。

「ん？　エルファ、何か用か？」

途中にエルファが待ち構えるように立っていたので俺はそう声をかける。

「いいえ、何も。ただ、今日の主は主に近づいていましたよ」

「それはありがとう」

俺は艶然と微笑むエルファの横を通り過ぎて自室へと戻っていった。

ジグサールへ（前書き）

超展開かもしれませんがお読み頂けると幸いです。

ジグサールへ

「師匠、武器ができました」

そう言って俺のもとへ走ってくるサラに俺は冷や汗をかきながら。

「転ぶなよ、絶対転ぶなよ。転んだら地震で俺の屋敷が倒壊するからな」

サラが先ほど作ったのは土属性を付与させたハンマーなのだがこの代物、効果が半端なく強い。

正式に俺の屋敷に住みこむことになったサラは少しだけ落ち着き、物事の分別がつくようになった。

「今の私には5つ以上の属性を付与させることはできません」

と己の非力を認め、代わりとして1つか2だけの属性を付与させた武器の精度の底上げを行っていた。

サラの武器はそれこそ町職人のはるか上をいっているが、王宮専属や俺レベルから見るとまだまだひよっこ。

なのでサラは多くの属性を付与させる代わりにまず1つだけ付与させた武器を作っている最中だ。

が、そこまでなら美談なのだがサラは天才。

1年ちょっとで俺と並ぶぐらいに成長してしまった。

サラの将来が恐ろしい。

「主、お客様です」

サラと2人でサラが作った武器を論評していた矢先にエルファが現れてそう告げる。

「ヒュエテルさんか」

俺の問いにエルファは首を動かした。

「これを見てください」

開口一番そう切り出して両手に抱えた大きな袋を置くヒュエテルさん。

俺はその中身が気になったので開けてみたのだが中から出てきた代物に俺は目を丸くした。

袋には金銀宝石が詰まっている。袋の中を総計すると俺の全財産の内約3割に相当するだろう。

「『恩を返します』と銘打たれていますので、おそらくユウキ様が保護をした孤児達の中でその道専門の高等教育を受けた孤児の誰かだと思います。」

確かに俺は4ケタに迫る数の孤児を保護したが、社会に出ている

のはその3割に満たないだろう。だから俺は目の前の金貨が信じられない。市民の給料は月15~30Gだということを考えると、まっとうな方法で稼いだわけでは絶対ない。

俺の驚きが伝わったのかヒュエテルさんは説明のために口を開くのだが心なしか戸惑っているように見える。

「ええと、言い難いのですが最近貴族の家のみ侵入する義賊が流行っているのはご存知ですか」

俺は首肯する。

今の俺の暮らしぶりは貴族から見ても上の方なので義賊に狙われる一つとして役人から注意するよう忠告されたことがあるからだ。

「ちょっと待て、つまりそれは」

俺の懸念が当たったようだ。ヒュエテルさんは困ったように首を苦笑して。

「ええ、お察しの通りその義賊はユウキ様が保護した孤児達の一部です」

「……最悪だ」

俺は額を抑えて天を仰ぐ。

何をトチ狂っているんだか。

彼らは良かれと思ってやったことかもしれないが、彼らが捕まっ

てその身元がばれてみろ。知識と技能を与える環境を作った俺は一気に窮地へと陥ってしまうぞ。

「止めさせられないのか」

俺は一縷の望みをかけて聞くが、案の定ヒュエテルさんは首を振る。

「このお金は私が知らない間に置かれていますから止めることはできません」

これを役人に届けると俺が疑われる。つまりこのGを受け取るしか選択が無いようだ。

「けどなぁ、今の俺はGに相当余裕があるからこんなリスクの高いものを受け取りたくないのだが」

俺自身が作った武器に加えてサラの作った武器も取り扱った結果、濡れ手に粟という表現がぴったりくるぐらいのGを稼いでいる。

おそらくこのシマール国の鍛冶職人の中では最もGを持っているかなと本気で考えてしまうほどだ。

ヒュエテルさんは俺の苦悩も分かっているのだが、ヒュエテルさんがこのGを持っていると聖者というイメージが崩れ、下手すれば俺以上の迷惑を被ってしまう。

だからこそヒュエテルさんはこのGを持ってきたのだろう、自分では処理できないがゆえに。

「それでは私はこれで失礼します。またお金が置いてあればユウキ様にお届けします」

そう言って去っていくヒュエテルさん。

そして残されるのは俺と大量のGのみ。

「どうしたもんかな……」

腕組みをし、憮然とした様子で俺は鼻を鳴らす。

仕方ない。

このGは目立たない様に恵まれない人達へ施すか。

妥当な考えに一つ頷くと俺は袋の口を閉じた。

「私に提案があります」

いつの間に近くへ寄っていたのだろう、気が付くとエルファが俺の隣に立っていた。

「このGと主が貯めたGの何割かを私に任せてもらえませんか」

「別に良いが、理由を聞いても良いか？」

「はい。確か主は工業都市ジグサールに移住を希望していたと考えます」

その通りなので俺は頷く。

「で、つい先程宮廷闘争に敗れてジグサールへ左遷されたツバイク伯爵が逃亡しました」

「ほう……」

この状況でそんなことを知らせる理由はただ一つ。

知らず俺は唇を歪める。

「なるほどね、それは面白い。ただ、街や都市を治めるのは貴族の特権だ。市民である俺がどうしてそこを治められるのか知りたいな」

そう聞くとエルファはクツクツクツと喉を鳴らし。

「このご時世、Gさえ払えばシマール国は爵位を与えてくれますよ」

と、囁いた。

「この国の腐敗はそこまで進んでいるのか」

Gで名誉を買える。

国の威信をかけて贈る称号をGで手に入れることが出来るのを聞いて俺は複雑な気分に陥った。

滅びた国のことなのであまり注意を払っていなかったが、シマール国が滅びた原因は魔物大進行だけではなさそうだ。おそらく長年かけて溜まっていた膿が溢れ出し、そして魔物大進行が引き金となったのだろう。

「やはり肝心なのは人か」

あらゆる万物は外側からの攻撃に強くとも内側からの攻撃にはえてして弱い。これが内と外の両方から攻められるといかに頑強な城であっても名将と呼ばれる人物が率いてもなすすべなく陥落するだろう。

「まあ、俺には関係ないか」

考察はここまで。

これ以上考えても意味のないことに気づいて俺は思考を止める。

「どうも話がうますぎるんだが、Gで爵位を買った市民に街の治安を守ることを他の貴族が許すか？」

貴族は保守的で嫉妬深い。突然俺みたいな市民が出ると叩かれそうな予感がしたが、エルファは何の心配もないと首を振る。

「ジグサールは周辺の魔物が強く、交通が不便な国の辺境にある都市です。あそこを治めるのは左遷された貴族ぐらいなものですから。さしたる妨害などなく手に入れられますよ」

「あそこはまだ辺境だったのか……」

その事実に俺は呟く。

ゲーム開始のころには有数の都市として名を馳せていた記憶があるのだが、どうもそれはあてにならないらしい。

「まあ、いいか」

辺境で誰の目にも映らないのであれば好都合。それなら周辺の反対も少なく、思う通りの改革が進められる。

「エルファ、できれば早いうちがいい」

善は急げ。ここはツバイク伯爵の後任が決まらないうちにさっさとジグサールを手に入れてしまおう。

エルファは「畏まりました」といういつものお辞儀を行ってこの場を後にした。

数日後――国からの要請で俺は男爵の地位を手にいれ、めでたくジグサールの赴任となった。

そして俺は単身ジグサールへと向かう。

サラはカリギュラスに残りたいと言ったのでお目付け役としてエルファを置いてきた。エルファは付いて来たさそうだったが、ヒュエテルさんの対応もあるのでエルファはカリギュラスから離れさせられないと説き伏せている。

まあ、実際の理由は今回の手腕の敏腕さに傍で置いておくのが怖くなったから。何故伯爵の逃亡という情報を察知できたのか何故こんな数日の間に爵位と領地を得られたのか、その理由が知れるまでエルファにあまり近寄られたくなかった……チキンだと罵ればいいさ。

そして、キッカ達は学校を卒業した後４人でパーティを組んで冒険がてら試金石となる素材を集めてくれるので何も言うこと無し。

で、俺がジグサールへ赴任した際の第一印象が。

「見事に何もないな」

屋敷に入った俺は帳簿を確認してそんな感想を漏らす。

俺の知っているジグサールは多くの腕の良い職人を抱える鍛冶場が乱立している都市だ。この都市に住む人々の大半は職人で、外部からは良い武器を買い求めようと遠方からやってくる冒険者で溢れかえる活気ある都市だった。

しかし、目の前に広がる光景はそれとは程遠い。

今のジグサールには何軒かの古びた工房と空き家だらけの住宅群しかない。都市に現在唯一開いている中央商店街は店の大半が閉まっている。

この都市の人口の大半はどこからか流入してきた身元不明者であり、まともな身分を持つ者の方が少ない。

王都であるカリギュラスの市民と貴族の割合は9割で、このジグサールは3割しかいないことを鑑みるとどれだけ酷いか理解できるだろう。

「金も無ければ人手もいない、挙句の果てには物も無い」

周囲の魔物が強すぎるためにここまで訪れる行商人が少なくなり経済が停滞して人口が流出する。人口が少なくなるとさらに訪れる行商人が減るという悪循環に陥っていた。

ツバイク伯爵が失踪した理由も分かる。

これだけ悪条件が揃えば逃げ出したくなるだろう。

事実、俺も始める前に心が折れそうだ。

ここがプレイヤー時代に親しんだ都市でなければ受けようと思わなかった。

「郷土愛って言うのかな」

我知らずそんな呟きが漏れる。

「まあ、泣き言はここまで」

俺は頬をピシャリと叩いて気持ちを切り替える。

周囲の魔物が強いということはその分手に入る素材も上等な物が多い。

ヒュエテルさんと相談して冒険心溢れた腕っ節の強い孤児をこちらに回してもらおうか。

監督はキッカ達に任す。

そして、彼らに素材を集めさせて加工して売る。

まずはG。

それが無ければ改革など夢のまた夢。

治安や人口問題などやるべきことはたくさんあるが、今はGを溜めることに決めた。

「さてと、やりますか」

俺はそう頷くと筆を手に取ってヒュエテルさんに手紙を書き始めた。

魔物大進行まで後2年。

急ぐ必要があるな。

名前：　ユウキ＝ジグサリアス＝カザクラ
装備：
武器　アダマスダガー
防具　貴族のマント
頭　シャインヘルム
足　黒龍革の靴
装飾品　サファイアの指輪
お金　３２４６００Ｇ
ステータス
剣　３５
魔法　２０

採取 25
料理 5
鍛冶 75
調合 66
裁縫 43
支配 5

貴族になったのでおれはミドルネームとスキル『支配』を手に入れた。

ジグサールへ（後書き）

読者様からの要望を考慮して主人公を単身ジグサールへと向かわせました。
次話から新キャラが登場しますが、読者様にとって魅力的に映るよう努力します。

番外編　エルファの追憶（前書き）

第3章へ移る前にちょっとした小噺を用意しました。
読まなかったことで本編に影響はありませんので無理に読む必要はありません。

番外編　エルファの追憶

殺せない暗殺者は不必要。

確かにその通りだと私――エルファ＝ララフルは首肯します。

暗殺者は人を殺すから存在意義があります。

汚れ仕事を行うために生きています。

では、人を殺せなくなったら。

殺す瞬間に突然ナイフを持つ手が震え、胃の中のものを戻してしまう錯覚に囚われてしまった暗殺者はどうなるのでしょうか。

答えは簡単。

ただこの舞台から消え去るのみ。

私は私を終わらせるために街の外へ出ようとしました。

「あら、エルファじゃない？　どうしたの？」

懐かしい声がした方向を振り返るとそこには昔の面影を残した薬売りが立っています。

「……ティータ」

辛うじて私はそれだけを呟きました。

「ふーん、お仕事を首になったのね」

私はティータとすぐに別れようとしたのだが、ティータは私が尋常ならざる雰囲気を放っていることに気づき、半ば無理矢理に近くの店へ連れて行かれて今に至ります。

そこで根掘り葉掘り聞かれましたが、肝心な個所はぼかして答えました。知ったことによってティータが危険に晒していい道理はありません。

「でもまあ、それで死ぬことはないんじゃない？　ほら、人生って仕事だけが取り柄じゃないし」

一般の職業はそうかもしれませんが、生憎と私の仕事は闇の領域に入る部類です。職業上の秘密を守る必要があるため墓場に行かなければなりません。

「もういいでしょう。これは私の問題です」

そう言って私は席を立ち上がろうとしますが、ティータは袖を引っ張り離してくれません。

「私の問題は私の問題、エルファの問題も私の問題よ」

真顔でハッキリと言い切るティータを見て私は「ああ、昔と一緒ですね」と苦笑します。

思えば幼少時代もそうでした。

私とティータは記憶がある頃から一緒で、私にその道の才能があると判断される8歳まで一緒にいました。

寡黙だった私にいつも目をかけ、他の友達よりも私と共にいることを望んでくれました。

明るく、面倒見の良いティータが私の傍にいることを鬱陶しいと感じたことも良い思い出です。

閑話休題

「じゃあエルファはお仕事が見つかればいいのね」

しばらくの押し問答の後ティータが疲れた様子でそう聞いてきましたので私は首肯します。

しかし、私はその質問に意味はないと考えています。

どこの世界に重大な秘密を抱えた人物を野放しにする阿呆がいるでしょう。

この都市に留まっていると早くて数日後には私は屍を晒しています。

街を出ようにも私はこの生き方しか知りません。

つまり私は死ぬしかないのです。

「失礼していいですか」

これ以上話す必要はないと判断して私は再度席を立ちます。

今度は袖も引っ張られませんでしたので私は踵を返しました。

「ユウキ＝カザクラって知ってる？」

その質問を聞いた私は足を止めました。

最近現れた正体不明の浮浪児が市民権を手に入れて一角の人物になったので、念のために監視を付けるという話を聞いたことがあります。

私が振り向くとティータはしめたとばかりにニコーッと笑って。

「興味を持った？　あの子ってただの浮浪児には過ぎたる技能を持っているから不安なのよね。そういえばエルファって昔から強かったからあの子のボディーガード兼メイドになってみない？」

特段私は生きることに興味がないわけではなく、死ぬしかないから死のうと考えていたのです。

生きることができるのなら私は垂れ下がった蜘蛛の糸も掴みましょう。

後日

ユウキ＝カザクラのメイドとして侵入に成功できたことで、私は死から免れることができました。数日に一度報告書を書かされます

がそれは仕方のないことでしょう。

さて、メイド服に袖を通すのは初めてですが中々着心地がよろしいですね。下手すれば前に着ていた黒装束よりも動きやすいかもしれません。

「これはあの子が作った代物なんだけどね」

そう言ってティータは苦笑しますが私には笑えません。これだけの逸品を作れるユウキは何者なのでしょうか。このメイド服は王宮の備品と嘯かれても大多数の人が信じる出来栄えです。

ティータに付き添われ、私は扉の前に立ちます。

呼び鈴を押されて中の主がこちらへ向かい、そして扉を開けました。

「ああ。ティータさんか、こんにちは。で、隣の女性は誰かな？」

私はティータにせっつかれたので一歩前に進み出て頭を下げました。

「お初にお目にかかります主。私の名はエルファ＝ララフル。横のティータ＝エルマライの紹介により主のメイドとして参上いたしました」

「へえ、エルファさんってバイオリンも弾けるのか」

ある日、朝食を作り終えて手持ち無沙汰だった私は何気なくバイオリンを手に取って弾きました。

こう見えても私の趣味はバイオリンです。

仕事を始める前と終わった後に自分を切り替えるためにバイオリンを弾いていました。

喜んでもらえて何よりです。

一曲弾き終わった私はバイオリンを元の位置へ戻しているところ、主がしみじみと呟きます。

「料理も掃除も大分マシになってきたことだし良かったな」

恥ずかしながら私は料理や掃除などメイドとして必要な技量を身に付けていませんでしたが、主はそのことに文句一つ言いませんでした。

しかし、主は許しても私のプライドが許さないのです。

仕事は完璧に。

それが私のポリシーですから、しばらくの間メイドとして技量を身に付けるために努力しました。

そのために犠牲となった食材と装飾品には合掌を送るしかありませんが。

このところ、私は主に対してイラつきがあります。

他の家の従者から見れば贅沢だと非難されると思いますが言いたいことがあります。

主は怒らないのです。

いえ、怒らないというより全ての出来事に対して無頓着と言うべきでしょうか。

無礼な客が訪れて弾劾されようとも、柄の悪い冒険者に脅されても主は何の関心も払いません。形だけとはいえ仕えている者にとっては主が私以外に馬鹿にされるというのは酷く屈辱的な光景です。

しかも主はそのことをどうでもいいとしか感じていません。

これは少し喝を入れるべきでしょうか。

手始めに来客室に豪華な品を並ばせましょう。

それで怒ってくれれば私としては喜ばしいことです。

……まあ、主を苛めることに若干の悦びがあったことを否定しませんが。

「師匠、今日も来ました」

そう言ってニッコリと微笑みかけるのは最近出入りするようになったサラ＝キュリアスです。

主と接触しに来ましたので、念のため裏を探ってみましたが何も出てきません。これは正直に主の鍛冶の腕前に惚れたというところでしょうか。

このメイド服もそうですが、主は物を作るということにかけては常軌を逸していますから気持ちもわかります。

「師匠、今日も見学しますね」

そう馴れ馴れしく主に近づくサラ様。私が言うのもなんですが、仮にも師匠と崇め奉っているのですからもう少し敬意を払うべきでしょう。

と、主のメイドである私は思います。

私は人を殺せません。

いや、殺せなくなったと言いましょうか。

そのために私の能力は大幅に低下しています。

しかし、そうは言っても「はい、そうですか」とやられるわけにはいきませんが。

「ば、化け物め……」

大広間で現在立っているのはそう発したリーダー格の男と私だけです、他は全員眠ってもらいました。

主は闇の世界でも有名らしく、どうにかして主を手に入れようと画策している輩がいますが、その中に今回の様な乱暴な手段に出る者の後が絶ちません。

「さすが『氷の死神』と呼ばれただけはあるな」

懐かしい名を出してきた相手を私はジロリと睥睨します。

よくわかりませんが、私はやるべきことをやっているとそんな2つ名で呼ばれ始めました。

老若男女問わず人を殺す時は顔色一つ変えないからだそうです。

まあ、今となっては興味などありませんが。

リーダー格の男はこの場から脱しようと背を向けましたが、それを見逃す私ではありません。

得意のスローイングで彼の背中にダガーを投げつけました。

主特製のダガーですから当たると確実に眠ります。

やれやれ、こんな代物を作るから狙われるのですよ。

侵入してきた輩を縛りながらそんなことを考えます。

「お疲れ様」

全てが終わった頃に主が地下室から戻ってきました。

襲撃があった場合、身の安全を確保できるまで主は地下室で過ごしてもらうことにしています。

「ふわー、エルファさんって凄いんだね」

一緒に避難していたサラ様もそんな感嘆の声を上げます。

「ありがとうございます」

このような場合は謙遜するのが一番だろうと考え、私は一礼しました。

どうでもいいことかもしれませんが、サラ様に身の危険が迫ると主が困るため他の『草』が常に張り付いています。

ヒュエテル様と主が孤児達をどうするかで話し合っています。

本人達は良かれと思ってやっているかもしれませんが、警護するこちらの身にもなってほしいものです。

主が行っている孤児しかりスラムの解体を行って一番困るのは闇の人間です。

彼らは汚れ仕事をそういった使い捨ての人間に行わせるのですが、

主達の行動のおかげで人間が集まりにくくなり、結果として彼らの行動を制限しています。

闇の人間は国にとっても害悪でしかないので国は主の行動を好意的な目で見ていますが、主達に対する報復活動が行われているのは事実。最近になって襲撃回数が増えてきました。

襲撃を行うファミリーはすでに見当を付けているのですから、国は早いところ解体させてほしいものです。

主も人の子だということが分かった出来事でした。

サラ様の態度に主もとうとう堪忍袋の緒が切れたようで、無謀な課題を出しました。

普通ならそこで終わりなのでしたが、サラ様は私と同じで己の身よりも課題をこなすことのほうが重要なようです。

その姿勢は仕事を完璧にこなす私は共感ができますが、主はそうではなかったようです。サラ様をどう止めようか狼狽して苦しんでいます。

仕方ありません。

私はそっとため息を吐いた後、サラ様の父親へ会いに行きました。

主に汚れ役を押し付けるわけにはいきませんから。

サラ様の父親は子煩悩なようです。

まさか話し合いに来た主を問答無用で投げ飛ばすなど想像できませんでした。

今の事態は私の責でもあります。

それを償うために今回は主を手助けいたしましょうか。

私はキュリアス家の行動パターンを整理して主に手渡しました。

主の笑顔が若干引きつり気味だったのは気のせいだということにしましょう。

サラ様の件で私はようやく主の人間らしい面を知ることができました。

ですので私はサラ様を慰めた主に対して賞賛させていただこうと口を開きました。

最近王宮がきな臭いです。

現国王の容体が悪化し、次の国王を誰にするか迷っているようです。

世襲的に見れば第1王子のフォルター宰相。

能力的に見れば第2皇子のキルマーク騎士団長。

現在王宮はこの2派閥に分かれて争っているようです。

王宮闘争に興味などありませんが、このままですと近いうちに権力とは違った力を持つ主が巻き込まれるのは必至。

せっかく得た安住の地を手放すわけにはいきません。

天が与えた機会とでも言いましょうか、目の前には義賊が奪った金銀財宝があります。

これと少しの主の財産を使えば王宮闘争の及ばない地へ逃げることができるかもしれません。

「主、提案があります」

私は前々から思索していた考えを披露しました。

主は単身ジグサールへ向かいました。

本来なら私も同行したかったのですが、そこは王宮からストップがかかりました。

大方私まで連れて行くと王国にとって主が脅威になると考えたのでしょう。

まあ、その通りでしょう。

主は大きな力を持つ反面、隙が多すぎます。

どこかの刺客に狙われたら高確率で命を失うでしょう。

しかし、それは主が一人の場合です。

私は密かにヒュエテル様と相談し、主の身辺を守るための教育を受けた孤児を何人か主の傍に置くことにしました。

私が太鼓判を押した孤児達です。

そこら辺りの刺客では相手にならないでしょう。

さて、私は主の代わりにサラ様の警護を行うことになりました。

サラ様は主ほどではないにしろ脅威ともいえる力を付け始めています。

上が上なら下も下と言いましょうか、隙の多さは主と勝るとも劣りません。

主は落ち着いたら全員をこちらに呼ぶと仰っていますから、その時までサラ様の身の安全を守りましょうか。

鍛冶場工房は主特製の施設ですので、使用中なら誰も入ることはできません。ですので今の時間帯は自由に行動できます。

「あら？　エルファじゃない」

街中を進んでいるとそんな声が聞こえました。

「ティータですか、どうしました？」

私がそう尋ねるとティータは何が嬉しいのか笑いながら頷いていました。

「良かったわと一安心している最中よ」

「何を訳の分からないことを」

「アハハ。いいじゃない、別に。ところでエルファ、なんでメイド服を着ているの？」

「これですか？」

私は服の裾を摘み上げます。

色々理由はありますが、やはり安心するからでしょう。

さすがは主と言いますかこのメイド服はとても肌に馴染み、動きやすいので同じのを何着も持っています。

「エルファ、注目の的よ」

確かに言われると多くの視線が私に集まっています。おかしいですね、私の他にもメイド服を着て歩いている人がいるのにどうして

私だけ。

「エルファは少し自分の容姿を気にするべきね」

ティータが呆れ気味にそんなことを呟きました。

「ところでエルファ、今暇？　時間があるなら少しお茶しない？」

そうティータが誘ってきましたので私は頷くことにします。

帰りは多少遅くなるでしょうがサラ様は気にしないでしょう。

「もう3年か、月日が経つのは早いものね」

3年前と同じ店の同じ席に座ったティータはしみじみとそんなことを呟きます。

確かにこの3年は殺し一色の日々と違い、充実していました。

「ティータ、ありがとう」

感謝の意味を込めて私は頭を下げます。

「ティータがいなければ私はここにいなかった」

私は自然と旧友に頭を下げます。

で、それを見たティータの反応は。

「どSのエルファが頭を下げるなんて、今日は雨でも降りそうだわ」

……失礼なことを言いますね、ティータは。

私は無言で目を細めました。

番外編　エルファの追憶（後書き）

追記　エルファが暗殺者として活躍していたのは８歳から１５歳までで、主人公のメイドとなったのは１６歳からです。
……かなり早熟ですがエルファは１７歳という設定に合わせるために見逃してください。

まずは金、とにかく金（前書き）

タイトルについては何も聞かないでください。

まずは金、とにかく金

まずは金！　とにかく金！　金がなければ全てが始まらない！

「そう！　いくら高性能の自動車でもガソリンなしでは動かない！　どんな精兵であろうとも食料がなければ弱卒以下だ！」

「一体何を吠えているのですか？」

俺がそう叫んでいると横から呆れ気味の質問が聞こえた。

「まあ、気合付けだ」

さすがに誰かから今の痴態を見られ、咎められるのは恥ずかしい。俺は誤魔化すために笑う。

横にいる女性はレア＝レグトリア＝ツバイク。

海を映し出した深い青色の髪を腰まで伸ばし、瞳は涼しい色合いを持っている。年は俺と同じ１６歳なのだが、身体の成長は１６歳と思えないほど進んでいる。身長こそ俺より少し低い程度で胸はあまりないのだが、それを欠点と思わせないほどしなやかでスレンダーな体つきをしていた。

ジグサールを治めていたツバイク伯爵の双子娘の片割れだ。

先日失踪したツバイク伯爵の人質として娘達をカリギュラスに留めていたのだが、この辺境を統治するよりも娘を見殺しにしてまで他国へ亡命したかったらしい。

で、亡命したツバイク伯爵の代わりに責を負うとして奴隷に成り下がりそうだったのだが、エルファの進言によって俺が引き取り今ここにいる。

「頼んでいた財政の案件は整理できた？」

俺が問うとレアは間髪入れずに頷く。

「隠れ借金や脱税など多岐に渡ってありましたが、すでに山場を越えました。後は事後処理だけです」

レアは事務能力が高いのでジグサールの内政の総責任者となってもらっている。

貴族の娘なのにどうしてここまでしっかり管理しているのか聞いてみたところ、博打好きの父のおかげで自分しか財政を操れる人間がいなかったからしい。

せめて帳簿をつけることができるぐらいの人間は雇っておけよ。

家が困窮するほど博打に嵌ったことからツバイク伯爵はかなり無能だったのではないかと推測する。

「さて、そろそろ戻ってくるかな」

約束の時刻はもう過ぎているが俺の待ち人は現れる気配もない。

「毎度毎度のことだからもう気にならないが、何とかならないものかなあ」

俺の呟きにレアが困ったように笑うと、ようやくこちらに向かってくる足音が聞こえてきた。

「ごめんごめん、また商人が放してくれなくて」

「姉さんは余裕というのを覚えるべきよ」

レアはフィーナに説教を始めるがフィーナは堪えた様子もない。

矢のように走って俺の前で謝るのはフィーナ＝レグトリア＝ツバイク。レアの姉である。

フィーナとレアは双子で、しかも一卵性双生児であるがゆえに姿形は全く同じ。シャッフルされると全く見分けがつかなくなるほど似ている。

ヒュエテルさんも双子でここまで酷似するのは珍しいと評することから如何に2人が鏡写しなのか分かるだろう。

が、残念ながら性格までは似なかったようだ。

妹のレアは几帳面で受け身な性格に対して姉のフィーナは活発的でアクティブに行動する。

レアは暇な時は本を読み、フィーナは外へ出る。

姿形がそっくりだった分を性格でバランスを取ったのかなと考えてしまうことなど何度もあった。

閑話休題

「で、フィーナ。どうだった？」

「ええ、大手の商会がジグサールに支店を置く契約が決まったわ」

フィーナは笑顔で首肯する。

フィーナは相手の警戒心を解かせる素質を持っているので主に外交を中心に行わせていた。

宮廷暮らしのお嬢様が海千山千の怪物達と話し合えるのか不安に思っていたがそれは杞憂に終わり、今ではこのジグサールの顔としての位置を占めていた。

レアとフィーナが揃ったところで俺は次の計画を打ち上げる。

「では、そろそろ本格的に動きたいが街の治安はどうなっている？」

レアに先を促すと、彼女は手にした報告書を読み上げる。

「ユウキ男爵の財力とクロスとアイラが率いる孤児達のおかげで中央商店街周辺の治安は確保しました。全体からみると小さな地域ですが、あそこだけなら窃盗や暴行など起きず、安心して外部の者を招けると断言できます」

その報告に俺は満足して頷く。

ここに赴任してからすでに数カ月がたった。その間俺は何をしたかというと、まず都市内で安心できる場所を作る準備をしていた。

人を呼び込むためにはそこが安全だということを知らせないとならないのでこの事業には金と人手を惜しまず注ぎ込んだ。

ここでクロスの騎士養成学校での経験が生き、クロスを治安維持の筆頭に任せたところ十二分の働きをしてくれた。クロスがいなければ中央商店街の治安維持はさらに数カ月はかかったといえる。

もちろんクロスを支えてくれたアイラも外せない。

道理を通せば角が立つように、逮捕された不逞な輩からの報復を未然に防いでくれたのはアイラの功績だ。ここはアマチュアであるならず者とプロのレンジャーであるアイラの違いが出たということか。

その報告に続いて今度はフィーナが口頭で述べる。

「キッカとユキが中心となって集めてくれた素材が規定量に達したのでその一部を各都市の腕の良い職人に渡したところ、評判は上々よ。身の安全を確保できるならしばらくジグサールに滞在しても良いという返事を貰えたわ。そして、各都市にユウキ男爵を含めた腕利きの鍛冶屋が集結するという噂を流したから早くも行商人はここに向かって動き出しているわ」

上々の結果に俺は口元を綻ばせる。

俺も職人だから彼らの気質を少し理解できるのだが、一流の職人ほど生活のためでなく優れた品を生み出すことに精を出す。

そんな職人達に普段は扱えない希少な素材に加え、俺が鍛冶を行

っている場面を見学させるのであれば断らない手はないだろう。

「本当にキッカとユキには感謝だな」

職人を呼び込むための素材を集めてくれたのはキッカとユキだ。彼女達が危険を顧みず最前線で活躍してくれたからこそ職人を呼び込めるだけの素材を集められた。

良い素材が大量に採れるとそれを加工する職人が来る。

腕の良い職人が集まるとそれを買い求める冒険者や行商人が寄ってくる。

そして彼らが来れば都市にGを落としてくれる。

その結果、都市が潤う。

「さて、これが成功すると冒険者がこの都市に滞在すると予想されるが、彼らが宿泊するであろう宿や酒場について抜かりはないかな」

「はい、従業員はこの数か月でしっかりと教育を施しました」

うん、それはよかった。もし不祥事が起こってしまえば客足が遠のいてしまうからそれは避けなくてはならない。

「冒険者のレベルに合わせた場所へ誘導できるか？」

「都市の入り口に情報屋を配備します。そこで聞けば今のステータスと装備でどの場所で狩るのか適切な場所を教えてくれます」

未熟な冒険者が己の力量も顧みれず、無駄に命を散らせると後の風評に響く。だから死なせるわけにいかないし、それ以上にこの都市周辺でステータスを上げてくればこちらとしても儲かる。

「そういえば1つ提案があったのだけど」

「何かな？　フィーナ」

「娼館や賭博場なんて作れないかな。ほら、あれって禁止しても無理な類のものだし」

「あー……それか」

プレイヤー時代はそういう類いのものをしなかったから失念していた。確かに人が集まるとそのような施設も必要になってくる。

「ねえユウキ男爵、もし良かったらそれらの指揮を私に任せてもらえない？」

「フィーナが？」

俺が聞くとフィーナは笑顔で頷く。

「ああいったものを一度でいいから運営してみたかったの。いつも父の傍で見ていただけだからとても気になって」

「うーん」

それを聞いて俺は一気に不安が高まる。

フィーナは自分がしたいことに関して一切の容赦がない。

以前手っ取り早く金を稼ぐために金貸し屋から不良債権を集め、それの回収をフィーナに任せたら返却率が１００％に近い状態へなった。それだけなら構わなかったのだが、フィーナがやり始めてから店や家を失う人が増えて治安に大きな影響を与えた。

「借りたものは返す。これ、正論でしょ？」

素でそんなことを言ってのけたフィーナに内政担当のレアが珍しく火を噴くように怒り狂ったのは記憶に新しい……そんなに大変だったのか、レア。

俺が唸っているとレアが口を開いてフィーナを擁護し始める。へえ、何だかんだ言っても姉妹なんだと俺は感心する。

「今回なら大丈夫です。二重三重の警戒網を張り巡らせ、もし引っ掛かった場合姉さんはしばらくハードプレイ専門の娼館で働いてもらいます」

「ちょっと！　そこまでやらなくていいじゃないの！？」

訂正

全然許していなかった。

レアが笑っていることから本気でフィーナをそこで働かせたがっている。

「まあ、そこまで言うのなら構わないか」

俺は許可を出す。娼館もカジノもいずれは建てなければならないのなら早い方が良いだろう。

大きな案件はここまで。後は小さな報告のみを済ませてこの場は解散した。

「ねえ、確認するけど娼館で働かせるというのは冗談よね？」

「さあ？　どうでしょう」

フィーナが震える声で尋ねてくるのに笑顔で返すレアが相当怖かったことを追記しておく。

まずは金、とにかく金（後書き）

誤字脱字やご意見、ご感想をお待ちしています。

治安向上

「～♪」

「ご機嫌だなレア」

俺とレアがいつも通り執務室兼会議室で仕事を行っているのだが、時折レアから鼻歌が聞こえてくる。

本人は自重しているつもりなのだろうが、頬の緩み具合や眼が生き生きしている様子から喜びを抑えきれないようだ。

「ええ、何故ならここまで上手くいくとは思いませんでしたから。内政を預かる身として冥利に尽きる結果です」

普段表情を崩さないレアがそこまでご機嫌になるのは3か月前から行った都市の活性化が想像以上の利益を落としてくれた。

この利益のおかげでこれまで予算がなく、実現できなかった案件に手を付けられるのだからレアとしては笑いが止まらないだろう。

「まあその通りだな」

俺としてもこれからの方針を進めるにあたっての第一段階をクリアできたから万々歳。

レアも喜び俺も喜ぶ結果と終ったのだが、残念ながら約一名不満な者がいる、それは。

「何なのよこの忙しさは！」

髪を振り乱して足音も荒く入室してくるのはレアの姉のフィーナ。

彼女は豪商や貴族などの折衝を行う外交を主に行っている。

「馬鹿貴族どもが！　袖の下とか利益供与とか便宜を図れとかなんて図々しい！　そんなに羨ましいのなら自分の領地で行えばいいじゃないの！」

フィーナがそう叫ぶのもわかる。

今回の町興しの成功を妬んだ他の貴族達が何とか甘い汁を吸おうと群がってきた。

で、その対応を一手に引き受けたのがフィーナ。

利益に目ざとい彼らの権謀術数を掻い潜り、相手に弱味を握らせずに奮闘していたのだからそれはそれは心労が溜まることだろう。

「ご苦労様、フィーナお姉さま。お姉さまの苦労がこのジグサールを支えていますよ」

言葉上は労っているように聞こえるがその実全然労っていない。

レアがフィーナをお姉さま呼ばわりするときは十中八九馬鹿にしている。

案の定フィーナが肩を怒らせてレアに詰め寄った。

「はいはい、もう分かったから2人とも止めてくれ」

このまま姉妹喧嘩にもつれ込みそうだったので俺は2人の間に割って入る。さすがのフィーナもこれでは不味いと悟ったのか渋々ながらも引き下がってくれた。

「……後で覚えておきなさいよ、レア」

（やれやれ、本当にお前らは仲が良いな）

そう口に出すと2人から折檻されそうだったのでその言葉を口に出すことはなかった。

「さて、フィーナは貴族の対応に追われていたらしいが、前に任せると言った娼館やカジノの掌握はどうなっている」

その言葉にフィーナは態度をコロッと変えて勢い込んで話し始めた。

「順調も順調、商人との提携も上手くいったし、そこから闇の人間を追い出すことも成功したわ。だからもうぼろ儲けよ。この2か月の収入だけで1年は遊んで暮らせそうだわ」

事もなげに言ってくれるが、実際にやるとなると途方もない労力を使う作業である。

「彼らを制御するのに何かコツでもあるのか？」

と、聞いてみるとフィーナは手を振って笑いながら。

「ああいうのを扱う人間は最終的に利益さえ得られれば良いのよ。だからそこを思考の基に置けば彼らが何を考え、何を得たいか、そしてそのために何をしようとしているのかが手に取るように分かるわ」

と、簡単に言ってくれた。

俺的には商人は貴族より厄介だと考えているのだが、どうもフィーナは違うらしい。

「下らない誇りや地位に固執し、後先考えずに付き纏ってくる貴族の連中よりずっと可愛いわよ」

この言葉にはレアさえも頷いていた。

「前々から思っていたがフィーナは貴族をボロクソに貶すな」

「だってあんな血筋だけのお荷物に尊敬の念なんて持つことができる？」

と、伯爵の爵位を持っていた元貴族のフィーナは非常に辛辣な言葉を返してくる。

……もう何も言うまい。

同族嫌悪と思うことにしておこう。

「さて、街の活性化が上手くいったので次の段階に移りたいと思う」

その言葉に頷くツバイク姉妹。

だから俺は会議の始まりを宣言した。

「レア、現在の財務はどうなっている？」

「はい、収入と支出のバランスが崩れ、今は金余りの状況になっています。この量があれば大きな改革の１つや２つは起こせるでしょう」

レアの報告に頷く俺。

「よし、それなら軍を整備しようかと考えている」

「軍ですか」

レアが渋い顔を作る。

まあ、当然だろう。

軍というのは基本的に金食い虫なので内政を預かる者としては好ましい存在でない。

が、俺が考えているのはレアが考えているような軍じゃない。もっと生産的な軍だ。

「半農半兵、という表現が正しいかな有事の際は兵として活躍してもらうが、それ以外は公共の福祉に力を注いでもらう」

「具体的にどういうこと？」

フィーナが今一つ理解していなかったのでそう質問する。

「輪番制というものを採用しようかと考えている。つまり1日兵の訓練、1日公共事業そして1日休みという具合にな」

「それで上手くいくかしら」

「フィーナの疑問も最もだ。しかし、短期的にはともかく長期的に見ると相当な利益を生む。何せこのような形ならば普通より多くの兵を確保できるからな。だから頑張れレア」

「分かりました」

レアが多少沈んだ声だったのは気のせいにしておきたい。

「で、公共事業として何をさせるかというと都市の整備が主な仕事。これから先、中央商店街以外でも治安を安定させたいからな」

「確かに。そろそろ都市の整備を行わなければ後々の業務に支障が出ます」

レアが納得するのもわかる。

金が動けば人も動くと言うように、最近ジグサールへの人口の流入が著しく、このままだとまだ治安が整っていない場所に流民を住まわせなければならなくなる。

「これが街の整備の基本計画書。ヒュエテルさんが前々から構想し

ていたスラム解体の構図をジグサールに合うようアレンジしたものだ」

そう言って俺は2人にそれを配る。

このジグサールへ赴任する前にヒュエテルさんの所へ赴いてこのことを相談すると快諾してもらった。

そして俺はそれをアイラとその子飼いの孤児達にこの街の全容を解明してもらい、この計画書を作成した。

「人手はこの街に多数の身元不明者が在住しているから彼らを使う。で、その際に兵役も負うならば一定の給付金を毎週送ると下賜してほしい」

「ふーん、大体理解したけど彼らの監督は誰がやるの？　私やユウキ男爵のような上品な存在に彼らが従うとは思わないんだけど」

「フィーナの疑問もわかる。だから彼らの総監督はキッカ、そして中級監督はヒュエテルさんが選んだ孤児達にやらせようかと考えている」

「キッカが？　確か彼女って根っからの冒険者でしょ、将軍には向いてないんじゃないかしら」

「フィーナの言うとおり、俺もそう思ったんだけどな。しかし、エルファの言葉によるとキッカは人を導くカリスマ性を持っているらしい。だから今回の人事に抜擢したのだけどな」

「エルファさんか、それなら納得」

自分を見出してくれたエルファはレアもフィーナも一目置いている存在だ。そのエルファが推薦したのだから2人は頷かざるを得ないのだろう。

「失礼ですがヒュエテル様が選んだ孤児というのは信用できるのですか？」

「レアはそう思うだろうな。ただ、疑問に思うのは彼らの仕事振りを見てからにしてほしい。ヒュエテルさんとは3年しか付き合っていないが、その彼女が持つ人物眼は大したものだぞ」

4ケタに迫る孤児の確保と彼らを保護する施設の維持は1人の人間にできる芸当じゃない。だが、ヒュエテルさんは目をつけた人物にそれを任すことで可能としていた。

そのことからヒュエテルさんが持つ眼は優れている判断できる。

「エルファ様には敵わないと思いますが」

レアよ、どう答えていいかわからない言葉を口にしないでくれ。

「……とにかく、キッカからはOKを貰っている。だから具体的な内容はレアとキッカで詰めてくれ」

その言葉にレアが頷いた。

「さて、公共工事と兵についてはレアとキッカに任せるとしてフィーナはクロスとともに治安を向上させてほしい」

「私も参加するの？　彼が率いる治安部隊で十分じゃないかしら」

「その疑問は最もだな。しかし、これ以上治安を上げるとなると闇の組織――ブラッディ商会からの反発が予想されるからこの機にクロスの治安部隊で一掃しようと考えている。フィーナは反目し合って同士討ちを誘発し、彼らを弱体化させてほしいのだが」

今まではパワーバランス上彼らに手を出すとこちらがやられる為手出しできなかったが現在は違う。財政が潤い、こちらの味方も増えた以上彼らに遠慮する道理はどこにもない。

ちょうど良い機会だ。

フィーナの交渉能力とクロスの治安部隊を使って一掃してしまおう。

「こちらの手足となって動きそうな人間の処遇についてはフィーナの裁量に任せる」

こちらに降って忠実な手下として動いてくれるのならそれでよし。

やはり彼らは彼らなりに使い道があるのが事実なのだ。

「ただ、助ける人間は選んでくれよ。後々こちらの寝首をかかれては堪らないからな」

言うまでもないとばかりに笑うフィーナを見て俺は成功を確信した。

踊り場（前書き）

今回は総括だけです。
話し的にはあまり進んでいません。
しかし、内政って結構難しいですね。
試行錯誤の毎日です。

「芳しくないな」

レアから輪番制による練兵具合そして都市の整備状況を聞いた俺はそんな感想を漏らす。

「申し訳ありません。予想以上に兵の士気が低く、中々従ってもらえません」

レアが恐縮するのだが俺はそんなに縮こまらなくていいと考えている。

元からの兵士ならともかく、つい先ほどまで浮浪者だった人間に兵のような働きを期待しても無理だ。幸いにもジグサールはこの都市の規模でまだ補える範囲なので急ぐ必要はない。

「キッカと送られてきた孤児達が今も奮闘しているのだろう。だから俺達は温かく見守ろうじゃないか」

「はい、今はその手しかありません」

レアが首肯したのでこの話題は終わり。

ふとキッカとその孤児達が頭に過ったので聞いてみる。

「ところでキッカと孤児達はどう？」

ヒュエテルさんが選んだ人材がどうなったのか興味を沸いたので

伺ってみると、レアは恥じ入るように口を開いた。

「ヒュエテル様を疑ってしまい、本当に申し訳ありません。彼女が選んだ孤児は想像以上の働きをしてくれたおかげで最悪の形である失敗だけは防ぐことが出来ました」

こう言っては何だが、計画の失敗の回避よりもレアがヒュエテルさんを認めてくれた方が嬉しい俺がそこにいる。

「キッカについてはやはりエルファ様のご慧眼です。彼女が送られてきた孤児達を統制してくれたおかげで私の指示を全体に行き渡らせることが出来ました」

「ほう、それはよかった。ところでレアから見てキッカはどう感じた？」

その質問にレアは人差し指を顎に当てて考え、口を開いた。

「圧倒されました。普段は何の変哲もない小娘のはずなのですが、いざ指揮をするとなると彼女から溢れ出す何かが私を含めた全員を魅了します」

小娘って……まあ、良いだろう。問題はそこじゃない。

キッカは仲間内から永久機関の持ち主と呼ばれていたからな。その底なしの体力と気力が生み出す覇気にレアは呑まれそうになったのだろう。

「つまり当初の計画よりは遅れているがそれは深刻な影響を齎すものでなく、時間さえかければ解決する類のものなのだな」

俺がそう結論付けると同意するかのようにレアは頷いた。

「お疲れ様～」

レアからの報告が終わるとそれに見計らうかのようにフィーナが顔を出す。

当初は3人が揃ってから報告会が行われていたのだが、報告する内容は事前に知らされていることから全員出席することに異議を唱えたのがフィーナ。

「大丈夫よ。聞きたいことがあれば出席するから」

そう言って席に着くフィーナ。

余談だがフィーナが最初に報告する際には必ずレアが遅れてくる。

性格は真反対なのだが妙な所で似ている双子娘のフィーナとレアだった。

「治安の件は？」

「もう大成功。アイラの助力もあったけどクロスが率いる治安部隊のおかげでジグサール全ての場所に目が行き届くようになったわ。この調子だと夜に娘が1人歩いても大丈夫じゃないかしら」

「へえ、それは良かった」

治安の向上は兵や都市の整備と違って緊急の用件だったためそれ

が上手くいって良かった。正直な話これが上手くいかないと次の段階に大きな支障が出てしまうからだ。

「で、フィーナが担当していたブラッディ商会の件はどうなった？」

「ああ、それね。概ね成功というところかしら」

「具体的には？」

「ブラッディ商会は壊滅できたけど、有能な人材は手に入らなかったわ。それはこちらの就こうとした人間も何人かいたけど、彼らはとてもじゃないけど使えない。せいぜい鉄砲玉が良いところだから全員捕えたわ」

「当初の目的は果たしているから問題はないな」

人材が手に入らなかったのは痛いといえば痛いがそれほど惜しむことじゃない。そういった人材はヒュエテルさんが送り出してくれるからあまり問題はない。精々優秀だったら拾ってやる程度の認識だった。

「ところでフィーナから見てクロスとアイラはどう見る？」

「そうねえ……クロスは責任感が強く、見ていて安心できるわ。だから彼の率いる部隊はどんな時でも動じないのかしら。何か事件があるとすぐに彼の部隊が駆け付けて冷静に処理する様子は惚れ惚れするほどだったわ」

クロスの評判が上々で何より。これはまだ誰にも明かしていないが、クロスは後1年ちょっとで起きる魔物大侵攻の際に守衛の指揮

官を任せるつもりだからな。

「で、アイラは……ユウキ男爵は愛されているわねとしか言えないわ」

「ん？　どういうことだ」

歯切れの悪い答えに俺は首を傾げるとフィーナは言葉を選ぶように語りだす。

「人ってさあ、愛する者のためなら残酷になれると言うけど、まさしくアイラはそれを地で行っているわ」

その言葉にレアも頷く。

「確かに、アイラの心酔具合は私から見ても寒気を覚えました」

「少しでもユウキ男爵を貶める気配を感じたらアイラの瞳から感情が消えるのよ」

「その通りです。諜報関係でアイラと打ち合わせする時があるのですが、次の瞬間には首と胴体が分かれていそうでいつもビクビクします」

そう言って頷く2人を見た俺はどう反応していいのかわからない。

「これだけは言えますが、もし私達がユウキ男爵に叛意を翻したら次の日には物言わぬ屍になっていますね」

「そうね。しかも見せしめを兼ねて無残な死に様を晒すわ――」

「――よくお分かりですね」

だからこそ俺の後ろから響いてきた怜悧な声音に全員が固まった。

「……アイラ」

フィーナが呻き声をあげた先には渦中のアイラがそこにいた。

諜報部隊主任　アイラ＝カザクラ

装備：

武器　スリープボウ　　射抜いた相手を眠らせる。

防具　カメレオンマント　　周りの景色と同化する。

頭　忍の頭巾　　己の呼吸音を消す。

足　サイレントシューズ　　己の足音を消す。

装飾品　神の不在証明書　　己の気配を消す。

ステータス

短剣　４６

弓矢　６５

隠密　７２

魅了　４３

恐怖　８２

４年前と比べて成長したアイラは、浮浪児の時と比べて印象が鋭くなったように見える。藍色の髪のボブカットは変わりないが瞳はさらに鋭く光り、体も少女体型から女性の豊満な体型へと変貌していた。

「ベッドで人を殺せそうだな」

アイラの十分に育った果実から目を逸らして呟くと。

「その前に初体験をユウキ様で済ませてからですね」

腕を組んで胸を強調する姿勢を取ったアイラは至極余裕のある笑みを浮かべて返してきた。

その言葉は男として嬉しいが今は童貞を失う気が起きない。だから童貞を失ってもいいかなと思ったらお願いしようと考えている。

「何場違いな会話をしているのよ！」

呆然状態から復帰したフィーナがアイラに食ってかかる。

「そうです！　見張りはどうしたのですか？」

続いてレアもそんな声を上げた。

するとアイラはニッコリと妖艶な笑みを浮かべて。

「抜き打ち検査ですよ。このように不測の事態に対応できるかどうかという」

「へえ。で、結果はどうだった？　会議室の外には5，6人が固めていたと思うが」

分かり切っていることだがここは聞いておくのが礼儀というものだろう。案の定アイラは唇を歪めて。

「全員鍛え直しですね。反撃はできなくともせめて声ぐらいは上げ

て欲しかったものです」

フフフとアイラは笑うが、仮にもヒュエテルさんが選んだ人材をこうもアッサリと無力化するのを見た俺は戦慄を禁じ得ない。

「いえいえ、私などエルファ様に比べるとまだまだ」

唇を笑みの形に広げながら謙遜するアイラ。それが本当かどうか分からないが、アイラにしてもエルファにしても化け物だと考えてしまう。

「それではこれで失礼します。会議を邪魔して申し訳ありませんでした」

驚きで声も出ない俺達を尻目にアイラはその場から出ていく。

「ああ、言い忘れていましたが。もしユウキ様を裏切ったらどうなるのか、とくと想像して下さい」

フィーナとレアにとってはこれ以上ないぐらい不吉な言葉を残していった。

「……えーと、会議を始めていいか？」

アイラが去ってしばらく経った後で俺は2人に伺う。

「え、ええ。大丈夫よ」

フィーナの震える声から推察できる通り2人ともまだ立ち直っていないが、このまま時間を浪費するのも何なので話を進めることにする。

「まあ、とにかく。レアは引き続き兵の調練と都市の整備を頼む」

「分かりました。ところで気になったのですがユキはどうしています？　彼女だけ名前が出てこないのですが」

「ああ、それは私も思った。キッカやアイラ、そしてクロスはよく見かけるけどユキは最近見てないの。一体何をしているの？」

「そう言えばまだ伝えていなかったな」

今振り返るとユキがどうしているのか2人に伝えた記憶が無かった。

「ユキは今、魔法学園のＯＢやＯＧ、そして同級生を尋ねて回っている」

「え、何で？」

「フィーナ、理由は簡単だ。ユキは近い内に創設する『魔導騎士団』のメンバーを集めてもらっているからな」

これは俺の構想の一つで、絶対数が少ない魔導師は1人で軍の一個小隊に相当する火力を持つ。そのため魔導師の数というのは軍の強さを表す一つのパラメーターにまでなっていた。

「しかし、そう簡単に集まるのですか？　魔導師というのはその性

格上国や貴族が囲い込む場合が多いのですが」

「レアの言うことも分かるな。ユキは最難関と名高いの王立魔導師養成学校で史上始めての市民で生徒会長を務めた天才だ。今でもユキに心酔している者が多く、国や貴族よりもユキの下で働きたいと表明している者が確定しているだけで２０人は下らない」

「２０人！……」

レアが驚くのも分かるだろう魔導師が２０人ということは軍の一個大隊に相当する戦力だ。しかもその集団はユキを崇めている者で構成されているから結束力も並大抵でないだろう。

「何にせよフィーナの負担が増えることは確かだ。と、いうことで近いうちに魔導師を取られた国や貴族の抗議が来ると思うからそれを一手に引き受けてくれ。ああ、資金もある程度自由にしていいから決して魔導師を返さないように」

フィーナの悲鳴をバックにして俺はこの話題を打ち切って会議を終わらせた。

踊り場（後書き）

本当はアイラの登場予定など無かったんですけどね。
恐るべし、ヤンデレ。
作者の手を離れて動くとは。

大嵐（前書き）

キッカ大暴れ。
前半の内政パートが吹き飛ぶインパクトをキッカが与えてくれました。

大嵐

「報告出来るまでの仕上がりになりました」

どことなく嬉しそうに語るのは輪番制と都市の改革を任されていたレア。

「当初の予定より遅れましたが、仕上がりは上々です。最大の労働力を手に入れ、さらに無法地帯を撲滅出来ましたからさらに多くの人をジグサールに受け入れることが出来ます」

3か月前は芳しくなかったものの、キッカと送られてきた孤児達の活躍によって俺が思う通りの仕上がりを見せてくれた。

モデルケースは中国の唐時代における長安の都の再現。

碁盤状に区画を整理し、一定区画ごとに治安部隊の詰め所を配置することによって都市の治安維持を図る。

さらにこの中央役所を中心として以下の様に区域を割り振った。

北には強力な魔物出没地域に繋がる北門ゆえにここは素材買い取り屋や情報屋、鍛冶屋そして薬屋など冒険者向けの店を揃える。

東から外部の者がやってくるためこの区域に宿屋や商店街など行商人や旅人を対象とした商業区とする。ちなみに娼館やカジノ、闘技場もここにあった。

南については現在建設中だがここら辺りに学校や病院、研究所、

裁判所の他に訓練場や教会、汚物処理場など公共の施設を置く。

西が最も治安が安定しているのでこの区域に住居区を構える。中央に近づくほど相場が高い。

中央に行政機関の中心となる役所がある。他にも有事の際にいつでも対応できるよう軍や治安部隊の本部も用意していた。

「南の区画に置く学校だが、技術者養成学校を優先的に立てて欲しい」

ここは工業都市ジグサール。

その名前に恥じないよう後継となる技術者は育てておかなければならない。

構想としては都市内にいる技術者を順に学校に招いてより実践的に行う予定だ。

「技術者を育てるためのGは惜しまないからいくらつぎ込んでも構わない」

俺の愛した工業都市ジグサールが着々と完成していく。

レアが「畏まりました」と頷くのを確認しながら俺はほくそ笑んだ。

そして次はフィーナからの報告に移る。

あのアイラの一件から身の危険を感じたのかレアもフィーナも出席義務の無い報告会へ顔を出すようになっていた。俺が出席しているにも関わらず自分達が出席していないという状況はアイラの怒りを買うんじゃないかと恐れた結果だから俺は何とも言えない。

……お前らは身の危険を感じないと出席しないのか？

閑話休題

今回はレアが輝く反面フィーナは沈んでいる。

まあそうだろう。

ユキが勧誘した魔導師の雇い主からの抗議を一手に引き受けていたのだから。

噂によるとフィーナは時折奇声を上げていたそうだからそろそろ壊れかけているのかもしれない。

と、言っても雇い主を鎮めるためにかかるであろう袖の下を予想の半分に抑えているからまだまだ余裕があるのかと考えてしまう。

「魔導師を引き抜かれた貴族からの抗議だけど何とか捌いたわ。これに関してはアイラに感謝しなくちゃ。フフフ、もうアイラに足を向けて寝られないわね」

聞いたところによるとアイラの諜報部隊が貴族達の弱みを握り、それを材料にフィーナが駆け引きを行うことによって黙らせたらしい。

フィーナはアイラを頻りに褒めているが、俺から言わせると押しが強すぎると貴族達の反感を買って孤立してしまい、かといって弱すぎると魔導師を取り返されるので針の穴を通すような絶妙なバランスを取ったフィーナはやはり天才なのだと考える。

「抗議してきたのは貴族だけか。国からは無かったのか？」

俺はそっちの方を恐れていた。

貴族からの反感を買うのは痛いが、民衆からの支持を得られているためすぐに影響が出ることはあるまい。魔物大進行が起こるまで持たせればいいだけの話だからな。

しかし、国の反感を買うともっと直接的な制裁が来てしまう。

罪をでっち上げられて犯罪者と認定されてしまう可能性があったので、国からの追及が避けられないのであればそちらは諦めるつもりだった。

するとフィーナはため息を吐きながら

「王宮は外部に目を向けるどころじゃないのよ、もう派閥争いが泥沼化してそんな抗議をする暇があるのなら王宮内で味方を付けた方が得というぐらい。だから外部の私達が何をしようがどうでもいいみたい」

「悲しいですね」

元貴族で伯爵の地位にいたレアが顔を顰めるのだが、俺はむしろ

好機と見ている。

何をしても許されるのであれば精々好きなようにやらせてもらおうか。

そして後でエルファに頼んで王宮内で有能な人材をこちらに流してもらおう。

そう考えている間にもフィーナの報告は進む。

「実際問題としてユキが連れてきた魔導師の大半は国が召抱えている宮廷魔導師よ。彼らは権力争いに巻き込まれるぐらいなら安全な私達に付こうという魔導師が多かったわ」

「なるほど、だからユキの連れてきた魔導師のレベルは高かったのか」

貴族や実力者が持つ魔導師にしては練度が高すぎると薄々勘付いていたが、まさかそんな事情があったとは。これは思わぬ僥倖だ。

そう内心俺は喜ぶ反面とあることに気付く。

そこまで王宮の腐敗が進んでいるのであれば民衆の生活は相当酷いことになっているのではないか。

俺の懸念を読んだのか今度はレアが口を開く。

「産業都市ジグサールの繁栄はこの国に轟いています。今でさえ多くの人が流れてきていますが、これから先はさらに増えると考えて下さい」

「具体的には？」

「アイラからの報告によると明日の食事さえ覚束ない人間がこの国全体の１０％に上ります。最悪現在ジグサールの総人口の５倍にあたる人間が流れてくると考えて下さい」

「５倍！？」

フィーナが絶句するのも分かる。

シマール国の総人口は１０００万人。

そしてその１割にあたる人口がここに流れてくればどうなるか。

豊かになったとはいえ一都市であるジグサールではそれだけの人数を許容できないのは明白だった。

余談だがユーカリア大陸に住む人口は判明しているだけで１億人である。

「レア、もしそれだけの人口が流れてくるとすれば今ある食料の備蓄で何か月持つ？」

「半年です」

「……厳しいな」

ジグサールは現在順調に発展しているが、それは工業による二次産業によるもので、農業や家畜などの一次産業は全然発展していな

い。

それはジグサールの地質によるものであり、強力な魔物が徘徊するこの地域に農業など土地に根付いたことは出来ないのだ。

血の滲むような努力の果てに作物を育てても収穫前に魔物が大挙して押し寄せて食い散らかされるのがオチだろう。

一分、二分と俺は瞑目する。

フィーナもレアも俺の決断を待っているのか何も言わない。

「……仕方ない」

しばらく時がたった後俺は目を開ける。

「フィーナ、近隣の村に掛け合って交渉してくれ」

このままでは難民が押し寄せて都市全体が餓えるのは明白。だからそれを避けるために俺はある考えを披露した。

「肥糧と農業用具、そして警備兵を無償貸与する代わりに村の拡張を頼んで欲しい」

ジグサールはドラゴンの糞や世界樹の枝などが取れ、そこから作り出される肥料は他と比べ物にならないほど作物がよく育つので、肥料は輸出品の目玉の一つだった。

それに腕の良い鍛冶師が作る鋤や鍬も一級品。農家からすれば喉から手が出るほど欲しい逸品である。

収入を上げるためには村を拡張すれば良いのだが、拡張した分だけ畑を耕す人と守る人が必要となるので、少ない人口では不可能だが誰だって収入を上げたいと、村を拡張したいと願うのが普通。

だから俺はそれを叶える代わりに農作物の安定給与と将来訪れるであろう難民の受け入れ先を確保しておきたかった。

「構わないけどそれらの村を統治している貴族はどうするの？　彼らからすれば自分の領地を勝手にされるのは面白くないと思うのだけど」

「それらの村が納める租税を2割増しで払うと言ってほしい。最悪4割まで出せる」

レアの様子を伺うが反対する素振りは見せない。つまりそれだけの余裕はあるということだ。

フィーナは「また仕事が増える」とぼやいていたが、これは必要なことなので我慢してもらおう。

安心しろ、後に今の苦労に見合った報酬を用意するから。

……多分な。

「さて、これで会議を終了する」

大まかな方針を決定出来たのでこれ以上することはないと考えた

俺はそう宣言する。

フィーナは辛そうだったがそこはどうすることも出来ない、頑張って耐えてくれ。

「ちょっと待って下さい」

立ち上がりかけたその時、レアがまだ報告があると言う。

「非常に言い難いことなのですが」

レアの目は泳いでる様子からかなり無茶な要求なのだろう。しかし、そういうのは会議の途中に言ってほしいな。

と、俺は苦笑しながらもレアに先を促した。

「先ほど申しました輪番制の成功はキッカの活躍と報告しました」

その通りなので俺は首肯する。上げられてくる報告を見てもキッカが重要な役割を果たしていることは明白だ。

「で、そのキッカが報酬を要求したのです」

「何だ、そんなことか」

身構えていた俺は拍子抜けする。

レアの深刻ぶりな様子からもっと重大なことだろうと予測していたが、そんなことなら何とでも出来る。

「しかし、それは普通の要求じゃないのです。具体的には――」

「そこからは私が話すわ」

扉が開いて、コツ、コツ、と足音を鳴らしながら一人の戦乙女が姿を現した。

ジグサール軍総大将　キッカ＝カザクラ
装備：
武器　竜骨の槍
防具　ワルキューレアーマー
頭　雷神の兜
足　コルクマリッドの靴
装飾品　大将軍の証
ステータス
剣　６５
槍　７８
探索　６３
魅了　９２
支配　８３

キッカの身長はすでに１８０ｃｍを越え、トレードマークである赤毛をポニーテールにしている。口元には常に笑みをたたえ、スラリと伸びた長身に合わせるかのようなスレンダーボディは少女時代と一線を画し、その佇まいは将軍のそれを思わせた。

「で、何をしたいんだ？」

突然キッカが現れたことに意表を突かれながらも、何の用件を持って来たのか尋ねる。

「ああ、簡単よ。そろそろ私も部隊も持ちたいと思ったから」

「部隊？　変なこと言う。キッカはすでにジグサール軍の大将だろう」

前々からキッカは人を率いる素質を持つと睨み、その予想は今回の輪番制の件によって当たっていたと考えている。

おそらくキッカがいなければ兵も孤児も動かず、失敗していた可能性があっただろう。

が、そう言ってもキッカは首を横に振る。

「違うわ、私よりもクロスが大将に相応しい。だから私は別の部隊を持ちたいの」

「クロスはクロスで別の役割がある。だから大将はキッカしかいない」

俺はそう言って何とかキッカの叛意を促そうとしたがキッカの決意は固い。俺は諦めて何の部隊を持ちたいか尋ねる。

「私が持ちたいのは竜騎兵よ」

突然の単語にキッカと予め聞いていたレア以外がポカンとする。

「……騎兵か？　まあ、キッカなら騎馬隊でも隊長が務まると思うが俺は役不足だと考えるぞ」

聞き間違いだと判断し、俺は騎兵についてそう述べたのだが。

「馬じゃない、竜よ。竜騎兵の隊長を私は務めたいの」

聞き間違いじゃなかったので俺は頭を抱える。

こともなげに言ってくれるが竜を飼い慣らすというのがどれだけ大変なのかキッカは理解しているのか。

竜というのは知能が高く、誇りが高いので脆弱な人間に背中を貸す竜はまずいない。通常は卵の頃から育て、その竜と兵は一蓮托生というのが一般的だった。

そのため卵から面倒を見なければならないので、1人の竜騎兵を作るためには少なくとも20年以上の月日が必要だった。

シマール国に竜騎兵など数人。数十人単位で抱えている国は大陸でも5つにも満たないことから如何に竜騎兵が貴重なことが分かるだろう。

「安心して、通常の卵から育てる方法じゃないから」

「どういうことだ？」

そう聞くとキッカは花が咲く様な綺麗な笑みを浮かべながら。

「卵から育てるからそんなに時間がかかるのよ、成竜を従えさせれば問題は解決だわ」

それが出来たら誰も苦労せんわ！

と、叫びたい衝動を必死で抑える。

「まあ、とにかく。竜の住処についてはあてがあるから3ヶ月ほど空けるわ。ああ、それと私が見繕った者も連れて行くから」

そう言ってリストを見せるキッカ。

約３０人ばかり載せられているそれを見た俺の感想は。

「……おい、キッカ。これに載っているメンバーを連れて行くって正気か？　これだけの人材が抜けたら軍が大変なことになるぞ」

リストに載せられていたメンバーはいずれもジグサール軍の中核をなす幹部ばかり。そして、幹部以外もリストに載せられているが、その人物達はキッカやクロスほどではないにしろ一軍を任せられる将帥の器を持った将来性のある者だった。

「成竜を従えさせるにはこれくらいの器を持ってなきゃ無理よ」

本当に、呆気なく言ってくれる。

もはや怒りを通り越して呆れてしまった。

「……反対しても行くのだな」

「当然」

俺の嘆息に即答するキッカ。

……もう何も言うまい。

「何か他に必要な物は無いか？」

こうなれば自棄だ、とことん付き合ってやろう。

「そうね、これだけの装備を一式揃えて欲しいわ」

「一式で良いのか？」

「ええ。戦うのは私一人だし、これを全員分揃えるのは多分無理よ」

そう言ってキッカが要求した装備は。

武器　風神のドラゴンキラー　ドラゴンキラーに風属性を３つ付与、カマイタチを飛ばせる。
防具　火土竜の鎧　火属性によるダメージを軽減。
頭　セイレーンの帽子　熱風から呼吸を守る
足　リザードマンの靴　溶岩でも溶けない
装飾品　韋駄天の魂　ＡＧＬを２倍にする

「……まあ、これは俺が作っておくから３日ほど待て」

キッカの要求した装備は優秀な職人が多いジグサールでも俺しか作れないだろう。これを３０人分揃えろとなると俺は死んでいたかもしれない。

「うん、我儘を聞いてくれてありがとう」

実際は我儘で済む範囲でないのだがな。

用は済んだとばかりに去ろうとするキッカに俺はこう一声かける。

「キッカ、死ぬなよ。もし竜騎兵を得られたとしてもキッカがいなければ意味はないのだからな」

その言葉にキッカは振り返らず、大丈夫とばかりに親指を立てた。

キッカという嵐の前にしばし沈黙としていたレアだが、とにかくキッカ達が抜けた穴を何とかしないといけないので、突然降って沸いた難事に呆然としているレアに「軍の再編成をクロスと相談して行うように」と命令する。

「フフフ、仲間仲間♪」

一人だけフィーナが暗い声で唄っていたのが印象的だった。

大嵐（後書き）

次回は番外編としてキッカの学生生活を含めた内容を執筆します。

完成（前書き）

2回目の超展開です。
心してお読み下さい。

完成

「完璧だな」

魔物大進行まで後半年を前にして俺はレアとフィーナを前にしてそう宣言する。

それを肯定するかの様にレアが口を開いて。

「はい。技術の面ですが、ユウキ男爵の弟子であるサラがジグサールに住み付いたためそういった技術関連が大幅に飛躍しています。おそらくジグサールはシマール国どころかユーカリア大陸全体から見ても工業の面においては他の追従を許さないでしょう」

治安が安定したのでようやくサラを呼べる環境が揃った。

ここに来た当初は危険すぎて招けなかったが今は違う。

今のジグサールに昔の荒廃したイメージはもはや無い。

国内有数の治安の高さを誇る都市へと変貌したのだ。

「ウフフ、本当に嬉しいわあ」

フィーナもやはり喜んでいる。

「エルファ様紹介のティータがあれほど使えるなんてねえ。おかげで私の仕事も大助かりよ」

「ええ、私もヒュエテル様が財務を担ってくれたおかげでずいぶん楽になりました」

サラを呼んだついでにティータさんとヒュエテルさんも一緒にこのジグサールへと呼んでいた。

ティータさんはともかく、ヒュエテルさんは生まれ育ったカリギュラスから離れたくないと渋っていたが、俺は何度も出向き、いわゆる三顧の礼を尽くして説得した結果、レアの補佐兼財政担当を担ってくれた。

ヒュエテルさんは多くの孤児院と新しく建設した学校の運営を担っていたためその実務能力は折り紙つきだ。人を見抜く眼も持っているのでレアの意思が組織内に伝わりやすいよう人材を配置してくれた。

そして、ティータさんについてだが、これはフィーナの諸事情によって急遽招いた。

俺の見立てではまだイケると考えていたのだが、妹のレアから「これ以上は危険」とシスターストップを宣告されたのでフィーナに補佐を付けることとなった。

その結果、エルファが推薦したのがティータさん。俺から見てもティータさんは気さくな人物でフィーナと通じるものがあったからフィーナと相性は良いだろうと考えていた。

そしてその期待は裏切らず、ティータさんの活躍のおかげでフィーナは日に日に元気を取り戻していった。

「うーん、本当に嬉しいわ。近隣の村からも評価は上がっているし貴族からのやっかみも無い。こんな週休1日、1日10時間労働がずっと続けばいいのに」

……フィーナが仕事中毒になっているような気がする。

「ええ、その通りです姉さん。私も久しぶりに日付が変わる前に就寝出来ました。こんな日など一体何時以来でしょう」

フィーナどころかレアも仕事中毒になっていた。

……ごめんな、人手が余りに少なすぎたから君達2人に押し付けることになってしまって。

俺は密かに詫びる。

振り返ればジグサールへ赴任してから1年と11か月。俺は休んだ記憶が無い。

起きている間はずっと仕事をし、気が付いたらもう寝る時間だったというのがザラだった。

うーん。これはもしかすると全員が仕事中毒だったのかもしれない。

「よし、ちょうど良い機会だ。来週あたりに都市を視察しよう」

このままだと緊張の糸が切れて肝心な時に使い物にならなくなる可能性がある。

後半年後には魔物大進行によって嫌でも働かなくてはならなくなるんだ。

ここら辺りでガス抜きをしておくべきなのかもしれない。

「都市視察ですか、どのようになっているのでしょうね」

「そうね、いつもは仕事だったからじっくりと見ていなかったけど、それはそれは素晴らしいに決まっているわ」

レアもフィーナも都市の視察に乗り気だ。

それはそうだろう。

何せ自分達の成果が見られるのだから。

何せそう論評する俺でさえ心が躍るのを抑えきれなかった。

待ち合わせの場所は中央役所の前。

タイトルは抜き打ち検査なのでアイラを筆頭とした部隊に守られているだけだ。もちろん有事の際にいつでも対応できるよう治安部隊も遠くに待機している。

どうも貴族という肩書には慣れない俺は一般の市民が着るような布の素材でできた簡素な服に身を包んでいる。

布のズボンにジャケットと、向こうの世界でも好んだ服装だった。

「遅れました」

その言葉と共に姿を現すのは清楚なワンピースに身を包んだ少女。ワンピースは青い髪に映えるような色合いを主とし、無駄な装飾を徹底的に排除しているのが印象的だった。

「お待たせ～」

今度は対照的な派手な色合い。日傘に二重フリルのスカート、ブラウスには光物が散りばめられているので相当目立っていた。

前者が自身を引き立たせるための服装なら後者は自身すら飾り付けの一部ということだろう。

性格的に考えれば前者がレアで後者がフィーナなのだが。

「何をしているレアとフィーナ、どう考えても服が逆だろう」

「あれ？　やっぱりばれた」

「……一瞬で見抜かれるとは」

清楚な服に身を包んだフィーナが舌を出し、派手な服装のレアが瞠目する。

まあ、普段からあまり接していない人間なら判別がつかなかっただろうが、俺はもう2年弱もともにいる。いくら2人がそっくりだからと言っても間違うはずがないだろう。

「あーあ、残念。お父様でさえ見分けがつかないと評された私達が通じないなんて」

すぐに看破されたことに不満の声を上げるフィーナ。

「ええ、昔はこれで色んな人をからかっていたんですが」

レアも溜息を吐きながら呟く。

「じゃあそろそろ行くぞ」

これ以上コントに付き合うのは嫌だったので俺は先を促すと。

「ああ、ちょっと待って。いくらなんでもこのちんけな恰好じゃ恥ずかしいわ」

「ちんけですって！　フィーナの選んだけばけばしい服よりもましです」

フィーナが思わず漏らした本音に目をむくレア。

そしてそのまま姉妹喧嘩へと突入する。

「……日が暮れる前に終わらせてくれよな」

キャンキャンと騒いでる様子を眺めながら俺はそんなことをぼやいた。

いつまでも続くと思われていた喧嘩はあっけなく幕を閉じる。

どこからか現れたアイラがポツリと「何をしているのですか？」と呟くと2人は途端に硬直し、次の瞬間には仲の良さをアピールし始めたからだ。

この2人の阿吽の呼吸の良さは見ていて面白かったと付随しておこう。

「まずはどこに行く？」

俺は付き添っている両隣の姉妹に行先を聞く。ちなみにもう服は交換していた。

「そうねえ、やはり東を先に回りたいわ」

俺の右にいたフィーナがそんなことを口に出す。

「いえ、ここは西の住宅街でしょう。あそこがどうなっているのか気になります」

すると反対方向の左にいるレアがそう反論した。

俺的にはどちらでもいいが、なるべく早くこの場を去りたい。

実は俺たち、現在結構注目されている。

レアとフィーナは立ち止まって見惚れるほどの容姿を持つ美人だ。

ここら辺りはさすが貴族の女というべきか己の武器はしっかりと

磨いていた模様。

それだけでも目立つのに、2人は一卵性双生児で姿形は全く一緒なのに、服装は全く逆ということで注目度が相乗効果で上がっていた。

そして駄目押しとばかりに先ほどの喧嘩。

俺達を中心に輪が出来ていた。

「……とりあえず北からまわろう」

この注目から回避するために俺は2人の手を取り引っ張っていった。

北区画は冒険者が使うような施設を中心に置き、さらに人も冒険者が多いので必然的に緊張気味の雰囲気が漂う。

「良いわねこの空気。このピリッとした感覚が交渉の時間を思い出させてくれるわ」

北区画の様子を見たフィーナがそんな印象を漏らす。外交官として戦場に身を置いてきたフィーナにとっては命がけで戦う冒険者に親近感を覚えるのであろう。

「そうですか？　私からすればもう少し規則を守ってほしいものかと」

内政担当のレアらしい言葉だ。

確かにこの北区画は東区画を例外とし、それ以外の区画と比べて治安部隊の出動回数が多いから、それがレアにとっての悩みの種なのだろう。

「いいじゃないの、冒険者に規則を求めるなんて土台無理な話。そこら辺は大目に見てあげなきゃ」

現場重視のフィーナらしい意見だ。戦場というのは規則などなく、それどころか規則があるならまずそれを破ることが重要だからな。生き残るためにはあらゆる手段が許されんだよな、戦場は。

レアは経験していないことに口を出すのを控えたのかこれ以上反論することはなかった。

そして俺はこの北方面で最も大きい施設のキュリアス鍛冶屋へと向かう。

「あ、師匠。お久しぶりです」

鍛冶をしていた手を止めてパッと振り返るサラ。

このキュリアス鍛冶屋は最高基準の設備と３０人以上の鍛冶師が常に待機している一大施設だ。

基本的にはサラの作る武器防具を周りの職人が観察し、その過程と完成品から同じ物を作るというシステムを取っている。

かなり面倒だが、サラは鍛冶以外の能力が致命的なためそうせざ

るを得ないと言うのが実情だった。

しかし、それで上手いところ回り、この施設から最先端の技術が産み出されているのだからそれで良いのだろう。

サラはこの2年で大人と呼ばれても違和感ないほど成長した。

「見て下さいこれを。ついに全ての属性を付随させることが出来ました」

俺が来るとすぐに見せたかったのだろう。

近くに飾ってあった剣を手に取って興奮を抑えきれないようにして見せる。

2年前はサラの身体能力的に無理だったが今は違うということを教えるのにこれ以上の物は無かった。

うん、この剣は俺に作れないだろう。

サラの圧倒的な才能と不断の努力があったからこそ、この輝きが生まれたのだ。

俺は感慨深げにこの剣を上に掲げる。

太陽に照らすと刀身が虹色に輝いているのでこれは間違いなく全属性を付与させていた。

「すごいな、サラは。で、この剣の名前は?」

「師匠が決めてください」

間髪入れずにそう返すサラ。

「この剣は師匠の存在なしでは姿を見せることができませんでした。師匠がいたからこそこの剣があるのです。ですから師匠が産みの親として名付けて下さい」

そう言われて悪い気がしないでもない。俺は顎に手を当てて考える。

この剣の本来の名称はエレメンタルソードだが、それをそのまま名付けても面白味がないだろう。

1，2分ほど考えて出た名前が。

「サラの剣でいくか」

俺がそう名づけると案の定サラは慌て出したのだが、先ほど言質を取ったことを繰り返すと顔を真っ赤にしながらも渋々と頷いた。

「師匠、意地悪になりました」

最後にそう言い残していったのが印象的だった。

悪いな、サラ。

俺はこの2年間で鍛えられたんだよ。

北区画の次は住宅地のある西区画。

このご時世の住宅地というのは隙間のないくらい綺麗に並んでいるかまたは逆の蛇の道が多い無秩序な状態化かのどちらかだが。俺の構想した住宅地は一味違っていた。

「余裕というものは大事なのですね。一定間隔に空き地といいますか公園を置いた結果、こんなにも外観が落ち着いて見えるのは」

レアがそんな言葉を漏らす。

これは俺の育った環境によるものだが、どうしてもきっちりと決まった住宅の違和感が拭えなかったため、多少前例を壊してでも今の形に持って行ったというのが実情だ。

なんにせよ、それが成功して良かった。

価値観が違うから受け入れられないんじゃないかと内心ハラハラしていたのは秘密だな。

「子供達が笑いながら遊んでいるわ。これがどれだけ貴重なのか国は分かっているのかしら」

公園で遊ぶ子供たち。

これは一見何でもない風に見えるが、王宮がガタガタなので民の生活にまで目を向けていない結果、大多数の民は明日の生活に不安を覚えている。

ジグサール外での状況をよく知っているフィーナの言葉に俺とレアは黙り込んでしまった。

「まあ、何にせよこの光景は守らないといけないな」

俺の呟きにレアとフィーナが同時に頷いた。

次は南区画。

南区画は都市が出資元である公共施設が主に建てられているので、雰囲気も北とはまた違った意味で硬い。

「これは駄目だわ。この堅苦しい雰囲気は私に合わない」

と、視察して数分で音を上げるフィーナ。

「うーん、もう少し従業員の数を増やすべきでしょうか。皆疲れているように見えます」

対照的にレアは眼を鋭く光らせて道行く人々を観察する。

レアはここで働く人と根本的には似通っているので苦を感じるどころか逆に生き生きしていた。

「改善点についてはヒュエテル様と相談し、予算の計上を行う必要がありますね」

何かを思いついては手に持った羊皮紙に記していくレア。

フィーナは早々にダウンして近くのベンチに寝転がり、俺は苦も楽も感じなかったのでただ漫然とレアの張り切りようとフィーナの疲れぶりを観察していた。

うん、本当に2人は容姿だけ見ると良く似ているな。

……性格は真反対だけど。

レアの書留はまだまだかかりそうだったので俺はこの南区画で一番立派な建物に入る。

この建物は南区画の総司令塔のような存在で、多くの公共施設が立ち並ぶここを一手に総括する場所だった。

で、俺はこの建物の中で一番偉い人に会いに行く。

扉をくぐった先に書類仕事を行っているふくよかな体型に心当たりがある人物は。

「ヒュエテルさん、こんにちは」

ご存じヒュエテル＝クーラー

孤児院の元運営責任者で今はレアの片腕として財務の総指揮を任されている人物だった。

「あら、ようこそいらっしゃいユウキ男爵。どうしましたか？」

突然現れたにもかかわらず眉一つ崩すことなく笑顔で応対するヒュエテルさん。

この芸当は真似できないなぁと考えた。

「王都に戻りたくはありませんか？」

前々から懸念していたことを聞いてみる。

ヒュエテルさんはカルギュラスで生まれ、カルギュラスで育ったから王都を離れることに難色を示していた。

王都を愛していたにもかかわらずここに招いたことを不快に感じていないのか知りたかった。

そういった旨を伝えるとヒュエテルさんは一瞬きょとんし、次の瞬間には声を立てて笑う。

「クスクス。ユウキ様、それは愚問というものです。もしそうならばこんな大役を引き受けていませんよ」

ヒュエテルさんはこの南区域を統括する立場なので、彼女の肩に降りかかる責任がいかに大きいのか理解している。

その意味から自分が王都に戻ることはありえないと言外に伝えていた。

「それは良かった」

ヒュエテルさんが王都に戻るつもりがないことを確認して安堵を漏らす俺。

それぐらいヒュエテルさんはこのジグサールにとってなくてはならない人材だった。

ふと、ヒュエテルさんが遠い目をし始めたのでどうしたのか聞いてみる。

「ええ、やはりこの国は一度滅びるしかないのではと考えまして」

国王が崩御してからの王都はますます荒廃の一途を辿った。

貴族からの信頼が厚いフォルター宰相と騎士団から尊敬されているキルマーク騎士団長。

現国王も未だ決まっていなく、この2派の争いが更に激しくなったので市民の生活はますます困窮していった。

ヒュエテルさん曰く、どんなに力を尽くしてもスラムは拡大し、貧困層の大量増加のため積み立てていた資金を切り崩しても間に合わないほどだったらしい。

「彼らを救えるのであれば私は喜んでこの都市を離れてユウキ様のもとで働きましょう」

三度目に訪れた際にヒュエテルさんがそう言った言葉を今でも鮮明に覚えている。

あのいつも微笑みを絶やさないヒュエテルさんが涙を湛えながら声を詰まらせる様子を見て俺は胸が痛んだ。

「まあ、いいか」

俺は頭を振って思考を止める。

過去のことを考えても今は仕方ないだろう。

全ては半年後の魔物大進行を乗り切ること。

それが終わってからだ。

「じゃあ、俺はもう行くから」

その言葉にヒュエテルさんはお辞儀をして送り出してくれた。

ジグサールで最も繁栄している区画と聞かれたら１０人中１０人が東区画と答えるだろう。

人の出入りが最も多い東区域に店や娯楽施設を揃えてきた結果、この東区画がジグサールの顔だと認識され、不本意だが工業都市ジグサールでなく、産業都市ジグサールと呼ばれている。

「嬉しいわあ、ここまで発展するなんて。この区画だけで毎日何百万Ｇというお金が動いているのよね」

この東区画に力を注いでいたのはフィーナ。

外交官として各地を飛び回っていた合間にここの手入れをしていたらしいのだが、よくもまあそんな方法でやってこれたなと頭を抱える。

「ユウキ男爵、フィーナはやりたいことならいくらでも才能と時間を惜しまない性質です」

確かにレアの言う通りだ。

心身に異常をきたす寸前にも関わらずここの監督に勤しむフィーナは鬼気迫るものがあったと付随しておく。

「こんな区画を作る暇があれば休めばいいものを」

フィーナはご機嫌の様だが対するレアは違う。

まあ、この区画は最も治安が悪いからな。

治安部隊の出動回数も毎日2桁は越えている。

犯罪と欲望が渦巻く区画――東区画

そんな2つ名がこの東区画に付けられていた。

「ユウキ男爵、あそこへ行ってみる？」

そうフィーナが指差した場所は18禁指定の店が立ち並んでいる。

「これは……」

俺が思わず引き攣ったのも分かるだろう。

まだ童貞の俺にここへ入る勇気はない。

色っぽいお姉さんが立っていることや入る客は全員男性であることから、これらの店が何であるのか嫌でも想像がついてしまう。

「何馬鹿なことを言っているのですか、さっさと行きますよ」

幸いにもレアが氷の様な突っ込みを放って俺の腕を引っ張ってくれたためこの会話は終わった。

少しばかりの後悔はありそうでない様に見えるけど本当はある。

……ごめん、俺も何を言っているのか分からない。

「大体見回りは終わったな」

すでに日も暮れ、夜の帳が下りてくる中、俺は2人に声を掛ける。

「どうだった？　見た感想は」

俺がそう振ると。

「素晴らしいです、あそこまで発展させたことが今でも信じられません」

とレアは頬を紅潮させ。

「そうよね。あれを見るためにあそこまで頑張ったと考えると今までの苦労が報われるわ」

フィーナもウンウンと頷く。

俺も何よりだ。

少し予定が違ったが、概ね俺が愛したジグサールの姿だ。軍隊の方もキッカやクロス、そしてユキの活躍によって大幅に増強され、魔物大進行が起こっても全くの被害を出さずに終わらせる可能性も出てきた。

「さて、明日からはまた仕事だ。２人とも気を引き締める様に」

俺の言葉に２人はしっかりと頷いてくれた。

竜騎士キッカの誕生（前書き）

首輪登場。
異論は受け付けない。

「予想以上の展開になりましたね」

扉の外で待っていたククルスが嬉しそうにそう言って私を出迎える。

彼女、ククルス＝フォンテジーは私が冒険者のための学校にある寮で出会い、現在は私の補佐を務めている。

「あれだけの功績を残したキッカお姉さまにあの無能な連中は無下できるわけがありません、必ず呑まざるを得ないと考えていましたが、まさかこちらの要求を全て叶えるとは思いませんでした」

私をお姉さまと呼び慕うククルスは１５０？に届かない小さな身長や大きな瞳、愛らしい顔つきとフワフワの栗毛から小動物を連想させるけど、中身は結構腹黒く、私以外の人間を陰で罵倒する良くも悪くも小動物と言ったところが私の認識だわ。

しかし。

「いくらあなたでもユウキを馬鹿にするのは許さないわよ」

ククルスの性格の難点は知っているものの、どうしてもこれだけは譲れない。

ユウキがいなければ今の私は存在せず、あの街でゴミを漁っていたのだから。

「ご、ごめんなさいお姉さま！　決してお姉さまの機嫌を損ねたわけじゃなく……」

先ほどまでの嬉しそうな様子はどこにやら、一転して悲しそうに目を潤ませて平伏すククルス。

「ああ、誤解しないで。私は決してあなたを無下にしたつもりはないのよ」

「しかし……」

私はそう慰めるけど、ククルスの気分は晴れない。

これではククルスが普段通りに動くことができないから私はククルスの耳元に唇を近づけていつもの言葉を囁く。

「私がどれだけあなたを必要としているのかわかるでしょう？　夜にその証拠を見せてあげるから元気出しなさい」

「は、はい！　お姉さま。楽しみにしています」

するとククルスはパッと顔を上げ、目を潤まして返事をしたわ。

……うーん。

私のせいでもあるのだけどククルスの百合具合は半端じゃないわね。

こんな性質だけど彼女はそれを補って余りある才能を秘めているから困ったものよ。

輪番制の際にもククルスがいなければ私は総監督時に何をしていいのかわからなかったでしょうね。彼女は人を動かしやすい環境を作るのが得意なのね。

「ああ、お姉さま。今日はどのような行為で私を可愛がってくれるのか。前日の首輪プレイは最高でした」

「……最初の頃の私達が今の光景を見たら卒倒するわね」

うっとりと目を細めるククルスを横目で見ながら私はククルスと出会った当初の頃を思い出しながらそんなことを呟いたわ。

私達の関係はお世辞でも良好な関係でなく、むしろ反発しあっていたのよね。

冒険者の卵として日々教育を受けるのは苦痛だったわ。

いったい何が悲しくて長時間椅子に座らなければならないのよ。

けれどそれを耐えなければ冒険者になることはできないので、私は必死に耐えていたわ。

それだけなら良かったのだけど、相方である学年首席のククルスが腹の立つこと。

勉強ができない私を軽蔑し、いつも蔑んだ瞳で睥睨してくるのはうっとおしかったわ。

で、その辛さをユウキに手紙を書いて送ったところ、ユウキから大量の薬瓶が送られてきた。

「……ブラッディーX？」

よくわからない薬品の名称をそう読み上げる私。

これまでの座学で冒険者の心得として多数の薬品を学んだ私でさえこのような薬はなかった。

「危ないものなのかしら」

一瞬そう考えたがすぐに否定する。あのユウキが意味もなく送ってくることはありえない。必ず私にとってプラスになるものだ。

「えーと、何々？」

説明書が付随していたので私はそれを読み上げる。

『この薬は成長率を上げる効果と引き換えに副作用が心配されるが気にするな、死にはしない』

「……止めておこうかしら」

どんな副作用が起こるかわからない薬を飲むのはいくら私でも躊躇われるわ。死にはしないとしても体に異変が現れるのだからちょっとねえ。

そこまで考えて苦笑したと同時にククルスが部屋に入ってきた。

そして薬を手に持った私を睥睨して。

「あらあらドーピング？　まあ、そこまでしないと勉強できない人間って哀れよね」

「……」

胸に参考書を抱えて勝ち誇るように言い放ったククルスを見てこのブラッディーXを使用しようと心に決めたことは言うまでもないわ。

始めは飲んでも飲まなくてもそんなに変わらなかったのだけど、日が追うごとにその効果がハッキリと見て取れた。

頭が回るというか、複数の事柄を結びつける作業が容易になりだしたのよね。

そうして私はおちこぼれから天才と呼ばれるようになっていたわ。

と、同時に私の中で燃える様な感情を抱き始めていたわ。

カリスマっていうのかしら。

その衝動のままに言動を行うと周りの人間が先生を含めて私に羨望の目を向けるようになり始めるのよね。

今振り返るとあれが副作用だったのかもしれないわね。

現在では薬なしでもカリスマを発揮できるけど、あの時は未熟だ

ったわ。

まさか学園で革命を起こすなんて思わなかった。

ありえないけど本当なのよ。

若気の至りというか今では反省しているわ。

で、その時に参謀として私の騒動を大きくしたのがククルス。

ククルスは私と接する時間が長かっただけに、忠誠を通り越して依存の域にまで入っていたわ。

落ちこぼれだった私を蔑む様子から尻尾を振るような心酔具合までの変貌を見せられると、どうても苛めたくなってきちゃった。

……今も続いているけど部屋でククルスに首輪をつけて主従ごっこをやっていたのは内緒よ。

閑話休題

ククルスは勉強だけができる嫌な奴と言う印象だったけどそれは改められた。

あそこまで人を動かすのに長けているのなら鼻持ちになっても仕方ないわね。

とにかく、ククルスが参謀を務めたおかげであそこまで騒動が大きくなり、ククルスが後始末に動いたから私は退学にならず、逆に学園に私の要求のいくつかを認めさせれたわ。

で、本当ならククルスとはそこで終わりだったのだけど、彼女は私についてきたわ。

首席はギルドの幹部候補生として栄誉あるにも関わらずそれを蹴ってまで私に付き従うククルス。

ククルスの意志は固く、翻意を促せないとして妥協案で学年次席がギルドの幹部候補生になったわ。

学園長が送る言葉に「キッカとククルスが在籍したこの3年間は学園で永久に語り継がれることは間違いないのです」と名指しで涙ながらに語っていたのが印象的だったわね。

革命以外にも私とククルスは色々とやらかしたから仕方ないかもね。

「さて、ククルス。竜が住む場所の特定はできているのでしょうね」

回想はここで終わり。私は頭を切り替えて次の算段について尋ねる。

「は、はいお姉さま。アイラからの情報もあってしっかりと掴んでいます」

ククルスの言葉に頷いた私はリストに載ってあった者の下へ向かったわ。

さあ、憧れの竜に乗れる日はすぐそこにあるのよ。

竜が住むとされる場所は人が踏み入れられない秘境にあると聞いていたけど、本当に前人未到の場所にあるのね。

ジグサールの周辺ほどではないにしろ、ここまで魔物が強く悪路が続く道は容易に人を奥へ進ませないわ。

「皆、ついてきてる？」

人の方向感覚を狂わせる樹海の中、一定時間ごとにそう聞いて回るのだけど誰一人として遅れる者はいない。

さすが幹部や幹部候補生とだけあって体力と精神力は並大抵なものではないわ。

「そろそろ目的地へ着きます。ですのでここら辺りで休息を取るのはどうでしょうか」

ククルスがそう進言してきたので私はそれを取り入れ、皆に休憩を言い渡したわ。

皆疲れているのだけど眼はキラキラと輝いている。

そうでしょうね。

後数時間後には竜と出会い、さらに上手くいけば竜に乗れて大空を飛びまわれるのであればこれまでの苦労など吹き飛ぶでしょう。

「あの……お姉さま、大丈夫でしょうか」

けど、一人だけ例外がいるわ。

ククルスだけは当初から浮かない顔でしきりに私のことを心配してくるのよ。

だから私は安心させるようにククルスの頭をなでる。

「大丈夫よククルス、もし失敗しても私だけが犠牲になるだけだから」

「それが駄目なんです！」

ククルスは通常出さない音量で私を責めた。

「私はお姉さまが全てなんです！　お姉さまがいないのならこの世界は要らない！　お姉さまのためなら全てを敵に回す覚悟はあります」

……正直驚いたわ。

まさかあのククルスがそんなことを宣言するなんて想像できなかった。

私は嬉しく思う反面悲しくもある。

もし私がいなければククルスは今頃ギルドの幹部候補生として片手団扇な生活を送っていたわ。

しかし、薬の作用によって私に依存してしまったからククルスは私の片腕として過酷な場所に身を置かざるを得なくなってしまった。

さすがの私でも多少の罪悪感を感じているのよ。

「死ねないわね」

ククルスを抱き締めながらそう心に誓う私。

おそらくククルスは私が死ぬとすぐにでも後を追ってくる。

ククルスをそうしたのは間違いなく私の責任だ。

ユウキとそしてククルスのため。

私はこの挑戦を必ず成功させなければならないと心に決めた。

樹海が終わり、その先にあるのは渓谷だった。

「……なんというか」

「壮観ですね」

「俺はこの光景を一生忘れないぞ」

後ろに控えている隊員のメンバーが口々にそう呟くのも理解できるわ。

普通竜というのはお目にかかれる存在でなく、あったとしても一生に一度あるかないか。

そんな希少な存在が、目に入るだけでも２０は下らない光景に出くわせばそんな感嘆が漏れても仕方ないわね。

「さて、ここからは私一人でいいわ」

竜のテリトリーに入る一歩手前で私はそう命令する。

「この内の何人かはククルスを抑えておきなさい。その他の隊員は何があってもここで待機。そしてもし私が死ぬことになれば一目散に逃げなさい。いいわね、ククルス？」

あえて名指しでそう呼ばなければククルスは私についてきただろう。ククルスが何か抗議を上げる前に私は背中を向けて竜の住処へと踏み入れた。

案の定、私が一歩侵入すると近くにいた竜が容赦なく咆哮を上げ、火炎を吹きかけてきた。

「本当にユウキの武器防具は大したものね」

鉄すら燃やし切るブレスを身に受けながらそんな感想を漏らす。

多少熱くは感じるけどその程度よ、我慢できる範囲内だわ。

ブレスが効かないと悟った竜は大きな巨体を生かした突進を仕掛けてくる。

「まあ、この程度は予測済み」

韋駄天の魂によって強化された私にはハエが止まるかのような速度に見えてしまう。十分な余裕をもって攻撃を躱した後、手に持った私の身長ほどある風神のドラゴンキラーが生み出す衝撃波を放った。

竜の皮膚は何人も通さないとされているけど、ユウキ特製のドラゴンキラーの前では無意味みたい。軽く振った程度なのに竜の背中には大きな傷跡が作られていたわ。

「下がりなさい！　あなた達では相手にならないわ」

こういうのは気迫がものを言うのよ。

言葉は通じていないと思うけど私の意図は伝わったと思うわ。

そのせいか竜達の唸り声が止み、奥から老竜と呼んでも差し支えないほど皺くちゃの竜が姿を現したわ。

『人間よ、我らの地に如何なる用で参った？』

何これ？　直接頭に響いてくるのだけど。

『テレパシーと言うものじゃ。エルフなど高等生物が使う一種の意思疎通手段じゃな』

へえ、便利なものね。私にも使えないかしら。

『先ほどにも言ったであろう。テレパシーが使えるのは高等生物の

みじゃ』

ふーん、そう。まあ使えないのなら仕方ないわ、どうしてもほしいものじゃないし。

『お主は変わっておるのお。ここまで蔑んでも感情に起伏は見られん』

と、そこで老竜は私のことをまじまじと見つめてきたわ。

その年齢を重ねた瞳で見つめられると私の全てを見透かされそうで不快ね。

『ふむ……キッカというのか。そして竜を従えにここまで来たと』

私は何も話していないのによく分かったわね。

『お主が何を想い、何を考えているか。１００も生きられぬ人の子の考えなど手に取るように分かる』

まあ、別にいいけど。知られたからと言って減るもんじゃないし。

「で、どうするの？　私の要求はただ一つ、従うか否か」

『その答えはすでに分かっておろう。我らは人に頭を下げることなどない』

「ふうん、そう。なら力づくで従えさせるしかないけどそれでも良い？」

私は手に持ったドラゴンキラーをコツコツと叩きながらそう言い放つ。私の挑発的な物言いに他の竜達が騒ぎ始めたわ。

「まあ、あんた達が戦うのなら別にいいけど。こう言っては何だけどおそらくあなた達は私に触れることすらできずに全滅するわよ」

ユウキの作った装備を舐めないでちょうだい。大陸最高の腕前を持つユウキ＝カザクラの名は伊達じゃないわよ。

『鎮まれ！　馬鹿者！』

気勢を上げていた若い竜達を一喝する老竜。

『確かに、お主の力量はわしらのそれを大きく超えておる。おそらくわしら全員でかかったとしても、後に残るのは我が同胞の亡骸じゃろうな』

へえ、よく分かっているじゃない。

『お主が親と仰ぐユウキ＝ジグサリアス＝カザクラと会わせてほしい。彼の態度次第でわしらは誇りか服従かを選ぶ』

まあ、妥当な提案ね。

いくら何でも突然現れて「従え」なんて無茶な注文だから仕方ないかもしれないわ。

「お姉さま～」

交渉？　を終えた私は隊員が待機している場所に引き返すとククルスが涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら私に抱きついてきたわ。

「ちょ、ちょっとククルス？　いくら何でもこの場でこれは不味いんじゃない！？」

仮にも私とククルスは上司で見ている隊員は部下よ。部下にこんな様を見せて良い訳はないわ。

すると隊員は苦笑しながら。

「２人が禁断な関係にあるということはもうとっく知られていますって。けど、安心してください。だからと言って自分達がキッカ隊長とククルス副隊長を軽蔑することはありません」

むしろこれがあるから自分達はあなた達についていくのです、と言われて私は何とも言えない気分になるわ。

……本当にこの人選で良かったのかしら

「良かったですね、私達は公認です」

ククルスのそのセリフに私は頭を抱えたのは言うまでもないわね。

後日

めでたく私達の部隊３２人は全員竜騎兵として大空を駆け回るこ

とができたわ。

ユウキ曰く「突然竜が現れ、訳も分からず問答が開始されて驚いた。交渉の末、キッカが生きている限り我が同胞３２体を貸し出すということで決着がついたぞ」とのこと。

つまり私が死ぬと自然と竜騎兵は壊滅してしまうのよね。

だったらなおさら死ねないわ。

大空を飛びながら私はそんなことを考える。

『グルル、小娘よ。長老の命で仕方なく従っているが俺はこの背中につけられた傷を忘れていないぞ』

そう唸り声を上げるのは前回私に攻撃を仕掛けてきたあの竜。血気盛んで喧嘩っ早いけどその分実力はあの竜の里で一番らしい。老竜はその竜が訳もなく無力化されたのを見て私には敵わないと見たらしい。

「分かっているわよ。だからそんなに威嚇しないのギール」

ギールというのは私がつけた名前。これから一蓮托生なのだから名前ぐらいは必要かなと思ってつけたのよ。

ギールは嫌がっているけど満更ではないみたい。

だって名前を呼ぶと僅かに首が動くのだから。

「さあ、訓練を始めるわよ！　全員！竜に感謝の心を忘れず気を引

き締めるように！」

手に持った竜骨の槍を天に掲げ、私はそう宣言したわ。

妖刀アイラの鞘（前書き）

２０１１／１１／３０
話を大幅変更しました。

妖刀アイラの鞘

「今日はここまで！　皆もアイラのように精進するように！」

教官の号令と共に本日の訓練が終わる。

今日は短刀を使った内容で、得意分野である弓矢ではなかったけど難なく一番を取れた。

ここはレンジャーを育成するための専門学校で私は2年目に突入したわ。

あらゆる職種の中で最も死と隣り合わせとされているレンジャーのための学校よ。

そのせいか入学してくる生徒も浮ついた雰囲気を持つ者が少なく、どちらかというと復讐や妄念に凝り固まった子供が多い。

「……またやられているわね」

部屋に戻った私はその惨状に溜息を吐く。

私の私物は全て部屋にぶちまけられ、足の踏み場の無いほど散らかっているわ。

全く、こんな姑息な手段を使うとか本当に陰険な輩が多いこと。

そんなに私が憎たらしいのなら実力で示せばいいのに。

自室の掃除を簡単に終えた私は備え付けのベッドに横になりながらそんなことを考える。

ここに入る人間は大体協調性がゼロなので部屋は個人に与えられ、調理台や不浄場も付いていた。

「ああ、早くユウキ様のお傍に参りたい」

最近は寝ても覚めてもそんなことを考える。

あのスラムから私達を引っ張り上げてくれたユウキ様。

私達のどんなに無茶なお願いにも快く叶えてくれるユウキ様。

私は親というものがどんな者なのか知らないけど、多分あんな感じなのだろう。

「少し疲れたわね」

今日の訓練は激しかったせいか普段は感じない眠気が襲ってくる。

「１０分だけ眠ろうかしら」

そう決めた私はベッドから起きて立ちあがり、壁にもたれながら目を閉じた。

こうすると寝過ぎないで済むからちょうど良い。

起きた後は本格的に部屋の片づけでもしましょうか。

そこまで考えた私は心地よい睡魔に意識を手放した。

次の日

朝食を済ませた私は座学のため教室へと向かう。

まだ早い時間なので教室には人が少なく、まばらしかいない。

「あ、アイラだ」

そう声を上げて近寄ってくるのは2位に位置付けているオーラ＝ユクリエス。

レンジャー志望には珍しく活発な性格で誰にでも声を掛ける人よ。

その気さくな性格から変人揃いであるこの学校でも人気がある。

確か前も誰かに告白されたとか言っていたわね。

まあ、ユウキ様と関係ないからどうでもいいけど。

「また孤立しているね、本当に辛くない？」

彼女は何が楽しいのかいつもそうやって私に声をかけてくる。

全く、本当にうっとおしい。

「……全然」

だから私はそっけなく答え、追い払うように手を振るのだけどオーラは全然堪えない。

むしろ。

「嘘付かないでよ、あれだけ邪険にされて辛くないわけないじゃないか」

そう私を心配してくる毎日。

本当に邪魔よ。

私は天を仰ぎながらそんなことを考えていたわ。

「ウフフフフフフフ」

「あ、アイラ？　少し怖いよ」

隣のオーラが私を気味悪がるけど、どうでもいい。

何故なら次の課題が申告した人間をしばらくの間張り付くというものだからよ。

張り付く人間はもちろんユウキ様。

しばらく会えなかった分、しっかりと守らせてもらうわ。

ついでに害虫駆除も行おうかしらね。

オーラどころか教官さえも私に引いている様子を睥睨しながら私は心に決めたわ。

ユウキ様の屋敷の中で私は倒れていたわ。

「く……カハッ」

腹の底からせり上がってくる嘔吐感と闘いながら私は楽になるために体を丸める。

迂闊だった。

あのメイドの力量を見誤っていた。

ユウキ様に付き纏っているサラとかいう小娘は百歩譲って許すとしても、あのユウキ様を罵倒し責め立てると言う万死に値する言動を取るあのメイドだけは許せず、怒りのままに矢を向けた結果が今の様よ。

あのメイドにボウガンを構え、隙が出るまで張り付いた先に隙が出来たので私はその一瞬を逃さず矢を放った。

タイミングも完璧、軌道も問題無い。

私は仕留めたと感じた瞬間、あのメイドは首をこちらに向けて難なく矢を回避した。

失敗したらその場から逃げるのが基本。

それに忠実に従った私なのだけど、あのメイドにあっけなく追い詰められてしまった。

「まだまだひよっこですね」

私の鳩尾に膝を叩きこみながらそう教えることから、あのメイドは始めから狙われていたのを知っていたのでは。

そのために逃げるのが困難な場所にまで私を誘導してわざと隙を見せたのでは。

私は掌の上で転がされていた事実に気付き、二重の意味で悔いていたわ。

力が欲しい。

私は強烈に力を求めたわ。

だから私はユウキ様にどうすれば力を付けられるのか手紙を送ってみると数日後に小包が届いたわ。

その小包の中に収められていたのはブラッディーX――飲んだ人間の潜在能力を引き出す薬よ。

副作用の心配があるから異変を感じたらすぐに服用を辞めるよう

にと警告文があったけど私は気にしない。

力を得られるのなら私は全てを差し出すつもりだったわ。

その薬を飲み始めてから1ヶ月。

私は同級生から化け物と畏怖されるようになったわ。

飲み始める前も化け物じみていたけど、今では正真正銘の怪物だと。

教官ですら私に敵う者はいないまでになったわ。

でも、私の心は晴れない。

どれだけ称賛されようと畏怖されようと私の心は高鳴らない。

何故なら、私はまだ勝っていないから。

これまで何度も挑戦したけどあのメイドは私を苦もなくあしらう。

あのメイドと私の差は何なのか。

どうして敵わないのかずっと考える日々だったわ。

「アイラ、最近どうしたの？　とても怖いよ」

あなたは……確かオーラだったわね。どうでもいいから名前を忘

れかけちゃった。

あの薬を飲み始めてから酷く記憶が曖昧になってきちゃったのよね。

もちろん昨日食べた物とか授業で習った内容については逆に怖くなるくらい鮮明に覚えているのだけど、人の顔と名前が全然一致しなくなっちゃったのよ。

まあ、ユウキ様のことと全然関係ないから忘れても良い記憶なんだけどね。

そうこうしている内に授業が始まり、教官が講義を始めたわ。

すでに頭に入っている内容なので聞き流していたけど、途中で脱線した話に興味深い内容があった。

「狩人は見える罠と見えない罠の2段仕掛け行います。見える罠を回避したからといって油断していると獲物は見えない罠に絡め捕られます」

「これよ！」

突如私は電流に打たれたような天啓が閃いたわ。

これでようやくあのメイドを排除できる。

心の内から高ぶる歓喜に私は周りの奇異な視線などどうでもよかったわ。

「こんにちは、オーラ」

あの金髪のボブカットと少し小さい瞳は確かオーラだった気がする。

「アイラ、どうしたの？　私の部屋に」

突然現れた私に狼狽するオーラ。それはそうでしょう。

私が誰かの部屋を訪れるなんて初めてなのだから。

「少し聞きたいことがあってね……オーラ、あなたが私を苛めていた黒幕だったのでしょう」

そう言い放つとオーラはビシリと顔を硬直させる。

「アハハ、いきなり現われて何を言っているのかな。私がアイラを苛める？　そんなわけないじゃないか」

ふうん、まだしらばっくれるのね。証拠も上がっているのに。

「オーラ。あなたのやり口は見事だった。私でさえ最初は無関係だと思っていたのよ」

オーラは直接手を下さず、間接的に情報を小出しすることで痕跡を残さず陰湿に私を責めていた。

「けど、あなたやり過ぎたわね。いくらばれにくくとも、何度も使

用すればボロが出てくるのよ」

1つ1つだと分からなくとも、数が揃えばパターンというものが浮かび上がってくる。

そのパターンというのは個人個人が持つ特有の匂いの様な物。

それを辿っていけば自然と真犯人へ辿り着くのよ。

「そんなに否定するのなら証人でも連れて来ましょうか？　ジェーンやキャシーが自白したわよ」

名前は確かこうであっていたはず。全く、本当に人の名前を覚える能力が低下しているわね。

そこまで問い詰めるとオーラは俯いたまま顔を上げなかったわ。

そしてそのまましばらく時が過ぎた後、顔を上げてこれまで溜まっていたものを吐き出し始める。

「どれだけ頑張っても私はいつも2番。私は1番でいたいの！　アイラがいるから私が1番になることを許なかったのよ！」

オーラは優等生の仮面を投げ捨ててそう叫ぶわ。

目を血走らせて恥も外聞もなく喚く姿はいつもの姿とは程遠いわね。

私はオーラの気が済むまで何も反論せず思うがまま叫ばしてやったわ。

「……私をどうするの？」

全てを吐き終え、息を切らしながら私にそう問いてくるわ。

「この事実を公表して私を除け者にする？　別にそれでも良いわ。私は負けちゃったんだもの」

諦め、蚊の鳴く様な声でそう呟くオーラ。

ふむ、もう良い頃かしら。

「それじゃあ一つお願いを聞いてもらおうかしら」

オーラが頷いたのを確認した私はこれからの計画について話したわ。

私はオーラとともにユウキ様の屋敷へ赴いたわ。

「ね、ねえ。本当にやるの？」

オーラは初めて経験することなのか声音が震えている。

「大丈夫よ、先程も言った通りあなたは囮よ。奴の注意を引き付けてくれればそれで良いわ」

あのメイドがオーラを相手にした直後にこの矢を放てばいくら化け物でも反応できまい。

これでようやくユウキ様に平穏を与えることが出来る。

そう考えた私は逸る気持ちを抑えてじっとその瞬間を待ち続けたわ。

「……ねえアイラ。彼女って何者？」

「化け物よ」

私は吐き捨てる様にそう言い放つ。

「アハハ、化け物が誰かを化け物と呼ぶかあ」

オーラは何が楽しいのか廊下に転がったまま笑い始めたわ。

襲撃は見事に失敗したわね。

一応弁護しておくけどオーラは相当な体術と短剣の使い手よ。

ブラッディーXを飲み始めた私でもオーラと組み手を行えば結構手こずらさせられるわね。

そして私はあれから弓矢の技量も磨き、獣にすら気取られないほど殺気を抑えることが出来るようになったわ。

なのに完敗。

不意を突いたにも関わらずオーラは一瞬で無力化され、その数分後には私も廊下に伏していたわ。

私は痛む体に鞭を打ち、壁にすがりながらも何とか立ち上がる。

「……オーラ、もう良いわ。私を虐めたことは金輪際口にしないから。と、いうより私はこれから先あなたの前に顔を出さない」

「どういうこと？」

「決まっているでしょう、私はもう学校を辞める。これ以上あそこで学ぶべきことはないわ」

知識も技能も吸収した。

教官も全て倒した。

ならもう学校にいる必要はどこにもない。

「……それでどうするの？」

「奴に弟子入りする」

もう決定している。

おそらく学校で学べる技量では奴に敵わない。

そうならば学校に通う意味はないに決まっているじゃない。

「おめでとうオーラ、これであなたは一番になれるわ。精々楽しい

学園ライフを送っていなさい」

これ以上話すことはない。

だから私はオーラに背を向けて奴を探し始めたのだけど。

「……何をしているの？」

オーラは私の袖を引っ張って行かせないようにする。

「何か言いたいことでもあるの」

うっとおしいと感じながらも私は真意を問いただすと、オーラは口を開けてポツリポツリと語り始めたわ。

「私も連れて行って」

「は？」

突然そんなことを言いだしたオーラを私はマジマジと見つめる中、オーラは続ける。

「私は井の中の蛙だということを思い知ったわ。あんた達の様な存在を知っちゃったら学校で一番になっても満足できない。いえ、むしろよけい惨めになるだけよ」

オーラの決意は固いようです。

何が何でもついていくという気概が満ち溢れています。

「はあ、分かったわ。そんなに言うなら私も手助けしてあげる」

私はため息をついてオーラの願いを聞くことにしました。

「ん？　どういうこと？」

オーラが首を傾げたので私はブラッディーXについて話し始めました。

「なるほど、あれがあったからアイラは常軌を逸し始めたのね」

あれを境に私が変化したのを感じ取っていたのでしょう。

「それを飲めば私もアイラ並みの強さを手に入れることが出来るのかしら」

「その可能性は限りなく高いけどお勧めしないわ。何せ強烈な副作用があるのよ。例えば私は感情が希薄になったわ。オーラもそう、それを飲めば心身に何らかの異変が現れる。もしかすると別人格に変貌してしまうかもしれないわ」

「構わないわ」

オーラは躊躇もなく答える。

「一番になれるのなら、強くなれるのならそれぐらい構わないわ」

オーラは瞳に決意の光を浮かべている様子から叛意を促すことをもう不可能でしょう。

私は手を差し伸べました。

「改めてよろしく、オーラ＝ユクエリス」

するとオーラも笑顔で手に取って握り返してきます。

「こちらこそよろしく、アイラ＝カザクラ」

お互い手に力を込めた瞬間、私は久しぶりに心から笑いが込み上げました。

「また私の侵入を許しました。一体あなた達は何の訓練を受けてきたのですか？」

私は定例会議の警備担当をしている者達を弾劾します。

彼らは申し訳なさそうに恐縮していますがそれで済まされると思っているのでしょうか。もし万が一が起きれば彼らは生かしておけませんよ。

もう少し彼らにそのことを理解させようと思い、さらに責めようと口を開きましたが。

「もうそれくらいにしておけば、アイラ」

「オーラ……」

呆れ調子のオーラがそう言いながら私の隣に立ちました。

諜報部隊副主任――オーラ＝ユクエリス

装備

武器　デモンズダガー　５％の確率で即死
防具　闇夜のマント　闇を生み出す
頭　影の帽子　光を吸収する
足　盗賊の靴　ＡＧＬ上昇　足音を消す
装飾品　梟の瞳　隠れている敵を見つける

ステータス

小剣　６７
素手　６６
隠密　７９
魅了　７２
支配　６７

２人揃って学校を辞めた私達はそのままエルファ様に弟子入りを志願しました。

エルファ様も何か思う所があったのかユウキ様に私達のことが知らされないことを条件に私達を受け入れ、エルファ様の手足として動いていました。

で、オーラにも私が飲んだブラッディーＸを施したところ、彼女は私と同じく技能が飛躍的に増大しましたが代償として。

「何かもう慣れたけど人を見上げるってしんどいわ」

オーラ曰く「私が８歳の頃とそっくりね」と言う通り幼児へと体

が退行してしまいました。しかし、体は幼女にも拘らず体力も技能も成人のそれと変わらないことからオーラ自身はあまり気にしていないようです。

……本当にブラッディーXは摩訶不思議な薬です。

で、そのオーラが腰に手をを当てて私に説教を始めました。

「あなたはもう少し自分の力量というものを鑑みなさい。あなたが本気を出せば侵入を防げるのはエルファ様か私しかいないわ」

確かにその通りです、私を止めた者は今の所オーラしかいません。

「ほら、あなた達は行っても良いわよ。各自反省をしておくように」

オーラは私が一言も話さない内に勝手に解散を宣言しました。

「相変わらずユウキ男爵一筋ね」

残るのは私とオーラの2人だけになった時、オーラが感嘆とも呆れとも似付かない声を出します。

「皆がアイラと同じなわけないんだからもう少し加減しなさい」

「慰めるのはオーラの役目です。適当な所になれば止めてくれるから私は加減しなくてもいいでしょう」

「まあ、その通りだけど」

私の言葉にオーラは苦笑してしまいます。

信じられないかもしれませんがオーラは私の一番の理解者となりました。

エルファ様の下で共に過ごした仲故なのでしょうか、オーラと私はお互いの好みから行動、昨日何をしていたかまで全てを知っています。

余談ですがオーラと深い仲になって以降物忘れが止まり、今では感情を消したい時に消せるようになるまでコントロールすることが出来るようになりました。

具体的にはユウキ様の単語が出てきても感情を消すことによって相手の挑発に乗らなくなりました。

……オーラとの組み手ではそこを攻められて負け続けでしたからね。

「ユウキ男爵が大切なのは分かるけど、そこをつかれて熱くなるようじゃ駄目よ」

と、何度もオーラから注意されました。

「彼らの元へ行くのですか」

オーラはしばらく私と談笑した後踵を返します。

「ええ、アイラの折檻が原因で彼らが委縮してもらっては困るからね。彼らはあれでも将来有望の人材よ、フォローは必要でしょ？」

オーラはそう言って手を振りながらその場を後にしました。

「さて、私は情報確認でも行いましょうか」

残された私はこの国に散らばらせた多くの間諜が集めてきた情報を確認しに部屋へ向かいました。

妖刀アイラの鞘（後書き）

苛めっ子と苛められっ子の関係から親友へ。
その辺りをテーマとして書いたのですが、締まらない内容になりました。
うーん、何がいけないのかなあ。

魔女と呼ばれたユキ（前書き）

今回は短めです。
いや、キッカとアイラが濃すぎたと言うべきか……

魔女と呼ばれたユキ

魔導騎士団団長――ユキ＝カザクラ

それが今の私の肩書。

キッカ率いる竜騎兵軍団には敵わないけど、それでも戦の花形として持て囃される存在だ。

今振り返れば本当に色々なことがあったと思う。

あの時、私がユウキからパンを奪わなければ今頃はただのユキとして過ごしていたのかもしれない。

「どうしたんだい？　団長」

どうやら深く考え事をしていたみたい。

魔法学園時代からの知り合いであるミア＝キャストウイッチ＝ヴァルレシアが私の目を覗き込んで心配そうに言った。

彼女はミドルネームがある通り貴族で由緒正しいヴァルレシア侯爵の長女だ。

身長ははすらりと長く、ボーイッシュな顔立ちで金色の髪を肩まで切り揃えている。気さくで活動的なのはキッカと一緒だけど、ミアはその動作の一つ一つに気品が溢れているのが大きな違い。

何をしても絵になるというのはミアのみが持つ才能だろう。

「気分が悪くなったのなら言ってくれよ、ボクはユキが心配なんだから」

その男勝りな口調なのは親が自分を男のように育てた結果だと言っていたっけ。

学園時代からその口調と容姿が相まって王子様と呼ばれ、男子よりも女子からの告白が多いという難儀な人だった。ミアは「可愛い物を愛でるのは好きだけど百合百合しい雰囲気はねえ……」とよく苦笑していたのを覚えている。

そんなに嫌なら態度と口調を改めればいいのに思っているのだけど、ミアは幼少の頃からこれで通していたからついつい出てしまうらしい。

閑話休題

私は魔法学園の生徒会長だったけど、それはミアの尽力が大きい。彼女が私を全面的に支援したから私は生徒会長になれた。

で、それだけならよかったのだけど、何故かミアも副会長に立候補していた。

「やっぱりユキ一人にそんな重責を背負わせるわけにはいかないからね」

ミアはそう嘯いていたけど、実際は私と一緒にいたかったんでしょう。

私を生徒会長に推薦したのは他ならぬミアだし。

でもまあ、本当によく生徒会長として1年間勤めきれたと思う。

選民主義に凝り固まった魔法学園において史上初の市民での生徒会長になった私は、それはもう酷い仕打ちを受けた。

苦情や弾劾は当たり前。酷い時には私の命令に従えないと学園事業をボイコットされかかっていた。

生徒会長を辞めたかったけど、今度は市民出の教師陣から辞めないでくれと懇願される始末。

八方ふさがりになったこの状況をどう打開すればいいのかわからなかった私はユウキに手紙を送ると、後日に大量の薬瓶が送られてきた。

「……ブラッディーX？」

聞いたことのない薬品だ。色は真っ黒で毒々しく、私の本能がそれは危険だと訴えていたと思う。

だって説明文を見ると。

『これを飲むと潜在能力を解き放つ代わりに人間が終わっていく副作用があるから気を付けるように』

……人間が終わるって何？　相当碌でもない未来しか思い浮かばない。

「……けど、これしかない」

今のままだと私は貴族からの非難と生徒会長としての責任から壊れてしまう。

全てを失うくらいなら人間を失った方がまだ活路があるのかもしれない。

そう考えた私は覚悟を決めてそれを口に含んだ。

「ユキ、ボクはたまに君がとんでもなく恐ろしく見えるよ」

冷や汗交じりにそう呟くのは生徒会室で仕事をしているミア。会計や書記等の3人はまだ来ていない。

「それはボクも彼らがうっとおしいと感じていたさ。いなくなっても構わないとまで思っていた。けど、実際に退学させることはないんじゃない？」

「……私から逃げる？」

小首を傾げてそう尋ねるとミアは首をぶんぶんと振る。

「いや、ここまで来たらもう引き返せない。リーンやルナ、イータと同じ様に最後まで共にいるよ……何故なら――」

苦笑しながらミアは続けて。

「『魔女』に意見を述べられる立場を捨てようとなんて思わないね」

魔女――そう、私はそう呼ばれていた。

あの薬を飲んで最も変わった点といえば悪知恵が回るようになったことだろう。

人を眺めているだけで、私はその人を貶めるにはどのようなことをすればいいのかを瞬間的に閃くようになった。

私は生徒会長としての権限とミアの人脈をフルに使い、敵対する生徒を社会的に抹殺していった。

ある者は原因不明の暴行に会い、ある者は女子の下着を盗んだとして学園を去っていった数は３０人に上り、その中には教師も含まれている。

学園の皆はそれが私の謀略よるものだということが周知の事実。

しかし、そこまで畏怖されているにも拘らず私の評判はすこぶる良い。

それはそのはずで追放した生徒は学園の問題児ばかりであり、彼らがいなくなったことで学園内に類を見ないくらい平和な時が訪れているからだ。

彼らが消える前に必ず生徒会役員からの忠告があるのも大きい。

生徒会役員に逆らわなければ魔女に目を付けられることはない。

それが魔法学園全生徒の共通意見だった。

そんなわけで私は見事1年間生徒会長を務め上げることができた。

私の代の生徒会交代式は他と違って惜別の他に安堵が加わって教師を含む全員が泣いていたっけ。

……まあ、やりすぎてしまったのは認めるしかない。

で、そこでミアと別れたのだけど、すぐに出会うことになる。

ユウキが創設する魔道騎士団の団員を集めてほしいと言われ、私はまずミアのもとへ向かった。

キッカ達以外で最も長く接していたのはミアだったので彼女以外の副団長はいないとまで考えている。

案の定、ミアは2つ返事でOKを貰った。

けど、ここで問題が一つ。

ミアはヴァルレシア侯爵の跡取りなのでおいそれと抜けるわけにはいかない。

事実ヴァルレシア家の当主は首を縦に振らなかった。

「どうする、ユキ？」

さすがのミアも不安げな様子で私に尋ねるけど、私はなぜ無理だと感じているのかわからなかった。

私は魔女と畏れられた謀略の使い手。

綺麗な身の生徒ならともかく叩けば埃が出る貴族に要求を呑ませることは造作もない。

私は早速行動に移すためアイラに連絡を取った。

ヴァルレシア家の当主が快くミアを送り出したので、私は次に誰を誘うべきかミアと相談する。

「うーん、そうだなあ……生徒会役員の3人は加えるとして、他は調べてみるから少し時間をくれないか？」

火急の用事じゃないので急ぐ必要はどこにもないから頷くことにする。

「うん、ありがとう。シマール国最強の魔道騎士団の創設のために人材を選りすぐってみるよ。だから交渉はユキに任せる」

名門出かつ社交的な性格のミアは私と比べ物にならないくらい交友関係が広いのでこういう時は頼りになる。

軍の花形である魔導騎士団。

ユウキの期待に応えるためにも私は頑張らないといけないなと心に決めた。

後日――魔導騎士団総数５０名をユウキの前に連れて行くことができたわ。

魔女と呼ばれたユキ（後書き）

次はクロス。
ブラッディ―Xの副作用はどうしよう？

クロス将軍（前書き）

とりあえず判明したことは自分に恋話など無理ということでした。

クロス将軍

「全体！　整列！」

僕の隣に控えている副官がそう激励を飛ばすと眼前に控えていた3万に上る兵が一糸乱れずに統率を取る。

今は合同練習の最中。

全兵のうち3分の1を動員して行われるこの訓練は文官は勿論のことキッカやユキ、アイラやユウキも見に来るので決して無様な真似を見せることは出来なかった。

「右へ習え！」

ザッザと足音を鳴らして全員が右を向く。

「各隊に分かれよ！」

その指示を受けてからわずか5分後には綺麗な長方形が１０個出来ていた。

「魚麟の陣！」

次から次へと出される命令に兵達は混乱することもなく所定の位置へ着いていく。１００人や２００人ならともかく3万の兵が生き物の如く動くというのは生半なことでは出来ないよ。

これはユウキが取り入れた公共事業による全体訓練の成果である

し、もう一つは。

「さすがレオナ教官ですね」

僕は右に控えている副官に向かって小声で称賛した。

するとレオナ教官は唇を僅かに綻ばせ。

「いえ。私は命令しただけであり、兵がここまで動いてくれるのはクロス将軍の人望です」

と謙遜するのは元僕の教官で今は副官の女性――レオナ＝カリスリン。

レオナ教官はどんな暑い日でも礼服に身を包んでいることで有名だ。

とある事情で右目を失って眼帯をし、左目はその分鋭い光を放っている。年は２０代前半で身長は１８０ｃｍを超えるであろう長身と腰まで伸びた金髪ストレート。人形の様な整った顔立ち、そしてレオナ教官の最大の特徴である制服越しから盛り上がる胸があるせいでどんなに罵倒されようとも僕の他の候補生は喜んでいたのを覚えている。

ちなみに僕の身長は２ｍを超えている。

「レオナ教官、僕と話す時の敬語は何とかなりませんか？　肌がむず痒く感じます」

「何を言う。上司であるクロス将軍に普段通りの言動をとれば軍の

規律に違反するだろう」

レオナ教官は大真面目でそう反論する。

「それに私のことを教官と呼ぶのは止めろ。私はクロス将軍の部下なのだからレオナと呼び捨てにするのだ」

「やっぱり厳しいなあ」

変わらないレオナ教官に僕は苦笑せざるを得なかった。

「私の目に狂いはなかった」

残った左目に感慨の色を浮かべながらそんなことを呟くレオナ教官。

すでに訓練が終わり、ユウキ達は引き揚げている。

隊長クラスとの反省会も終わって、この会議室には僕とレオナ教官しかいなかった。

「始めてクロス将軍を見た時からお前は将来大物になると直感し、例外的に幹部候補生の訓練を受けさせたことは正しかったと思う」

「僕はあれで何度も死にかけましたけどね」

あれは辛かった。僕は同年代と比べて体や力が大きいとはいえまだ１３歳。

そんな僕が２０歳以上の正騎士が受ける訓練に参加すること自体が無謀だった。

それだけでも辛いのにレオナ教官は僕にだけ厳しく当たる始末。

何回腕立て伏せをしたのかもう覚えていないや。

ユウキから貰ったブラッディーＸが無ければ多分死んでいたと思う。

あの薬を飲むと血が沸騰したような高揚感と共に力が溢れてくる代わりに少し思い切りの良い性格になるんだよね。

「おかげで少し性格が変わりましたよ」

「フフフ、許せ。しかし、あの地獄を超えたからこそ今のお前がある。お前が率いるジグサール騎士団はシマール国で最強だ、近隣諸国と比べてもお前の騎士団には敵わない。これは王国騎士団元第二部隊の隊長だった私が保証する」

レオナ教官はその天才的な用兵術でエリート部隊である王国騎士団の部隊長を務めていた。彼女の指揮する部隊は精鋭と呼ばれ、どんな困難な状況でも必ず任務を達成することで有名だった。

「まあ、そんな輝かしい経歴を持つ私でもヘマはするものだ」

レオナ教官はそう言って影を落としたので僕は慌ててフォローする。

「そんなに落ち込まないで下さい！　あれは国が悪いのです。ユリカール子爵の反乱を鎮めるために１０００の兵を連れ添ったそうですが相手は倍の２０００で、さらに城に立て篭もられている状況で勝てと言うのは無謀です」

信念を通すレオナ教官は兵達に親しまれ、騎士団の中で最も人気があったためそれを妬んだキルマーク騎士団長が仕掛けたのがその謀略だ。

結果は当然の如く失敗する。

多数の兵の命を散らし、国の名誉を落としたとしてレオナ教官は幹部候補生のお目付け役に左遷された。

「ああ、ありがとう。けどな、失敗したのは事実なんだよ。どれだけ言い繕っても死んだ部下は帰ってこないんだ」

レオナ教官はそう言って右目の眼帯に手を添える。

その傷はユリカール子爵の鎮圧に失敗し、撤退している際に飛んできた流れ矢によってつけられたものらしい。

任務に失敗し、部下を失い、さらに自身の目も失って追い打ちとばかりに名誉も失ったレオナ教官がどんなことを考えているのか僕には分らない。

「教官、僕はキルマーク騎士団長が許せない」

だからこそ、僕はレオナ教官をこの立場に追いやったキルマーク騎士団長を憎む。

「もし戦うことがあれば刺し違えても奴を葬り去ります」

それしか僕には出来ない。

だからそう力強く宣言することでレオナ教官を元気づけようとした。

するとレオナ教官は少し目を瞬いて僕を見、次にゆっくりと笑みの形を作る。

「その言葉は嬉しいが私はお前に死んでほしくないな。どこの世界に愛する人間の屍を見たいと思う？」

「いや、それはまあ……」

突然愛する人間とか言われて戸惑っても仕方ないと僕は思う。

そう慌てふためいている隙にレオナ教官は僕の隣まで近寄り、もたれかかってきた。フワリとしたレオナ教官の匂いが鼻腔に広がる。

「きょ、教官！？」

「今は教官じゃない、レオナだ。クロスの恋人としてのレオナだ」

「そ、そうか……れ、レオナ」

僕がたどたどしくそう呼ぶとレオナ教官はクスクスと肩を揺らして。

「何だ、今の君はヘタレモードだな。剣を持った際に見せるあの君はどこにいる？」

その言葉に僕の顔が引き攣る。

ブラッディーXの副作用というかあれを飲んだおかげで力は付いたものの剣を握ると少しだけ気が大きくなってしまうんだ。

「私に告白して振られた際、野獣のように無理矢理私を求めたあのクロスはどこに行ったのかな？」

「きょ、教官！？」

黒歴史を掘り起こされて僕は慌てる。

いつの間にかレオナ教官に恋心を抱き、意を決して告白したのは良いけどにべもなく振られた時のこと。

僕は剣を握っていないにも拘らず狂暴になってしまい、衝動のままにレオナ教官を求めてしまった過去がある。

「今振り返るとお前は殺されても文句は言えなかったな」

「それは、まあその通りです」

上司に恋心を抱き、それどころか無理矢理求めると言うのは極刑になってもおかしくない。

「まあ過ぎたことだ。キッカケはあれだったが、今はお互い恋人同士。終わり良ければ全て良しだ」

そう言ってカラリと笑うレオナ教官は本当に器が大きいと思う。

僕じゃ釣り合わないと思ってしまうほどだ。

そんなことを考えていると急に僕の唇が塞がれる。

驚く僕の眼前にレオナ教官の瞳が全く揺れずに僕を見据えていた。

しばらくの間、そのままの時が過ぎる。

ようやく唇を離したレオナ教官は普段とは違う震える口調で語りかけてきた。

「なあクロス。私は怖いんだよ。部下も名誉も何もかも失った私が今ではお前が傍にいて、さらに最高の騎士団を率いている事実が怖いんだよ。こんな幸せがあって良いのか、いつ失ってしまうのかを考えると怖くて仕方ないんだよ」

レオナ教官から漏れる弱音を聞いて僕は胸が締め付けられる思いがする。

レオナ教官も人の子だ。

人なのだから完璧なわけがない。

「……ごめんね」

だからポツリと僕は謝罪を口にする。

「僕はレオナのことを疑っていた。レオナの器があまりに大きいから釣り合わないと思っていた。本当にごめん」

僕は精一杯謝罪したつもりなのだが、レオナ教官は僕の様子を見て噴き出した。

「ハハハ、何を言ってるんだ。私よりお前の方が器が大きいぞ……全く、本当に今のお前はヘタレモードだな。あの野獣モードのお前はどこに行った？　私はあの本能丸出しで求めるあっちの方が好みだぞ」

「き、教官！？」

今までの雰囲気はどこにやら。急にレオナ教官は元気を取り戻してそんなことを言い始める。

「教官でないレオナだ。安心しろ、冗談だ。私は今のお前も好きだぞ」

「……本当に教官は冗談が多いですね。あの鬼教官とどっちが本当なんですか？」

「どちらかというと私はこっちの性格だ、出来れば1日中冗談を言って過ごしたいぐらいだ……しかし」

そう言ってカラカラと笑っていたレオナ教官だけど急に笑いを引っ込め、代わりに妖艶な雰囲気を醸し始める。

「ここから先は冗談でないぞ」

レオナ教官は自分の軍服に手を掛けてゆっくりと脱ぎ始めた。

クロス将軍（後書き）

意外ですがクロスはユウキより大分進んでいました。

まあ、ユウキがそんなことを知っても「あ、そう。おめでとう」済ますと思いますが。

とある日の葛藤

「うーん……」

俺は机の上に作成した薬をどうしようか頭を捻る。

サラはいなく、エルファもどこかを掃除しているためこの部屋には俺1人だ。

「使うか使うまいか、それが問題だ」

俺をこんなに悩ましているのは目の前に置いたブラッディーXについてだった。

この薬は本来課金アイテムであり実際にお金を払うことによって得られる類のものである。

効能はこれを飲むとステータスが上がり易くなるというもの。

俺は金が無かったので使用できなかったが、サラリーマンなどお金はあるけど時間がないプレイヤーがよく使用している代物だった。

もしこの薬を自在に作れるようになればどうなるのか。

確実にこのゲームの支配者になれる。

そんな魅力に憑りつかれた1人のプレイヤーが違法ツールを使用してこの薬を自在に生み出せるようにした。

管理者側がそれを規制するまでの間、短時間で最強クラスのプレイヤーが大量発生したのは言うまでもない。

プレイヤー時代ではもうこの薬は作れないが、この世界だとどうなるのか。

幸か不幸か俺はその違法ツールを知っていたので、調合レベルが規定以上に達したから違法ツールに書いてあった素材と手順から違法ブラッディーXを作ってみた。

「作れることは作れるんだな」

出来た代物は色も味も全てブラッディーXそのものだ。

だからこれはブラッディーXと判断していいのだが。

「正直な話、怖くて使えない」

ゲームの世界で禁止されたものをこの世界で使うとどうなるのか予想がつかない。

そんなに不安なら使わなければいいじゃないかと思うのだが、捨てるには未練がありすぎた。

「どうしようか……」

堂々巡りである。

「主、お手紙です」

そんなことを考えているとエルファさんが現れ、ペーパーナイフで封を切って俺に渡して退出する。

「ふむふむ……」

手紙の内容はキッカからだった。

勉強が大変でそれに相方も嫌な奴、本当に苦しいとの旨が書いてあった。

「そうか、困っているのだな」

椅子にもたれてどうすればいいのか思案していた俺は机に置いてあった違法ブラッディーXが目に入る。

「ちょうど良いかな」

俺はニヤリと笑う。

この薬をキッカ達に試してみよう。

たぶん大丈夫だ、死にはしない。

そう考えた俺は早速この薬を大量に作ってキッカに送った。

「さてさて……どうなることやら」

後日談としてキッカの他のアイラ、ユキそしてクロスにも同じように送って効果を確かめた結果、めでたくお蔵入りとなった。

「やはり違法な代物は駄目なのだな」

俺は一つ学んだ。

とある日の葛藤（後書き）

これで間章は終わりです。
ありがとうございました。

急転直下

『良いものだな』

俺を背に乗せているイズルガルドはジグサールの上空を飛びながらそんな感想を漏らす。

この老竜はキッカが竜騎兵の結成のために訪れた渓谷の長で、その時に俺と彼が交渉していくつかの竜を貸してもらったのだが、老竜は俺の何が気に入ったのか俺が生きている限りは共にいると言い始めた。

なのでその老竜をイズルガルドと名付け、普段は南区画の隅にその巨体を置いている。

「そう言って貰えると嬉しい」

眼前に広がるのは険しい山脈と活気ある豊かな街並み。

ここに赴任してから1年半――荒れ果てていた都市は秩序を取り戻し、民も魔物に脅えるようなことはなくなった。

「イズルガルド、悠久の時を生きるお前からすればこの発展はどう思う？」

何千年も生きていたイズルガルドにとっては人の営みなど一瞬にすぎないだろう。

だが、それでも俺はこの発展は繰り返すものなのか、それとも俺

だからこそできたのかが知りたかった。

するとイズルガルドはしばし沈黙した後重々しく意志を伝えてきた。

『わしはお主が何をなすのかに興味があった。そして、お主はその期待を裏切っておらん」

「……ありがとう」

詰まるところこの発展は俺だからこそ出来たと言っている。

それが嬉しくて俺は自然にそう感謝を述べることが出来た。

「イズルガルド、もう少し高度を上げてほしい」

俺がそう頼み込むとイズルガルドは承知したとばかりに羽を羽ばたかせ、それはジグサールが小指ほどの大きさになるまで続いた。

ここまで高くなると寒いと感じるが、それでも俺は見てみたい光景があった。

ジグサールの周辺は荒野や山脈が広がっているのだが、それ以東は不毛な地帯が続く『無限砂漠』。

そこはジグサール周辺の魔物など比べ物にならないほど強大な魔物が出没する地域である。プレイヤー時代においてはジグサールが東の果てにある街となっていたので、あの無限砂漠から脅威がやってくることなど考えなくて良いだろう。魔物大侵攻も東からではないし。

続いて西に見えるはシマール国の王都――カリギュラス。

シマール国は平坦な土地が多い国なので馬や人などの交通手段が発達していた。また、温暖な地域に加え、肥沃な大地が広がっているためユーカリ大陸の中で最も農作物が豊富な国である。

が、今はその土地に胡坐をかいて財産を潰し合っているのが現状だ。国の荒廃はますます進行し、国民の心は離れていっているにも拘らず王宮は目を向けようともしない。

もはや末期症状なのではと俺は思う。

北西に目を向けるとそこは険しい山脈が広がり、最も自然の驚異を受ける地域一帯を治めるリーザリオ帝国。

あの国はシマール国と違い、気温も低くて土地が痩せ細っているので毎年のように餓死者や凍死者が出る国だ。常識的に考えるとそんな国などとうに滅びてもいいはずなのだが、土地に恵まれない分人が強い。

リーザリオ帝国の農民に至るまで兵士としての資質があり、とくに帝国が管理している傭兵団は大陸最強と呼び声が高い。そのため武力に物を言わせて何度もシマール国に侵攻してくるのだが、ワイマール砦の堅固さによって攻めあぐね、そして持久戦を迫れて何度も撤退している。

噂によると今年は飢饉だったそうだ。

シマール国は対して影響はなく、小麦の値段が1割ほど上がった

程度だったがリーザリオ帝国は死活問題だろう。このままだと例年より冬を越せない民が増えるのは必死なので、何かしら仕掛けてくるというのが俺の見立てだ。

最後に南西。

バルティア皇国は川が多数存在し、移動手段も船が主となっている。

聞いたところによると皇都とされている水上都市ファルケニアは雨季の時期になると道が水没し、完全に船のみの移動となるらしい。

交通の段は極めて悪いが、攻める方にとってはこれほど厄介なものはない。

シマール国は陸地続きゆえに水軍というのが発達していない。逆にバルティア皇国の民は幼少の頃から水とともにあるため船での戦いはお手の物だ。

そのためシマール国は何度もバルティア皇国の侵攻に失敗している。

今のところは考えなくてもよいが、最近バルティア皇国は軍事活動が活発になってきているという報告があるため、気を抜かない方が良いだろう。

シマール国よりさらに西側には多くの国が存在してあるが、これら三国に比べると見劣りする。

時たま侵攻してくる場合もあるのだが、にべもなく撃退されてい

るのが現状だ。

「イズルガルド、シマール国が潰れるのには後何年かかる？」

シマール国が亡くなるのはもはや時間の問題。

俺が困るのは魔物大侵攻前に他国が攻め入ってくることだ。

もちろん勝つことは出来るのだが損耗した状態で魔物大侵攻に突入すれば多大な被害が出る。

それが俺の中での懸念材料だった。

するとイズルガルドは重々しい様子で。

『2年』

と答える。

「……そうか」

それなら大丈夫だな。

『ユウキよ、なぜ安心するのだ？』

「簡単だ、あと半年もしないうちにこのユーカリア大陸にある国の大部分が滅びるからだ」

俺がこの世界に飛ばされて戸惑ったのはプレイヤーとしての知識が全然生かせられないことだった。

存在するはずのない国が多数存在し、出没する魔物も弱すぎる。

これはおそらく魔物大侵攻によって大陸地図が大幅に変わった結果だと考えている。

『ふむ、そんなことが起こるのか』

残念なことにこの事実は誰も信じてくれない。

俺は孤独だが、歩みを止めるわけにはいかないという思いがあった。

「まあ、後半年だ。その時に俺は世紀の笑い者になるかそれとも預言者になるか決まる」

できれば後者であってほしいと願う俺は救いようのない阿呆なのだろうな。

いつも通りフィーナとレアの3人で仕事をしていた俺達なのだが、緊急の連絡があるとかで応接室にそろっていた。

「エルファ様が直接いらっしゃるなんて始めてですね」

レアの言うとおり、エルファは普段カリギュラスに滞在しているためここに来る用件などない。それに加えてアポも取らずに来たということは重大なことが発生したのだろう。

椅子に座って数分が立つと扉が開き、そこからエルファが入室してくる。

「お久しぶりです、主」

エルファは普段と変わりなく平坦な様子で頭を下げてそう挨拶した。

「ああ、久しぶり。どうした？」

エルファがここに来た事はおそらく始めてではないのか。

サラを呼び寄せたからエルファも来るのかと考えていたがその予想は外れ、まだ王都に残って人材を俺の所へ集めていた。

「調子はどうですか？」

「ああ、上々だ」

そう言って当たり障りのない言葉を少し交わす俺とエルファ。

「ええと、主にお伝えしたいことが」

あの冷徹なエルファが珍しく戸惑っているのを見て俺は警戒心を強める。

「百聞は一見に如かずと言います、このお方を見て下さい」

その言葉とともに遅れて入室したのは一人の少女。

おそらく俺と同じ年代だろう。役所の中から現れたのは腰まである見事な銀色の髪を持っている。儚げな印象を醸し出し、純白と言っても差し支えないほど白い肌と相まって次の瞬間には折れてしまいそうな雰囲気だった。

「ひっ！」

俺には誰だから分からなかったが、フィーナは即座に理解したようだ。

口に手を当てて視線も落ち着かなくなっている。

「ま、まさかこのお方は」

レアも目に見えて狼狽する。

「えーと……紹介をお願いしていいか」

俺はこの中でただ一人状況を理解していないので助け船を求める。

すると鮮やかな銀色の髪を持つ少女はツカツカとレアの前を通り過ぎて俺の前まで歩き、目を覗きこんだ。

その底が知れない銀色の瞳で探るように俺をしげしげと観察してくる。

そのまま俺と少女は硬直していたが、先に動いたのは少女の方だった。

視線を外して後ろへ2，3歩下がる。

「へえ、私を見ても動揺の欠片も無い。さすがエルファの好いた男だわ、こんな反応を取った人なんて始めて見た」

アハハ、と何がおかしいのか高い声で笑い始める。

声を上げると一転。先程の儚い印象が霧散し、代わりに狂気そのものの雰囲気が彼女から溢れ出してきた。

「エルファ、レア、フィーナ。誰でも良いから彼女が誰なのか教えてくれ」

「このお方は――」

「いいわ、エルファ。私が名乗るから。でもその前に面白い情報をあなたに伝えるわ」

口を開きかけたエルファを制した少女は何が面白いのか畏まって胸に手を当てて話し始めた。

「『ユウキ＝ジグサリアス＝カザクラ男爵。貴殿は第1王女を暗殺した咎として申し開きの場を開くも欠席したことによりこの咎を認めることとする。よって反逆罪の刑に処する』だって。近くこの都市に騎士団を差し向けてくるらしいし、他の貴族も呼応しているようだからこのまま無防備だと蹂躙されて終わるんじゃないかしら」

とんでもないことをサラリと言う少女。

王女を暗殺？

申し開きの場を欠席？

始めて聞く単語に俺は混乱する。

「どういうことだ？　俺はそんな知らせなど聞いた覚えはないぞ、それに第一アイラからその類の情報は上がってきてない」

「そりゃそうよ。だって昨日王女が殺されてその日に裁判、そして今日に騎士団を出動させることが決定したのだから。で、あなた達はそんな重大な出来事が迫っているのに呑気に遊んでいた」

あっけらかんとそう言い放つ少女の瞳から喜以外の表情が見当たらない。

「どうしてフォルター宰相とキルマーク騎士団長が手を組んだのかというと彼らは前々から中立を保ち続けるあなた達の存在が目障りだったみたい。だからこの機に乗じて協力したのよ」

憎い敵のために手を取り合う、素晴らしいわね。

そう言ってアハハハハと今度は回りながら笑う。

「……一体何が楽しい。そして、お前は何者だ？」

まるで俺の不幸を嘲笑うような態度に俺は目の前の少女に煮えぎたる怒りを感じる。

「ああ、凄いわあ。そんな顔も出来たのね」

が、少女は全然堪えていなかった。

「ああ、そう言えば自己紹介がまだだったわね」

少女はそう言って回転を止めてこう言い放つ。

「私の名はシマール国第1王女、ベアトリクス＝シマール＝インフィニティ。殺されたはずの王女よ」

アハハハハハハハハハハ。

もう楽しくて仕方ないと言う風に目の前の少女――ベアトリクスは笑っていた。

立国宣言（前書き）

今回からしばらく戦いが続きます。
相当ご都合主義な展開が続くかもしれませんが
どうか寛大な心でお許しください。

立国宣言

突如振って湧いた出来事に俺は何と答えればいいのだろう。

つい先程までは俺達が心血を注いで作り上げたのを見て万感の思いだった都市が、それが今にも崩れそうな砂上の楼閣になり果ててしまった。

「あらあら、大変ねぇ」

そんな危機を伝えた少女――ベアトリクスは何が楽しいのかまたクルクルと回り始めた。

「誰か、こいつを――」

捕えろ。と言う前にエルファが一歩前に進み出る。

「お待ち下さい、主」

エルファはベアトリクスを擁護するかの様に俺の前に立ち塞がった。

「何の真似だ、エルファ？」

場合によってはただで済まない。そんな気迫を込めて言い放ったが、エルファは瞳の揺らぎすら見えなかった。

「怒りにまかせてベアトリクス王女を捕えても何もなりません。それに」

そのエルファの相変わらずな冷静さに俺は少しだけ正気を取り戻した。

だから俺はエルファに先を促す。

「ベアトリクス王女は策略や姦計において右に出る者はおりません。ここは王女を参謀として迎え、この難局で試してみては如何でしょうか」

「……」

「それに主は重大な勘違いをなさっています。ベアトリクス王女は謀略に巻き込まれた被害者です、この騒動はどう見ても王女に何一つ利がありません」

「謀略や姦計において右に出る者はいないのに策略に引っ掛かったのか？」

「それは……」

「これから先は私が説明するわ」

エルファが言い淀むとベアトリクスは回転を止めて俺に向き直る。

「私も馬鹿だったわ、国内だけに目を向けていたからこの様になった。まさか隣国のリーザリオ帝国がこんな謀略を仕掛けてくるなんて思いもしなかったわ」

リーザリオ帝国とはシマール国の北にある国家で国土は同じくら

いだがそのほとんどが山脈のため痩せているのだがその分民は逞しく、兵も精強である。

飢えや逆境を経験している兵を侮ってはならない。彼らは引くことを知らない死兵へと容易になり易い。

「フォルター兄様が唆されたのよ。私を謀殺してその罪をカザクラ男爵に被せろって。間一髪エルファが気付いたおかげで何とか生き延びることが出来たわ」

つまりこの国を狙っていたリーザリオ帝国が謀略を仕掛け、あわや殺されそうになったので俺の所へ逃げのびてきたと。

話としては筋が通っている。

最近リーザリオ帝国が軍事演習で活発になってきたという報告が届いていたから真実味はあるだろう。

しかし。

「お前がリーザリオ帝国の間者という線も否定できないな」

すでに王女は死んだことになっており、目の前にいるのはただ頭のおかしい少女だからそんなぞんざいな口調で構わないだろう。

「あらあら、性格悪いわねえ」

お前には言われたくない。と、心の中でそう叫ぶ。

「けど、これぱかりは信じてもらうしかないわ。今の私に証明でき

るものは何もない」

まあ、そうだろう。

2人は相当慌てていたらしく、最低限の持ち物で逃避行を続けていたのか衣服の所々が薄汚れていた。

「イズルガルド」

俺には手が余るとし、確かな審議眼を持つ者の名前を呼んだ。

『何用かな、ユウキよ』

「少し困ったことになった、至急来てほしい」

『わかった』

短い言葉だがすぐに来るだろう、この時間帯はまだイズルガルドの活動範囲内だ。

「ねえ、いったいユウキは何をぶつぶつ言っているの？　もしかして頭がおかしくなった？」

……エルファがいなければ俺はこいつを百回殺していた自信がある。

隅の方でもベアトリクスを射殺そうとするアイラを必死に抑えるオーラの姿が確認できた。

俺達はイズルガルドが滞在できる中庭へと移動し、イズルガルドにベアトリクスを見てくれと頼みこむ。

「うーん、なんか嫌な感じね。心の奥底まで見透かされているようだわ」

ベアトリクスの感想は概ね合っている。テレパシーが使えるイズルガルドの前にはどんな嘘もつくことはできない。

『……ふむ、おそらくこの娘は嘘をついておらん』

「ほら、私の言ったとおりでしょ」

視線を外したイズルガルドはそう評するが、「ただ……」と続けた言葉が不吉だった。

『一個の人間がここまでの悪意と狂気を身に宿せるものだろうか。その闇は深く、ワシでさえ全てを見通せん。使い方次第ではユウキに大きな栄光を齎すであろうがもし誤れば大いなる厄災が降り懸るであろう』

「劇薬か……」

俺はベアトリクスをそう評する。

「ありがとう、イズルガルド。助かった、このお礼はいずれする」

『ワシの酔狂だから礼などいらん。それではユウキ、もう用はないようじゃからこれで失礼するぞ』

イズルガルドはそう述べると翼を広げて飛び立ち、元の場所へ帰って行った。

「イズルガルドがそう評するのなら問題はないだろう。ベアトリクス、お前を参謀に命ずる。だからしっかり働け」

「ご拝命承りました我が君。必ずやご期待に添えて見せましょう……アハハハハハハ！」

ベアトリクスは恭しい態度で頭を下げたと思いきや次の瞬間には大声で笑い始めた。

「……よくこれで権謀術数渦巻く王宮内で生き残れたな」

怒りを通り越して呆れてしまう俺がそこにいる。

するとエルファこうフォローした。

「ベアトリクス様は普段は淑女然ですが、気に入った相手だけこのような態度を取ります」

それを聞いた俺は喜んで良いのか悲しんで良いのか分からなくなってしまった。

「ああ、そうそう」

何を思い立ったのかベアトリクスがポンと手を打つ。

「ちょうどいい機会だわ。この際王国の設立を宣言しちゃいましょう」

そのあまりの言葉に全員が呆気に取られるが、構わずベアトリクスは話し始める。

「今のままでは私達は反乱軍だわ。しかし、それだと風評に悪いから何とかしましょう」

「あのなあ、それならお前が生きていたことを公表し、あちらの非を弾劾すればいいだけだろう」

俺は正論を言ったつもりなのだが、ベアトリクスは馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

「何言っているの、あちらは絶対に私の生存を認めないでしょうね。まあ、それでも良いけどこの場合だと王国の設立を宣言した方が民衆受けにいいわ」

どういうことかと、俺はエルファに聞いてみる。

「今の王国に民衆は失望し、大地は荒れ果てています。王族はすでに尊敬の対象でなくなり、逆に国を乱す憎悪の的となっているのが現状です」

エルファの答えに我が意を得たとばかりにベアトリクスが。

「そういうこと。ここは私の生存よりも我が君が新しく作った方が得なのよ」

「ふざけるな」

さすがに無理があると考えて反論し、そこで終わったのだが。

なぜか後日になると俺が立国宣言するという話題で都市中が持ちきりだった。

「へえ、それは良いじゃない」

意外にもキッカがその意見に賛同する。

「ユウキ様が王とならられることに私は反対することなどありません」

アイラまでそんなことを言う。

「……王様、すごい」

「まさかそんな日が来るなんてね」

ユキもクロスも乗り気だ。

「ああ、ボクがそんな遠いところまでいっちゃったか。お姉さん悲しいわ」

「師匠、私は何があっても師匠の弟子です」

「王様ですか。その時は貧困者を生み出さないでくださいね」

ティータさんやサラ、ヒュエテルさんも乗り気だ。

「いいんじゃない？　私は相応しいと思うわよ」

「そこに関しては姉さんと同意見です」

こんな時に限って姉妹が意見をそろえる。

「まあ、キッカお姉さまが認めたのなら」

「アイラと共に御身を守ります」

「ボクに反対する理由はないな」

「王の誕生か、いいものだ」

ククルス、オーラ、ミアーそしてレオナは口々に推薦する。

八方塞になった俺は藁をも縋る思いでエルファを見やるが。

「諦めてください、主」

案の定、藁がプッツリと切れた。

「どうしてこんなことに……俺は元々浮浪児だったのだぞ」

気が付けばいつの間にか俺は王様。

サルと呼ばれたどこぞの百姓もビックリの出世だ。

「やればいいんだろう、やれば」

俺は観念してそう呟いた。

「本当にあなたは優柔不断ねえ……アハハアハハハハ！」

この噂を広めた元凶の高笑いがいやに耳についた。

翌日――場所は役所前広場

ジグサールの中心場所だから大きくしないと駄目だろうということでここは結構な工事を行い、ジグサール内で最大の規模を誇っている広場だ。

その広場の前には多くの民衆が押し寄せている。

その目が不安げに揺れているのは、つい先ほど俺が第一王女を暗殺したとして反逆罪に問われている事実が広まったからだ。

だから昨日民衆に集まるよう表明したばかりなのに、今日の昼にはこの広場が満杯になり、近くの道まで溢れ返っている状況だ。

さて、やるか。一世一代の大芝居を。

俺は覚悟を決め、清水寺から飛び降りる覚悟でイズルガルドの背に乗った。

『鎮まれ、皆よ』

突然皆の頭にそんな声が響き渡り、大きな体躯を持つ竜が辺りを

旋回した。

「皆の者、私が王女殺害の反逆罪に問われたユウキ＝ジグサリアス＝カザクラだ！」

水を打ったかのような沈黙の中、俺の声が響き渡る。

「今、ここにいる者は不安なのだろう。本当に私が王女を殺したのか知りたいのだろう」

と、ここで俺は一区切りする。

さあ、もう後には引けないぞ。

「それは無実だ！　ベアトリクス王女はここにいる！」

俺の後ろから現れたのは嫋やかな雰囲気を持つ銀色の髪が印象的な少女。

そう、あのベアトリクス＝シマール＝インフィニティだった。

「皆もこれで分かっただろう！　いかに王宮の発表が欺瞞に満ちているのかを！」

ベアトリクスが姿を現したことで群衆に安堵が広がる。しかし、ここで安堵しては困るのだ。

「王女は生きている！　しかし、王宮はそれを偽物だという！　それは何故か？」

群衆が俺の問いについて周りと相談し始めたのでざわざわと騒ぎ出した。

「それは自分達が妬ましいからだ！　自分達が素晴らしい生活を送っているから！　それを壊したいのだ！」

何て酷い王宮だ。と、あちこちから呟きが漏れ始める。

「諸君！　今、この国はどうなっていると思う！　田畑は荒れ果て、貴族の専横が横行し、国は荒廃した。ゆえに、王女はその責を負うとして退官し、代わりに私が王になれと進言した！」

王という言葉に群衆がざわめき始める。それはそうだろう。

王というのは天上の存在だ。普通に暮らしている分だと絶対にお目にかかれないのだから。

「私は迷った！　この私に王など務まるのかと！　しかし！　私は思い当たった！　今、我々は豊かな生活をしているが、他の地方はどのような暮らしを送っているのか！　どのような苦汁を味わっているのか！」

この言葉には最近流れてきた難民が反応する。

彼らは相次ぐ重税で身動きが取れなくなり、断腸の思いで故郷を捨てた者なのだ。

「そのような中、国はいったい何をしていたのか！　我々の苦しみを知っているのか！」

俺はイズルガルドの背に乗って広場や近くの道を何度も旋回していた。

「いや、知りはしない！　奴らは我々の涙を啜っているのだ！。血を啜っているのだ！　そんなことが許されると思うのか！」

そうだ！　絶対に許せない！　とあちこちから上がり始める。

それはアイラが仕込んだサクラからだったのが、今回はそれが良い働きをしてくれる。群衆はすでに興奮状態に陥り、俺の言うことに疑いを抱いていなかった。

さあ、総仕上げだ。

「だからこそ私は王を名乗る！　腐りきったこの国を滅ぼし！　新たな国を作ることにする！」

俺はここで大きく息を吸い込み、一息に吐き出した。

「その国の名はジグサリアス王国！　諸悪の根源であるシマール国を打ち倒し、我々が笑顔で暮らせる国を作ることをここに誓おう！」

爆発したような歓声の中、俺はさらに言葉を重ねる。

「ゆえに、私の手足となって動いてくれる者達を紹介しよう！

風林火山の将帥よ！　呼ばれた者は前へ！

キッカ＝エメラルドグリーン＝カザクラ侯爵

疾きこと風の如く――竜騎士団『風』を率いる者とし、その補佐としてククルス＝トパーズイエロー＝フォンテジー伯爵を任命する。

疾風迅雷を体現する軍として敵に痛撃を与えよ！

アイラ＝サファイアブルー＝カザクラ侯爵

徐かなること林の如く――隠密集団『林』の総責任者とし、補佐としてオーラ＝アメジストパープル＝ユクエリス伯爵をつける。

無から来る恐怖を存分に敵に味わせることを期待する！

ユキ＝ルビーレッド＝カザクラ侯爵

侵掠すること火の如く――魔導騎士団『火』の団長となれ、補佐としてミア＝ガーネットオレンジ＝ヴァルレンシア伯爵を命ずる。

その圧倒的火力によって敵を殲滅せよ！

クロス＝ダイアモンドホワイト＝カザクラ侯爵

動かざること山の如く――ジグサール騎士団『山』の将軍に命じ、補佐としてレオナ＝ジルコンクリア＝カリスリン伯爵を任せる。

その不動の姿から敵を跳ね返せ！

そして、それらを統括する参謀にベアトリクス＝アレキサンドライトブラック＝インフィニティを命ずる。

風林火山を自在に動かし、我々に勝利を齎せ！」

彼らが呼ばれ、群衆に向かって礼をする度に広場から歓声が迸る。

俺は次に声を出すタイミングを見計らい、今だと思った瞬間に最後の宣言をした。

「私は誓おう！　必ずや民衆を圧政から解放すると！」

ジグサリアス！　ジグサリアス！　ジグサリアス！　ジグサリアス！　ジグサリアス！

ジグサリアス王国の建設を賛同する声音がいつまでも広場に響いていた。

立国宣言（後書き）

次は対王国騎士団です。

２０１１年１２月２日　ジグサリアス王国の設立の話を追加しました。

対貴族連合

俺は至急主要なメンバーを集めて会議を開き、その席でベアトリクスを参謀につけると発表すると、当然のごとく反対者が現れた。

反対しているのはキッカ、アイラ、ユキ、クロスやヒュエテルさん、ティータさんやサラ、ククルス、オーラなど市民出身の者で、賛成者は王宮に身を置いていたエルファ、フィーナ、レア、ミア、レオナなどだった。

「絶対に認められないわ！　そんなこと」

キッカがそう言って断固反対の態度を取り、周りもそれに同調する。

キッカ達からすればジグサールの危機を齎し、さらに不快な言動をするにも関わらず自分達の上につくということが我慢ならないのだろう。

「いいえ、あなた達はベアトリクス様の力量を知らないからそんなことを言えるのです」

するとエルファが反論する。

エルファ達は王宮に身を置いていたのでキッカ達よりベアトリクスと長く接していた経験がある。僅か１６歳の少女が老獪な国の重鎮を手玉に取っていた様子を知っていることから、絶対に敵に回したくないのだろう。

「あらあら、大変ねえ」

自分の処遇からここまでの大騒ぎになっているにも拘らず、どこ吹く風とばかりに自分の銀色の髪をくるくる巻いて遊んでいるベアトリクスは本当に大した奴だと思う。

「お前のせいでこうなっているんだぞ、少しは収束させようと思わないのか」

そのあまりに呑気な様子のベアトリクスにそう毒づいたのは仕方ないだろう。

「うーん、そうねえ。会議を長引かせて相手に時間を与えるのは馬鹿らしいからそろそろ終わりにしましょうか」

ベアトリクスは挙手をして注目を集め、これまでとは違った凛とした口調で話し始めた。

「つまりあなた達は私の実力が信じられないから私が上につくことを是としないのね」

「当たり前でしょ！　王女か何だか知らないけど勝手に現れたあんたに誰が従うものですか！」

キッカが立ち上がって激昂する。

「あらら、結構嫌われているわね。まあ、私は新参者だから仕方ないわ。しかし、私は老竜イズルガルドに認められ、我が君が参謀に命じたのよ。つまりキッカ隊長は我が君に逆らうとでも？」

「そ、それは……」

「ユウキ様を諫めるのが私達の役目なのよ、今はどう考えてもユウキ様は間違った決断を下そうとしているのだから逆らっていないわ」

言葉に詰まったキッカの代わりに副隊長のククルスがそう弁護した。

「へえ、そう来るのね」

ベアトリクスは何が面白いのかヒュウっと感嘆の声を上げる。

「まあ、そんな建前なんてどうでもいいわね。私は参謀なのだから私が提示した策で判断して頂戴」

そろそろ潮時だなと判断した俺は口を開き、現在の状況についてアイラに報告させる。

「……現在私達は王女殺害の大悪人とされ、王国騎士団がこちらへの進撃準備を進めています。そして、それに並行して各貴族が私兵を徴兵しました。その数はおよそ5万。その数がこちらへ向かっていますのでおそらく貴族の私兵の方が先に戦闘が始まるかと思われます」

アイラは多少不満げな様子だったがそんなことなど微塵も見せずにスラスラと文章を読み上げる。

「で、ベアトリクス。こちらは3万しかいないように見せかけているが、実は10万の戦力を持っている。だから彼らを殲滅できるが、それをするとリーザリア国が侵略してきた際に非常に困ることにな

る。こちらも相手も被害を最小限に抑えるにはどうすればいい？」

おそらく向こうは俺が３万しか持っていないと踏んだのだろう。

しかし、輪番制によって全兵のうち３分の２を単なる労働者として計上していたので実質上の戦力はその３倍にあたる１０万だ。

さて、この圧倒的優位の中でどんな采配を振るのか振るとベアトリクスは唇に手を当てて少し考え込んだ後に口を開く。

「そうね、彼らは数が多いけど所詮は寄せ集めの烏合の衆だわ。だからそこをつけば良いのよ」

「つまり頭さえ潰せば簡単だと？」

俺がそう聞くとベアトリクスは大声で笑い始める。

「アッハッハ、それは無意味よ。むしろ下策ね。彼らは指揮系統ができていない代わりに個別に動くことができるから頭を潰しても素直に降伏勧告には従わない。そりゃあ相手を徹底的に痛めつけるならそれでいいけど、今回はそれを是としないんでしょ？」

ベアトリクスの言うとおり相手の頭を潰して降伏を促すのが基本だが、彼らは寄せ集めであり各軍隊が別個の指揮系統を持っている。各個撃破するのならこれ以上の条件はないが、今の状態ではお勧めできない。

「それに貴族の中でも優秀な者は何人かいるのよ。もし乱戦の最中に彼らを殺してしまうのは非常に惜しいわ」

腐敗が進んでいる貴族だが、やはりその中でもまともな貴族はいるものだ。この後を考えると彼らは生きていてほしい。

「で？　どうする？」

「そうね。無能な貴族は粛清し、有能な貴族だけ生かす方針でいきましょうかしら」

「そんなことはできるのか？」

俺がそう尋ねるとベアトリクスは当然とばかりに。

「できるわ。３回の敗北とお金があればね」

女神のような美しい美貌を醜悪に歪ませてそんなことを吐いた。

「……まあ、今はそれを信じるか」

キッカはそれに異を唱えるが俺は応じない。

今はベアトリクスの立ち位置よりもこの事態を打破することが重要と考えたからだ。

「この戦が私の最期なのかもな……」

私――エレナ＝グランシリア＝イーズルブル子爵は今回のユウキ＝ジグサリアス＝カザクラ男爵の討伐に疑問符を抱いている。

彼は第一王女であるベアトリクス＝シマール＝インフィニティを殺害し、自らを王と称してジグサリアス王国の建国を宣言したとして反逆罪の疑いがかけられていた。

一山幾らの浮浪児が市民となり、はては貴族として幅を利かせているのは生粋の貴族である私から見ても面白くないものだが、それでも荒廃した領地を僅か2年で国を代表する都市へと発展させ、多数の兵と魔導騎士団、そして竜騎兵軍団を持つまでに至らしめた彼の手腕は決して侮れないものだと考えている。

まともにやりあえばこちらが大怪我をするので戦いたくないのだが、侯爵クラスの貴族に奨励をかけられては子爵である私は従うしかない。

どうすれば良いのか散々悩んだ末に私は信頼できる兵を選抜してこの貴族連合に加わった。

一応弁護のために言っておくが、少数の兵しか連れてこなかったのは私だけでない。他の何人かも私と同じ様な不安に駆られて兵をわざと少なめに持っていった。

で、その所業が多数の兵を持ち込んだ伯爵や侯爵クラスの貴族達の不評を買ったのだろう。私を含めた少数の兵しか連れてこなかった貴族は初戦の前線を任された。

「今夜は無礼講だ！　何をしても許す！」

そう言って祝宴を催し、最後の晩餐とばかりに大騒ぎした翌日。

私はここで果ててしまうとまで考え、意気込んだ戦いだったのだが、以外にもジグサール反乱軍は大して戦いもせず、早々に軍を引き上げていった。

私はこの機を逃さず追撃しようとしたのだが、後に残された糧食や軍資金を見て取り止めざるを得なかった。自分の領地の1年は無税でもいけるだけの量が残されていたので、隊長達がここで止めることを進言したからだ。

最初の取り決めにより、戦いによって得た戦果は各々が自由にしてよいと決まっていたので、これらは自分たちと同じ様に前線を任された者だけで分かち合った。

「これだけあればしばらく民を飢えさせずに済むな」

「ああ、俺の領地も子供を売る親が減る」

その成果に後方で控えていた貴族達は歯軋りしていただろうが、これくらいは許されるだろうと。前線に出ていた私達は笑いあった。

で、次の戦いも私達が先鋒になった。

あれはたまたまの偶然。次からはジグサール反乱軍が本腰を入れてくるという意見が満場一致だったからだ。

そして2回目の戦闘。

これも1回目の戦闘の繰り返しでジグサール反乱軍は早々に撤退していった。

違っていたことといえば残されていた糧食と軍資金の量ぐらいか。

前回は1年分だったが、今回は2年分あった。

私達が大した戦闘もせず、うまうまと成果を得たことが悔しかったのだろう。

今度は彼らが前線に出た。

3回目に何か起こると踏んでいたのだが、何事も起らずに戦闘は終了。彼らは3年分の糧食と軍資金を得た。

そして、次に誰を先鋒に据えるかは大揉めに揉めた。

この3回の戦闘で連勝し、旨味を知った私達が「自分が自分が」と自己主張したからだ。

ジグサール反乱軍など恐れるに足らず、所詮は成り上がりの者だ。

と、いうのがすっかり私達の常識になっている。

が、私はそれを冷めた目で見ていた。

産業都市ジグサールが生み出す利益は私が持つ領地からの収入など比べ物にならない。そして、もしジグサールが１０年分でもポンと出せるぐらいの財力があるのなら、私達はすっかり相手の策略に嵌っているといえる。

すでにこの連合の統制などあらず、各々がいかにして相手を出し抜こうかに注意を張り巡らし、ジグサール軍のことなどもはや考え

ていない。

しかし、彼らは知っているのだろうか。

ジグサール反乱軍はまだ竜騎兵軍団と魔導騎士団を出撃させていないことに……

そんな懸念を抱いた私は後方支援に回ることにした。

そして、それは私だけでない。

初戦と次戦で共に出た者の多くも私と同じ危機感を抱いて裏方を選んだ。

「……カザクラ男爵は恐ろしい方ですね」

そんなことを呟くのは私の部下であるキリング＝トリアエルだ。

彼女は頭が私より切れるので私の右腕として軍政に活躍してもらっている。

「どういうこと？」

聞き逃せない言葉を呟いたキリングを私は問い詰めると、彼女は前線の方に目を向けながら。

「おそらくカザクラ男爵はすでに戦の後を視野に入れています」

見て下さい、とばかりにキリングは両手を広げて。

「今、この連合は欲に負けた者と欲を制御できた者の2つに分かれています、前線には前者が集まり後方には後者が集合しています」

その言葉の従い私は周りを見渡す。

前線にいる貴族は民からの評判が悪く治安も低い。そして後方にいる貴族はその逆で名君とはいかないまでも優れた統治を敷いている者ばかりだ。

「そうです。玉石混合の貴族連合をカザクラ男爵は2つに分けました、私ならここで仕掛けま――」

「ま、魔導騎士団だ！」

キリングの言葉と同時に前線から絶望の悲鳴が上がり、幾つもの火柱が出現する。

魔導騎士団――魔法によって広範囲殲滅を主とする軍団であり、彼らを擁するのは一部の実力者にしか許されない。

打たれ弱いが、その攻撃力は比類なき力を持つ彼らが最も力を発揮できる瞬間は今回のように相手が密集している時だ。

事実、彼らが放つ魔法は大きく地面をえぐり、次々とこちらの味方を絶命させていく。

「な、何をしている！？　こちらも魔導騎士団で対抗すればいいだろう」

魔導師の攻撃を防ぐには特殊な加工を施した防壁か装備で身を固めるか同じ魔導師で対抗するしか手段はない。私は魔導師を持っていないが、侯爵や伯爵クラスの貴族なら擁しているだろう。

しかし、キリングはそれに首を振る。

「もう遅いですよ。魔導師というのは集団になると力を発揮します。最初の一撃で固まっていた魔導師を狙い撃ちにしましたから彼らに防げることはできませんし、何よりあちらは練度と装備が違います」

キリングの言葉通りだ。

彼らの魔導騎士団は宮廷魔導師など優秀な魔導師で構成されているだけでなく、あの世界最高峰の技術力を持つ産業都市ジグサールの装備だ。そこら辺の魔導師では敵うはずもない。

「しかし、このまま見捨てるわけにもいかん！　総員！　戦闘準備」

一刻も早く彼らを救援しなければならない。私はその思いに駆られて号令をかけるのだがキリングは諦めた様な声音で呟きました。

「もう遅いんですよ、すでに私達は詰まれています。ここまでの策を考えたカザクラ男爵が救援などを許すと思いますか？」

その言葉と同時に身も凍るような咆哮が辺りに響き渡り、私達の上に３０体を超える竜が上空を旋回し始めた。

「私はジグサリアス王国竜騎兵軍団『風』を率いるキッカ＝カザクラ！　素直に降伏するのなら身の安全を保障するわ！」

「……私達の負けです、ここは潔く投降しましょう」

キリングの言葉を聞いた私は地面に膝をついて慟哭するしかなかった。

ベアトリクスの智謀（前書き）

前置きが長くなりましたのでここらで一旦区切ります。
申し訳ありません。

ベアトリクスの智謀

――ジグサリアス王国謁見室。

最も奥にある王座に俺は腰掛け、右にキッカ達武官を左にベアトリクス達文官を並べている。

今行われているのは先の戦いで殺さずに捕えた貴族の処遇を本人の前で伝えることだった。

「エレナ＝グランシリア＝イーズルブル子爵だな」

俺が静かにそう問うと彼女は頭を下げ、片膝をついたままゆっくりと頷く。

エレナ子爵は無骨というか、一本気が通っている。１８０ｃｍを超える身長にボリュームのある赤毛。すっきりと通った目鼻とそして燃えるような瞳が印象的だった。

やはり何もできずに負けた悔しさなのかその態度が少しばかり固いし、全身から並々ならぬ殺気を放っている。

「……エレナ様、もう少し柔らかくなってください。ここで相手の不興を買ってもこちらが苦しくなるだけです」

隣のキリングがそう諭すとエレナ子爵は完全にはないにしろ幾分か殺気が和らぐ。

エレナ子爵を諫めたのは片眼鏡をかけている女性で、ちょっと仕

草から知性が見え隠れしていた。そして、特徴的なのが黒光りする美しい髪である。

「何も申し開きはない、反逆者――ユウキ＝ジグサリアス＝カザクラ男爵。私は貴殿を反逆罪として捕えに参った、それだけだ」

「エレナ様！」

その強気な口調に隣のキリングが血相を変える。

そしてキリングは何とか誤解を解こうと口上を述べ始めたが、俺はそれを制した。

「噂に違わない御仁だな。まあ、その発言は許そう。さて、本日ここに呼んだのは何でもない。私はエレナ子爵にこれまでの働きを奨励して領地を送ろうと考えているのだ」

「え？」

俺の言葉がよほど意外だったのか顔を上げて呆然とするエレナ子爵だが、構わず先に進める。

「体面もあるので名目上は直轄地となるがな。エレナ子爵が持っていた所領の特性上暖かい所は苦手だろう。エレナ子爵の隣り合わせであるヴァルザック公爵とベナンス侯爵を合わせた領地はどうかな？」

「あ、あの……」

「まあ、エレナ子爵は必然的に元シマール国の3分の1の領土を統

治することになるわけだ。しかし、領地に移住する時期についてだが今は少し荒れていてな、こちらの準備が終わるまで我慢してほしい」

「ま、待って下さい」

「ん？　何か問題でも？」

「大ありです。そもそも私はあなたを討伐しようと兵を挙げた者です。罰を与えるこそすれ何故褒美を与えようとするのですか？」

エレナ子爵は何故自分が領地を与えられるのか分かっていないようだ。

やれやれ、有能な人間と言うのは得てして己の行いがどう映っているのか客観的に見ようとしないんだなあ。

エレナ子爵が統治していた領地に住む者は、生活こそ貧しいが皆が笑顔だ。

それにエレナ子爵自身も質素倹約を行って余計な散財をせず、飢饉などの際には民に手を差し伸べるなど善政を行っているんだよな。

「エレナ子爵はよほど謙虚な人物と見受けられる。そして、だからこそ私はお前にもっと多くの領地を統治し、民を守ってほしいのだ」

「し、しかし。私には分不相応です、謹んでおこと――」

エレナ子爵は断ろうとしたが、隣のキリングが黙っていろとばかりに彼女の脇腹を突いたので彼女は疼くまざるを得なくなる。

「申し訳ありません。エレナ様は突然の事態に混乱していますので代わりに私がお伺いします」

ツラツラと立石に水のように饒舌に話すのだが、どこか知性の感じさせる雰囲気があるキリングが口を開いた。

「カザクラ男爵――いえ、王がエレナ様を殺さなかったのは善政を敷いているが故ですか？」

「その通りだ。少なくともエレナ子爵の領地から民の怨嗟の声は聞かない」

「次にお聞きしますが、エレナ様に領地を奉じるのは欲をかかなかったからですか？」

「そうだな、私が仕掛けた人の欲を刺激する罠を見事に見破った。これだけでもエレナ子爵は己を律することが出来る貴族だと判断した」

「最後にお聞きします。エレナ様に最大の領土を与えるのは何故ですか？」

「それはお前を始めとした有能な家臣を多く召抱えているからだ。人は万能でない、間違うこともある。だが、重要なことは間違うことでなく、間違いを認めて正すことだ。そして、その間違いを諫める家臣が多いエレナ子爵に最大の領土を与えるわけだ」

俺は前もって用意してあった内容を述べるだけだったのだが、目の前にいる2人には効果が抜群だったようだ。あの切れ者そうなキ

リングさえ眼鏡がずれかかっている。

「……申し訳ありません、もう一つ質問をお伺いしてもよろしいでしょうか」

「構わない、述べてみよ」

「それで……そこまでする見返りは何でございましょうか。あなたのために兵や軍事物資を支援することでありましょうか」

そんなことを大真面目に述べたので俺は高笑いをしてしまった。

2人が身構えたので俺は手を振って侮辱したわけでないとアピールする。

「済まない。決してお前達を侮辱したわけでないのだ。ただ、おかしくてな」

と、そこまで言って俺はコホンと一つ咳払い。

「それに対する答えだが、エレナ子爵からは何も支援してもらう必要はない。しかし、誤解するな。それは役立たずと言っているわけでなく、エレナ子爵が私に味方して私が敗北した場合、王国はお前という貴重な人材を失ってしまうからだ」

実際は負ける要素など微塵にもないけどな。と、心の中で付け足す。

「エレナ子爵の働きは誰よりも私が見ている。そして、お前が己の領地で奮闘している様子からエレナ子爵こそがジグサリアス王国最

大の領土を持つに相応しい」

「「……」」

そこまで言い切ると2人は押し黙って沈黙してしまった。

いくら経っても何も言いださなかったので俺から口を開く。

「さて、エレナ子爵は王国から疑われない内に領地へ戻ってほしい。そして、できるなら臣を纏めてすぐに移動できるような環境を整えてくれると嬉しい」

俺は2人に退出を命じる。

「どうした？　もう終わりだぞ」

と、俺がそこまで言った途端片膝をついていたエレナ子爵が両膝をつき、そしてついには額を床に擦り付けた。

「エレナ様！？」

キリングは突然の事態に驚く。

2、3秒ぐらいそうしていたエレナ子爵がパッと顔をあげる。その顔は感謝と尊敬の意があることをありありと伝えていた。

「王よ、これまでの無礼をお許し下さい。王がそこまで私に期待しているのならこのエレナ＝グランシリア＝イーズルブルは己の身命をとして忠誠を誓います」

ハッキリと、迷いなくエレナ子爵はそう言い切った。

「これで良かったのか？」

エレナ子爵が退室した後、俺は隣のベアトリクスに聞く。

「良いのよ。彼女は指揮官としても領主としても優秀だけどその子孫までが優秀とは限らない。だからエレナ子爵は派遣貴族として北を統治してもらうわ。それに、これからあそこは荒れるだろうから彼女の力が必要だろうしね」

「何か騙した様で気が引けるな」

北方に位置するリーザリオ国は近い将来に侵略してくるのは火を見るより明らか。

そしてその際に戦場となるのはヴァルザック公爵とベナンス侯爵の領地になると俺達は踏んでいた。

だからその2つの領土に住む民を移住させている途中であり、さらにアイラ直属の部隊にある仕掛けを行わせている。

「……何というかお前はもう悪魔だな」

そのあまりに凄惨な仕掛けの内容に俺はそう零したのを覚えていた。

「結局、捕えた貴族２０人が全員俺に忠誠を誓ったな」

謁見も終わり、一息をついた俺はそんなことを呟く。

「領地を与えるといってもそれは直轄地だから一代限りであり、領地を国に返さなければならないと明言しても彼らは渋面すら浮かべなかったな」

贅沢かもしれないが、もう少し国のために死を選ぶ者が多いと考えていた俺である。

「アハハハハハハ、何を言っているの？　紐付きでも領地を与えられるわけなので、逆らうより従ったほうが得よ。そして何より有能な者がこんな国と殉じるわけないじゃない」

こんな国の元王女だったベアトリクスがそう俺を馬鹿にする。

「中にはいるだろう、容易く主君を変えられない不器用な貴族とか」

「そんな貴族は無能以下、ただの部品よ。まあ、その人が騎士だったら有能と言えるけど、少なくとも貴族においてそんな不器用だったらあっという間に食われるわ」

どうやら複雑怪奇な政治を領分とする貴族においては応用が利かない人間だと駄目らしい。

「しかし、何度も言うが本当に俺が王を名乗って良かったのか？これが謀略ならお前が王女と宣言すれば良いと思うが」

信じられないかもしれないが今の俺は王と名乗っている。

掲げた標榜は『貧困に喘ぐ民を救うべく私が王となり、新しい国を建設する』というもの。

それに関してベアトリクスは。

「ジグサリアス王国の戦力を確認したけどこれなら大義名分など必要ないわ。むしろこれだけ差があるのなら全てを破壊して一から作り上げた方が後々効率が良いのよ」

とのこと。

しかも不可解なことに自分や近隣の民からの反発もなく、むしろ好意的に受け止められている。

「良くやってくれた」とか「最後までついていきます」との評判から如何にこの国の民が愛想を尽かしているのかよくわかる。

ところ変わって会議室。

議題の内容は次に来るであろうシマール国最強と呼び声が高い王国騎士団3万についての対策だ。

「さて、ベアトリクス。何か策はあるか？」

俺がそう振っても他の者は不満げな様子を見せない。

やはり先日の貴族連合による大勝が皆の心境を変化させていた。

と、言ってもそれは表面上だけで中身は全然納得していないのが見て取れるのだが。

まあ、必要とはいえ3回も負けさせられたらそう思っても仕方ないよな。

「そうねえ……」

ベアトリクスはまたも己の銀髪を弄りながら考え込んでいる。

周りはベアトリクスがどんな意見を出すのか注視していたが、俺はクロスの様子が変だということに気付く。

提案があるが、それを出していいのか。

そんな葛藤と戦っているのが目に見える。

「クロス、何か意見はあるのか？」

だから俺はクロスにそう聞いてみるとクロスは一瞬ハッとなり、そして表情を引き締める。

「はい、自分はこの王国騎士団と正面決戦を望みます」

その言葉を受けた者の反応は2つに分かれた。

武官組を中心に「それは面白い」と頷き、逆に文官組は「それは非常識だ」と渋面顔。

クロスは続ける。

「我々の強さは控えめに見ましても王国騎士団より上回っています。ならば彼らと同じ3万で正面決戦を行って勝利し、『山』の強さを国の内外に知らしめては如何でしょうか」

「論外ね」

クロスの提案にベアトリクスが一言で切って捨てる。

「よく考えなさい。今、この国は隣国リーザリオ帝国が虎視眈々と狙っているのに、何故精鋭ともいえる王国騎士団と正面から戦うの？　相手が喜ぶだけだわ」

「あんたはクロスの苦悩を知らないからそんなことが言えるのよ！」

当然、キッカが反論する。

「確かに先の戦では勝利を得たわ！　しかし、その代償としてクロスは軟弱な指揮官として周りから蔑まれている！　あんたに分かる？　格下の相手に馬鹿にされる辛さが！」

クロス率いる騎士団は自分たちのことを王国最強と自負し、それは下にも共通していたからこそ不満なのだろう。事実、最近兵が不祥事を起こすことが増えている。

他を武官の様子を見ても程度の高低はあろうともキッカと同じ感情を抱いているようだ。いや、唯一レオナだけが何とも言えない表情をしているな。

「ふむ……」

仮に3万を失ってしまったといってもまだ7万の兵を持つ。それだけあれば再戦も可能だし、何より今後のためにここでキッカ達のガス抜きを行ってもいいかなと思う。

「まあ、良いだろう」

「ほんとっ！？」

その決定にキッカが目を輝かせ、他の武官も似たり寄ったりの表情を作る。

「ベアトリクスもその方向で進めることにする、だから納得しろ」

「我が君が仰るのならその通りに」

俺は反対すると思っていたのだが、意外にもベアトリクスはアッサリと従った。

「意外だな」

会議も終わり、キッカ達は勇んで軍の準備のために足早へと退出し、文官も己の業務を果たすとしてこの場にはいない。つまりこの場には俺とベアトリクスの2人だけだ。

「よく俺の意見に賛成したな。お前のことだからもう少し粘ると考

えていたのだが」

「アハハ、あの時はそうした方が良かったのよ。ここら辺で我が君の株を上げておくべきだと考えてね」

「なるほどね」

俺は得心する。

ベアトリクスがあの場で引き下がってくれたからこそ、その後の会議は刺々しい雰囲気もなくなって議題を進めることができた。

「しかし、正面決戦でよかったのか？　勝てるには勝てるが。彼らの力量は侮れないし、何よりリーザリア国との戦いを考えれば降伏を促した方がいいんじゃなかったのか」

「あらあら、ただの騎士ならともかくエリートである王国騎士相手にそれは無理よ。彼らは貴族と違って全員石頭だわ、多分ほとんどの者が従わないから、それなら殲滅させて内外部に対する宣伝と自軍の士気向上のために利用した方が得よ」

あの後に決まったことは『山』の強さを見せつけるために『風』や『火』は別命あるまで待機。あくまで騎士団のみでの決戦に決まった。

こちらは騎士団しかいないのに向こうが竜騎兵軍団や魔導騎士団を持ち出してきたらどうするのか懸念したのだが、ベアトリクスがそれを否定する。

「『先の戦の評価はジグサール騎士団は弱いが、竜騎兵軍団と魔導

騎士団があったからジグサリアス王国が勝った』というのが大勢を占めているわ。そしてこちらは王国騎士団との戦いで竜騎兵軍団と魔道騎士団を使わないと宣言しているのだから、プライドの高いキルマーク兄様が使うわけがないじゃない」

まあ、それ以上に。

と、ベアトリクスは続ける。

「自称、王国最強の騎士団が貴族連合に3回も負けた相手に竜と魔導師なんて投入したら後世の笑い者になるから誰であっても使えなかったでしょうね」

アハハハハハハハハハハハハハハ！

そう言ってベアトリクスはクルクルと回りながら笑い始めた。

ベアトリクスの智謀（後書き）

２０１１／１２／８改訂しました。

対王国騎士団　前編（前書き）

長くなりましたのでここで一旦区切ります。

対王国騎士団　前編

「サラ、いるか？」

クロス率いるジグサール騎士団が出発する前夜。

俺はサラの住んでいる屋敷を訪れていた。

サラは技術関連において無くてはならない存在なので常に警備兵が常駐している。

「あ？　師匠！　どうしたのですか？」

サラは俺の呼び出しから1分も経たずに現れた。

おそらく暇をしていたらしい。

「明日のことについては知っているな」

「はい、クロスさん率いる騎士団が王国最強の騎士団と戦うのでしょう？　もう私も興奮していますよ」

その言葉の通りサラは元気一杯で、今にでも飛び跳ねそうな雰囲気だった。

「なら、サラ。明日の戦場は俺と一緒に行くか？」

俺はサラを戦場に誘うことにする。

「え？　どうしたのですか？」

サラが疑問符を浮かべるがそれは仕方のないことだろう。

サラの様な技術者が戦場に出ることなどありはしないから。

「まあ、特例だ。俺はサラが開発し、制作した武器防具がどのように使われているのかを知ってほしいんだ」

サラは知らなければならない。

無邪気に作っている武器がどのような結果を生んでいるのかを知るのに今回は絶好の機会だと俺は考えている。

納得するならよし。

納得しないのであれば……

俺の内心の葛藤も知らず、サラは元気に「喜んで」と返事した。

明朝

俺はイズルガルドに乗り、そしてサラとベアトリクスも共に乗せていた。

「参謀たる者、戦況の把握はしておかないとね」

とか言って無理矢理俺の前に座ったのは記憶に新しい。

ちなみにサラは俺の後である。

「イズルガルド、悪いな」

突然増えたので俺は謝るのだがイズルガルドからは『気にするな』と返ってきた。

そして戦場へ。

この場所はイラキア平原と呼ばれ、周り一面の草原で遮るものは何もない平地だった。

守るのはともかく軍を展開するのにここ以上の適した場所が無いというのが俺達の見解である。

「さて、ベアトリクス。この状況をどう見る？　こっちは3万と聞いていたが実際は倍の6万はいるぞ」

あの軍の展開量と陣の厚さから俺はそう評する。どうやらキルマーク騎士団長は予備兵力も投入してきたらしい。それに数体の竜騎兵と魔導騎士団も見えることからどうやらそれらも投入することは明白だ。

「……迂闊だったわね、私を追い落とした黒幕の存在を忘れていたわ」

どうやらベアトリクスは思い通りいかないと爪を噛む癖があるら

しい。

悔しそうな顔で親指を噛んでいる。

「本当の敵は北のリーザリア帝国、そこまで考えなかった私のミスだわ。我が君、ここは一度撤退しましょう。さすがのジグサール騎士団でも倍の数である王国騎士団に加え、竜騎兵や魔導騎士団を相手にするのはむ――」

「必要ない」

ベアトリクスは撤退を進言しそうだったが俺はそれを途中で遮る。

「予定通り、このまま進軍させる」

「え？　え？　我が君、どういうつもり？　まさかクロスを見殺しにするつもりではないでしょうね？」

始めて見せたベアトリクスの狼狽具合に俺はほくそ笑みながら「それもない」と答える。

「はあい、ユウキ」

どうやらキッカが近くに寄って来ていたらしい、俺にそう手を振ってあいさつをする。

「見る限り竜騎兵や魔導騎士団を相手は投入しているようね。どうする？　命令さえあれば私達も戦場に出るけど」

「いや、別に要らないだろう。おそらくジグサール騎士団だけで十

分だと思うが、クロスが必要だと要請したら戦列に加わってくれ」

そう言うとキッカは苦笑して。

「さっきほとんど同じことをクロスに言われたわ。ユウキが必要だと言うのなら加わってくれって」

「そうか、それなら必要ないな」

「ええ、その通りね」

俺の頷きにキッカが反応する。

そんなツーカーな返事に唯一ベアトリクスが反論した。

「さっきから聞いていたけど、あなた達はクロスを買いかぶり過ぎよ。さすがのジグサール騎士団でも竜騎兵や魔導騎士団相手を含め、さらに倍いる相手に正面からぶつかるなんて酔狂以外の何物でもないわ」

「へえ、あなたでも驚くことってあるのね。少し気分がスッとしたわ」

「何を呑気な事を!?」

ベアトリクスの慌てふためき具合に対してキッカはマイペースに返す。

そして続けて。

「出会った時はいけ好かない奴だと思っていたけど、あなたもそんな人間らしい一面があるのね。見直したわ。私はキッカ＝カザクラ、これからよろしくね」

どうやらキッカは取り乱すベアトリクスに親近感が湧いたらしい。会議で見せる険悪感など遠くの隅へ追いやり、逆に笑顔を見せて手を差し出す。

ベアトリクスはどう反応すればいいのか迷っているのだろう。表情を目まぐるしく変化させながらキッカの手を凝視していた。

「もう良いだろう、あまりベアトリクスを苛めるな」

これ以上続けるとベアトリクスが崩壊しそうな気がしたので俺は止める。

「あら、残念」

結果的にキッカは握手を出来なかったのだが、全然堪えた様子もなくテへっと舌を出す。

「それじゃあ私はもう行くわ。後はよろしく」

キッカはそう言い残して竜を旋回させてこの場を去っていった。

「……ありがとう」

「ん？　何か言ったか？」

後ろから何か聞こえたのだが小さくて聞き取れない。

「何でもないわよ！」

するとベアトリクスは怒った調子で言い返してきた。

「……まあ良いか」

理不尽な気持ちに駆られるも、追及すれば悲惨な目に会いそうだったのでここで止める。

「そういえばサラはどうした？」

この間中ずっとサラが黙っていたので俺は多少不安になったが。

「眠っているんじゃないの？」

ベアトリクスの指摘通り、後ろから微かな寝息が聞こえる。

確かサラは昨日興奮して眠れなかったらしい。

だから竜の背中に乗って揺られている内に眠ってしまったのだろう。

「サラ、そろそろ起きろ。戦闘が始まるぞ」

気持ち良さそうに寝ているのならばそのまま寝かせてあげたいが、ここは心を鬼にしてサラを起こした。

「緊張しているのか、クロス将軍？」

軍を展開し終えた僕は本陣の前で瞑想していると気遣う様な声が聞こえた。

「教か――いやレオナか。いいや、武者震いだよ」

だから僕は笑いながら大丈夫だと答える。

本当は全然大丈夫じゃなかったけど、ここはレオナ教官以外もいるため不安な様子を見せられない。

「その心がけは立派だ。何せ大将の信念が軍全体の行方を左右してしまうのだからな。空元気でも良いから取り繕わなくてはならない」

厳しいが優しく教えるレオナ教官は変わらないなあと思う。

「将軍！　報告します。魔導騎士団団長のユキ＝カザクラがお見えになっていますがどうしましょうか」

すると連絡将校の１人が陣幕に入り込んでそう報告した。

「本当にクロスは愛されているな」

僕にしか聞こえない声でしみじみと呟くレオナ教官。

そういえばさっきもキッカが激励しに来ていたよね。

来るよう許可を出すと、すぐにユキが入ってくる。

小柄な体なのは相変わらずだけど、その内側には大陸屈指の魔力を秘めているんだね、これが。

「……大丈夫？」

開口一番そう言うユキ。

「……相手は魔道騎士団を出しているから、せめてそれだけでもこちらで引き受けようか？」

抑揚のない声で簡潔に述べるのだが、その瞳には心配の色がありありと浮かんでいる。

それを見て僕は苦笑しながら。

「大丈夫だよ、それはこの状況は意外だったけどまだ想定内。僕の率いるジグサール騎士団だけで十分だよ」

しっかりと一音一音発音してそう言い含めるとユキは少しだけ目を伏せて「……分かった」とだけ呟いた。

そして踵を返したユキは最後にこう言い残して去って行く。

「……アイラから伝言『敵の数を見誤りました、申し訳ありません』だって」

アイラが気にする必要はないのに。

この状況は誰も想定できなかったのだから仕方ないよ。

アイラの昔から変わらない変な律儀さに僕は苦笑をますます深めた。

さて、戦いの前の前哨戦を始めるか。

僕は立ち上がり、そして愛用の剣を探す。

「……これを」

レオナ教官は前もって準備していたらしい、僕の前に跪いて『獅子の剣』を差し出す。

そして僕はその剣を携え、刀身を一気に引き抜く。

すると体の奥底から燃え上がる様な高揚感と破壊衝動が湧き上がってきた。

いつもながら慣れないなと思う。

ユウキが贈ったブラッディーXの副作用によって僕は力を得る代わりに別の人格が芽生えてしまった。

それはとてもつもない戦好きで僕とは正反対の性格なんだけど、戦いにおいてはこれほど適した性格はないというのが僕の考えだっ

た。

昔はともかく、今はコントロールが出来るから全然問題はないけどね。

そんなことを考えている内に、湧き上がる衝動が僕の全てを塗り潰していった。

「……レオナ、行ってくる」

そう言い残した俺は振り返らず、憎きキルマークとの舌戦に向かった。

「大罪人！　ユウキ＝ジグサリアス＝カザクラ率いる逆賊どもよ！　貴様らに救いなどない！　命が惜しくばすぐに去れ！」

短く髪を切り、大柄でがっしりとした体躯の男が剣をこちらに突き付けながらそんなことをぬかす。

やれやれ、もう少し気の利いた言葉を言えねえのかと呆れてしまうな。

「何を笑っている！　何度も言うが我が王国騎士団の前には貴様らなど塵芥に等しい！　思いあがった貴様らに正義の鉄槌を加えてやる！」

どうやら俺は笑っていたらしい。いやあ、あまりにお粗末だからついついな。

しかし、このまま一方的なのは全軍の士気に関わるから頂けねえ。

ここらで反論させてもらうか。

「正義だと！　それは笑止千万！　貴様らは我々に何をした！　無数の同胞を餓え悲しませた貴様らこそ悪！　そして、天誅を下す我々こそ正義だ！」

「何を寝言を！　貴様らの主は私の妹を謀殺した！　その嘆き！　悲しみが貴様に理解できるか！」

妹を殺したのはお前らだろう。よくもまあいけしゃあしゃあとそんなことを言えるものかと感心したぜ。

「ならば我々も同じだ！　貴様らの悪逆非道な行いでどれだけの同胞が絶望の淵で亡くなって行ったと思う！　その何十万の悲しみこそ理解できるのか！」

「貴様ら下賤な者と私の妹が釣り合うと思っているのか！」

「釣り合わん！　あんな下賤な奴一匹じゃ我が崇高な同胞の鎮魂になりはしない！」

「そうか！　そこまで侮辱するならその罪！　身を持って味わうが良い！」

「我が同胞の弔いのため！　貴様の血も添えさせてもらうぞ！」

そうして舌戦は終わった。

まあ、正直な感想としては引き分けだな。

やはり言葉は苦手だ。

「お疲れ様だ、クロス」

陣幕に戻るとレオナが手拭いを用意していたので俺はそれを手に取りって汗をぬぐう。

「レオナ。お前、本気で戦えるか？」

相手はレオナの古巣である王国騎士団だ。

情に負けるようだと困るからあえて聞いてみる。

するとレオナは一瞬悲しそうな表情を作ったがすぐに引き締めて。

「今の私はジグサール騎士団副将軍レオナ＝カリスリンだ」

「……そうか」

その迷いなき信念を聞いて俺は安心すした。

そして手拭いを近くの世話係に投げ捨てて俺は立ち上がって宣言する。

「始めるぞ！　俺達の恐ろしさを奴らに見せてやれ！」

おおおおおおおおおおおお！

俺の掛け声に全将兵が咆哮したな。

戦いの皮切りというのはまず魔導騎士団による魔法の打ち合いから幕を開ける。

ゆえに、戦いの序盤は如何にして魔導騎士団を守れるかによって決まると言えるだろう、が。

「ほら、やはりこちらは魔道騎士団を有していない分一方的に撃たれているわ」

ベアトリクスの言う通りクロス率いるジグサール騎士団には魔道騎士団がいないので遠距離攻撃が出来ず、結果的にこちらから攻め入るしかなくなる。

「そんなに気にする必要はないだろう。ほら、魔法による攻撃は魔防効果のあるミスリルの楯で防いでいる」

向こうから魔法が飛んで来るものの、こちらの被害はほとんどない。

それは彼らに持たせているミスリルの楯が大きな効果を発揮して

いるからだった。

「あれはサラが作った楯を量産した物だ。ミスリルが最も効果を発揮できるようミスリルの量や熱具合を計算されて作られたあの楯はこれぐらいじゃビクともしないだろうな」

「凄いです！　魔導騎士団の攻撃が全然効いていません」

サラは自分の作った防具が役に立って嬉しいようだ。

クロスは敵に接近するよりもまず魔導騎士団を何とかする必要があると考えたらしく、その場から動かずに弓矢部隊を前線に出す。

彼らの持っている弓矢は通常のと違い、少ない力で遠くまで飛ばせるよう設計された代物だった。

向こうは飛んでくるはずがないとたかを括っていたがそれが仇となり、守られていなかった魔導騎士団が次々と矢の餌食になってしまい、慌てて魔導騎士団を下げさせたのだが、すでにその数は半分以下にまで減っていた。

「とりあえず魔導騎士団は無力化させたな」

あれだけやられれば組織的な魔法は使えないと判断する。

「魔導騎士団は無力化させたわ。けど、それは局地的勝利にすぎない。向こうはまだあんなに厚い陣を持っているのよ」

ベアトリクスの言葉通り、向こうはこちらの倍を抱えている。

その彼らが槍を構えて突撃しようとしているのだから、参謀からすれば心もとないのだろう。

しかし、俺はそれを一笑に付する。

何故ならクロスも前線に突撃兵を送り込んで突進を開始した。

「あの槍は」

まあ、サラにとってもあの槍に見覚えがあるだろう。

何せあの槍は通常のと比べて何と約3倍の長さを誇る。

それらを一列に構えているのは壮観だった。

普通ならそんな槍など重くて持てないし、それ以前に作る前に折れてしまうのだが槍の中を空洞化させさらに金属配合を調整して強度を維持し、さらに槍を腰に装着させることによって持ち運びを可能としていた。

そのあまりのリーチの差に向こうはなす術無く打ち取られていく。

キルマーク騎士団長は不利と悟ったのだろう。

突撃兵を引っ込め、前線に大楯部隊を配置する。

「どうするの？　あれを破るのは容易じゃないわよ」

王国騎士団の陣の幅はこちらの倍はあり、特に最前列から2、3段目まで大楯を構えいるので容易に打ち崩せないだろう。

しかし、俺はその懸念に首を振って。

「まあ、見ておけ。こちらの騎馬隊が出るぞ」

クロスの方から騎馬に跨った騎士が大楯部隊に守られながら王国騎士団へと接近する。

「どうしてあんなにバラバラなの？　普通は密集させて使うものでしょう」

ベアトリクスの指摘通り、騎馬隊の真の実力はその突破力にある。

そして、それを十分に生かすためには密集させるのが合理的なのだが、こちら側は百人単位で集合させた騎馬隊を各地に散布し、さらに彼らは方円陣を構えていた。

「さて、出来るかな」

序盤において最難関ともいえるこの局面をどう乗り切るのか俺も固唾を飲む。

騎馬隊がもう少しで敵と接する時、一際大きな銅鑼の音が鳴り、それを合図にして、１００程度の騎馬隊の軍勢が動きを変える。

方円の陣形を組んだまま左周りまたは右周りと騎馬隊は陣形の円を回転し始めた。

それは戦場にいくつも出来た小型の台風。

こうして、高みから見下ろしている俺達は一目瞭然だが、向こうは何が起こったかが全く解らないだろう。

正面に居たはずの敵が、いつの間にか側面に居り、一瞬にして消えた様な錯覚に陥っているに違いない。

しかも、まるで途切れる事のない騎馬隊の側面攻撃を受け、兵士達は恐慌状態となっているはずだ。

「これは……」

ベアトリクスも始めて見る新戦法に目を丸くしている。

参考は戦国武将――上杉謙信が用いた車掛かりの陣。

風車の如く騎馬隊を回らせることによって敵に間断なく攻撃を仕掛けられるという利点がある。

ただ、この戦法は上杉謙信しか使えなかったという逸話の通り、習得するのに相当な技量が必要となる。

だからこそ俺はジグサールへ赴任した当初から2年間、この陣形を使える部隊を編成して、叩き込んでいた。

まあ、人間相手に使うことは予定外だったがその効果は実証された。

王国騎士団の陣列はズタズタに引き裂かれ、あちこちで逃げ惑う兵士が確認できる。

「……これは戦い方の歴史が変わるわね」

ベアトリクスの呟きを聞きながら俺は考える。

序盤は完勝。

魔道騎士団を無力化させ、敵の大楯部隊を打ち破って陣に食い込んだ。

「はてさて、次はどうなることやら」

戦いは中盤へと移り始めていた。

対王国騎士団　前編（後書き）

ベアトリクスはドSですから受けに回ると弱くなります。

対王国騎士団　後編

「左翼に伝えよ！　戦線を拡大せよと！」

隣のレオナが矢継ぎ早に各部隊に指示を出している。

俺が率いるジグサール騎士団はユウキの装備と長年かけて仕込んだ奇妙な陣によってエリートの王国騎士団に痛撃を与えて前線に張り付くことができたぜ。

「しかし、なんとまあ圧巻だな」

ここからは遠目にしか見えないが敵の王国騎士団の前線は混乱し、指揮系統が引き裂かれたせいか何の抵抗もなく俺達に打ち取られている。

「このまま勝負がつけば嬉しいのだがな」

レオナがそんなことを呟くが、俺はそう甘くないと見ている。

「レオナよ、希望的観測は述べるべきじゃないぜ」

兵士ならともかく、指揮官が希望にすがるといざという時に正しい選択が取れなくなっちまう。そうなると勝てる戦も勝てねえから甘い予測は禁物だ。

「ハハハ。冗談だ、それくらい分別がついている」

「変な冗談は止めろ」

俺がそう言い放つとレオナは首をすくめて。

「やれやれ、本当に今のクロスは容赦がないな。これがヘタレのクロスなら苦笑して終わりなんだが」

「今の俺はあまり冗談が好きじゃないんだぜ」

レオナはあまり堪えた様子がないのだが、これ以上話しても無駄だと悟ってそう言って無理矢理打ち切った。

「しかし、王が作った装備は凄まじいな」

またレオナがそんなことを呟くのだが、俺はそれに同意なので何も言わない。

通常、戦というのは数が最重要で次に装備、そして最後に士気がくる。そして、誤解されやすいようだが指揮や練度というのはそれら3つを如何に効率よく運用するためにあるのであり、勝利の因として重要な要素だが、絶対でない。

極論を言うと10人の農民に槍を持たして突撃させた方が2、3人の兵士による攻撃よりも効率が良い。

つまるところ数がモノを言うのだが。

「寡兵が大軍を圧倒している景色は壮観だぜ」

向こうが6万でこちらは3万しかいないのに、状況は終始優勢だ。

まあ、さすがにこれだけの数になると全兵をぶつけるわけにもいかないから、部隊の運用が重要になってくるのだが、それを差し引いても数というのは重要だ。

しかし、現在はこちらが勝っている。

もちろん指揮や練度によるのもあるのだが、一番の要因は装備だろうな。

「見ろよ、あっちの攻撃が全然通用していねえ」

視線の先には鉄仮面や鎧、鋼の脛当てで固めた重装歩兵が縦横無尽に動いている。

本来ならああいう兵種は相手の陣地を突破するための使い捨てとして突撃させるのだが、こちらはその常識を覆して軽装歩兵とはいかないまでも機敏な動きを維持していた。

しかも恐ろしいことにあれが特殊なのでなく、普通の一般装備として俺達の騎士団では標準装備だもんな。

普通あんな重装備など身に着けたらあまりの重さに動けなくなるものだが、そこはあいつの技術によって強度はそのままで、格段に軽くしたもんな。

俺が昔装備していた材料である鋼を全員に着られるよう改良し、それればかりか大量増産できるまでの設備を整えたユウキはすごいぜ。

敵ながら同情するしかないかもな。

あんな弓矢はおろか剣も槍も通せない鉄の塊に襲われ、さらにあちらの楯や鎧は容易に切断されるんだ。

俺だったら逃げる一択だな。

「……ん？」

思索から浮かび上がった俺は前線に目を向けると何か異常が起きていた。

竜騎兵が攻撃しているのは予想通りだが、それにしては混乱が大きい。

「一体何が起こっている？」

レオナも同じ疑問を浮かべたのだろう、そんなことを呟く。

そうしている内に連絡将校が陣内に入ってきたな。

「報告します！　敵は竜騎兵を投入した模様、こちらの指揮官が狙い撃ちにされています。さらに相手は風や炎など属性を操る武器を扱う一団によって指揮官不在の隊は混乱しています！」

なるほど、そういうことか。

あちらはついに奥の手である竜騎兵と属性武器を投入せざるを得なくなったか。

数体しかいない竜騎兵はその活用によって大きな効果を上げる。

地上なら指揮官の場所にまで辿り着くまで一苦労だが、空からだと一瞬で向かうことができる。

そこから指揮官を狙われると、たとえ殺せなくとも命令を出すことが困難になり、結果として指揮官が打ち取られたと同じ状態になってしまうし、誰かを掴まれて空中に惨殺されるとこれ以上ないくらい心理的ダメージを与えられてしまう。上空から仲間の血を浴びせられて平静でいられるのはごく僅かだしな。

また、属性武器による攻撃も厄介だな。

あれは範囲が広いとはいえ１ｍから２ｍぐらいまでなので落ち着いて対処すれば問題ないのだが、いかんせん視覚による効果が大きい。

目の前でカマイタチや氷槍、炎を生み出されてそれが向かってくるとなれば、経験がないと足がすくみ上ってしまうだろう。

しかもそれはユウキが作っていた属性武器なのだから性能も大きいだろう。

全く、変なところで手間をかけさせてくれるな。

まあ、属性武器に関しては俺達の方が量も質も上だからすぐに鎮圧できるが、問題は竜騎兵。

あれは早急に対処しないとこちらの被害が大きくなる。

「俺が行くか。レオナ、切り札である重装騎兵を準備させておいてくれ。これが終わったら敵が浮き立つだろうからそこで勝負を決め

る」

本来なら別の手練れを向かわせるのが常であり、俺のような大将が戦うどころか武器を手に取ること自体おかしいのだが、そこはまあ性だ。

どちらかというと俺は前線で戦いたい性質なのさ。

「……止めても無駄なのだろうな」

レオナが呆れ顔で呟く。

さすがだな、俺の性格をよく分かっている。

「当たり前なことを言うなよ」

「危ないと思ったらすぐに退いてくれ。私はお前に死んでほしくないからな」

うーん。その言葉は嬉しいが副官としては頂けねえな。副官というのは大将の補佐だが、それ以外にも大将に万が一があった場合、代わりとして振る舞う役目もある。

レオナのことだから取り乱すことはないに決まっているが、そんなことを言われると不安になっちまう。

今のレオナは戦時における厳しい顔だが、よく観察してみると瞳の奥が僅かに揺らいでいるな。

まあ、いいだろう。

レオナは俺の恋人でもあるのだからな。

不安を取り除くのも俺の役目だ。

そう判断した俺はレオナの肩に手を置き、驚いて顔を上げた瞬間に口付けた。

それは1秒にも満たない短い時だったが、俺の意図は十分に伝わっただろう。

「行って来る」

俺のその言葉にレオナはただコクリと頷くだけに終わってくれた。

余談だが俺とレオナの仲は幹部全員が知っている。

「俺がジグサール騎士団将軍――クロス＝カザクラだ！　誰か俺の首を狙う猛者はいないのか！」

戦場の中陣で俺はそう吠えて己の存在をアピールする。

俺が立っている場所は前線から離れているので地上の敵に狙われる心配はなく、上空の敵だけに限ることができた。

「しかし、まあ。この恰好は良いな」

剣を握らない俺は嫌がっているが、今の俺は何故嫌うのかがわか

らない。

見よ、この全身を紅蓮に染めた甲冑に真紅のマント。

他の兵の鎧は灰色だが、俺はさらに背丈が２ｍもあるので目立つことこの上ないだろう。

その証拠に中央の敵兵が俺を討ち取ろうと慌ただしく動き始めてきたな。

そんなことを考えていると俺の上空に５体の竜騎兵が集まる。

ふむ、どうやら一発逆転を狙って全ての竜騎兵を向かわせたらしいな。

肩慣らしにはちょうどいいな。

俺は一つ頷き、急降下をしてきた竜騎兵を手に持った獅子の剣で竜ごと真っ二つに叩き切った。

絶命する瞬間の兵がありえないとばかりに驚愕に染まっていたが、それは仕方ないだろうな。

けどな、残念ながら俺はキッカとよく戯れているんだよ。

あのギールとかいう野生の竜と比べれば飼いならされた竜の鱗など紙のようなものだから簡単に切断できる。

２体目の竜騎兵が俺の射程範囲外でのみ攻撃しようとしているが無駄なことだ。

この獅子の剣は炎と光を付与させているんだなこれが。

俺が獅子の剣を一振りすると金色の炎が出現して襲いかかり、竜騎兵を跡形もなく燃やし尽くす。

「さてと、次は」

こうなれば玉砕覚悟と心に決めたのだろう。３体が集まってこちらに突進してくる。

「まあ、意味ないがな」

俺はその重装備をものともせずに軽快に立ち回り、数秒後には竜騎兵全員が全滅していた。

よし、これで俺の仕事はあと一つだ。

俺は血に塗れた剣を掲げる。

「強敵！　竜騎兵は始末した！　後は怨敵を討つだけだ！　最後の勝負だ！　士気を奮い立たせよ！」

味方の士歓声が湧き上がると同時に重騎馬隊が俺の後ろへ整列する。

さあ、後は詰みだけだ。

「どうだ、サラ？」

ベアトリクスが「竜騎兵を殺さなくていいじゃない、あれは貴重なのよ」とぶつぶつ呟いているのを放っておき俺はサラに向き直る。

趨勢はほぼ決定し、後はキルマークを討つだけになっている。

中盤も圧勝の一言だった。

向こうがいくら攻撃を仕掛けようともこちらは傷一つつかず、逆にこちらの攻撃は相手を面白いように葬る。

こちらは何もしなくとも勝手に自滅していってくれる。

そして、その状況を作り出したのは間違いなくサラが絡んでいる。

サラの生み出した武器や防具が敵とはいえ命を刈り取っている事実をどう考えているのか。

「もし耐えられないのであればジグサールを去ってもいい。俺はお前を引き留めないし、これまでの謝礼も払おう。おそらく一生遊んで暮らせる額だから生活に困ることはないだろう」

正直に言えばサラは残ってほしい。

ジグサールの工業力はすでに最高水準とはいえまだまだ満足していないから、さらにはもう少し協力してほしいのだが、サラの親父さんと約束がある。

サラの親父さんはサラの幸福を願って俺に送り出してくれたのだ

から、それに応える義務がある。

だからサラがここを去る言うならば俺はそれに従うのだが、もしサラがこの景色を見て興奮しているようならば、俺は……

「……父が残した手紙に書いてありました」

ポツリと語りだすサラ。

「自分達は不幸を生み出す職業でもある。いつの日か己の所業を振り返り、後悔する日が来るだろう。しかし、どれだけ悔いても人も魔物も戻ってこず、失われた命は還らない」

それは概ね合っている。

鍛冶といえば聞こえはいいが、詰まる所生き物を殺すための武器を作り出している。

いわば死の商人。

言い訳などできない。

「そして！　だからこそ逃げるなと！」

瞳に涙を浮かべながらサラは叫ぶ。

「泣いてもいい！　怒ってもいい！　悲しんでもいい！　けど、鍛冶を止めるなと！」

大声で、あらん限りの力を振り絞って声を出す。

「葬った命に悔いないためにも！　最後まで続けろ！　……と、書いてありました」

「……」

サラの父親がそんなことを書いていたとは。

意外だったが、そう考えると色々納得いくところがある。

同じ鍛冶仲間からどれだけ弾圧を受けようともびくともしなかったのは、そういったことをずっと心に刻んでいたからなのか。

死を覚悟した人間は強いというか、確かにそんな信念があればそんな中傷なんてものともしないよな。

「……サラ、一つだけ訂正しておく。サラに罪はない。もしあるとすればお前に鍛冶を教え込んだ俺だ。何も知らないサラに武器や防具を作らせた俺こそが無間地獄へ堕ちるべきなんだ」

俺はサラの頭を撫でながら優しく囁く。

「だからここで辞めたとしても誰も責めない。もし何か弾劾されようともそれは俺の責任だ……しかし――」

「ここから先は私の責任になるんですよね」

サラは俺の言葉を引き取る。

眼元こそ濡れているが、無理に笑おうとしていた。

「師匠、私は逃げません。父の言葉通りに私は見届けようと思います。これから先、私の武器がどこに行くのか、何の命を葬るのか」

サラの言葉は決意に溢れている。

「今までありがとうございました。私、サラ＝キュリアスは今まで師匠に甘えていました。しかし、これからは違います。これからは私自身が自ら立ち、選び、傍に参ります。王――ユウキ＝ジグサリアス＝カザクラ様。王のために私の持てる限りの技能を尽くしましょう」

そしてサラは俺の右手を取って額に当て、臣下の礼を取った。

「感動的な場面で悪いのだけど」

ベアトリクスがじと目でこちらを睨んできたので俺は慌てて前へ向き直る。サラも先ほどまでの気恥ずかしさから顔を真っ赤にしているようなのが横目で確認できた。

「あのままだとクロスは死ぬわよ」

ベアトリクスの指している方向には重騎兵隊を率いていたクロスが単身敵の総大将であるキルマークがいる陣へ強襲を仕掛けるところだった。

ベアトリクスは続ける。

「この謀略がリーザリオ帝国によるものだとすれば敗北したキルマーク兄様を生かしておく理由はないわね。もし私ならあそこへ突っ込んだクロス諸共伏せておいた魔導師で殺すわよ」

確かにすでに勝敗は決定しており、どう転んでも王国騎士団に勝ち目はない。しかし、何を血迷ったのかジグサール騎士団を率いるクロスは本陣へと突っ込んでいる。これならいっそ巻き添えにさせた方が後々有利に働くだろう、が。

「クロスなら死なないだろ」

俺はそんな呑気な感想を漏らす。

「は？　どういうこと？」

やはりベアトリクスは信じられないようだ。目を見開いて俺を見つめる。

だから俺は肩をすくめて。

「まあ、見ていればわかる」

そう諭した数秒後にキルマークがいるであろう本陣に火の手が上がる。

その炎は普通でなく、黒いことから魔法によって生み出されたものであることは容易に理解できた。

「火と闇を融合させた黒炎ね。あれは水じゃ消せず、燃え尽きるか光属性をぶつけるかそれとも術者の魔力が尽きるかしかないわ」

炎はどんどん勢いを増し、ついには本陣全てが黒い炎に包まれた。

突然の出来事に味方はおろか敵さえも見入っていた。

そして、燃え尽きるものがなくなったらしく、黒炎の気配が弱まる。

「な、言ったとおりだろ」

そして、奥からのそりとしながらも真紅の甲冑に身を包んだ者が現れた。

「クロスの鎧は特別製だ。あれはどんな魔法も効かない」

神話に登場するオーディーンの名を冠したあの甲冑には一般の魔導師による攻撃など効きはしない。

あれにダメージを与えようと思ったら俺達が擁する魔法騎士団の団員全ての全魔力を結集した魔法をぶつけないと駄目だな。

そんな伝説クラスの甲冑を身に纏うクロスは手に持った獅子の剣を掲げながらこう叫ぶ。

「王国騎士団団長キルマーク＝シマール＝インフィニティ！　ジグサール騎士団騎士団長――クロス＝カザクラがこの手で討ち取った！」

ここからはよく見えないが左手に何かスイカのようなものを抱えているからあれがそうなのだろう。

するとあちこちで絶望やら歓喜の声音が上がり、そして「ジグサリアス！」と連呼が始まる。

俺はその様子を睥睨しながらベアトリクスに声をかける。

「お前の兄は討ち取ったぞ。何か思うところはないか」

裏切られたとはいえ血縁の繋がった者である。

ベアトリクスから何かしら感傷のセリフをでも言うのかと思っていたが。

「……素晴らしいわ」

「は？」

ベアトリクスは震える声音でそう呟き、俺へと向き直る。

その表情は興奮と歓喜――間違っても悲哀の色は見えない。

「本当に素晴らしいわ！　あの王国騎士団が相手にもならない！　それどころか魔道騎士団さえも無力！　何これ？　どうしてこんなに強いの！　これならリーザリア帝国から守るどころか三国を狙えるわ！」

アハハハハハ！

とベアトリクスは狂ったように笑う。

笑え、嗤い、哂う。

どうやら兄であるキルマークのことなどどうでも良いようだ。

「我が君！」

そして哄笑がピタリと納めて、改めて真剣な表情で向き直る。

「今までの非礼、申し訳ありません。このベアトリクス＝シマール＝インフィニティは我が君に栄光を捧げることを誓います」

そう言った後、また笑い始めるベアトリクス。

何故だろう？

サラの時と違って安堵よりも不安の方が勝っているのはどうしてなのだろう。

理由についてはおおよそ見当がついているが、それはあまり考えたくなかった俺がいた。

「緊急連絡！　緊急連絡！」

サラの要望によりイズルガルドの背に乗って戦場周辺を滑空していると緊急用の赤旗を掲げた2体の竜騎兵がこちらに接近し、用紙を渡してきた。

「……やはりか」

その用紙に書かれた内容が予想通りだったため俺は渋面を作る。

「うふふ、楽しくなってきた♪」

ベアトリクスは楽しそうだ。

「あの？　どうしましたか？」

この中で唯一用紙に目を通していないサラが聞いてくる。

「簡単よ、サラ。ついに来たのよ」

俺の代わりにベアトリクスがそう答えるのだが、それだけでは何も分からないだろうと思ったので俺は補足する。

「北のリーザリオ帝国が軍隊を動かした。その数２０万」

「えっ！？　つまり……」

サラもここまで言うと理解したのだろう。

しかし、それだけでない。

「さらにバルティア皇国も国境線に軍隊を集めている」

二か国同時進行、その予想が現実のものとなりつつある。

「し、師匠！　どうします？　このままではいいように蹂躙されますよ」

サラはそう慌てるのだが、残念ながら俺はそんなに脅威とは考えていない。むしろこのタイミングで良かったとさえ安堵している。

「ベアトリクス、アイラ率いる『林』と共にリーザリオ帝国を撃退しろ」

「承知しました我が君」

続いて1体の伝令兵に目を向けて。

「『火』のユキと『風』のキッカに連絡。早急にバルティア皇国の首都を攻めろと」

「はっ！」

「『山』のクロスはそのままカリギュラスへ侵攻。シマール国の息の根を止めろ」

「分かりました！」

そう言い終えた俺は一息つき、そして最後にこう宣言する。

「これよりシマール国、リーザリオ帝国そしてバルティア皇国の三か国を同時に征服する」

魔物大侵攻まで後４か月。

木枯らしの風が嫌に体に染みた。

対王国騎士団　後編（後書き）

ようやく終わりました。
はあ……長かった。

戦準備（前書き）

キリが良いのでここで区切ります。

戦準備

私――エレナ＝グランシリア＝イーズルブルは憤慨していた。

先日私が王と仰ぐお方――ユウキ＝ジグサリアス＝カザクラからの要請によってこのリーザリオ帝国と国境を接する砦を守衛しに来たのはいいのだが、先に到着していた輩の存在が気に入らない。

そいつは王の命令によって参謀として来たらしいのだが、その態度や行動が最悪だった。

先ほども挨拶の際に。

「こんにちは、私が美少女仮面――オマエ＝バカダローよ。よろしくね、アハハハハハ」

と、クルクル回って踊りだしたのは百歩譲って認めるにしても、そのふざけた名前は何事か！

だから私はそいつを有無も言わせず放り出そうとしたのだが、それは側近であるキリングに固く諫められる。

「エレナ様、お止め下さい。このお方は王の使者です。それを無下に返されましたら不興を買うのは必死です」

ふむ、それは確かに困るな。

私の才を認めてくださったあのお方を怒らせたくはない。

「そして、最も大事なことですが、このお方はベア――」

「はーい、ストーップよキリングちゃん」

キリングが何かを言おうとしたのだが、その直前にあの仮面少女によって口を塞がれる。

「今の私は美少女仮面――オマエ＝バカダローよ。わかっているわね？」

仮面を被っている上からでも分かる。

今、こいつは笑っているだろう。

私がどんな反応をするのか楽しみで仕方ないような表情を浮かべている。

しかし、私はそれ以上に。

「この下郎！　キリングに馴れ馴れしく触れるとは何事か！？」

「ふーん、あなたはこういう態度を取られるのが嫌なのね」

すると私が激昂するに比例してオマエと名乗る者はどんどん冷めていく。

「まあ、単なる私の見込み違いということで構わないわ……先程の無礼をお許し下さいエレナ子爵、私の本当の名は――」

「――いや」

急に畏まった態度を取り始めた彼女に私は脊髄反射の如く否定する。

どうしたのかと首を傾げるオマエに私は頭をかきながら。

「……そのままでいい。すまないな、私も気が立っていた」

どうして私が謝らなくてはならないのかわからなかったが、ここでオマエに畏まられると後々大変なことになると私の勘が告げていた。

するとオマエはクルクルと回転を始め。

「そうよ、それこそエレナ子爵よ。良かったわね、もう少し遅れていれば面白いことになっていたわよ。アハハハハハハ」

オマエは何が嬉しいのか前よりも一段階高い音程で哄笑を挙げた。

「……命拾いしました」

隣のキリングが心底安堵した様子でそう呟いたのが印象的だった。

「で、オマエ殿。我々はここで敵を食い止めればよろしいのですか？」

このワイマール砦には北方警備隊と私の部下を合わせて１０００が集結している。

もっと数を揃えればいいのだが、生憎と今は亡きキルマーク騎士団長がここに最低限の兵だけ残して先の内戦に連れて行ってしまった。

まあ、地形的にも両脇は崖のようになっているので脇から突かれることもなく、守る側としては正面だけ相手にすればいいだけだから楽といえば楽なのだがこの数では……

「敵国の中に魔導騎士団や１０体もの竜騎兵が確認できたという。もし彼らに連携されれば私達では荷が重いのだが」

しかもここには魔導騎士団と竜騎兵を常備していたのだがそれも徴収されてしまい、現在残っているのは歩兵だけだ。

本当にキルマーク騎士団長はなぜこのような暴挙を敢行したのか。

この国を滅ぼしたかったのかと疑ってしまう。

そんなことを考えているとオマエ殿は鼻をフンと鳴らして。

「あなた馬鹿？　誰が私達だけで相手をするというの？　ちゃんとこちらも『火』と『風』を用意するわよ」

……ここで怒っては駄目だ、オマエ殿はこのように人を不快にさせることが大好きなんだから。

「勘違いしているようだけど、私達の任務は水際で相手の侵攻を止めることじゃない、住民が避難するまでの時間を稼ぐことよ」

オマエ殿は続けて。

「本来の予想ならもっと侵略が遅れると考えていたのだけど、我が君率いる騎士団『山』が圧勝し、大して損耗しなかったから向こうが慌てて進軍を始めたのよ。だから残された住民の移動が終わるまでここで敵を足止めね」

「何故籠城を選ばないのですか？」

リーザリオ帝国の兵は強い代わりに兵站に不安がある。だからここは兵法の道理に従って籠城し、持久戦を行うべきでは。

昔からシマール国はリーザリオ帝国からの侵攻の度にそうして跳ね返してきたのにどうしてそれを踏襲しないのか気になった。

するとオマエ殿は肩をすくめて。

「まあ、私もそれが一番だと思うんだけどね。けど、事情が変わった。リーザリオ帝国はシマール国の反対側にあるバルディア皇国と内通しているのよ。もし、リーザリオ帝国と持久戦を行っている際に南から攻め込まれるとどうなると思う？」

確かに。

暴政と内戦によって疲弊しているこの国に同時に二方から攻め込まれて撃退できる力は残っていない。もしリーザリオ帝国と持久戦によって疲れ果てた時に南のバルディア皇国から攻め込まれては本当にこの国は終わるだろう。

「なるほど、それは持久戦などできませんな」

敵はリーザリア帝国だけでない。

弱みを見せてしまった国はすぐさま他の国から侵略を受ける道理を忘れていた。

「しかし、よく気づきましたな。さすがは我々を生かした王」

ここは素直に称賛するしかない。

如何に己の視野が狭いのかを自覚させられる。

「そうね、本当に我が君は素晴らしいわ。策略や智謀においては誰にも負けない自信があるけれど、視点の高さにおいては我が君に勝てる気がしないわね」

オマエ殿もそこは素直に同意する。

「私は本当に良い君主を見つけられたものだ……」

しみじみと私は呟くのであった。

「それで、我々は何日ほどここを守る計算で」

王の慧眼の深さにしばし感動した後、私はオマエ殿にそう聞く。

「おおよそ2日というところね、それだけ持たせれば私達は撤退よ」

「承知した」

１００００という数は心許ないが2日なら先鋒の2、3万を相手にする程度だから大丈夫だろう、その期間だけならこの私でも十分に対応できる。

「ああ、そうそう」

オマエ殿は何かを思いついたようにポンと手を打った。

「最初の策と撤退の際における置き土産についての策を献上しても良いかしら」

それは嬉しい。

恥ずかしながら私は普通の考え方しか出来ぬのであっと驚くような策を思い付くことが出来ない。

少しでもこの状況が有利になるのであれば良いに越したことはなかった。

「……ウフフフ。私を嵌めた報いを十分に受けてもらおうかしら」

オマエ殿が何かをブツブツ呟いていたが、声が小さかったので私の耳にまで届かなかったことを追記しておこう。

焦土作戦（前書き）

グロ注意

焦土作戦

「で？　まんまとやられたと？」

先遣隊の隊長である男に詰め寄ると、男は恐縮しながらも頷き、言い訳を始めた。

男からの報告はこうだ。

一昨日――男はワイマール砦に辿り着いたのだが、その砦は門が開け放されていた。

不安に感じたので先鋒隊２万のうち半数を連れて門へと接近し、そしてあと５０歩のところまで到達すると、門の内側から魔物の咆哮が鳴り響き、次の瞬間には興奮したケルベロスやビッグガゼルなどが大挙してこちらに襲いかかり、混乱の極みに陥ったとおろで向こうが騎馬隊を出撃させたのでこちらの兵は魔法騎士団を含む７００の死傷者が出たと。

「何よそれ！？　そんなの典型的な空城の計じゃない！　何で見破れなかったの、あんたは何を学んでいた！」

私はそう詰め寄るのだが向こうは謝るばかり。

私はそれに辟易して溜息を吐いた。

私――リーザリオ帝国第３皇女のヴィヴィアン＝リーザリア＝ト

ルツエンは非常に不機嫌だった。

私の仕掛けた謀略によってシマール国は弱体し、内戦にまで持ち込んだところまでは全て思い通りに進んだものの、あの邪魔な第１王女のベアトリクス殺害の疑いをカザクラ男爵に被せてからおかしくなった。

ジグサリアス王国の設立を宣言したのは良い。

しかし、その後の貴族連合において有能な者だけを残し、シマール国最強の王国騎士団との戦いでほぼ無傷だった。

時間を置いてしまうと向こうがどんどん有利になると判断した私は予定より早く軍事行動を起こさなければならなくなったおかげで糧食が十分に確保できず、こうして見切り発車をする羽目になってしまった。

もし、こちらの糧食が尽きてからバルディア皇国が行動を起こしてしまうとこちらは良いように利用されるだけで終わってしまうだろう。

バルディア皇国だけが利するわけにはいかないので当初はワイマール砦の前で持久戦を行うつもりだったのだが、その予定は大幅に狂ってこうして侵略行動を起こさなければならなくなった。

「全く、本当に予定通りにいかないわね」

もし普段の私を知っている者が今の私を見たら腰を抜かすだろう。

それぐらい今の私の顔は憤怒で彩られているわ。

6歳から現在までの11年間手入れを繰り返したこの髪は黄金のように美しく、美貌においても入念に手を加え、いつも柔らかな微笑みを浮かべるよう訓練し、このスタイルを維持するために毎日運動を繰り返した結果、リーザリオ帝国においては私より美しい者はいないとの評判だ。

そして、智謀においても指揮においても私に敵う者はいない。私の戦略の前にはリーザリオ帝国お抱えの参謀でさえも舌を巻くほどだ。

そんな私に唯一足りないもの――それは立場。

私の上には3人の兄と2人の姉がおり、私は末っ子なのでどんなに頑張ってもどこかの国に嫁がされてしまう運命だ。

私より無能な人間が私の上に立つなんて許せない。

なら、どうするか。

簡単だ、実力を示せば良い。

私こそが国を総べるものだと周りに認めさせれば良い。

だからこそ仇敵であるシマール国を乗っ取ろうとしたのだけど、結果はご覧の様。

正直今の状況は芳しくない。

軍を引くことも視野に入れるべきだ。

しかし、軍を引いてしまうと私の今までの努力が水泡と帰し、2度と挽回のチャンスはないだろう。

だから私は無茶を承知で軍を進めたのだけど。

「……まだ進まないの」

私の視線の先にはワイマール砦の外壁に梯子をかけて登っている兵士と門を防いでる土砂を崩し、ここらは見えない位置にある堀を埋めている作業が映っていた。

「大丈夫です。これなら明日にでも通れるようになります」

副官がそんなことを言ってくるけど、その1日がどれだけ貴重なのか分かっているのか。その間に向こうはまんまと撤退し、こちらの迎撃の準備を整えているだろう。

「どうしようかしら」

道は2つある。

1つは早さを尊び少数の兵で進軍させる方法ともう1つは移動速度は犠牲にしながらこのまま大軍で進ませる方法よ。

少数の兵で先行させる方法は兵糧の関係から望ましいけど、こんな敵地で寡兵を進ませることがどれだけ危険か。

そうなると必然的に大軍になるけれど、そうなると問題になるの

は兵糧。

兵糧は国から送られてくるので距離が空けば空くほど移動距離が長くなる。そうなると危険なのが竜騎兵軍団ね。

リザーリア国は１０体だけど、向こうはその3倍の３０体を保持している。

彼らから糧食を守るために普段の倍以上の護衛兵を付けないとまずいわね。

「……やはり現地徴収しかないか」

どう考えても寡兵では無理なのだから大軍で行くしかないわ。

そうなると大量の食糧が必要となるからそれは送られてくる食料のほかに現地で賄うしかない。

幸いにも今は秋の終わりなのだから民家に備蓄はあるだろう。

「全軍に伝えなさい。食糧は現地で徴収するように」

２日間でどれだけ逃げれるか分からないけど、突然の事態に半数以上はまだ残されているだろう。その彼らから食糧を奪えば何とかなるわね。

私はそう自分に言い聞かせるように頷いたわ。

「……焦土作戦」

私は手のひらに爪が食い込むほど固く握りしめながらそう呟いたわ。

斥候からの情報によると辺りには人どころか民家もない。田畑も全て焼き払われ、井戸には毒を流し込む徹底ぶりらしい。

さらに嫌な報告は続く。

時折どこからか水稲と槇を括り付けた羊や牛が小隊の前に現れるのだが、それを食べた小隊の兵士は久しぶりの食事のため気が緩み、次の日には行方不明になっているそうね。

行方不明となった兵士はともかく、今の状況はまずいわね。

夜中になると竜騎兵が現れて鐘の音を鳴り響かし、私達を安眠させないのよ。

おかげでこの数日は私も寝不足だわ。

私達の兵がいくら飢えと逆境に強いとしても、常に腹をすかせ、夜中は安眠できずさらに時々仲間が行方不明になるという状況は彼らの士気を著しく下げているのよ。

「……このままだと戦わずに負けてしまうわ」

領内に入ってから一戦も戦っていないのに自軍はすでに敗北の空気が漂い始めているわ。

これでもう一つ何かがあれば彼らは完全に心を折られる。

「早いところここを抜けないとね」

この領地さえ抜ければ産業都市ジグサールまで目と鼻の先だ。あそこの周辺は有名な穀倉地帯なので自軍の士気も回復するだろう。

私は何もない荒涼とした野原に目をやりながらそんなことを考えたわ。

私は完全にカザクラ男爵を見誤っていた。

彼も人間なのだからそこまで残酷なことはできないとたかを括っていたのが仇となった。

よく考えれば彼は浮浪者から王へと成り上がった者。

清濁併せ呑める強さを持っていることを失念していたわ。

「ザール！　ケイン！」

兵士の誰かが旧友の名を呼んだのだろう。

しかし、それは珍しいことじゃなく、軍のあちこちで起こっていた。

今、私達の軍は目の前の光景によって完全に息の根を止められたわ。

そこは大きな街道に沿って無数の十字架が立てかけられている場所よ。

それだけだったら別に構わない。

けど、その十字架に張り付けられているのが行方不明になっていた兵士だとすれば、その衝撃は計り知れないわね。

死体には蠅と蛆が湧き、酷い悪臭が漂うこの光景にはさすがの私でさえも食べたものを戻したわ。

これが地獄なのかしら。

歩いていた兵士が突然止まり、反転して逃げ出す。

一人がそうなると後にも続き、いくら隊長が押し留めようとしても無駄だった。

「……負けたわね」

敵であろう一騎の竜騎兵がこちらに向かってくるのだけど、誰も迎撃しようとしない。

そんな光景を眺めながら私はポツリと呟いたわ。

焦土作戦（後書き）

悪魔――ベアトリクス復活！

参考元はヴラド・ツェペシュです。

三国統一

「リーザリア帝国第3王女――ヴィヴィアン＝リーザリア＝トルツエンで間違いないか？」

場所はジグサリアス王国の首都ジグサール。

ジグサールの中央役所の一室にある簡素な部屋にいるのは俺とベアトリクスと仮面を被ったメイド、そして縄で縛られさらに猿轡を噛まされている者だけだった。

「……」

身を整えれば女神と称えられそうなほど美しい容姿にも拘らず、今は敗北による憤怒と嘆きと疲労で見る影もない。

これでもまだ見れる方になったらしい。

舌を噛み切ろうとする彼女を無理矢理風呂に入れてさらに化粧を施してようやく今の状態なのだから、如何に彼女がこの現実に屈辱を感じているかがわかる。

「彼女は殺しておいた方が良いわよ。後々面倒なことになってしまうわ」

ベアトリクスの言葉通りに一般の慣習に従うのならそうなる。

ジグサリアス王国を窮地に追いやった張本人なのだからそうなっても仕方がないと言えるのだが、俺としてはもう終わったことなの

でその責を負うのでなく、むしろこちらの幕下に入ってほしいと考えている。

もし俺がいなければヴィヴィアンは冗談抜きでシマール国を滅ぼしていたことは1人を除き、全員が納得する事実だ。

「失礼するわ、私がいるのに滅ぼせるわけがないじゃない」

とは謀殺されかかった某王女の弁。

「ヴィヴィアン、一つ聞くがお前は私の幕下に入る気はないか？」

考えていても仕方ないのでまずは言葉にして聞くのだが、ヴィヴィアンは俺を馬鹿にしたように笑う。

目が言っている――ありえないと。

「ほら、やはりここは殺した方が良いわよ」

ベアトリクスが横で囁いてくるが俺は無視する。

「ほう、つまり下でなければいいのだな」

「……？」

ここでヴィヴィアンが首を傾げたので俺はクックと笑い。

「なに、私はヴィヴィアン＝リーザリア＝トルツエンを妃に迎えようと考えている。さて、その返事は如何に？」

この言葉はさすがに予定外だったのだろう。ヴィヴィアンは顔を驚愕に染めて硬直していた。

俺はさらに続ける。

「お前は誰かの下につくことが嫌だと言ったな。なら、俺の隣につけばいい。そうすれば問題はないだろう」

ヴィヴィアンの様子から自殺する気配は消えたと判断して俺は彼女の前に膝をついて自ら猿轡と縄を解く。

これで俺とヴィヴィアンとの距離は２０?もなくなった。

「アハハ……面白い冗談ね。そんなに私をからかいたいの？　嘲りたいの？　そんなことをしても私はともかくあなたにメリットがないじゃない。もし私と契りを交わせばジグサリアスは崩れるわよ」

ほう、混乱した状態でもそこまで頭が回るのか。これはベアトリクスとは違った意味で賢いな。

「そうだな、確かに今のお前ではデメリットの方が大きい」

そこは認めよう。

いくら国民からの求心力が高くても侵略してきた者と結ばれれば一気に離れてしまう。

しかし。

「国民に納得させる方法がある、それはお前がリーザリア帝国を滅

ぼすことだ」

納得させるには手土産が必要だ。

後ろ指を指されないほど見事な成果を持ってこれば国民も納得するに違いない。

「お前をリーザリア帝国討伐軍の総大将を命ずる。そしてもしリーザリア帝国を滅ぼすことが出来たのなら国民はお前を妃として認め、迎えられる」

ヴィヴィアンは瞳をせわしなく動かしながら。

「う……あ……。もし、私が裏切ったらどうするの？　私に部隊を任せるということはその部隊の兵士の生殺与奪を握っていることになるのよ」

そんなことを口走る時点ですでに裏切るつもりはないことを伝えているのだが、ヴィヴィアンはそれに気付かないほど狼狽していた。

もう一押しだ

あと少しで落ちると俺は踏み、さらに驚愕の事実を伝える。

「シクラリス、仮面を取れ」

俺は傍に控えていた仮面を着けていたメイドにそう告げると、彼女は面を外して素顔を見せた。

「あ……あなたは……」

予想通り、ヴィヴィアンの混乱は極致に達して唇をわなわなと震わせながらそのメイドに指をさす。

するとそのメイドは少し頭を下げた後、涼やかな声音で言葉を紡いだ。

「はい、私はバルティア皇国第2皇女――シクラリス＝バルティア＝ライソラインです」

プラチナ色の髪と病的なほど白い肌を持ち、物憂げな表情を常に浮かべてさらに深窓の令嬢という言葉が似合いそうなほど何気ない動作の一つ一つが気品に満ちていた。

「ど、どうしてあなたが侍女をやっているの？　一国の皇女のあなたがそんな真似をする――」

聡いヴィヴィアンはどうしてバルティア皇国の第2皇女が俺のメイドの真似事をしているのか理解したようだ。

だから俺はその理解を裏付けるかのような用紙をヴィヴィアンに見せた。

「つ、つまり――」

その先を俺が引き取って。

「そう、バルティア皇国はジグサリアス王国に降伏した」

その驚愕の事実を述べた。

バルティア皇国がリーザリオ帝国と共謀している事実を掴んでいた俺は、あの決戦後、そのままバルティア皇国へ攻め入っていた。

始めにキッカ率いる竜騎兵軍団とユキ率いる魔道騎士団を先行させると相手はまだ準備の最中だったので、痛烈なダメージを与えることが出来たらしい。

そしてそこに騎馬隊のみで編成させたジグサール騎士団を投入するとその日の内に決着がついたという。

その動きは疾風迅雷。

またの名を電撃作戦。

そのためバルティア皇国から聞こえる声というのは「何が何だか分からない内に始まり、そして終わった」というのが大部分である。

「お前にはバルティア皇国の兵士と今回の戦で連れてきたリーザリア帝国の兵士を任せる」

ひどくゆっくりと、ヴィヴィアンの心に染み付かせるように囁く。

それは言外に「裏切られても怖くない。もしそんなことをすればどうなるのか分かっているのか？」との意味もある。

そして最後に。

「選ばせてやろう。俺に反旗を翻して死ぬか、それとも俺の横に立って生きるか」

ヴィヴィアンが素直にコクリと頷いた様子から俺は完全に決まったとほくそ笑んだ。

「……疲れた」

ヴィヴィアンを連行した後なので今、この部屋には俺とベアトリクス、そしてメイド服を着たシクラリスがいた。

「お茶です」

俺の呟きを耳にしたシクラリスが如才なくお茶を差し出したので俺は苦笑して。

「あ～、シクラリス？　もう演技はいいぞ。メイドとして振る舞わなくていいから」

「いえいえ、ご主人様に尽くすのが私の役目です」

が、シクラリスは首を振ってそう答えたので。

「……どこかのメイドに聞かせたいセリフだな」

俺はしばし遠い目をしてしまった。

このシクラリス。

将来はどこかの国の嫁になるとして幼い頃からそうした術を叩き込まれた結果、誰かを尽くすことが全てであり、主となる人物が喜ぶことが生きがいになるという性格になってしまった。

ベアトリクスが「こんな性格になるくらいなら死んだ方がましね」と吐き捨てていたのが酷く印象的である。

誰かに尽くすというのは王女の教育として間違っているのではないのかと思ったのだが、そう言うとシクラリスに「そうなのですか？」と首を傾げられてしまう。

「男尊女卑のバルティア皇国皇女の教育方針はこうなのよ」

ベアトリクスのその言葉で俺はこれ以上聞くのを止めた。

うん、女性を差別してはいけないな。

もしジグサリアス王国で女性を怒らせると国が崩壊してしまうからな。

と、女性が軍政両方において中枢機能のほぼ全てを担っている国の王の意見だ。

十数日後

ジグサールはこれまでにない異様な活気を見せていた。

それもそのはず、何故ならまもなくリーザリア帝国を討伐しに向かった軍が戻ってくるのだから。

「予想より早かったな」

ジグサール全体を見渡せる場所で俺はそう呟く。

借り物の兵に加え、自分の思い通りに動かせる兵士も自国を攻めるんだ。

士気は全然上がらないに決まっているので失敗も視野に入れていたのだが、見事にヴィヴァンは勤めを果たしてくれた。

「当り前よ。ヴィヴィアンは頭だけでなく度胸もあるわ。言うなれば覇王としての資質を兼ね備えているのよ」

すると隣のベアトリクスがそんな感想を漏らしてさらに。

「我が君は本当にヴィヴィアンを嫁に迎えるのかしら。言っておくけど辞めておいた方が良いわ。彼女は虎よ、間違っても飼い慣らせない」

シクラリスも続いて。

「いつか彼女はご主人様の首を噛み切るかと思います」

どうやら2人の王女の意見によるとヴィヴィアンを嫁に加えるのは大変危険だと言うことらしい。

しかし、俺は苦笑して。

「蛇よりはましだろう」

「失礼ね、誰が蛇よ」

ベアトリクスがプクッと頬を膨らませる。

相手の弱みを徹底的に突き、周りから恐れられるお前が何故蛇じゃないのか逆に聞きたい。

「確かに、その通りかもしれません」

「あなたも！？」

シクラリスの呟きにベアトリクスは目を剥く。

そんなことを考えている内に歓声が一際大きくなった。

どうやら無事に帰還したらしい。

ヴィヴィアンを先頭にした軍隊はゆっくりとした歩きで俺の前の広場に向かい、そしてそこに辿り着くとヴィヴィアンが一歩先へ進み出て胸を張ってこう宣言した。

「ユウキ＝ジグサリアス＝カザクラ王の妃！　ヴィヴィアン＝リーザリア＝カザクラは！　リーザリア帝国を打ち倒した！」

その途端広場が爆発したような印象を受けた。

国民が全員歓喜の涙と歓声を上げて誰か憚りなく抱き合っている

のが見える。

それを俺は睥睨しながら。

「嬉しいのは分かるが少しはしゃぎすぎだろう。そんなに凄いことなのか？」

俺はそう言って首を傾げると。

「「そんなに！？」」

２人の王女が突っ込まれた。

「我が君は分かっていないようね！　如何に私達が歴史的瞬間に立ち会っているか！」

「そうですよ！　ご主人様は歴代三国の王が夢見ていたことを成し遂げたんですよ！」

「わ、分かった……」

ベアトリクスもシクラリスも普段の調子とは打って変わって興奮した様子で詰め寄ってくるので俺は熱意に押されて頷くしかなかった。

「しかし、どうしましょうシクラリス。ジグサリアス王国はユーカリア大陸において最大の国になったわ」

「ええ、他の国々は必ずジグサリアス包囲網を敷くでしょうからその対策を練らないと」

「このまま世界を統一しちゃおうかしら」

「行く行くはそうかもしれませんが、今は国の安定が先なのでは」

そして2人はそのままこれから先について話し出す。

元凶である俺が言うのもなんだが、お前らは亡国の王女だろう。少しは亡き国について感傷してもいいのでは。

眼前の国民の内誰かが「ジグサリアス！」と声高に唱えるとすぐに周りが後に続き、あっという間に大合唱へと繋がる。

ジグサリアス！　ジグサリアス！　ジグサリアス！　ジグサリアス！

横を見ればベアトリクスもシクラリスも「ジグサリアス！」と讃頌していた。

その光景を見ながら俺は考える。

魔物大進行まで後3ヵ月。

三国を統一したことで守るべき領土が増えたものの、元リーザリア帝国の兵とヴィヴィアンがいれば広範囲な場所をカバーできるだろう。

本当はバルティア皇国を攻めるつもりなどなかったが、もし魔物大進行まで後1か月以内の時期に攻められたら不味かったので、ちょうど良いからこちらから攻めた。

シクラリスを得たのはついでだったのだが、彼女はベアトリクスと相性がいいのかよく話し込んでいたのでこれは思わぬ収穫だった。

「まあ、予定は大幅に狂ったが許容範囲まで修正できてよかった」

始めはジグサール一地方だけの予定だったのが今では三国を守らなければならない。

当初の予定と比べると想像を絶するだろうが、3ヵ月もあるのなら対策は打てる。

「だから今はこの瞬間を喜んでおこうか」

そう考えた俺は手を突き上げるとさらに歓声が一段階大きくなった。

三国統一（後書き）

魔物大進行の期限があまりにきつかったので後3ヵ月に変更しました。

これで第4章は終わりです、ありがとうございました。

ユウキ争奪戦開幕（前書き）

ついカッとなってやった
後悔はしていない。

この章はかなりの確率でキャラ崩壊しますのでご注意ください。
キャラの性格が変わっていても突っ込まないでほしいです。
一種のお祭りと思って下さい。

ユウキ争奪戦開幕

今、俺の立場はこのユーカリア大陸において最も力のある立場である。

どの国も俺と敵対したくないばかりに贈り物が多いのだが、その中で最も多いものが。

「主、サイザール国から側室にとして姫が贈られてきました。どうしましょうか？」

「どうもこうもせんわ！　送り返せ！」

あまりの女の多さに俺はついに切れてしまった。

「あの……そんな真似をなされますと主の評価が低下するかと」

人形の様な美しさを持ったエルファは表情を変えずあくまで冷静にそう返してくる。

俺は頭をバリバリとかきながら苦悶する。

「ああ、俺は何もしていないのに、どうして女性がこんなに集まるんだよ」

言っておくが俺はまだ一人も手を出していないし、そんな噂をたてられるような真似すらしていないのにどうしてこんなことになるのか分からない。

「はあ……主。本気で気付いていなかったようですね」

珍しくエルファがため息を吐き、そして朗々と語り出す。

「良いですか、この大陸では現在ジグサリアス王国が最も強いことはご存知ですよね」

その通りなので俺は頷く。

「ですから他の国々は何とかご主人様に気に入られようといい贈り物を贈ろうとする。ここまでは良いですか」

「ああ」

「そして、この国において女性の立場はどうなっていますか？」

「どうなって……まあ、結構高い方だな」

実際この国を動かしている者の大半は女性だからな。

するとエルファは早口に捲し立て始めた。

「いいえ、結構どころではありません。異常なほど高いです。一体どこの国に軍政全般において男女比率1対9がありますか。断言できます、それはここ以外あり得ません」

「いや、だってたまたま女性の方が優秀だから」

俺は能力で選んでいるから女性優遇など贔屓はしていない。

偶然そうなっただけだ。

「しかし、世間はそう見てくれませんよ。『ジグサリアス王は女性が大好きで糸目を付けない』というのが各諸国の見方です」

「何だそれは！！」

そんな不名誉な評価を受けていたのか。

とても不本意だ。

「ですから他の国々はご主人様に女性を贈るのです」

「そんなことになっているのなら何故教えてくれなかったんだ。王である俺がそんな評価を受けているとジグサリアス王国の威信が低下してしまう」

俺がそう文句を垂れるとエルファは複雑そうな顔をして。

「古参のフィーナ様やレア様の意見によるとその方が良いそうです」

「何故？」

「彼女達によるとご主人様は女性を積極的に採用していると広めることによって埋もれていた有能な女性がこの地に集まり、さらに彼女達が活躍するとその知名度が上がって遠くから有能な女性がここに来る。その繰り返しによって産業都市ジグサールはあそこまで発展したそうです」

「そうだったのか……」

ジグサールの発展の陰にはそんな裏事情があったことを初めて知る。

「けど、主には悪いですが、ここは女性にとって天国ですよ。女性の力が強いから理不尽な差別や暴力を受けませんし、何より私達が必要だと思える施政を最優先で実行してくれますから」

その分男性にしわ寄せがいっていると思うが。と、心の中で付け足しておく。

「そういえば主は女性経験ってありましたか？」

「いや、ないよ？」

「……」

あまりにスッと返したのでエルファはしばし目が点になった。

そしてそのまま数秒経過した後、ようやく動き出す。

「……あの、主？　こう言っては何ですがそろそろ経験しておいた方がよろしいですよ？」

「は？　何故だ？　好きでもないのになぜ経験する必要がある？」

「いえ、国のためですから。色によって主が惑わされたらどうするんですか」

「それは不味い」

「その通りです。ですから一度経験しておくことをお勧めしますよ。何なら市井の人でも良い。現在この国は見目麗しい女性が多く集まっていますから彼女達にお願いしてもよろしいのでは」

「ハハハ。冗談にしては面白いな、市井の人がそう簡単にＯＫをするはずがないだろうが」

「いいえ、そうとは限りませんよ。むしろこの大陸最高の実力者である主に抱かれることをお望みになっている方は多数います」

ここで顔をにやけさせてしまった俺を責められる者は誰もいないだろう。

ヤバイ……これ以上続けると変な気分になりそうだ。

「ああ、そうか。そういった話はまたあとで検討しよう。所で今日の夕飯についてだな」

俺はエルファとの会話をここで変更しようとしたのだが。

「欲情が湧き上がりそうでしたから止めましたね？」

鋭い……

「とにかく、主は早急に免疫を付けるべきです。何なら私でも――」

「あー！　あー！　聞こえない！」

これ以上聞くと引き返せなくなる様な予感がしたので俺は形振り

構わず両耳を塞いで大声を上げながらその場を後にした。

「……そうですか。それなら実力行使です」

エルファのそんな呟きが聞こえた様な気がした。

ユウキ争奪戦開幕（後書き）

一度でいいからこういうのを書きたかったんだ。

三つ巴（前書き）

第1弾完成！
この調子でどんどんいきますよー

三つ巴

軽業師の靴という装備がある。

これを履くと体が軽くなり、空中一回転も可能となる代物なのだが。

「どうして俺についてこれるんだ!?」

俺は息を切らして全力で走っているはずなのに後ろから追ってくるエルファは顔色一つ変えず追ってくる。

階段を4段飛ばしで駆け上がり、吹き抜けから飛び降りたりなど特殊な装備が無い限り絶対に追跡できないはずなのに次の瞬間には俺と全く同じルートを通っている。

「これぐらいなら今の私でも十分です」

と、言うのはフレアスカートを指で摘みあげながら走っているエルファの弁。

「くそっ！」

このままでは不味い、そろそろ俺の方が限界だ。

自分が苦しい時は相手も苦しいというのは一体誰の言葉か。

エルファは汗どころか息一つ乱していないじゃないか！

「このままでは埒が明きませんね」

後ろからそんな呟きが聞こえた気がしたが、今の俺に確認する余裕はない。

「仕方ありません……主、もう鬼ごっこは終わりですよ」

「んなあ！？」

エルファが懐からナイフを取り出してそれを俺に投げつけてくる。

あまりの突然だった出来事に反応できなかった俺は被弾覚悟だったのだが、何とエルファは俺の動作を予測していたのか投げたナイフはすべて俺の衣服に当たり、俺は木で出来た壁に縫い止められる結果となった。

「本当に、どうしてそんなに嫌がるのですか」

エルファは僅かながら呆れの様子を見せる。

「人類どころか生命体である限り脈々と行われてきた行為です。大っぴらに公言するべきではないことは確かですが、嫌悪もするべきではありません」

そう諭しながら俺の衣服に刺さったナイフを回収しているのだが、俺が逃げ出さないよう押さえるべきところは押さえているのが憎たらしい。

さすがエルファはそつがないな。

「この場所でなら私の部屋が近いですからそこで済ませましょう。何、心配は要りません。主は寝ていれば後は私が気持ちよくして差し上げますから」

そんなことを無表情に言われても俺は全然嬉しくない。

何か作業をするかのような気分に陥ってくる。

俺は放せとばかりに抵抗するのだが、全体的に細いエルファのどこにそんな力があるのか、全然ビクともしない。

「ああ、もし後日にしたくなりましたらいつでも私が相手をしてあげますよ」

「っ！」

その台詞に反応してしまった俺はやはり男だからなのだろう。

そんなことを考えながら連行されていき、エルファの部屋にたどり着いた時、エルファの視線が鋭くなる。

「って、うわあ！」

そして次の瞬間に俺は横に押されて尻餅をついてしまった。

「痛た……いきなり押すとか酷くな――」

「何をしてらっしゃるのですか？」

俺が抗議の声を上げようとした瞬間、絶対零度の声音が響く。

「アイラ……」

視線の先には氷のような眼をしたアイラがボウガンを構えて立っている。

アイラは浮浪児の４人の中で最も体が成長した存在と言っても過言でなく、豊かな胸と魅惑の唇はたとえ隠されていても存分に色気を放ち、事実アイラを見ていると何とも言えない衝動が湧き上がってきていた。

「主に色というものを教えようとしまして」

ふとエルファの方を見ると手には何本かの矢が挟まっている。

状況から見るにアイラがエルファに打ち込んだらしい。

「ユウキ様を押すことはなかったのではないのですか？」

アイラの問いに。

「万が一のことを考えてです」

簡潔に答えるエルファ。

無表情ＶＳ絶対零度というのは見ていて寒気がしてくる。

「やれやれ、やっと追いついたよ」

その空気をひび割れさせたのは後から追いついてきたオーラだ。

彼女はブラッディ―Xの副作用によって幼女となってしまったが、その身にある技能は大人顔負けという。

「エルファさん。先約があるのに横取りとは感心しないね」

オーラは口元に笑みを浮かべながらそう聞いてきたので、エルファは「先約とは」との問いにアイラが答えた。

「ユウキ様の初めては私達が貰うという約束です」

何だそれは？　初めて聞いたぞ。

「ユウキ様には伝えていないからね。これは私とアイラで決めたことだから」

首を傾げる俺にオーラがそう囁いて補完する……と、いうかそれは約束と言えるのか？

「あなた方がユウキ様の相手をすると？」

「その通り。初めてはアイラに譲るけど2回目は私が貰おうかな、なんて」

ニコッと笑いながらそう述べるオーラ。

そこはかとなくオーラの笑みに猛獣のそれが思い浮かんでしまうのはなぜだろう。

そんなことを考えていた俺を余所にエルファはアイラとオーラを

見比べて。

「失礼ですがあなた方に経験はおありですか？」

「……」

「まだないかな」

それがアイラとオーラの返事。

それを聞いたエルファは多少勝ち誇るような気配を滲ませる。

「そうならば辞めておいた方が無難でしょう」

「なぜですか？」

「簡単ですよ。初めてと初めてでは確実に失敗するからです。初というのは一度だけですから、それを失敗という形で終わらせたくはないでしょう」

アイラの問いに滔々と語るエルファ。

思い当たる節があるのか2人ともそれに満足な回答ができない。

「さあ、参りましょう主」

そしてエルファは俺の腕を掴んでドアノブに手を掛けようとしたのだが。

「だからと言ってエルファ様に任せるわけにはいきませんね」

アイラがまたも矢を放ってドアノブから手を離させた。

「そうだよ、例え失敗してもいいから初めては欲しいな」

オーラも完全に調子を取り戻したようだ。

「エルファ様、ユウキ様をお放し下さい。さもなくば……」

アイラがスリープボウに矢を補充しながら言い放つと。

「また返り討ちにあいたいのですか？」

エルファの気がさらに鋭くなり、まるで針を全身に刺されているような錯覚に陥ってしまう。

「今回は負けないよ。何せこれだけは譲れないからね」

オーラも懐から獲物を取り出すのだが、それを見た俺は血相を変える。

「待て待てオーラ！　さすがにデモンズダガーは不味い！　取り返しのつかない事態になるぞ！」

どんな頑強な敵であろうとも５％の確率で即死させる効果のあるデモンズダガーをこの場で使っては駄目だろう。

「構いませんよ主。当たらなければどうということはありませんから」

そう言い切るのは勝手だが、あのオーラから一発も貰わないという芸当をできるのか？　オーラは体は子供だから小さくて身が軽いので回避はおろか防御すら困難というのが俺の見立てだ。

ふと気づけば3人がすでに戦闘モードへ突入して激闘を繰り広げ、俺の意見など通りそうにない。

俺は周りを見渡すと5歩先に外へ通じる窓があるのを確認できた。

（イズルガルド、すぐに来てくれ）

そう心の中で呼びかけたのであと少しで来るだろう。

そして、竜の羽ばたき音が聞こえた瞬間俺は窓に突撃して外に出る。

『何用だユウキよ』

「野暮用だよ。しばらく上空を旋回していてくれ」

イズルガルドの問いにそう答えた俺は、先ほどまで俺がいた場所を見る。

そこには俺のことなどすっかり忘れて戦闘に熱中していた3人が確認できた。

3P（前書き）

かなり際どい表現が多数出てきます。
しかし、後悔はしていない。

3P

『お主も災難じゃな』

テレパシーが使えるイズルガルドの前にはどんなおためごかしも無意味だ。

案の定、イズルガルドはすぐに俺の置かれた状況を悟る。

「なあ、年長者の知恵として何か良い方法はないか？」

ここは人生の先輩である老竜――イズルガルドの意見を聞くことにする。

するとイズルガルドは重々しい様子で意志を伝えてきた。

『諦めよ』

「おい！？」

真面目な様子だったので耳を済ませていれば出てきたのがそんな一言。

俺がそう突っ込んでも仕方ないだろう。

イズルガルドは遠い目を浮かべながら。

『わしはなあ、これでも昔はもてていたんじゃ』

とか唐突に昔の思い出を語り始める。

『わしはあの里で最も強く、賢く、美しく、正しかった存在なのじゃ』

相当美化されているような気がしないでもないが突っ込んでも仕方ないので続きを促す。

『そんなわしは最もモテ、里中の雌竜がわしに夢中じゃった』

自慢話を始めるイズルガルド。

年寄りというのはどの種族でも共通なのか折に触れてはそのような話をしてくるのだ。しかも性質が悪いことにテレパシーで伝えてくるから聞き流すことができない。

『聞いておるのか？』

「はい、聞いています」

ううう……本当に辛い。

『で、のう。わしはそんなことに興味など無かったものじゃから全く相手にせんでおくと、ついに雌竜達が切れてのお』

その話をオチが分かるような気がする。

『あれは地獄じゃった。全員が協力してわしから精を絞り上げ、雄竜も血走っている雌竜が怖いから見て見ぬふり。あの時は冗談抜きで死ぬかと思ったのお』

「大変だったんだな」

その状況と凄まじく似てるがゆえにそんな感想を漏らしてしまう俺。

『だからのお、ユウキ。意中の相手、または気になる者がおるのなら早い所結んだ方がええ。でないとミイラになるぞ』

あまりに生々しい表現から俺はギクリとしてしまう。

腕を組み、顎に手を当てて考える。

気になる相手か。

そんなこと考えたこともなかった。

この世界に来てからずっと走り続け、色恋沙汰すら眼中になかったのを覚えている。

「うーん。意中の相手か俺は――」

「もちろん私よね？」

「なあっ！？」

隣にキッカがいたので俺は驚く。

「き、キッカ！？　どうしてここに？」

「空は私の領域よ、だから驚かなくていいじゃない」

そう言いながらにこやかに笑うが、俺はそれに同調することができない。

「キッカ？　聞き間違いでなければ俺を意中の相手とか言ったよな」

そう聞くと。

「ええ、その通りよ」

と、答えたので俺は頭を抱える。

「あのな、キッカもあれか？　俺を狙っているのか」

「もちろんよ、当たり前じゃない」

いや、当たり前じゃないだろう。

「誤解を解いておくけど、ユウキを求めるのは単に色恋だけじゃないわよ。この竜騎士軍団を維持するには私の血を受け継ぐ者が必要だから、その義務も含んでいるわ」

確かにイズルガルドから竜を貸し与えられる際そんな約束をした覚えがある。

「だったら身近な相手の方がいいじゃない？　そして、ちょうど良い機会だからここで既成事実でも作っておきましょうよ」

そんなに笑顔で語りかけられても反応に困る。

キッカは真っ赤な髪と凛々しいその立ち姿から戦女神とも呼ばれて男性はおろか女性にも人気があるのでその申し出は嬉しく思うのだが、突然の出来事ゆえに俺はどう反応していいのかわからない。

「一緒にククルスも呼んでおいたわ。だから3人で愉しみましょう？」

横を見ると小動物の印象を与えるククルスが顔を真っ赤にしながらコクリと頷く。クセっ毛のある栗色の髪の毛をフルフルと揺れている様子から嗜虐心がむくむくと湧いてくる、が。

「ちょっと待て、やるってここでやるのか？」

「もちろんよ、当たり前じゃない？」

何を当然なことを聞いているんだとばかりの態度に俺は目をむく。

「安心して、ここで一回やれば他の場所じゃ物足りなく感じちゃうほど刺激的よ」

確かにこの一歩間違えれば落下という状況は命の危険が感じるほど刺激的だろうな。

「ユウキ様、最初の一回は私も恐怖を感じましたが、それ以降は結構愉しいですよ」

ククルスよ、さり気なくカミングアウトするな。

誰もお前とキッカがそういう関係なんて知りたくない。

まずい。

逃げようにしてもキッカとククルスの2人が挟み撃ちにのように立っているためどこにも行けない。

「そうだ！　ギール、お前はいいのか？　誇り高き竜の背中で情交に励むのは間違っているだろう」

キッカのパートナーであるギールに叛意を促す。

キッカがいくら乗り気でもさすがに竜が反対すれば無理だろうと予想したのだが。

『知ってるか？　キッカとククルスの嬌声で飯は3杯いけるぞ』

このエロ竜が！

何で下等種族と呼んでいる人間の営みに興奮するんだよ！

『ギールよ、そなたも男になったなあ』

何かイズルガルドが感動しているし！

おかしいだろう、色々と！

そんなことを考えている間にじりじりと2人が迫ってくる。

「安心して、気持ち良くさせるから」

万事休す。

ここで終わりなのか。

と、考えた瞬間下から竜巻が出現し、イズルガルドごと俺を飲み込む。

「あ……」

とっさの出来事で反応できなかった俺はうっかり手綱を放してしまい、落下する。

見る見るうちに地上が近づき、空中に浮いているような錯覚に囚われる。

ああ、ここで終わりなのか。

これまでの走馬灯が蘇ってきた。

「さよなら、皆。こんな死に方は末代までの恥になるから俺の名は残さないでくれ」

「……何を言っているの？」

地面まであと数メートルという地点になると急激に落下速度が弱まったので俺は怪我することもなく地面に足を着くことができた。

「た、助かった……」

安堵のあまり腰を抜かして膝をつく俺。

2、3回深呼吸を繰り返していると俺に影がかかったので顔を上げると、そこにいたのは。

「ユキ……そしてミア」

魔導騎士団『火』のナンバー1とナンバー2がそこに立っていた。

「驚いたよ、何せ突然ユキが竜巻を起こすからね。どうしてそんなことをしたのか聞こうとしたらユウキ様が落ちてきたんだ」

ミアが苦笑しながらこれまでの経緯を話してくれる。

ミアはその社交的でボーイッシュな様子から男女問わず人気があり、特に女子から人気がある。しかし、キッカが「お姉さま」ならミアは「王子様」と評されるように微妙にターゲットがずれている。

「ああ、そうだったのか。少々やり方が強引だったが、窮地を救ってくれたんだ。お礼を――ってユキ？　俺をどこに連れて行く気だ？」

ユキが俺の袖を引っ張って強引に王宮の中へ入れようとする。その理由を聞いても一言「……行く」だけなのでいまいち容量を得ない。

ユキは今回と同じように万事において口数が少なく、必要なことでさえ言おうとしない。

かなり失礼なのだがそれでも仕方ないと苦笑できるのはやはりユキが持つ個性ゆえだろう。

天然無口系であるユキは背が低く、１７歳とは思えないほど幼い容姿であることも相まって小さな子を見る保護者の様な気分に陥ってくる。

そういえばキッカとミアがずいぶんユキのことを気にかけていたのは２人は精神年齢が高いから母性愛が働いたのだろうと推測する。

「あー、ユキ？　理由を説明した方が良いよ」

そのミアの言葉でようやくユキは立ち止まって俺の方を向く。

「……セクロス」

「っぶ！？」

突然の言葉で吹き出しても仕方ないだろうな。

そしてユキはもう伝えたとばかりに再度俺の袖を引っ張り始めた。

「いやあ、本当にユキは正直だね」

「何を笑っているミア！？　というか止めろ！　そのための副官だろうが！」

苦笑しているミアを俺は必死で呼び止めるのだが、ミアは止めようとする素振りすら見せない。

それどころから俺の反対側の腕を取る。

「な、何の真似だ？」

ミアにそう聞くと。

「何ってお手伝い。一応ボクも女の子だからさ、そういうのに興味があるんだよね」

紳士然とした対応をしながらもその瞳の奥に欲情の光が見えるのは気のせいだろうか。

「色々と可笑しいだろう！　大切な瞬間を誰かに見られるというのは恥ずかしくないのか？」

「……別に構わない」

「恥かしいけど、ユキの瞬間も見られるのだったら文句はないね」

「駄目だ！　こいつら！」

頭を抱えたいが両腕をがっちりと押さえられているため身動きすら取れない。

「王宮のこの場所だったらボクの部屋が近いからそこに行こう。ユキ、頑張ってね」

「……ミアも一緒」

「うん、もちろん」

ミアとユキによって連行されていた俺だが、何度目かの曲がり角

を曲がると、２つの集団が道をふさいでいた。

よく見るとその集団は魔導騎士団の面々。

２つに分かれているのは男性と女性に分かれているからだ。

「ユキ団長！　俺達は大馬鹿者です！」

男性の集団がそう叫ぶ。

「そうです！　私達はミア王子の幸せを素直に願えない愚か者よ！」

続いて女性の集団が後に続く。

「……どういうこと？」

ユキが首を傾げるのも納得だろう、俺もよくわからない。

「あー……つまりボクとユキがユウキ様と結ばれることが納得いかないと？」

この中で理解力が高いミアが唯一彼らが何を伝えたいのか分かったようだ。

魔導騎士団の面々はミアの言葉に頷きながら。

「そう、ユキ団長には永遠に純潔を貫いてほしいのです！」

「ミア王子は誰の者でもないのよ！」

涙ながらに訴えてくる魔導騎士団。

おい、お前らは冗談抜きで大陸トップレベルの魔導騎士団『火』のメンバーだぞ。たった一人で１００もの人間を薙ぎ払うことができるお前らがこんな低レベルな争いをしていて良いのか？

余所の国の者なら笑えるかもしれないが、残念ながら責任者である俺にとっては笑いよりも頭痛の方が大きい。

「……邪魔するの？」

「っ！」

そんなバカなことを考えていると隣のユキの魔力が膨れ上がり、凍て付く空気があたりに充満する。ユキの強さは尋常でなく、あまりの強さからユキ一人で１０００人の軍隊を凍り付かせることができるというのが専らの評判だった。

「やれやれ、ここは一つお灸を据えないとね」

ミアも好戦的な笑顔を丸出しにして威嚇する。普段は団長を務めるユキの代わりとして魔導騎士団を統率し、さらにユキが強すぎるので目立っていないが、ミアも一騎当千な魔導師で小さな村一つ程度ならすべて焼き尽くせるだけの魔力と技量を持っている。

「ひ、怯むな同志よ！」

２人の臨戦態勢によって彼らは委縮するもすぐに持ち直す。

「そうよ、私達の結束力を見せるのよ」

魔導師というのは集団でこそ威力を発揮するので、個々の力量よりも団結することの方が重要である。

たった一人で軍隊や村を殲滅できる2人が異常なのだ。

ユキもミアも戦闘状態に入ってしまい、すでに俺のことなど眼中にない。

いい機会だ。

逃げさせてもらおうか。

抜き足差し足忍び足で移動する俺。

駆け出して行った後、後方から爆音が響いてきたのでおそらく戦闘に突入したのだろう。

「修理費は魔導騎士団の予算から引いておくか」

物が壊れる音をＢＧＭにしながら俺はそんなことを考えた。

3P（後書き）

ミアって実はかなりエロエロでした。

修羅場（前書き）

どんどん過激になっていくな……

修羅場

「……疲れた」

王宮の廊下を一人トボトボと歩きながらそんなことを呟く。

「もしかしてこれが暴発か？」

イズルガルドが言っていたことを思い出す。

雌竜に対してあまりにつれない態度を取りすぎたがゆえに雌竜が目を血走らせて襲いかかってきたと。

「ああ……なんか人生最大のピンチを迎えている気がするな」

少なくともこんな腹を空かせた獣を相手にするような恐怖感は味わったことがない。

そんなことを考えていたせいか、俺は曲がり角からやってくる人影に気付かなかった。

「おわっ！」

「え？」

まるで壁にぶつかったような感触が俺の全身に広がり、痛さで悶絶する。

「ユウキか、ごめんね」

痛む鼻を押さえながらぶつかってきた人影を見ると、そこには人一倍体がでかいクロスがそこにいた。

「ふむ、ユウキ様よ。少し前方不注意ではないのか？」

クロスだけでない、レオナの声も聞こえたことからクロスの陰になって見えない場所にいるのだろう。

だから俺は「まあ、その通りだな」と答えておく。

「しかし、今日はいつになく女性陣が餓えているね」

クロスはすでにこの騒動を知っているのかそんな感想を漏らす。が、俺はクロスの言葉の中に聞き逃せないワードがあったのでそこを聞いてみる。

「いつになく？」

俺が首を傾げていたのを見たクロスは呆れ気味に「気づいていなかったんだね」と呟いた。

「気づいていないとか何の話だ？」

「いや、だから女性達の好意の話」

「そんなのがあったのか？」

少なくとも昨日までは普通に過ごしていたはずだ。出会ったら声をかけて、時間が空いているなら共に食事をしたり世間話に花を咲

かせたりと親睦を深める普通な対応しかしていないはずなのに。

「うーん……何て言えばいいのかな」

クロスは何かを俺に伝えたいようだが上手い言葉が出ず、四苦八苦しているように思える。

「そこから先は私が伝えた方が良さそうだな」

クロスが詰まったので代わりにレオナが前に出る。

レオナはクロスの元教官で現在は恋人同士。常に軍服に身を包み、凛とした態度を取るので評価が高い。ストレートな金髪を腰まで伸ばし、右眼に眼帯をつけている他には眼福といえるほど豊かな体が特徴的だ。特に胸は軍服の上からでも大きく主張し、それに吸い寄せられる人間が後を絶たない。

「ユウキ様よ、あなたは御自身の魅力にお気づきでない」

「俺に魅力？　そんなものあるわけがないだろう。もし俺にあるとすれば運だな、それが多大にあったから俺はお前らに出会えた」

今はジグサリアス王国の王の位置に立っているが、それにはキッカ達を始めとした仲間に出会えたからであって、その内の一人でも欠けていれば今の俺はなかったといえる。

が、レオナは俺の答えに満足しなかったらしい。首を振ったのち熱く語り始める。

「いや！　ユウキ様は気付いていない！　一介の浮浪児から王にま

で上り詰め、あまつさえ三国を統一したユウキ様に惚れない女がどこにいる？　生ける伝説を作り上げたユウキ様に我々女性は憧れを抱き、想像を膨らませるのだ」

「膨らませるのは勝手だが俺はそこまで凄くないぞ、却って幻滅するのがオチ――」

「いや！　それは違う！」

ついにレオナは拳を振り上げて独裁者顔負けの演説を始める。

「出会って分かるのだ！　ユウキ様は想像以上だと！　何をされても許す限りなき慈愛の深さと時折見せる残酷ともいえる厳しさ！　そのギャップに私はもう……」

「ちょっと待てレオナ、少し抑えてくれ。キッカ達に気付かれたらまずい」

俺は制止を求めるのだがレオナは全然聞いてくれない。むしろさらにヒートアップして己の豊満な体を抱き締める。

「クロス！　レオナはお前の恋人だろう!?　恋人なら相方の暴走を止めてくれ！」

俺は必死になって訴とようやくクロスが動いてくれた。

「レオナ、そろそろ冗談は止めようよ。ユウキが困っているよ」

「む、そうか。すまんな」

するとレオナは先ほどのヒートアップぶりが嘘のように冷静さを取り戻す。

「冗談だったのか今のは！？」

「「うん」」

俺の叫びに対して見事にハモる2人。

その阿吽の呼吸に俺は脱力してがっくりと膝をつく。

「頼むからこういう時の冗談は止めてくれ」

「ハハハ、それはすまんな」

俺のボヤキに対してレオナは全く反省せず、笑い飛ばした。

「おお、そうだ。面白いことを思いついたぞ」

レオナはそう言って手をポンと打ち、素敵な笑顔を浮かべながら自分の腰に差してあった剣をクロスに持たせる。

「ちょ、おい」

俺が血相を変えるのは、クロスは剣を抜くと凶暴になって手が付けなくなるからだ。性質が悪いことにこれが戦場なら冷徹とも取れる思考ができるのだが、今回の様な日常だと単なる暴れん坊になってしまうことである。

「そして！　時折私は想像してしまうのだ。もしクロスと出会う前

ならどうなっていたかと！　いや、間違いなくユウキ様を選んでいただろう！　何故なら――」

「ストーーップ！！」

クロスに剣を持たせた状態だと冗談が通じない。

だからこの類でも真に受けられるととてつもなく悪い状況になってしまうのだ。

恐る恐るクロスの方向を見ると表向きは変わっていない。

「いや、クロス？　これは戯言だからな？　あまり気にす――」

「分かっているよユウキ」

何故だろう。ニコニコとクロスは笑っているのだがその表情が何よりも怖く感じてしまう。

まずい、これは本気で怒っている。

「いやあ、前々から警戒していたけどついにこの日が来たか。この無自覚天然たらし屋は人の恋人まで奪っちゃうんだね」

「いや、待てクロス。これは誤解だ冤罪だ。俺は断じてそんなつもりでは」

俺は両手を突き出して身の潔白を訴えるのだが、クロスはその笑顔を一向に止めようとしない。そして俺の肩に手を置いて。

「ねえユウキ、ちょっと向こうで訓練しようか？　ユウキって普段鍛えていないから良い機会でしょ」

「痛たたたた！　クロス！　落ち着け！　今のお前とすれば俺は絶対死ぬ！」

相当力を込めて握っているので俺は絶叫する。

「むしろ死んだ方が良いんじゃない？　恋人がいたとしてもユウキに夢中になる女性官吏が多いから、失恋した男性官吏が後を絶たないんだよね、これが」

「それこそ俺は知らん！　とばっちりだ！」

俺は渾身の力を込めてクロスの手を振り払い、じりじりと後ろへと下がる。

不味い。

本能が訴えている。

今のクロスに近づかない方が良いと。

と、ここでレオナが最悪の爆弾を投下した。

「そうだ。今度私とクロスとユウキ様で３Ｐでもしないか？　私は大歓迎だぞ」

「貴様は人の女に手を出しやがって！」

「出していない！　濡れ衣だ！」

剣を抜いて凶暴化したクロスから逃げるために俺は全速力で逃げた。

「あーーっはっはっはっはっはっはっは！　逃げろ逃げろー！」

レオナの囃子声が後ろから追いかけてきていた。

「待ちやがれこのたらし野郎が！！」

凶暴化したクロスは冗談というものが全く通用しないらしい。

あんな鎧を着ているにも拘らず俺と同じどころか僅かに速い速度で追跡してくる。

「ぐっ、このままでは」

遠からず俺は追いつかれてしまう。

そして、追いつかれれば待っているのは……

「死んでたまるか！！」

限界を突破し、さらに走ったおかげで少しだけクロスとの距離が開く。

このまま振り切れれば問題はないのだがその前に俺の体力が尽き

てしまうだろう。

何とか身を隠せる場所はないのか。

「師匠、こちらです！」

その時天の助けとばかりに近くの扉が開いて俺を招き入れるサラ。

俺は助かったとばかりにその部屋へ飛び込み、すぐに扉を閉めた。

「あの野郎！　どこへ行きやがった！」

凶暴化したクロスの叫びが小さくなり、ついに足音さえ聞こえなくなったところでようやく一息つく。

「た……助かった」

まさか冗談抜きで命を狙われるなんて思いもしなかった。

今更ながら体に震えが走り出す。

「師匠、ここに水があります。これを飲んで少し心を落ち着けてください」

俺を救ってくれたサラは置いてある水差しから水を汲みとり、近くのテーブルへと置く。

サラは昔ショートカットだったが、今はセミロングにまで伸びている。そして健康的に肢体が発達したのか、全体的に若々しい印象を与えるのだが、その瞳だけは昔と変わらず無邪気な光を湛えてい

た。

「ああ、すまないな」

冷静であれば、どうしてサラは水を汲んだのに俺に取りに行かせようとするのか疑問を持つはずなのだが、今の俺はクロスに襲われた後なのでそこまで考えを持たず、ただ言われるままに部屋の奥へと進んでしまった。

ガチャリ。

と、扉を閉める音が響いたので俺は血相を変えて振り返るとそこには笑顔を浮かべたヒュエテルさんが立っていた。

ヒュエテルさんはすでに３０代に差し掛かった妙齢の女性で、包み込むような包容力を持っている。ウエーブ状の髪や柔和な笑みを浮かべているのが相まり、接していると優しい気持ちになれるというのが俺の評価だった。

「ヒュエテルさん？　いったい何の真似かな？」

これまで一連の出来事から大よその予想はついていたが、それでも一縷の望みをかけて聞く。

「決まっているでしょう。サラちゃんのお手伝いですよ」

が、その希望は淡くも崩れ去った。

ヒュエテルさんはさらに続けて。

「鍛冶にしか興味を持たないサラちゃんが色恋沙汰に関心を示して相談してきたのです。ここは大人として応援をするべきでしょう」

「いや！　その理屈はおかしい！」

いったいどこの世界に２０に満たない娘にそんな手助けをする大人がいるのか。

「ヒュエテルさん、よく考えてみよう。多くの浮浪児を救ったヒュエテルさんが――」

「師匠！」

「おわあっ！」

サラの不意打ちタックルを受けた俺はなにも反応できず、サラと共に近くへあったベッドに倒れこむ。

「ど、どうしてここにベッドが。いや、計算したな！　ヒュエテルさん！」

断言できる。

これは絶対にヒュエテルさんが仕込んだものだ。

おそらくサラが俺に飛び込んだ位置にベッドがあるよう扉の鍵を閉めるタイミングを計っていたのだろう。

「サラ！　離せ！　この関係は間違っている！　俺とお前は師弟であり、こんな関係じゃないだろう！」

俺は何とか上に乗っているサラを引き離そうとするのだが、サラは万力で固定したかのようにビクともしない。

「師匠！　私は師匠のことが好きです！」

顔を上げてそう告白するサラに俺は。

「ああ、俺も好きだ。お前は本当によく出来た弟子だ！　だから離すんだ！」

「嫌です師匠！　絶対に離したくありません！　私は好きなんです！　師弟の関係じゃなく、男と女の関係として大好きです！」

サラは俺の胸で嫌々というようにぶんぶんと頭を振る。その度にサラの香りが鼻をかすめるので俺は劣情を抑えるのに必死となる。

「サラちゃん、もっと心に余裕を持った方が良いわよ」

と、そこでヒュエテルさんが優しくサラと俺を引き離す。

もちろん俺を逃さないことを忘れない。

「くそっ！　いったいヒュエテルさんのどこにこんな力が？」

手足をバタバタと動かすのだが、全然意味をなしていない現実がそこにあった。

そうこうしているうちにヒュエテルさんは俺の後ろに回って羽交い絞めにする。

「サラちゃん、まずはユウキ様の下を脱がしてちょうだい」

「ちょっと待てえええ！」

突然の言葉に俺は脊髄反射で突っ込む。

「ヒュエテルさん！　いきなり何を言っているの？　どうしてそこから始めるのか！」

俺は渾身の力でそう叫ぶのだがヒュエテルさんは全然聞いていない。

「はい、わかりました」

ヒュエテルさんの言葉に唯々諾々と従うサラ。

「サラ！　止めろ！　お前はこんなことをする人間ではなかったはずだ！」

サラは鍛冶のみを追い求め、純粋な光を瞳に浮かべるのが本来の姿だ。

しかし、今のサラはこれから行うことに興奮し、無邪気の代わりに妖しい色を瞳に浮かべている。

俺は必死で抵抗するのだが、サラは自分の両足で俺の脚を押さえてしまったため、完全に身動きが取れなくなる。

「大丈夫です。失敗はしません」

「失敗とか成功とかそういう問題ではない！」

俺はそう訴えるのだがサラは興奮しているのか耳に入っていないようだ。

「サラちゃん、教えられたとおりにしっかりとやるのですよ」

「はい、ちゃんとヒュエテルさんから教わった通りにすれば師匠は気持ち良くなるんですね、師匠？」

「上目づかいで尋ねるな！　変な気分になってしまう！」

ヒュエテルさんとサラの驚くべきやり取りに俺はサラの言葉にうっかり本心で答えてしまう。

「アハ、師匠もちゃんと私のことを意識してくれたんですね」

するとサラは新しい武器を製造した時と同じような至福の笑みを浮かべる。

「……」

いつもは純粋な子供みたいに無邪気な様子のサラが色欲に冒されている表情を見て興奮した俺はもう駄目かもしれない。

サラの両手が下にかかり、もう駄目かと思った瞬間に扉がすごい勢いで吹き飛んだ。

「あの野郎はここか！！」

扉の前には凶暴化したクロスが仁王立ちになって立っている。

「な、なんですクロス！？」

この突然の事態にヒュエテルさんも驚いたようだ。

そして、ヒュエテルさんの力が緩んだので俺は拘束を解き、窓際へと向かう。

「死ねえええええ！」

雄叫びを上げながら突っ込んでくるクロスから逃れるため俺は窓から外へ脱出した。

ここは3階だが、幸いにも軽業師の靴を装備しているので大怪我はしないだろう。

事実、着地しても少々足がしびれた程度で終わった。

俺は逃げながら飛び降りた窓の方を確認するとヒュエテルさんやサラ、そしてクロスが様々な感情を表情に浮かべていた。

悪いな、俺はこんなことで終わるわけにはいかないんだよ。

俺は手をひらひらと振りながらその場を後にした。

満身創痍

「……はあ」

王宮の庭をトボトボと歩きながら俺はため息を吐く。

軽業師の靴を装備しているから体は軽いのだが、心労によって足取りが重い。

「もう今日は寝よう」

こんな状態では仕事などできやしない。少なくとも今日一日はベッドに入って横になりたい。

「ここを曲がれば俺の部屋だな」

最後の廊下を渡る際にそう呟く俺。

いかんな。

疲れてしまって独り言が止まらない。

そう思いながら俺はその廊下を渡り切ると。

「あら、ボクじゃない？」

「ひっ！」

何故か計ったようにティータさんと鉢合わせしてしまった。

ティータさんは栗色の髪の毛をポニーテルにしており、いつも気さくな笑みを浮かべている。昔は薬屋さんの店主だったが、俺の要請によってフィーナの補佐役を頼んでいた。

「ちょうど良かったわ、ボクの判断を仰がなければならない案件があってね。尋ねようとしていたところなのよ」

ティータさんはそう言いながら俺に歩み寄ってくるが、今までの経験から俺は拒否反応を示し、体が後ろへと下がってしまう。

「ボク？　何で逃げるの？」

「よ、寄らないでくれ」

ティータさんが近づく度に俺は逃げるので、その様子を燻しかんだティータさんが片眉を上げる。

「何があったか知らないけど、私の要件は至極真面目よ。だから――」

「俺に近づくなー！」

俺は背を向けて脱兎のごとく逃げだす。

後ろから「ちょ、ちょっとボク！？」とティータさんの戸惑い声が聞こえた気もするが、今の俺には判断できる能力がなかった。

「……やってしまった」

しばらく逃げた後、俺は自分の行いに猛烈な自今嫌悪に陥る。

見る限りティータさんはまともで俺が勝手に疑心暗鬼を膨らませて逃げてしまった。

「後でティータさんに謝っておかないと」

疲れて判断力が鈍っていたとはいえ失礼なことを働いたのは事実。

後に謝罪する必要があるだろう。

「ユウキ王ですか？」

涼やかな声をかけられたので俺は視線を横に向けるとそこには深い青色をした腰まで長い髪と深い色の瞳を持ち、全体的にスリムな体の持ち主である双子の片割れのレアがそこに立っていた。ちなみにまったく同じ容姿をしている姉のフィーナもいるのだが、彼女はレアと違って活発的である。

「ああ、そうだが。どうした？　レア」

一瞬逃げようかと思ったが、先ほどの失態もあるためすぐに動くことができなかった。

逃げるかどうかはもう少し判断材料が必要だと考える。

「ええ、少しユウキ王に相談したい事柄がありまして」

ふむ、ティータさんと同じ類のものか。

それなら応じる必要があるな。

「分かった。いったい何の案件か聞かせてもらっても良いかな？」

「はい、伝えますのでもう少し近くに寄ってください」

ん？　何かおかしいな。

心なしかレアの雰囲気がおかしい気がするのだが、ああ言った手前、対応しないとまずいだろう。

だから俺はレアの言葉に従って足を進める。

「で、どういった内容だ？」

「はい、それはですね」

俺はレアの前に立って続きを促すとレアはまるで獲物を罠にかけたような笑みを浮かべる。

「双子丼ってどう思いますか？」

「っ！！」

気付いた時にはもう遅い。

俺は身を翻して逃げようとしたのだがいつの間にかレアと全く同じ顔をした姉のフィーナが反対方向に立ち塞がっていた。

「俺が一体何をしたー！」

あまりの状況に俺は力の限り叫ぶ。

「何もしていないから問題なのよ」

するとフィーナが呆れ調子で答える。

「そうです、その通りです」

レアもそれに便乗した。

「どういうことだ？」

「ユウキ王、私達は自分達の容姿に自信を持っています」

「そうね、昔はよく告白されたものだわ」

まあ、双生美姫と呼ばれていたから貴族達からの人気も相当あったのだろう。

事実、エルファが手を回してくれたとはいえこの双子を引き取るのにけっこう金がかかったし。

「ユウキ王に引き取られた際、私達は覚悟をしていました」

「エルファ様はああ言ったけど、やはりある時期になると求められるのかなって思っていたわ」

と、ここで2人は息を吸って同時に。

「「なのに！　いつまで経っても手を出さないってどういうこと！？」」

「どうもこうもせんわ！」

一卵性双生児のためか声の調子も全く同じなのでステレオで聞かされている気分になる。

「むしろ喜ぶべきだろう！　強制しないのだから！」

俺は両腕を広げてそう力説する。

本来なら彼女は奴隷として貶められるはずだったのに、それを救った俺に対してどうしてそんなに怒るのか理解できない。

「そうだとしても限度があります！」

「私達は女を否定されているように感じられるのよ」

「否定していない！　むしろ魅力的だ！」

仕事がなければとうの昔に抱いていた自信がある。

「それなら今すぐ抱いて下さい！」

「その証拠を見せてよ！」

「だから何でそんな結論に達する！？」

「私達はこの2年間戦々恐々でした！」

「いつ求められるのかと毎日ビクビクしていたわ！」

「そんなの知らん！　俺は始めから手を出さんと言ってあったはずだ！」

確かに初対面の頃、緊張に固まる2人を前に俺が示した仕事をやってくれるのであれば俺はお前達を拘束しないとして首輪を外させた覚えがある。

「そんな口約束なんて意味はないです！」

「性欲の前には理性も約束も紙切れ同然よ！」

「お前らは俺をどんな風に見てたんだ！？」

本能のままに生きる獣と同列視されてショックを受ける俺。

「とにかく！　私達を安心させて下さい！」

「私達は焦らされて喜ぶ性癖を持ち合わせていないのよ！」

「俺もそんなことなどしたくはないわ！」

そう叫んだ俺はまたも窓から外へ飛び出す。

ここは最上階付近なので落下するには危険だが、幸いにもこの下にはバルコニーがある。

案の定俺はそこへ無事に着地することが出来た。

「「ユウキ王！　また逃げるのですか！？」」

「今！　お前らに捕まれば全てを絞り尽されそうだからだ！」

双子の悲鳴に俺はそう返して部屋に入った。

「おお、王でございますか」

部屋に入るとエレナ子爵が俺の出現に驚いたようだ。

目を白黒させている。

エレナ子爵は女性でありながらクロスに次ぐ長身の持ち主で、その真っ赤でボリュームのある髪や豊かに突き出た胸、そして堀の深い顔立ちから激しい気性を感じさせる雰囲気がある。しかし、中身は潔白で、常に清貧を貫いている。常時は優しく非常時は勇敢として巷では貴族の鏡と呼ばれている。

「どうして外から参ったのですか？」

側近のキリングがそう聞いてきたので俺は顔を引き攣らせながら「聞かないでくれ」と答えておいた。

キリングはエレナの足りない部分を全て補っていると言っても過言ではない。ボブカットの亜麻色の髪や片眼鏡、そしてローブを羽

織り、口調も丁寧で礼儀を備えていることから知性を感じさせるので。副官というより教授と呼んだ方がしっくりくるだろう。

「あー、喉が乾いた」

先ほどツバイク姉妹と口論したせいか喉がヒリヒリする。

思えばあれだけ大声を出したのは久しぶりなのかもしれないな。

「喉が渇きましたか。少々お待ち下さい、水を用意させましょう」

エレナ子爵に命令されて水を持ってきたキリングが笑みを浮かべていたので訝しんだが、俺はそこまで注意を払わず「変だな」と思う程度に留めて杯を呷る。

冷たい感触が喉を通る――そこまでは良かったのだが、続く粉上の苦い感触に俺は咄嗟に水を吐き出した。

「ゲホッ、ゲホ……おい!?　これはまさか?」

俺の頭の中に警鐘が鳴り響き、すぐにこの場から逃げろと命令するのだが体は徐々に言うことを聞かなくなってくる。

「エレナ子爵!　お前もか!?」

体に力が抜け、床に崩れ落ちる直前に某皇帝のセリフを叫ぶのだが。

「お、王よ。一体どうなされましたか?　いや、キリング!　これは何の真似だ!」

エレナ子爵も想定外だったらしい、血相を変えてキリングに詰め寄る。

するとキリングはクツクツと笑いながら。

「エレナ様の恋心を叶えてあげようと思いまして」

と、言った。

「んなあ!?」

その台詞に形勢逆転され、エレナ子爵の顔が赤くなる。

「前々からエレナ様の様子を傍で拝見していましたが、王と出会ってからエレナ様は変わりましたよ。王のことを話す時はまるで夢見る乙女の様に顔を上気させて」

「言うな言うなー!」

エレナ子爵は顔をブンブンと振って否定することからおそらく図星なのだろう。

「もし機会があれば王にこの痺れ薬を飲ませてエレナ様の希望を叶えて差し上げましょうと思っていましたが、こんなに早く来るとは予想外でした」

満足そうにキリングが頷くが、当事者の俺にとっては笑いごとでない。

「おい、分かっているのか！　王に対してこんな無礼を働けば大変なことになるぞ！　今ならまだ間に合う、考え直すんだ！」

とりあえず建前を述べてみる。

キリングの行いは見方を変えれば王を害する意思があったと取られても仕方がない。

「だからエレナ子爵！　キリングの言うことに耳を貸すな！　ここで全てを失いたくないだろう」

エレナ子爵に対してはこのような言葉が一番効くだろう。事実、エレナ子爵は途端に視線を宙に彷徨わせ始めた。

「……やはり止めないか？　このような形は王の望みでなさそうだ」

さすがエレナ子爵。

ちゃんと現実を見ているな。

俺は何とか窮地を脱することが出来たと安堵したのだが。

「しかし、この機会を逃しますとエレナ様は二度と王と結ばれませんよ？」

「う……」

「上手くいけば王の寵愛を受けることが出来て傍にいることが出来るかもしれません」

「ううう……」

「そこを迷うなエレナ子爵！　失敗した際に失うものの方が大きいことを自覚しろ！」

俺はそうエレナ子爵を止めようと言葉を放つのだが、最後に言ったキリングの言葉が致命的だった。

「この痺れ薬もベアトリクス王女によるものです。『これなら我が君に飲ませて何をしても構わないわ』との言質も頂いていますから何の心配もいりません」

「ベアトリクスーー！！」

俺は断末魔の様な悲鳴を上げてしまう。

エレナ子爵も「そ、そうか。それなら大丈夫だな」と頷いているが、俺はそれよりもキリングの方が憎い。

「キリング！　お前はわざと隠していたな！？」

ベアトリクスからのお墨付きと最初に言えばここまでの喜劇を演ずることはなかったと断言できる。

さすがあの騙されやすいエレナ子爵をサポートしてきた者。

その腹黒さは他の者と一線を画している。

ベアトリクスと良い勝負をするのではと勘繰ってしまった。

「まあ、どちらでもいいではありませんか。今はエレナ様の体を愉しんで下さい。こう見えてもエレナ様はとても良い肢体の持ち主で――」

「そんなことを言う必要はないだろう！」

キリングの評価にエレナ子爵はそう叫んだ。

キリングは両手を肩の位置にまで上げて首を振りながら。

「しかし、王は反応していましたよ？」

「っ！」

俺の無意識による僅かな動きを見逃さなかったとは。

恥辱心で歯を食いしばってしまう。

「さあさあ、エレナ様。まずは王をベッドに運びましょう。脱がせること以降は私も手伝いますから」

何かとてつもなく不吉な言葉が聞こえた様な気がする。

そしてそのままベッドに横にさせられ、これで終わりかと覚悟を決めた瞬間。

コンコン

「ねえ、エレナ子爵？　ちょっと良いかしら」

絶妙とも言えるタイミングでティータさんのノックが入った。

「な！？　どうしようキリング？　この場面を見られたら私は終わりだぞ」

案の定、エレナ子爵は激しく取り乱す。

「落ち着いて下さいエレナ様。こういう時は落ち着いて対応すればよろしいのです」

が、残念ながらキリングは瞳の揺れすら見せずに対処案を提示した。

その後、俺を手短なシーツに隠して2人はティータさんを出迎えたのだが、2人はその場で済ませられる内容でなくティータさんの後についていった。

俺は痺れ薬を服用した量が僅かだったことが幸いしたのか2人が帰ってくる前に何とか体の自由を取り戻し、壁に手を付けながらその部屋を後にする。

「……しばらく誰にも会いたくない」

この2、3日は部屋に引き籠っておこう。

俺は自室へ向かいながらそんな決心をした。

満身創痍（後書き）

次が最後です。
いやあ、楽しかったな。

勝者は誰だ？（前書き）

これで終了です。
お付き合いいただきありがとうございました。

勝者は誰だ？

王宮の最上階。

もっとも豪勢な私室といえばこの部屋と言えるだろう。

何せフロア全体が丸々部屋になっているのだから。

俺的にはこんな豪勢な私室など要らんと思ったのだが、そこは皆の反対によって却下された。

「主が貧乏なお部屋に住まわれると私達も気を使います」

とはエルファの弁。

「とにかく、しばらくはこの部屋で過ごそう」

あまりに部屋が大きいため俺は敷居を用意し、多くのスペースを作ってそこに何かしらの物を置いていた。その中に食べ物もある。

そして、俺のベッドは２０人ぐらい同時に寝れるほど広い作りとなっていた。

「さて、ただい――」

「お帰りなさい、我が君」

一瞬ありえないものが見えた。

あの銀髪悪魔が待っていましたとばかりにニコニコと笑いながら待ち受けていたような気がする。

ベアトリクスは白磁の肌に透き通るような銀の髪を腰まで伸ばしている。容姿こそ可憐で儚く、浮世離れした美しさを持っているのだが性格は最悪で気に言った人間の困る顔が好きという非常に迷惑な趣味を持つ元シマール国第1王女。

目を擦って表示されたプレートを確認しても見間違いはない。

ここは何人たりとも人を入れたことのない俺の部屋だ。

「……疲れているのかな」

今日一日の疲労によって悪夢が見えたのだろう。

気を取り直してもう一度ドアを開ける。

「お疲れ様です、ご主人さ――」

「っく!!」

幻ではない！

ベアトリクスの横にいたのはあのお嬢様メイド。

白銀の髪に病的なほど肌が白さ。そこだけ見ればベアトリクスと似ているのだが、瞳に確かな意志を感じさせることからまだ区別が付く。王女なのに何故メイド服を身に着けているかというと、他人のために働くことに生きがいを感じるらしいから、動きやすいこの

格好が好きだと言っている元バルティア皇国第2王女。

これは現実だ！

この場所に俺の安息の場は無い。

だから俺は脇目も振らずに逃走しようとしたのだが。

「どこへ行こうとするのかな夫よ」

ガシッ！　とばかりに首を掴まれる。

俺はギギギと音が鳴りそうなほどぎこちなく首を回した先には見事な金髪が目に入った。

光り輝く髪に黄金比で調整された顔立ちから女神が降臨したかのように思わせる容姿を持つのはリーザリア帝国第3王女ヴィヴィアンであり、現在は俺の妃の地位にいる。相当な努力家であるがゆえに努力しない者は認めず、そんな人物が己の上に立つことを最も嫌うという困った性格をしている。

「なに、ちょっとティータさんに用があってな。緊急の用事だから離してくれるとありがたい」

俺はそう言ってヴィヴィアンの腕を払いのけて進もうとしたのだが、今度は別方向から誰かの手が伸びてくる。

「おい！　シクラリス！　放せ！」

その白い腕の持ち主はシクラリスだった。

「ご主人様、こちらの方がもっと大事です」

例え女性だと言っても2対1では分が悪い。俺は徐々にだが部屋の方へと引きずられていってしまう。

「あらあら、この時はこうするのよ」

「なっ！？」

ベアトリクスの声が聞こえたと思った瞬間俺の脚は払われ、うつ伏せに倒れてしまう。

「さあ、運びましょう」

ベアトリクスの合図によって俺はさしたる抵抗も出来ず、部屋の中へと吸い込まれてしまった。

「放してくれ～！！」

俺の悲痛な叫びにも拘らず、ドアは無情にも閉じられてしまった。

こういうのを何と言うのだろう。

正座している俺を中心とし、元王女3人がカゴメカゴメの要領で回り続けるというのは不気味以外の何物でもない。

「さて、我が君。私達はあなたに言いたいことがたくさんあるわ」

ベアトリクスが謡うようにそう言い聞かせる。

「まずはヴィヴィアンね、お願い」

その言葉を合図として3人は回り続けることを止め、そして俺の前にはヴィヴィアンが立ち塞がった。

「夫よ、そなたは妻である私に対して何か忘れていないか？」

心当たりがないので俺は首を振る。

結婚指輪は渡し、挙式も上げた。

他に何が必要なんだと考えているのか。

「なるほど、やはり知らなかったか。教えてやろう！　それは初夜だよ初夜！　夫婦で行われなければならない初夜を私達はまだしていないではないか！」

「いや、だって俺達は政略結婚であって純粋な愛ゆえではないのは広く知られていることだろう。それならしない方がましではないか？」

単に体だけの関係というのは俺の中の倫理が邪魔して実行することが出来ないんだよ。

「夫よ、それはちがう！　した方がましなのだ！」

ビシリと人差し指を突きつけてそう宣言するヴィヴィアンはさら

に続けて。

「私が夫と情交をしていないことを国民に知られたらどうなる！　私は夫に心はおろか体すら興味を持たせられない最悪の伴侶として認識されるのだぞ！　そんな屈辱を受けろと言うのか！」

「そんな大げさな」

俺は笑い飛ばそうとしたのだが、ヴィヴィアンの本気の目を見て止める。

「国民はまだ良い！　どうせ有象無象だ。しかし！　他の国から来た側室に憐みなんて持たれてみろ？　私は憤死する自信があるぞ！」

相当切羽詰まった様子で言い放つ様子からヴィヴィアンは本気なのだろう。

本気で馬鹿にされるのが慣れていないみたいだ。

「形だけでも私達は夫婦だ！　それならやっておくのが筋というものだろう！」

「いや、だからお前の気持ちはどうなんだ？　名誉のために純潔を失っていいのか？　それは大切な人のために取っておくべきものだろう」

「構わん！　いつ現れるか分からない人のためよりも確実に来る嘲笑から避けるほうが遥かに大事だ！」

心なしかヴィヴィアンがやせ我慢をしているような気がするが、

そこを突っ込むのは野暮だろう。

言いたいことを言いつくしたのかヴィヴィアンは俺の背の方へ回った。

「さて、次は私ですね」

そう言って次はシクラリスが現れた。

「ご主人様、私はすでに身も体もご主人様に差し上げていることはご存知ですよね」

その問いに俺は頷く。

バルティア皇国を降伏させた際、貢物として贈られたのがシクラリスであり、その時に彼女は俺に永遠の忠誠を誓っている。

「私はあの日からどんなことをされるのかと身を悶えさせました。何せご主人様は浮浪児から成りあがった者、そんな異常な方が普通のプレイじゃ満足できないと考えたからです」

「……おい、さりげなく俺を馬鹿にしたな？」

俺は片眉を上げるのだが、生憎とシクラリスは抗議を無視して先に進める。

「蝋燭、拘束、木馬、吊り下げ、鞭打ち、浣腸、二本差し、便器、ピアス、公開、輪姦等色々想像していましたが、ご主人様は何故どれもしないのです！？」

「やるやらない以前に想像すらせんかったわ！」

というかよくそこまでスラスラと頬すら染めずに言えたな。

俺はそこにびっくりだよ。

「嘘です！　男は全員そんな行為に興味を持つはずです！」

「勝手に決め付けるな！　少なくとも俺は絶対に興味など持たん！」

お前はどれだけ男に対して偏見を持っているんだ？

「だってお父様もお兄様も妻や奴隷に対してよくそういった行為を――」

「ストーーーップ！！」

これ以上続けさせると俺の中でバルティア皇国の評価がガタ落ちしてしまうので強制終了させる。

バルティア皇国はついでという形で滅ぼしたのだが、今となってはその判断が正しかったと考えてしまう。

現に俺はすでにバルティア皇国を滅ぼした罪悪感など綺麗さっぱり消えてしまったし。

「とにかく、私はそのような行為を受け入れることが出来ますから。もし興味があれば私に言って下さい」

うん、よく分かった。

お前には最高の教師をつけてやるから如何に男女が平等なのかを知れ。

シクラリスが横へと消えていくのを眺めながら俺はそう固く決心した。

そして最後はベアトリクス。

「アハハハハハ。こんにちは、我が君」

こいつは人を馬鹿にするときは笑いながら踊るという癖を持っている。今、結構テンションが高い様子からベアトリクスも絶好調なのだろう。

「ねえ、我が君。今回の騒動はどうだった？」

「どうもこうもしない、本当に災難だった」

傍目から見ると喜劇かもしれないが、実際に巻き込まれると悲劇だぞ。

俺の答えを聞いたベアトリクスは何がおかしいのかさらに声の調子を1オクターブあげる。

「如何だったかしら？　私の考えた遊びは？」

「は？」

今、こいつはとんでもないこと言ったぞ。

「名付けてユウキ争奪戦。参加したプレイヤーはどんな手を使っても良いから我が君の童貞を奪えば勝ち。そして勝てば向こう1か月我が君と共にいる権利を勝ち取れるわ」

「ちょっと待て、ベアトリクス。もしかしてお前が仕込んだと？」

「ええ、その通りよ。最近娯楽がなかったからいい暇つぶしだと思ってね」

なるほど、薄々感づいていたがやはりベアトリクスが一枚噛んでいたか。

道理で今日に限って女性陣が問答無用で求めてきたものだよ。

「誤解しないでほしいのは、仕掛け人は私だけど元々の原因は我が君よ。我が君が私達が日頃から発する好意に気付いていればこんなお祭りなどなかったと言えるわね」

「は？　俺のせい？」

突然出てきた俺の名に呆けるのだが、憎たらしいことに3人全員がウンウンと頷く。

「私が馬の骨を夫にするはずがないだろう」

「ご主人様として不適合ならとっくに舌を噛み切っています」

ヴィヴィアン、シクラリスがそう答え。

「私も馬鹿を我が君なんて絶対に呼ばないわね」

ベアトリクスもそれに同調した。

「あー……それは悪かったな」

ここは謝っておくべきだろう、俺は素直に頭を下げる。

「分かれば良いのよ」

――何故だろう　何故か殺意が　わいてくる

ベアトリクスの尊大な態度に俺はそんな一句が浮かんだ。

「さて、これでゲームは終了ね。勝者は私達3人。これから1か月ゆっくりと愉しみましょう」

「「「ウフフウフフフフ」」」

と、3人の笑いがハモったので俺は恐怖にビクリと震える。

そしてヴィヴィアンが俺を立たせ、シクラリスが先導した先にベアトリクスが待ち構えている。

「憎しみ合っていた三国の王女3人との乱交。これって一つの奇跡よね」

そんなことをベアトリクスが言う。

このままなら俺の争奪戦ゲームは王女3人の勝ちで収まっていた

だろう。

が、事態はそう易々と進まない。

俺がベッドに腰掛けた瞬間扉が勢いよく開き、多くの女性がなだれ込んできた。

「げ……」

俺がそううめき声を上げたのも無理ないだろう。

何故なら彼女達は今日、俺を追いかけまわしていた面々だからだ。

「予想通り主はここにいました」

「ユウキ様、申し訳ありません」

「また負けちゃったわ」

「……エルファ、アイラ、そしてオーラ」

先程まで戦闘していたのだろう。しかし、本当にエルファには攻撃一つ当たらなかったのかエルファが無傷の代わりにその分アイラとオーラがボロボロだった。

「イズルガルドの勘はもの凄いわ」

「お姉様が危惧した事態までまだなっていないようです」

「キッカにククルスも」

あの竜巻の余波なのか2人とも衣服の所々がほつれ、髪には木の葉が付いていた。

「……間に合った」

「ぎりぎりセーフというところかな」

「ユキとミア、よく無事だったな」

あの魔道騎士団と2人で相手にしていたはずなのに疲れの素振りすら見せないのはもはや化け物だ。

「あ！　師匠！　ここにいた！」

「あらあらサラちゃん、慌てなくてもユウキ様は逃げませんよ」

「サラ、ヒュエテルさん。よくここが分かったな」

俺を見つけて喜色満面のサラにそれを暖かく見守るヒュエテルさん。

「やっぱりここだったのね」

「こういう時の姉さんは役に立ちます」

「その瓜二つの顔はフィーナとレアか」

急いで来たのだろう、2人は息を切らしていた。

「ちょ、ちょっとキリング。急ぎ過ぎではないのか？」

「何を言っているのですか、私達が最後ですよ」

「エレナ子爵もキリングも来たのか」

最後に現れた2人を見て俺はそう呟く。

「これは予想外だな」

「ううう、後一歩だったのに」

「さすがのヴィヴィアンやシクラリスもこの事態には戸惑うか」

2人とも先程までの勝ち誇った顔が消えている。

「うーん、どうしましょうか。この状態から逆転できる手は……」

が、唯一ベアトリクスは諦めていないようで銀髪を弄くりながら策を考える。

そして出た答えが。

「決めた、やはり早い者勝ちよ」

そう言うが早いが俺を押し倒すベアトリクス。

ベアトリクスの行動を見た残りの１５人が一斉に動き出す。

そして次の瞬間には天国と地獄が出現した。

次の日

「こんにちは、ティータさん」

昼、俺はおそらく今日動けるであろうティータさんの様子を見に行った。

「ああ、ボク。おはよう」

ティータさんはいつも通りの笑みを返してくれる。

「それにしても今日は人が少ないわね。おかげで仕事が捗らないわ」

ティータさんがそうぼやくのも無理はないだろう。

何せジグサリアス王国の首脳部の大部分が欠席しているからな。

「クロスレオナはどうした？　確かあの2人は出勤していると思うが」

俺がそう聞くとティータさんは僅かに呆れのため息を吐きながら。

「昨日やり過ぎたからって両方とも腰を痛めて今日休むと連絡来たし……若いって良いわね」

どうやらあの凶暴化したクロスが際限なき欲望をレオナにぶつけた結果、自身すら痛めてしまったらしい。

まあ、あの2人から結構痛い目にあったので同情心など湧かないが。

と、ここでティータさんが年のことで黄昏ていたので俺はフォローする。

「いやいや、ティータさんも十分若いですよ」

「そう、ありがとう」

２０の前半ってまだまだ若いだろう。

「それで、他の皆はどうしたの？」

ティータさんがその2人以外のことを尋ねてきたので俺は肩を竦めて簡潔に述べる。

「全員俺のベッドで寝ている。何でも腰を痛めたらしく、今日は満足に動けないらしい」

特にベアトリクスはお仕置きの意味も兼ねて入念に相手をしてやったから2、3日は動けまい。

最後はもう泣いていたのか悦んでいたのか分からなかったからな。

「はあ？　何それ？」

ティータさんがそう聞いてきたので俺は曖昧にぼかすことにする。

「ところでティータさん。遅漏って何分ぐらいからだと思う？」

女性にする会話ではないのだが、ティータさんはこの類の話に免疫があるので安心してできる。

「うーん、そうねえ……」

「卑猥な雑誌を見ながら３０分以上擦ってようやく出るってどう思う？」

「ちょ！　それは遅漏とかそんなレベルじゃないわ！　もはや伝説の域よ」

ティータさんが血相を変えて捲し立てるので茶化してはいないだろう。

「ああ、そうか。ありがとう。ところでもう今日は仕事にならないから終わって良いよ」

「え、でも……」

「仕事をすることも大事だが、今回は誰も動いていないから仕事が回ってこない。だから今日は休んで精神を回復させてくれ」

「あら、そう。じゃあお言葉に甘えて」

ティータさんは少々驚きながらも今日を臨時休業にすることを了承する。

「さて……何をしようか」

そして一人になった俺はウーンと背伸びをしてこれから午後の時間をどうしようか考えた。

余談だがあの大乱交以降、女性陣は今後俺を相手にする時は2人以上で行うことというのが固く決められた。彼女達曰く「1人だったら確実に壊されるから」というものらしい。

「16人もの女性を相手にしなければならない……やれやれ、王様は大変だねえ」

俺はそんなことを呟いた。

勝者は誰だ？（後書き）

次は間章です。
この章と違ってシリアス多めにいきます。

リーザリオ帝国討伐（前書き）

ヴィヴィアンが主役です。

リーザリオ帝国討伐

「お初にお目にかかります。私の名はオーラ＝アメジストパープル＝ユクエリス、諜報部隊『林』の副主任です。これから先ヴィヴィアン様のお目付け役としてご同行させて頂きます」

丁寧な口調で淀みなくそう述べるのは私率いるリーザリオ帝国の軍を戦いもせずに敗北させたあの焦土作戦の実行役の副リーダーだった。

しかし、よくもまあその１ケタの女児にしか見えない容姿を維持できるものだわ。何か秘術でも使ったのかしら。

私――ヴィヴィアン＝リーザリオ＝カザクラはユウキ王の国を攻めて敗北し、彼の妃へなる代わりに母国を滅ぼすという契約を結んでいる。

そのための兵として同時期に滅ぼしたバルティア皇国の兵士と敗残兵、そして『林』の部隊を借りているのだが。

「そうそう。最初に言い含めておくけど、私達はヴィヴィアン様の命令に従う必要はないから」

このオーラの言うとおり『林』は実質別部隊で、私を監視するためにあるものだ。

ただ、私はこの措置をやりすぎだと考えている。

なぜなら。

「そんなに心配しなくていいわよ。今更反旗を翻したところで将来負けるのは確定なのだから」

ジグサリアス王国は仇敵だったシマール国を滅ぼし、バルティア皇国を降伏させた実力を持っている。

それにシマール国が誇る王国騎士団に圧勝した事例も鑑みると、裏切っても近いうちに攻め滅ぼされることは明白。それなら妃として収まった方がまだ未来があるのよ。

そう答えるとオーラは得心したのか一つ頷き「そう」と返した。

「さて、ここからリーザリオ帝国までのルートを確認するわね」

こちらの兵力は３０万で、向こうは４０万。

数も向こうが勝っているし、こちらの兵の半分は借り物の兵のため、窮地に踏ん張ることができないので旗色が悪くなればすぐに逃げ出すので、質も劣る。

「本当に、よくこんな状態で攻め滅ぼせなんて命令を出したわね」

「これぐらいしなければ国民は納得しないのよ」

私の漏れてきた愚痴にオーラはそう返す。

「ここからリーザリオ帝国の帝都まで進もうと思えば最低でも城２

つを通らなければならないわね」

一番近いのは三方が山に囲まれたベートリア城で壁が相当高く作られている。

このベートリア城はシマール国から侵略を防ぐための城だから防御力もリーザリオ帝国随一ね。

「さて、どうする？」

オーラの問いかけに私は少々考え、そして一つの案を出した。

「そうね、『林』は相手の陣地にまで手が伸びている？」

「詳しくはお答えできませんが、中級指揮官までに伝わる指示ならある程度こちらに入ってくるわね」

ジグサリアス王国の諜報部隊の優秀さに舌を巻くのだけど、それは表に出さない。

……全く、本当に恐ろしいわね。

「それなら彼らにこう噂を流して頂戴。『リーザリオ帝国のヴィヴィアンはジグサリアス王国から逃れてきた』と」

「ふうん、それで？」

「私は信頼できる手練れに酒と食糧を持たせて中に入るわ。そしてそれを飲み食いし、全員が油断したところで頃合いを見て火をつけ、城門を開くからその時に全軍を突撃させて」

「なるほどね、その手でいきますか」

オーラは納得するかのように顎に手を添えて内容を吟味する。

おそらく向こうは私が本当に寝返ったと信じていないから私が帰還したとして快く門を開くだろう。そして、私が持ち込んだ酒と食糧で宴会を開くだろう。

ベートリア城の兵士には悪いけどここで死んでもらうわ。

何を言っても言い訳にしかならないけど、私が妃になった暁には必ずリーザリオ帝国の民を救ってあげるから。

私は小さく黙祷した後、オーラに至急上記の伝言をベートリア城の陣中に広めるよう命令したわ。

作戦は終始上手くいったわ。

私が精鋭を連れてベートリア城の前に立ったところ、すぐに門を開いて私を迎え入れてくれた。

そして、その城の指揮官に持ち込んだ酒と食糧で慰労を行うよう頼んだ。

城門の向こうにまだ兵がいたので指揮官は難色を示したけど、そこは私が押し切った。

私はまだ王女の身分だったから向こうは逆らえないからね。

そして皆が酒を飲んで油断している時に、私の手練れが城門を開いて外の軍を中へ招き入れたわ。

その途中、事態を知った指揮官に殺されそうになったけど、『林』の主任であるアイラが表れて私を守ってくれたことを追記しておくわ。

「お見事です、ヴィヴィアン様」

隣のオーラが私を称賛するけど、自国の兵士を殺したという事実はやはり晴れないわね。

一応今は敵になっているのだけど、1か月前までは味方だったのだからそれも当たり前か。

私は勝利に沸き返る軍をしり目に息も絶え絶えになっているベートリア城の守兵の手を取る。

「最後に何か言いたいことはあるかしら」

するとその守兵は瞳に憎しみをみなぎらせ「……裏切り者」と残して逝ったわ。

「……次はアシアン城ね」

悲しんでいる暇はない。

泣いている暇があるのなら私は少しでも先に進み、この不毛な戦

いに終止符を打たなければならないのよ。

アシアン城は平原にある城であまり城自体の防御力はないが、代わりとして詰めてある人数が最も多い。

まあ、そこは帝都に次ぐ規模の都市にある城だからそうなっても仕方のないだのだけど。

「どうしますかヴィヴィアン様。おそらく向こうは野戦を仕掛けてくるかと思われますが」

オーラの言うとおり、数も質も向こうが勝っているのだから、障害のない野戦を行ったほうが効率がいい。

「そうね、食糧と金はどれくらい使ってもいいのかしら」

「ふむ、相当な猶予はありますがどうなされるおつもりで」

「簡単よ。向こうは数が多いといってもそれは食い詰めた連中が大半で、愛国心なんて高尚なものは持ち合わせていないわ。食べさせてくれるのだったら彼らは喜んでこちらにつくわよ」

悲しい事実なのだけど、リーザリオ帝国において忠義の心を持っている兵士はごく僅かしかいないわ。兵士のほとんどが農民の次男坊三男坊で、食い詰めたから仕方なく兵士になった者が多いのよ。

「できるだけ一般兵士も気付くぐらいに派手に送って頂戴」

「わかりました。しかし、この策を確実なものにするために少々仕込みを行います」

「どのような内容？」

「『ジグサリアス王国へつけばもう飢えなくて済む』や『上官が送られてきた食糧を独り占めにしている』という情報を流すことです」

「それはそれは……」

私が言うのもなんだけど結構あくどいわね、それは。

もし上手くいけば向こうは戦うどころか組織を維持することすら困難になるわね。

けど……

「もう一つ付け加えてよろしいかしら」

そこまで能力が高いのならこの策も出来るでしょうね。

「今、あの城の指揮官はルール＝ウェスタン＝イザラニアというリーザリオ帝国きっての猛将よ。あのやかましい将軍がいる限り兵の動揺は少ないでしょうね」

３０代にも関わらず髭面で大柄な体躯の持ち主で、その野太い声で吠えるとリーザリオ帝国全土に響き渡ると噂されるほど声が大きいのよ。だから彼が一喝すると大抵の兵士は大人しくなるわ。

兵からも慕われ、帝国からも信頼されている希少な人材なのだけ

どやはり彼にも弱点があるのよね。

「ここに彼の母が書いた手紙があるわ。誰かこの手紙に書いてある筆跡を真似て将軍に送り付けて頂戴。『立派になったお前の顔を見せてほしい』という内容がいいかしら」

彼は親孝行な人物なのだから母の願いには逆らえないの。

「わかりました。そして、ルール将軍の母君がいる村にアイラ主任を送り込んでおきましょう」

「アイラを送っていいの？　彼女って確かあなたの上官でしょ？わざわざ上が行くのかしら」

「普通ならおかしいのですが、アイラは人を扱うことが不得手であり、単独潜入においては彼女の右に出る者がいないためそうなる役回りなのです」

つまり実質的な上官はあなたというわけね、ややこしい。

まあ、確実に捕獲してくれるなら問題はないわ。

「できれば生け捕りが望ましいのだけど」

ルールは殺すのに惜しい人材だわ。できれば信頼できる人間として私のもとで働いてほしいわね。

「アイラなら造作もありません」

そう返すことからオーラはアイラに対して絶対の信頼があるので

しょうね。

私はここまで決め、大きく伸びをする。

「さあ、後は結果を待つのみよ。しばらく兵士には休んでもいいと伝えてね」

後は自滅を待つのみ。

こちらはそれまでの間、この寒い気候になれない元バルティア皇国の兵士の体調を慣らしていきましょうか。

「さて、後は本丸ノースタジアね」

アシアン城も兵士達による不信によって関係が崩れ、それを抑える将軍もいなかったせいか、短期間で向こうは内部分裂を始めたわ。

兵士の損耗率が低く、多くの捕虜を捕えたので糧食に不安な面が出てきたことが懸念材料かな。

閑話休題

ルール将軍を捕えたのはいいけど、私の幕下に入る条件として将軍の力を使わずにリーザリア帝国を滅ぼすことが決まったわ。

まあ、本来なら彼の力などあてにしてなかったから別に構わないけど。

「帝都決戦といっても消化試合の側面が強いけどね」

オーラがそう呟くのも分かる。

すでに大勢は決している。

リーザリオ帝国において最大の防御力を誇るベートリア城は陥落し、交通の要所であるアシアンも抑えた。

後は戦わずとも持久戦に持ち込めばこちらが勝つというのが大方の見方だ。

現に利に敏い商人や貴族はこちらに阿り始めているし。

けど、軍の内情はそうでもないのよね。

特に食料が予定より消費速度が多いから、実際に持久戦に持ち込まれるとこちらが負けてしまう。

「さて、早いところ帝都を落としましょうか」

私はそう檄を飛ばして軍を進めたわ。

「やはりこれを使ってきたか」

私は帝都の前で呆然とする。

本来ならここから帝都までの道のりは一本道で木一本生えていな

い荒野地帯のはずなのだけど。今、私の目の前には多数の氷の壁が帝都を遮るかのように立ち塞がっていた。

「これは見事ですね」

近くに生えてある氷の壁を叩きながらオーラは感嘆の息を漏らす。

「中に土が見えることから、一度土壁を作り上げた後に上から水をかけたのでしょう。この寒いリーザリオ帝国の中でも最寒といえるノースタジア帝都周辺の気候だと一日で氷の壁が誕生するわ」

昔、シマール国からの侵略に対してこの戦法を用いた実例があった。

当時のシマール国は精強で、このノースタジアまで攻め入れられたけど、この戦法を使って撃退した史実がある。

「『火』も多少いますから魔導師によって溶かすことも可能ですが、そんなことをしていると先にこちらの糧食が尽きてしまいます」

オーラの言うとおりそんな悠長な方法など取っている暇はない。

この温度では溶かす傍から凍っていくわ。

だから私は大きな被害が出るのを覚悟して正面突破を敢行したわ。

帝都攻略からもう1週間

状況は芳しくない。

いえ、確実に進んでいるから成果は上げているのだけど死傷者が多すぎるのよ。

そして、それよりも大事な問題が食料。

もうこのペースのままだと帰りの分を計算すると後1週間で終わる計算となってしまう。

「どうも旗色が悪いようですね、撤退しますか？」

オーラがそう聞いてくるけど私は首を振ってその意見を却下する。

今ここで退けばリーザリオ帝国を落とすことが出来なかったとして妃に相応しくないと判断されてしまう可能性がある。

そうなれば後は惨めなもので私に行き場などなく、今度こそ死しか道はなくなるだろう。

しかも自国を攻め滅ぼそうとした忌むべき王女としての烙印を押されながら。

「そんな未来はごめんだわ！」

我知らず叫んでしまう。

考えただけで震えが止まらない。

地位も名誉もなく、ただ悪人として死ぬなんて。

何とか考えないと。

このリーザリオ帝国を滅ぼし、ユウキ王の妃としての地位を確立しないと私は全てを失ってしまう。

「……仕方ないわね」

私はある決断をする。

「食糧の配分を減らしなさい」

「しかし、それをしてしまうと兵からの不満が。ただでさえ結束力が低い我が軍がそんな真似をすると――」

「分かっているから早くしなさい！」

私の剣幕に押されたのかオーラはそれ以上何も言わず、ただ頭を下げたわ。

「予想通り、兵からの不満の声が上がっています」

オーラからの報告通り、突然食糧の配分を減らされたのでこちらも兵の怨嗟が聞こえてきていた。

「予定通りね」

「は？　どういうことですか？」

私の呟きにオーラは目を点にするけど、生憎とそれを気に留める時間はないのよ。

「オーラ、食糧の配分を担当する者を呼べるかしら」

「だから何が――はっ、まさか！」

オーラは途中で私の意図に気付いたようね。出会ってから始めて声を荒げたわ。

「何という非情な策だこと。これは絶対に真実を知られるわけにはいきませんね」

オーラの指摘も最もだろう。

今、私は何の罪もない者に濡れ衣を着せようとしているのだ。

本当に申し訳ないのだけど食糧の配分を担当している者を殺してその首を兵達の前に晒す。

罪状は兵士の食糧を誤魔化した罪。

そして兵の鬱憤が彼に向けられたところで食糧の配分量を増やして一気に帝都を攻め落とす。

それしか勝つ方法がない。

犠牲になる者は申し訳ないのだけど、贖罪として彼の兄弟と妻子の面倒を見てあげるから。

「もう一度言うわ食糧の配分を担当している者を呼びなさい」

けど、なぜかオーラは動こうとしない。

やはり非情過ぎてこの策は使いたくないのかと一瞬考える。

「……王のご懸念通りになりましたね」

そう言ってオーラは懐から一通の手紙を取り出す。

「もし、王妃ヴィヴィアンが非情な策を取るようであればこれを渡すようにと」

そしてオーラはその手紙を私に寄越したわ。

私は恐怖によって手が震える中、中身を取り出して確認すると。

「アハハハハハ！」

もう笑うしかない中身だったわね。

「如何なされました？」

オーラは片眉を上げて私に問いかけるけど、全然気にならなかったわ。

その答えとしてその手紙をオーラに渡す。

「こ、これは……」

オーラも目を見張っただろう。

そこに書かれていたのは私の罷免の類ではなく、このリーザリオ帝国で育成する植物の調理方法について書かれていたからだ。

あんな槇にしかならない植物が食べられるなんて考えたこともなかった。

アクが強くて渋く、食べられない類のものを中心として書かれたそれは現在の食糧状況をひっくり返す程よ。

「これで食糧の問題はなくなったわね。さあ、ノースタジアを攻略しましょうか」

どうして彼がこの北国で生息する植物の調理法を知っていたのか気になるところだけど、そこは後で問い詰めましょうか。

今は目の前の帝都を落とすほうが先決よ。

そして帝都を落とした私は意気揚々とジグサールに戻ったわ。

父様や兄様、姉様達は捕えて専用の場所で拘束してある。

自害しそうだったのをアイラが止めたらしい。

私としては情けとして殺したかったのだけど、アイラがジグサールへ連れ帰るというのなら反対はできないわね。

そこは負けた者として仕方ないと割り切るしかないわ。

さあ、中央広場が見えてきたわ。

どうやらジグサリアス王国の国民は私を認めてくれたみたい。

ふう、これで一つ目の難関を超えたわ。

次は王妃としての地位を確立すること。

今のままだと良い側室が来れば切り捨てられる恐れがあるから気を付けないと。

さて、宣言しましょうか。

私は王妃だということを皆に知らしめるために。

私の視線の先には夫のユウキ＝ジグサリアス＝カザクラがいて、両隣にはシマール国の王女とバルティア皇国の皇女が控えている。

全く三国を統一するなんて本当に彼は化け物ね。

「ユウキ＝ジグサリアス＝カザクラ王の妃！　ヴィヴィアン＝リーザリオ＝カザクラは！　リーザリオ帝国を打ち倒した！」

私は大きく息を吸ってそう宣言すると広場に集まった国民は歓喜が爆発したわ。

リーザリオ帝国討伐（後書き）

気付いておられる方もいると思いますが、作中に登場した策の元ネタは三国志演技に登場する曹操を参考にしています。

バルティア皇国侵攻（前書き）

今日は更新できました。

バルティア皇国侵攻

大空を飛行し、ついに私達はバルティア皇国の国境付近まで辿り着いたわ。

「私達の役目はバルティア皇国の足を止めることよ！　応戦せずに船を狙いなさい！」

お姉様の凛とした声音が響き渡ると私――ククルス＝トパーズイエロー＝フォンテジーを含めた竜騎士軍団『風』の隊員は自然と身が引き締まる。

ああ、本当にお姉さまは素敵だこと。

真っ赤に燃える髪の毛に燃えるような瞳に加え、全身からあふれ出す灼熱の雰囲気に私はもう身も心も燃やされつくしたわ。

「……ククルス、後で相手をしてあげるからその締まらない顔を引き締めなさい」

あらいけない。

いつの間にかお姉様が私の前まで来てジト眼で呆れかえっていたわ。

心なしか他の隊員の目が「またかよ」って訴えているし。

コホン

私は一つ咳払いをして調子を取り戻す。

「さて、キッカ隊長の仰る通り私達の目的は敵の足止めであって数を減らすことじゃないわ。だから無駄な戦闘など行わず、粛々と任務を遂行すること」

私の最終確認に全員が頷く。

私が選んだだけあってこの『風』に属する者は胆力と判断力を高いレベルで兼ね備えているわ。

まあ、引き抜いた人間のほとんどが軍の幹部またはエースだったからジグサール首脳陣は大変だったそうだけど。

閑話休題

「作戦通り、隊を2つに分けます。一つは船を焼き払うための隊でもう一つは相手の竜騎士団を撃墜することよ。後者はキッカ隊長の元に集まり、前者は私の所へ来るように！」

あまり大声は出しくないのだけど、ここは私が言わなければならないから仕方ないわ。

そんなことを考えながら私は弓を番える。

私達の隊は全員火矢を準備しているのよ。

火なら簡単に燃やせるからね。

わざわざ近づいて撃退される危険性を増やしたくないし。

代わりにお姉さまの隊は弓の代わりに長い槍を持っているわ。

別段変なところはなく、槍が空を飛ぶ者の標準装備と言えるわね。

「キッカ隊長、その人数で大丈夫でしょうか」

私が不安がるのはお姉さまが最も危険な場所に加え、槍を持っている者はお姉さまを含めて5名ほどしかいないからよ。

いくらお姉さまが強いからといってもバルティア皇国は１０体控えてあるようだし、こちらは２０体もいるのだからもう5体そちらに回してもいいのではないかと考えるわ。ちなみに残る7体はリーザリオ帝国の援護に向かっているわね。

もしお姉さまに万が一があると私はどうすれば……

「心配しないでククルス、私は死なないし負けない。それは決定しているのよ」

お姉さまは相変わらず根拠のない自信を示すけども、何故かお姉さまの言葉にはそうだと信じさせてしまう何かがあるわ。

『安心しろ小娘、我がついているのだ。養殖で育った同族などに後れは取らぬ』

お姉さまの相棒である竜のギールもそう励ましてくる。

確かに私達の竜は育てたのと違ってスピードもブレスも段違いだけど、その中でもギールは別格ね。

『風』の中の模擬戦でお姉さまとギールのペアに勝とうと思えば少なくとも3人は向かわせないと食い止められなかったわ。

そんなことを考えているうちに停船場が見えてきたわ。

「総員！　火矢を準備！　狙いは船！　放て！」

私の掛け声を合図にして２０体の竜騎兵から一斉に射撃が行われたわ。

向こうも必死に消火活動しようとしているけど、空から射ている私達の攻撃の前に無力。

向こうの努力も空しくあの停船場にあった船は軍事物資もろとも灰へと成り果てた。

「進行方向を7時へ！　その先に停船場があるわ」

『林』の部隊からの情報によって私達は何の抵抗も受けなく次々と船を燃やしていたけど、４つ目になるとようやく竜騎兵が現れたわ。

「やっと来たわね、待ちくたびれちゃった」

予想はしていたけど、始めて見る他国の竜騎兵に私を含めた全員が緊張していたけど、お姉さまのその言葉によって多少雰囲気が軽くなった。

「さて、私が突っ込むからルートとワーギは私の後に続いて。そし

て残りのアオルとシャラは討ち洩らしを防いでね」

そうテキパキと指示を出したお姉さまは敵の中へと突っ込んでいく。

その様に私達は一瞬呆けたものの、指名されたルートとワーギは慌ててお姉さまの後を追ったわ。

そこから先はなんと形容すればよろしいのかしら。

４世代前と次世代との戦いといったほうがしっくりくるわね。

たまにユウキ王が練習中に現れて幾つかの技を提示したのだけど、それが実戦で使用するとここまで華麗かつ圧倒的だとは思わなかったわ。

確かユウキ王が言っていた技名――ロールやループ、旋回はまだ私達も使えるにしろ、その先のインメルマンターン、スプリットSやスライスターン、バレルロールを実戦で使用できるのはキッカお姉様しかいない。

それら華麗な技を自在に操り、敵を撃墜する様子はまさしく戦乙女。

美しいという言葉以外見つからなかったわ。

お姉さまが選んだ４人も私達と違って一通りの技が使えるけど、実戦に使うのには心もとなく、お姉さまの領域には遠く及ばない。

お姉さまは「ギールだからここまでできるのよ」と笑っていたけ

ど、例え私達の竜がギール並みの強さを持っていても無理だというのが共通の見解よ。

あの空中演武はお姉さまだからこそできること。

「さあ、次の停船場へ行くわよ！」

撃墜数8という圧倒的な記録をたたき出したお姉さまは凛とした声で竜骨の槍を突き上げ、そう宣言したわ。

一応ボク――ミア＝ガーネットオレンジ＝ヴァルレンシアは伯爵の跡取りだったんだけど、それを蹴ってユキについたことは間違っていなかったと思うね。

確かにミドルネームのキャストウイッチを失ったときは僅かな寂しさも覚えたけど、今はもう過去の話になった。

ユキは可愛く、いつまでも愛でていたくなるようだけど、それを抜きにしても本当に彼女を敵に回さなくてよかったよ。

「……この氷はあと5分持つ。だから早く」

いくら大陸は広いといってもこのバルティア皇国中を流れる川らを真っ二つに割って凍らせる芸当をできるのは多分ユキだけだろう

ね。

昔、ユキが流れる川を割って凍らせる瞬間を見たボクはおろか『火』の団員全ての目が点になり、ユウキ王でさえも「まるでモーゼだな」と苦笑していたからどれだけすごいか理解できるだろう。

今、ボク達『火』は『山』の中でも速さに特化させた軽騎兵を先導してバルティア皇国の皇都へ侵攻中だ。

ユキが川を割り、凍らせて作った道を渡ることの繰り返しで直接皇都を攻める。

この戦法にはバルティア皇国もビックリだろうな。

何せ圧倒的な障害として自分達を庇護していた川が全く役に立たないんだから。

向こうの慌てふためき様が目に浮かぶよ。

この事態を何とか打破しようとする動きもあるけれど、そのための足はキッカ率いる『風』によって潰された。

もうほとんど詰みの状態だね。

だからボクは鼻唄交じりに進んでいたけれど、やはり向こうも最後の意地だけは通したいらしい。

幾つかの川を渡り、そして皇都を目前とした川の対岸に軍を展開しているのが見受けられる。

「……ミア」

たったそれだけでユキが何をしてほしいのかが伝わってくる。

思えば学生時代からの付き合いだったからね、ユキが何を求めているのか大抵分かるんだよ。

ボクは腰に携えたあった杖を手に取る。

その先には純度の高いルビーが埋め込まれており、魔力の媒体としては十分だ。

さてと、あの兵士達には悪いけれど、これも戦場ということで。

「サラマンダー」

ボクの呼びかけに対して杖の先から蛇の形をした炎が出現し、それが時間を経つごとに大きくなっていく。

「これぐらいで十分かな」

先日の貴族連合を燃やし尽くした炎より少し多めに調整する。

「皆！　ボクの攻撃の後に魔法を放つように！」

ボクはそう宣言した後召喚した炎を飛ばす。

一瞬の静寂、そして向こうの陣地が一気に燃え上がった。

そしてそれを合図にして『火』の団員が援護のための魔法を発射

し、取り逃した敵を殲滅する。

「魔法はこうやって使うものだよ」

何もなくなった向こうを見やってボクはそう宣言した。

「……やりすぎ」

ユキがそんな風に叱るけど、ボクは首を竦めるだけで終わらせる。

だって炎が好きなんだもん。

あの揺らめきを見ていると心が躍るんだよね。

そして、ボク達がここまで強いのはわけがある。

もちろんユウキ王が示した失われたはずの古代魔法や魔力伝導率の高い装備もあるけれど、何と言っても『火』の魔法訓練はユウキ王が開発した意図的に魔力が薄い部屋で行っているのが大きい。

あそこで行うと魔法が発動しにくいので苦労する代わりにあの部屋で魔法が使えたのなら、通常時だと2、3倍の威力が発揮できるんだよね。

しかも『火』の装備一式は身に着けているだけで魔力密度が濃くなり、威力も規模も上がるんだ。

冗談抜きで『火』は大陸最強の魔導騎士団だと思うな。

そして大陸最強の魔導師はもちろんユキだね。

そう考えているうちにユキは馬に乗って出発準備を整える。

もう敵の主力は消し去ったから後は制圧するだけだね。

「さあ！　狙うはバルティア皇国皇都――水上都市ファルケニア！
我らの強さを皇民に見せつけぞ！」

ボクがそう宣言すると同時にユキが皇都までの最後の川を割ったので、ボク達はフォルケニアへ一直線に進んだ。

バルティア皇国侵攻（後書き）

前話のルール将軍の年齢ですが５０代から３０代へと変更しました。

弱者

破城槌が城門を叩く音がこの玉座にまで聞こえる。

今、この場には私と側近――ワークハードの2人しかおらず、他の者は逃亡したかそれとも捕えられたかのどちらかであろう。

「フォルター宰相……」

「分かっている」

私の教育係であり今は知恵袋として私を支え続け、すでに初老の域にさしかかっているワークハードが言い難そうにしている事柄がなんなのか私にも十分理解できた。

王都カリギュラスの門は『林』と名乗る部隊によって大した抵抗もできずに開け放たれてしまった

そして必殺ともいえる街中を火の海に変え、奴らを混乱させる策を用いても奴らはしっかりと統率され、逃げ惑う住民の中に潜んだ刺客さえも冷静に対処してみせた。

城を守る近衛騎士隊もあのキルマークが率いる王国騎士団を破ったジグサール騎士団の前に手も足も出ないのは明白。

しかも聞くところによるとジグサリアス王国はシマール王国のほかにバルティア皇国とリーザリオ帝国を同時に相手をしているとの報告も入ってきている。

「なあ、私はどこで間違えたのだろうな」

ワークハードに問うが何も返ってこず、重苦しい沈黙が辺りに横たわる。

「国を守るために妹を謀殺しようとし、仲間であった貴族の大半を失い、弟のキルマークを戦死させ、さらに王都を焦土に変えても撃退しようとしたにも拘らず上手くいかなかった……ハハハ、もう笑うしかないな」

これまでの行動を振り返るともはや自嘲しか出てこない。

国のためだと思ってした行動がすべて裏目に回り、今はシマール国の終焉を迎えようとしている。

「リーザリオ帝国が攻めてきた時、私は己の迂闊さを呪った。おそらくあの甘言に惑わされて妹を謀殺した罪をカザクラ男爵に被せてしまったから道を踏み外してしまったのだろう」

あの時はああするしか手段は無かったのだ。

騎士団は貴族を嫌い、貴族も騎士団を嫌っている。

国が疲弊していっているにも拘らず、自分達は王宮で泥沼の争いを続けていた。

そんな不毛な争いを止め、国のために尽くしたいという想いは兄弟ともあるのだが、お互い彼らの後ろ盾がないとまともに発言すらできない立場。

そんな中、一人の者がある意見を出した。

それは近年急成長したカザクラ男爵に末っ子であるベアトリクスを謀殺したとすれば2人は共通の敵が出現したとして纏まるのではないかということだ。

骨肉の争いを止められるのであれば是非もない。

キルマークも賛同していたから悪いとは思いつつ妹は死んでもらうことに決まった。

妹は王宮内の誰の派閥からの後ろ盾が無いのでいなくなったところで大して影響はなく、さらにカザクラ男爵も一介の浮浪児が由緒ある者よりも力を持っていることが気に入らない貴族が多かったので、目論見は成功して私はキルマークと再び手を取り合うことが出来た。

しかし、ここで予定外のことが起きる。

謀殺するはずの妹がある『草』の手引きによって我々の手から逃れてカザクラ男爵の領地へと逃げ延びたことだった。

カザクラ男爵は国のために死んでもらう予定だったから別にどういうことはないと踏んでいたのだが、その目論見は甘かった。

あの妹に参謀としての才能があることを見抜けず、私は味方である貴族の大部分を失う結果に終わってしまった。

そのことに激昂した貴族は王国騎士団の総力を挙げて弔い合戦を行おうと提案したのだが、キルマークが反対する。

キルマーク曰く、ジグサールの騎士団は3回も負けており、先程の敗北も貴族達の油断があったから起こってしまった悲劇だという。

ここで総力挙げてしまえばこちらは後世の世まで大人気ないと評される可能性があるので、向こうが宣伝している通り3万で迎え打てば良いと述べた。

さすが名誉を重んじる騎士団の畑から育った者の意見だと考えたのだが、それだと貴族達の気が済むわけがなく、何としてでも自分達の同胞を多く殺したカザクラ男爵の一派を完全に粉砕したいようだった。

いつまで経っても議論に終わりがなく、辟易していた頃に妹の謀殺を甘言した者が手を挙げたのだ。

彼の発言は驚くべき内容だった。

彼はリーザリオ帝国やバルティア皇国など国境と接する兵も呼び寄せてシマール国の全兵力を叩きつけ、それによってシマール国の盤石さを国の内外に知らしめるというものだった。

そうなると他国からの侵略も懸念されていたのだが、向こうは3万しかいなく、こちらは５０万以上なのであっという間に決着が付くと言う意見も出た。

血気盛んなキルマークがその意見に乗り気だったが、その５０万を集めてもロクな連携が取れないので、妥協案としてすぐに連携が取れるほど練度の高い兵で構成した６万で迎撃することに決まった。

今となってはもう遅いが、あの者はリーザリア帝国と繋がっていたのだろう。

リーザリオ帝国とバルティア皇国が侵略してきたという報と同時に彼が消えたことから、その確信はますます深まった。

しかし、私はこの事態こそ国の危機としてカザクラ男爵と休戦を模索したのだが、その構想は水泡に帰す。

何せ向こうはこの事を予期していたかのような対応を見せ、こちらの助けなどまるで必要なかった。

こうなると向こうは私達と組む利点が無い。

それならカザクラ男爵が立国時に宣言した通り、この国を滅ぼした方が良いだろう。

事実、何人かの貴族が降伏したのだが、ほとんどの者が私腹を肥やした咎を受けて処刑されている。

「……うっ」

知らずに涙が零れてしまう。

どうしてこんな事態になってしまったのか。

どうしてシマール国が滅びなければならないのか。

どうしてその時が私の代なのか。

どうして……

私が嗚咽を漏らしている間にワークハードは何も声をかけてこなかった。

本当によく出来た者だと思う。

振り返ればこの者だけがカザクラ男爵と敵対することを最後まで反対し、逆に手を取り合うことを進言していた。

あの時、その忠言を受け入れていればどうなっていただろう。

もしかしたら……

「……仮定の話をしても仕方ないか」

その言葉と同時に私は深くため息をつき、玉座に深く腰かけた。

「ワークハード、宰相としての命令だ。私を殺せ、そしてその首を持ってカザクラ男爵、いや、カザクラ王の元へ参るが良い」

「……」

側近であるワークハードは首を振って拒否しようとするが、私は翻さない。

何せこの者はこの腐りきったシマール国の中でもまだ良心のある殺すには惜しい優秀な人材。

向こうも潔癖で知られるワークハードなら迎え入れることが出来

るだろう。

「お前は生きろ。そしてその力を新たな国に役立ててほしい」

そして私はシマール国の宝剣をワークハードに手渡し、首を切り易いように前傾の姿勢を取る。

「キルマークよ、すぐに私も逝くぞ」

乱暴者だがあれでも私の弟だ。

あやつは普段威張り散らしているが、その中身は昔と変わらず寂しがり屋なのだなこれが。

いつまでも1人にさせておくのは可哀想だろう。

「どうした？　早く斬れ」

いつまで経っても剣が振り下ろされる感触が無いので、私は目を開けてワークハードを見ると彼は険しい目つきをしてある一点を睨んでいた。

「おい。どうし――」

「そこに隠れている者は出てこい！」

私は戸惑いながらそう尋ねようとするとワークハードは壁に向かって一喝する。

するとしばらく何も異変が見えなかったが突然笑い声が響き、そ

の場所の景色がゆがんで一人の女性が姿を現した。

「よく私の擬態を見破りました、素晴らしいですね」

黒装束と頭巾に隠れているから表情は見えないが、おそらく感嘆しているのだろう。

が、私はそんな相手の些細な表情などどうでもよかった。その女性はまるで冷たい機械のようで、人間味の温かさなど微塵にも感じないことが私に一層の恐怖を湧き立たせる。

「この下郎が、貴様はこの神聖な間に土足で足を踏み入れるとは。せめて名を名乗れ！」

ワークハードがその女性に剣を向けながらそう怒鳴ると女性は腰を深く折ってお辞儀した後に自己紹介を始めた。

「これは申し遅れました。私の名はアイラ＝サファイアブルー＝カザクラ。『林』の主任です。此度は重罪人フォルターを捕えに参りました」

その言葉とともにアイラと名乗る女性から何かが飛んできたがワークハードが防ぐ。

「ひっ！」

一瞬遅れて私の喉から悲鳴が上がる。

もしこれが刺さっていればどうなっていたであろう。

そんな想像が私の頭を侵食し、怯えが満ちていく。

「ふむ、これも塞がれましたか。まあ、良いでしょう。最終的な結果は変わりませんし」

「王よ！　お逃げ下さい！　この場は私が引き受けます！」

ワークハードがそう叫んで応戦するのを確認できると同時に私は憑かれたように玉座の後ろにある秘密の通路に向かう。

嫌だ、死にたくない。

先ほどまであった胆力と誇りはアイラと名乗る女の前で消え去ってしまった。

あの凍りついた瞳を見ていると、無性に生の執着心が湧いてくる。

あれはだめだ。

あれに捕まると悲惨な未来しか待っていない。

私はおそらくこの戦争を始めた元凶として車裂きの刑を公開で行われるだろう。

いや、そうとは限らない。

ここまで国を疲弊させた咎として最も残虐な鋸挽きになる可能性もある。

そうなってしまうのなら私にも考えがある。

どうせ死ぬのなら他の皆も道連れだ。

私はその通路を進んでいくと、途中で何やら色の違うレンガが眼前に登場する。

それは城において最大の急所であり、このレンガをずらすだけで城の重心はバランス失い、崩壊する仕組みとなっていた。

私はゆっくりと手を挙げてその色の違うレンガに手を置く。

「……私が悪いんじゃない、時代だ、他人だ、カザクラだ。そう、私はたまたま運が悪かっただけなのだ」

私はそう呟くと同時にそのレンガを押して外させた。

もう近いうちにここも崩れるだろう。

急がなければ。

「私が悪いんじゃない、私は何もしていない。わたし――」

私は少々掛け足になって進んでいたのだが、慣れない石畳みの上だったので足を取られて滑ってしまい、頭をぶつけてしまう。

すぐに立ち上がろうとしたのだが、変なふうにぶつけたのか体の言うことが聞かない。

このままだと埋もれて死んでしまう。

だから早く動こうとするのだが、私の意志に反して体は全く動かなかった。

天井から埃が落ちてくる。

おそらく崩壊の兆候だろう。

「どうして私がこんな目に会わなくてはならないのか」

と、私が呟くと同時に天井から岩が落下し、私の視界は完全に閉ざされた。

弱者（後書き）

フォルターは悪か善かという2つでは測れない存在だと思います。

受け継いだバトン

「王都、カリギュラスを制圧しました……しかし」

「わかっているアイラ。城は崩れ、街並みの大火事によって見るも無残な姿になったと」

「はい、せめて命令を下したフォルターは捕まえたかったのですが、ワークハードと名乗る者によって妨害されました。現在彼は拘束中です」

「火を止められなかったのか？」

「言い訳になりますがここ数日晴れが続き、乾燥している条件に加え強風が吹いていました。そのため出火場所のいくつかを取り押さえられてもどこか1か所だけでも火が付けばもう終わりでした」

「そうか、それなら仕方ないな」

どっちみちカリギュラスの滅亡は避けられなかったのだろう。そうならばアイラを責めても意味が無い。

カリギュラスの近くにある平原に降り立った俺はアイラからそんな報告を受け取る。

ここにいるのはサラと俺とアイラの3人。

ベアトリクスはイズルガルドに乗ってすでに北へと向かっていた。

本当ならもう少しここで滞在してもよかったのだが、イズルガルドがベアトリクスと少し話をさせてほしいということで彼女だけ乗せて飛び立っていった。

「あいつは泣いていたらしいな」

イズルガルド曰く、ベアトリクスは表面上は何でもない風に振舞っていたが、心の中では泣いていたらしい。

ああいうタイプは決して落ち込んでいる姿を他人には見せないのであの不自然なテンションの高さはおそらくそれを隠すための演技だということになる。

ああいう時ならイズルガルドと話し合った方がいいと俺は思う。

何千年も生きている老竜イズルガルドは俺達人とは比べ物にならないぐらい経験が深いので、きっとベアトリクスを慰めてあげることが出来るだろう。

「アイラ……故郷がなくなったな」

「今の私には関係がありません」

アイラは努めてそっけなくそう返すのだが、普段と比べて僅かに震えていた。

無理もない。

アイラを始めとした浮浪児組はあそこで生まれ、育ってきたのだ。

何かしら思うところがあるのかもしれない。

「何もかも無くなったな」

俺の眼前には血と瓦礫に埋め尽くされた都市がある。

王城が崩れ落ちる瞬間まであの都市はシマール国の兵とジグサリアス王国の兵、そして関係のない市民を巻き込んだ戦いが行われていた。

報告によるとそれは凄惨を極めたらしい。

フォルター王による勅命で都市の住民は事前に逃げ出すことすらできず、何も知らされないまま街中に火を付けたらしい。

炎が街を覆う中、混乱の極致にあった都市での戦闘。

逃げる者、略奪を行う者、戦う者。

そんな三者三様がカリギュラス中で横行していた。

――人間だけだ。人間だけがあそこにいる。カラスもネズミもゴキブリさえもいない中、人間だけがあの灼熱地獄の中で殺し合っていた。

誰の言葉だったか忘れたがそんな一句が脳裏に再生する。

5年前、俺がここに来た際の活気ある街並みはすでに見る影もな

い。

どちらかというとプレイヤー時代に出てくる廃墟カリギュラスに似ている。

これで魔物も出てくれれば完成だな。

魔物が跋扈し、戦死した亡霊が渦巻く都市――カリギュラス。

皮肉にもその原因を作ったのが未来を知っているこの俺ということだから滑稽だ。

１００万人を擁した都市は火で包まれ、生き残った民はその１割もない。

お互いの兵を合わせて約１００万人分の怨念があそこに渦巻いていることとなる。

「あの王城には宝が眠っているかもしれませんね」

「じゃあ取りに行ってみるか？」

あの火事によって運び出せた街の財宝も少なく、王城の宝に至ってはほとんど手を付けられていない。運が良ければ一攫千金の宝に出会えるかもしれない、が。

「御冗談を。あんな場所へのこのこと出向けばゾンビに食い殺されるのがオチです」

アイラの答えの通り、あそこは殺された者の怨念が溜まっている

ので、もうしばらくすれば死体が動き始めて宝を探すどころか歩くことさえ困難になるだろう。

まあ、今から処置すればそんなことになどならないが俺はあえて放置する。

あそこは俺が知っている知識によると最難関に近い魔物の巣窟となっている。

そうなら俺は何もしない方がいいだろう。

「まあ、処置するにしてもたった４ヶ月ではあれを鎮めることなど不可能だしな」

あと４ヶ月後に魔物大侵攻が起こるので、今はそこに手を加えることはできない。

幸いにも亡霊はあの場に留まり続けるので、こちらに影響することはないだろう。

ならばカリギュラスは冒険者のために置いておこうか。

「しかし、アイラなら大丈夫だろう」

だから俺は茶目っ気たっぷりにそう返すとアイラは首をすくめて。

「人はともかく魔物はまた別の感覚を持っていますからね。それに数が多すぎます、あのゾンビによる包囲網を掻い潜れる自信がありません」

「それは残念。ならキッカはどうかな？　あいつなら喜んで向かおうと思うが」

「キッカは肝試しすら全力で否定するほど怖いものが大の苦手ですから絶対行こうとしないでしょう。ユウキ様が光属性の装備を作って出向けばどうです？」

アイラがそう振ってきたので俺は手を振りながら苦笑する。

確かに光属性はゾンビに有効だが、カリギュラスのようにあそこまで死体と亡霊が溢れる場所だと光属性の効果が半減してしまう。

王城の中には目もくらむような宝が眠っているかもしれないが、そこまでたどり着くまでにどれだけの怨霊やゾンビを相手にしなければならないのか見当もつかない。

一体一体はともかく数がな。

１００万人を相手にするのはさすがに……な。

それに兵士の死体は一般人の死体と違ってまた一段と強いし。

確かに廃墟カリギュラスは上級者向けだよ。

「ねえ、お父さんとお母さんは無事かな」

サラがアイラに向かって発した言葉に俺は顔が硬直してしまう。

「あんな大火事があって心配だから会いたいのだけど、会えるかな？」

その無邪気な問いにさすがのアイラでさえもどう答えていいのか分からないようだ。

どう伝えるべきか迷っているように見える。

「サラ様、実は――」

「サラの両親は行方不明だ」

だから俺はアイラの声を遮ってそう述べる。

「『林』の部隊がサラの両親を保護しようと両親がいる店へ向かったのだが、すでに両親はいなかった」

その非情とも言える答えにサラがみるみる血の気を失っていく。

「え……つまり」

「まだ決まったわけではない。今避難させている民の中にサラの両親がいるかもしれない」

「うん、そっか。そうだよね。お父さんとお母さんが死ぬわけないもんね」

サラは自分に言い聞かせるように「大丈夫」を繰り返す。

それはまるで自分に暗示をかけているように見えてしまう。

「ユウキ様……」

アイラが何とも言えない視線を向けているにはわけがあった。

――言えるわけがない。

サラの両親は俺が反逆罪を掛けられた際にはすでに捕えられていたことを。

シマール国はサラに叛意を促す内容をしきりに宣伝していたが、その情報がサラの耳に入る前に俺とアイラで全て握り潰していたのでサラは両親が捕らえられたことすらも知らなかった。

――言えるわけがない。

貴族連合を撃退した際、サラの両親は見せしめとして公開処刑されていたことを。

多くの仲間を失った彼らは敗戦の鬱憤を晴らすために俺と関係のあった人を問答無用に捕えて拷問にかけた。そしてその最たる者がサラの両親として面前で両親ともども車裂きの刑に処したことだった。

――言えるわけがない！

2人は泣き言恨み言を漏らさず！　最後まで俺の正義を訴えていたことを！

アイラはサラの両親を事前に救い出そうとしたが、2人から頑強

に拒まれたらしい。

曰く、「この老いぼれの2人の生などどうでもいい。それよりも私達の死に様によってユウキ殿の正しさを証明し、国の腐敗を糾弾する」と。

もちろんアイラは問答無用で2人を連れ出そうとしたが、大声をあげられてしまったのでやむなく撤退したそうだ。

「ジドさん、俺はあなたにどう報いればいい？」

思い起こすのは3年前。

ジドさんとサラについて怒鳴りあったことがまざまざと思い浮かぶ。

もっと教えてほしかった。

たった一人で家を支え、家族を守ってきたジドさんに聞きたかった。

俺は今、ジドさんと同じ国を支え、国民を守る義務がある。

規模こそ違えど、一国一城の主であったジドさんはどうしてあんなに強かったのか教えてほしかった。

「……まあ、後悔しても仕方ないよな」

俺はそう割り切った後、サラを見る。

サラはまだブツブツと自己暗示をかけているようだ。

「偽善かもしれないがお前は必ず守るから」

俺がそう声をかけても返事すらしない世界にサラは没頭していた。

その儚く、壊れそうな様子から俺はますますジドさんのことを思い浮かべる。

ジドさんは俺にサラを託してくれた。

なら、俺はそれに応えることがジドさんへの手向けとなるだろう。

「……アイラ、しばらく2人にしてほしい」

アイラは少し眉を上げたものの、軽くうなずいて姿を消す。

俺はサラが自己暗示から復活するまでずっと傍にいた。

受け継いだバトン（後書き）

己の文章表現のなさをここまで恨めしいと痛感したことはありませんでした。

将来の布石

私、エルファ＝ララフルは主が市民だった頃は主の身の回りの世話をしていましたが、最近はバルティア皇国の皇女であるシクラリス様の傍にいることが多いです。

まあ、やることといっても彼女の監視の他にお茶を汲んだりスケジュールを確認する程度なので、専門教育を受けていない私でもできることです。

が、私の今の職場はおそらく体力がないとキツイでしょう。

なぜなら……

「レア！　ジグサールに移住を希望している集団の処置をお願い！」

「またですか！　ああもう、どうして次から次に！　ヒュエテルさん！　すぐに担当の者に取り次いで！」

「ちょっと待ってください！　私を含めて官吏全員が一杯一杯なのです！　これ以上は無理です！　ティータさん！　何とか上手いこと話して引き下がらせて頂戴！」

「はあ？　またぁ！　なんで私はそういった損な役回りばっかりなのよ！　この前も宥めるのに命の危険を感じたのよ！」

「大変ですね～」

私と黒いメイド服と対照的な純白のメイド服に身を包んだシクラ

リス様がのほほんと仰る通り、このジグサールの政の中枢はご覧のとおり戦争状態です。

シマール国、リーザリオ帝国そしてバルティア皇国を併呑したジグサリアス王国は領土が以前と比べ物にならないほど拡大したため、その処置にてんてこ舞いです。

何かもうシクラリス様を除いて下級官吏を含めた全員の眼が血走っています。

あまりの仕事の多さに逃亡する官吏が後を絶たないため、『林』が官吏を監視及び逃亡した者の捕縛を行っています。

……隠密部隊である『林』の使い方を間違っていると感じているのは私だけでしょうか。

「エルファさん、お茶をありがとうございます」

私が汲んだお茶を両手で受け取って上品に飲むシクラリス様。

もちろん他の者も一緒に汲んでいますが、全員飲む暇すら惜しいという状態ですのでお茶がすでに冷めきっています。

シクラリス様は何もしていないように見えますが、実はしっかりと仕事をしています。

彼女は何かを発信するというよりかは受信する方なので、全体を俯瞰することに向いていますので、各部署から送られてきた書類をチェックする役目を持っています。

それに参謀のベアトリクス様と主の名代のヴィヴィアン様はよく衝突しますので、それの仲介役としても一役買っています。

他人に指図されたくないベアトリクス様と主の妻であることを振りかざすヴィヴィアン様。

本来なら参謀であるベアトリクス様は主の名代であるのヴィヴィアン様の命令に逆らえないはずなのですが、ヴィヴィアン様が主の妻となった軌跡が複雑なため、素直に従いません。

私から見ればどちらも亡国の王女なのですから同じだと考えているのですが、当人同士だと違うようです。

そして、その果てない争いを止めるのがシクラリス様。

あまり自分から意見を発することが少ないシクラリス様は意見しか発しない2人の間に立って諌めてくれます。

水と油の関係である2人をなだめることのできるシクラリス様は洗剤のような方だと思います。

閑話休題。

「フィーナさん。これだとレアさんの計画に支障が出るから書き直しね」

「またあ～！！」

提出した計画書を笑顔で突き返されて絶望の悲鳴を上げるフィーナ様。

何というか、判断を下す際のシクラリス様は容赦がありません。

どれだけ訴えても笑顔で切り捨てるのです。

ですので官吏からはシクラリス様を陰で闇魔大王様と呼んでいるそうです。

他の3人も心当たりがあるのか同情の視線をフィーナ様に向けていたのが印象的です。

「はいはい、みんな頑張って。これはご主人様の構想の礎になるのよ」

シクラリス様が笑顔でそう述べますが、それは嘘ではありません。

ある時、主はベアトリクス様とヴィヴィアン様を含んだ私達にある計画書を見せてもらいました。

「いつかは実行に移したいな」と笑いながら渡してきた内容は驚くべきものだったのです。

それは従来の統治法を覆す代物でした。

いくつかを思い出します。

まず一つが文官と武官の給料の待遇についてです。

両方とも基本的に担当している地域から入る租税の内から何%を給料として配布するのですが、ジグサールに勤めている官はそこか

らさらに各地から集めた税からも上乗せされます。

地方によっては3倍以上の差がつくのですが、この計画書によるとそう中央官吏の懐に入ることはありません。

何故ならば交通費や出張に伴うお金は全て自腹であり、基本接待は禁止、やむを得ず受けた場合でもいつ、どこで、誰とやったかの報告を義務付けています。

さらに中央官吏は主の方針で頻繁に地方へ査察に行かせるので、ほとんどの者が上乗せされた分を使い切ることになっています。

と、言っても専用馬車でなく共同馬車を使用したり、宿も高級なものでなく一般的な宿を利用すれば結構懐に残るのは事実ですから、要は使いようということです。

傍から見ると相当厳しいように見えますが、そうやって中央官吏が一般人と同じ視点に立つことによって組織の硬直や腐敗を防ぐことになるそうです。

主はよく「自分は特別だと錯覚した瞬間から堕落は始まるんだ」と仰っていました。

もしこの方法が上手くいけば官吏の腐敗は無くなると容易に想像が出来ます。

次が参勤交代

主が仰る参勤交代の意味がよくわかりませんが、領地を治める貴族の跡取りは必ずジグサールに過ごさせることを義務付け、領主は

1年ごとに領地とジグサールを往復するということです。

そうなると領主がいない際に誰が領地を守るのかと問われると、そこは中央から派遣した武官が地方の武官と連携して指揮を執り、普段の管理は中央官吏を中心にして行います。

こうすることによって領主に大量のお金を消費させると同時に中央の威光を端から端まで行き渡らせることが出来るのです。

そして最後が楽市楽座。

これは大陸を斡旋している商業組合の干渉を受けないというのが目的で。彼らの独占を防ぐことにより経済を活性化させて物の流通を良くするそうです。

このご時世では、商人による組合が物流を管理していますから物の値段も私達が決められないのです。しかし、もしこの楽市楽座というものが成功すればその組合から解放されるでしょう。

他にもいくつかあったのですが、私が辛うじて理解できたのが以上の3つです。

そして、それらの構想は現在は残念ながら私達に従わない国があるので実現できません。

上に対して厳しすぎるので、優秀な人材が他国へ流れやすくなる弊害があるのです。

しかし、この大陸を全て統治下に置いた時、これらの方法が真価を発揮します。

その３つだけを実行するだけでも官吏の腐敗を防ぎ、領主から反乱の芽を削ぎ、商人から力を削ぐことができ、ますます国が精強になります。

この広大な大陸を治めるのだとすれば主が示した方法ほど有効な統治手段があるはずもありません。

そして、大陸全てを統一し、主が構想している内容を全て実行できたのならそれは千年国――

いえ、止めましょう。

私は一介のメイドなのです。

１００年や１０００年先の未来など考える必要はないのです。

これらの計画を聞いた時、私やレア様など大多数がそうやって心を閉ざしましたが、三国の王女は想像できたようです。

ベアトリクス様は狂ったように哄笑して主に跪き、ヴィヴィアン様は「さすが私の夫だ」と感激しながら抱きついてシクラリス様はその先に想いを馳せていました。

一体主は何者なのでしょう。

誰もが夢を見る大陸統一どころか、夢を見ることすら叶わないその先について現実的に考えることが出来るのはもはや狂人の域です。

出会った頃は主に対して主らしく振舞ってもらおうと考えていま

したが、それは誤ちでした。

主は私如きの想像出来る範囲にいなかったのです。

私に理解できないものを理解できる範囲まで落とそうとしたのはなんて滑稽か。

今、振り返るとあの時の自分を殴ってやりたくなります。

周りを見渡すと、皆は怒鳴り叫びながらも決して投げ出そうとしていません。

それは主の構想を理解できないにしても、その先を見たいからなのでしょう。

「主よ、あなたは私達をどこへ連れて行くのですか?」

ふと、そんな呟きが私の口から洩れていきました。

将来の布石（後書き）

これで間章は終わりです。
ありがとうございました。

そして、内政に関するアイディアを頂いたｙｕｕｍａ様に感謝を。

神の見えざる手（前書き）

はい、ここからが最終章です。

神の見えざる手

未来が分かっているのはどこか滑稽だ。

後数日後には魔物大侵攻が始まるというのに、俺を含めた人間というのは目の先の出来事に精一杯なのだから。

少し冷静になってみれば魔物の様子がおかしいことに気づくだろう。

このジグサリアス王国では魔物を徹底的に刈っていたから少ないにしろ、他国でも魔物の被害が去年と比べて激減している。

津波が来る前に潮が引くというかいう兆候にいったい何人が気づいているのか。

「まあ、そんなことを考えても仕方ないな」

玉座に座って眼前に重臣を揃えている俺はそう溜息を吐いた。

「我が君。余裕ですね、各国が反ジグサリアス同盟を結成したというのに」

ベアトリクスが俺の溜息を見咎めて酷薄そうに言ってくる。

「いやな、人の愚かさについて少し考えていたところだ」

シマール国、リーザリオ帝国そしてバルティア皇国の三国を併呑させたジグサリアス王国はこのユーカリア大陸で最大の国となった。

そして、浮浪児から王にまで上り詰めた俺を脅威と捉えた各国は危機感を抱き、長年憎み争っていた国々でさえも一時休戦して同盟を結んだ。

その同盟の名を反ジグサリアス同盟。

卑賤な輩の侵略から守るための同盟だというのだ。

「そこまで俺を敵視する理由はなんだろうな」

謀略によって濡れ衣を着せられたものの、俺は変なことをしていないと断言できる。政治に対してもそんなに横暴な態度を取っていないのにどうしてここまで俺を嫌うのか。

「簡単だ、夫よ。各国の王は恐れているのだ」

「何にだ？　ヴィヴィアン」

俺が振るとヴィヴィアンは唇をゆがめて。

「最底辺の者が最高にまで上り詰めたことによる自分達の常識では推し量ることの出来ない事実に皆は恐れているのだ。浮浪児が市民になるのはわかる、そして貴族が下剋上によって王にとって代わるのもまだ理解できる。しかし、浮浪児から王にまで上り詰めたのは夫ただ一人だ。つまり、各国の王は前人未到の域に立った夫に恐怖を持っているのだ」

「何て迷惑な」

俺は何もしていないのにも関わらず向こうが勝手に敵視してくるのはしんどい。

「なあ、こちらから不戦の使者を送れないか？　俺は各国を侵略する意思はないということを伝えれば少なくともこの包囲網を緩めることができるのでは」

その提案に首を振るのはシクラリス。

「無理でしょう。各国の王はご主人様の行動ではなく、その存在を恐れているのです。あの同盟は自分達の物差しで測れないご主人様を消し去るということによって一致団結しているので、向こうが包囲網を緩める時はご主人様の身命はおろかその功績も跡形もなく消し去った後でしょうね」

どうやら俺は存在自体許されないらしい。

その事実に溜息しか出てこない。

「で、どうするの？　我が君。このまま包囲網が完成するのを指を咥えて眺めているつもり？」

愉しそうに聞く様子からベアトリクスは先制攻撃を仕掛けたいのだろう。

が、俺はその進言に手を振って「もう少し待て」と答える。

「夫よ、相手の攻撃を待つというのは感心しないぞ」

ヴィヴィアンがそう口を尖らせるが俺は相手にしない。

「とにかく、後数日待て。そうすれば全てが分かる」

魔物大侵攻が起こると言っても誰も信じてくれないのであやふやな言葉で終わらせるのだが、意外に誰も文句を言ってこなかった。

「そうですか、ご主人様がそう仰るのであれば従いましょう。凡人である私達にはご主人様の考えなど理解できるはずもありませんから」

シクラリスの言葉に他の者も頷いていることからどうやら俺は神格化されていたらしい。

俺は神じゃないので否定しようと一瞬考えたが、こちらの言うことを聞いてくれるのならそれでいいと思い直して会議は終了した。

数日後

ここまで予想通りだと恐ろしくなるな。

俺が目論んだ通りにこのユーカリア大陸全土で魔物の大侵攻が始まり、すでに幾つかの国も陥落しているという報告が入ってきた。

どうして営々と築いてきた人の都市がここまであっさりと崩れ去るのか。

その理由は簡単で、人間よりも魔物の方が数も力量も多いからだ。

だが、そうにも拘らず人間が魔物を追いやって繁栄を築いてきたのは偏に団結し、組織立った行動を得意としていた点である。

魔物は数こそ多いもののその種類は膨大であり、それらが団結することなどありはしない。

が、もし魔物が団結したらどうなるのか。

その答えが今、現実に起こっている出来事だった。

「で、シクラリス。国内の被害状況は？」

この前代未聞の事態に眼前に揃った皆は心なしか緊張しているように見える。

「はい。先日発生した魔物による侵攻の件ですが、事前に国内の魔物を重点的に殲滅していたこともあり辺境にある村のいくつかは滅ぼされたものの、都市レベルだと被害は軽微です」

「ベアトリクス、軍の損耗率は」

「『風』と『火』の損害は皆無ね。ただ、『山』はそれなりの被害を受けているけど全体には影響がないわ」

「ヴィヴィアン、各国の状況は」

「突然の出来事に同盟は崩壊。各国とも魔物の処理に奔走しているのでこちらにまで手が回らないみたい」

それらの行動を聞いて俺は一安心する。

こういっては何だが、もし魔物大侵攻が起こらなければどうしようとビクビクしていたのだ。

さて、これで当面の危機は回避された。

後は勇者が魔王を倒すまで治安の維持を図ろうか。

「さて、フィーナ。キーツ王国はどうなっている？」

あそこは勇者が生まれた国。

魔物になど襲われていないだろうが一応聞いておこう。

が、フィーナの言葉は俺の予想と外れていた。

「キーツ王国は魔物によって存亡の危機よ。同盟国も手を差し出さない様子だから近いうちに滅びるんじゃないかしら」

「……は？」

俺は間抜けな声を上げてしまう。

おい、キーツ王国が滅びたら勇者はどうなるんだ。彼しか魔王を殺せないのだぞ。

「ラブレサック教国はどうなっている？」

勇者を影から支えた国で、世界宗教の宗教国家ラブレサックは何をしているのか。かの国の聖女は勇者のお供をしたのだぞ。

「あそこは聖女派と枢密派で内戦状態。各々の派閥がある国や都市に軍隊を送ろうと紛糾しているから関係ない他の国なんてどうでもいいみたい」

いったい何をしている。

今はそんなことなどどうでもいいだろう。

「他国はその2国を介入するそぶりはないのか」

「残念ながら他国に干渉できるほど余裕のある国はこのジグサリアス王国にしかないわよ」

魔物大侵攻を起こした魔王を倒すはずの国は亡国の危機やら内乱状態に陥っている。

そして、それを救えるのはこのジグサリアス王国だけ。

この2つから推測できることは。

……

……そうか

そういうことか。

ずっと疑問に感じつつも蓋をしていたが、どうして俺がここに飛ばされたのようやく納得がいった。

「すまない、少々席を外す。すぐに戻るから会議を続けていてくれ」

俺はそう断って一人自室へと向かい、鍵をかけた。

完全防音のこの部屋はここで大砲を鳴らしても外側では聞こえないほど完璧な作りとなっている。

そこで、俺は大きく息を吸い、怒鳴り始めた。

「神よ！　何故あなたは俺を選んだ！」

たった一人しかいないこの部屋で俺は呪詛を吐き続ける。

「俺は単なるゲーム好きの高校2年生だった！　どこにでもいる普通の人間だ！　俺よりゲームにのめり込んでいる者はたくさんいる！　俺より賢い人間もそうだ！　なのに！　何故！　俺をこの世界に飛ばした！」

力の限り叫ぶがもちろん返ってくる返事はなく、俺はただ虚空に向かって叫んでいた。

「神よ！　俺はあなたを恨む！　日本に帰せ！　人生を返せ！　時間！　友人！　趣味！　両親！　俺から奪っていったものを全てか……ごほっ！？」

これほど大声を出したからだろう俺の肺は空っぽになり、脳が酸欠状態に陥って視界が歪み、たまらず俺は両膝をつく。

「……分かっているよ」

両膝どころか両肘そして額を地面に擦り付けながら俺は呟く。

不思議なことに先ほどまで荒れ狂っていた理不尽からくる怒りの感情はどこかへと消えていた。

「俺にしかできなかったのだろう？」

俺でなければキッカ達４人を仲間に加えなかったし、冒険者ではなく、市民として根を生やすこともなかった。貴族として領地を富ませることも王として領土をここまで大きくするにはこの火桜優喜しか出来なかったのだろう。

腹立たしいがこれまでの軌跡を振り返ると、俺の目に見えない形で神が手を貸していた確信がますます深まる。

姿も影も、匂いすら感じられないが神は実在するという説を信じてしまう俺がここにいる。

「……分かったよ」

神の思い通りに動くのは癪に障るが、かといって俺についてきた皆――キッカやアイラ、ユキ、クロス、ティータさん、ヒュエテルさん、サラ、エルファ、レア、フィーナ、ククルス、オーラ、ミア、レオナ、エレナ子爵、キリング、ベアトリクス、ヴィヴィアン、シクラリスを見捨てるわけにはいかない。

彼女達のことを想うと神に対する反逆の意志など消えてしまう。

「まあ、いいか」

このままだとこの大陸は魔物に侵略されて終わる。

それを防ぐために神は俺をこの世界に呼び寄せたのだろう。

勇者が魔王を倒すための環境を整えさせたいのだろう。

「やってやるか」

俺は立ち上がり、頭を振って思考を切り替えてこれからやることについて計画を立てる。

少なくともキーツ王国に救援を送るのは必須。

ラブレサック教国も聖女派に味方しなければならない。

そして、現在から魔王が殺される8年後まで、これ以上の侵略を防ぐために大同盟の結成もしよう。

「ジグサリアス王国が盟主だと各国が躊躇するかもしれないから、ラブレサック教国を表に立てるか」

他にも勇者の仲間となった人物を確保し、成長させる手順を整える。

このままだと人間の歴史は終わる。

それを避け、これから先も人間の歴史を続けさせるために俺は歴史の欠片となろうじゃないか。

俺は上を向き、そう誓った。

神の見えざる手（後書き）

ようやく神を登場させることができました。

このような類の神もいいかなと思っています。

番外編　余計な奇跡（前書き）

とりあえず思いついたから書きました。

番外編　余計な奇跡

神様とやらは奇跡を起こす存在だが時には要らん奇跡も起こしてくる。

俺が総勢１８人との女性と関係を持っている。

それゆえに出来てしまう可能性があるのだが、ここで神は本当に余計なことをしてくれた。

そりゃあ俺だって子供を欲しいと考えたことはあるよ。

俺は王という立場だからその意味も含めてそういう前提で行ったこともある。

けどな、神様よ。

何で１８人全員を同時期に懐妊させるんだよ。

しかも全員女の子というオマケ付き。

そしていつの間にかティータさんもレオナもその中に入っていたし、レアとフィーナは双子だったし。

おかげジグサリアス王国の中枢部が全員産休を取ってしまい、えらいことになってしまった。

いやあ、あの危機をどうやって乗り越えんたんだろ。

全く覚えていないや。

閑話休題

とにかく、俺は一気に２０児のパパという「どこのビッグダディ？」と問いかけたくなるような立場になってしまったわけだ。

俺は神にこう言いたい。

頼むから変なことだけはしないでくれ。

俺は何の気なしに自室で政務に勤しんでいると扉が開き、２歳ぐらいの銀色の髪の毛をした幼女が危なっかしいトテトテとこちらに向かってきた。

「危ないな」

俺はその幼女に心当たりがあったので筆を止めて幼女の元へ向かい、そして抱き上げる。

キャッキャと綺麗な笑顔で笑うのが印象的である。

「……カトリーナの母親もこれぐらい純粋であればなあ」

この銀髪の幼女はベアトリクスの子である。

あの悪魔が産んだ子にしてはどうも純粋すぎるので他の者は「他の子と取り換えたのではないか」と疑っているらしい。

「夫よ、何をしている？」

カトリーナを高い高いしてしばらく遊んでいるとそう険のある声音でそう呼ばれたのでそちらを向くと俺の妻であるヴィヴィアンがビアンカを抱いて部屋へと入ってきていた。

「いや、カトリーナが勝手に部屋へと入ってきてな。構ってほしそうだったから遊んでいた所だ」

隠しても仕方ないので正直に話すと、ヴィヴィアンは不満そうに口を尖らせて。

「その暇があるのなら私の子と遊んでやってほしい。ビアンカは昨夜父に会いたいと泣いていたんだぞ」

そう言ってずいとビアンカを俺に差し出してくるヴィヴィアン。

そのやきもち焼きな様子に俺は苦笑してカトリーナを降ろそうとしたが、その気配を察知したカトリーナは俺の両手を精一杯掴む。

「やっ」

その可愛らしい否定にクラッときた俺を責められる者は誰もいないだろう。

しかし、俺は心を鬼にして。

「ごめんなカトリーナ、次はビアンカの番なんだよ」

そう優しく説き伏せるのだがカトリーナは2歳ゆえなのか一向に放そうとしない。

「やっ、ヴィヴィアンおばさん、いや」

「おば……」

カトリーナの口から出た言葉に表情を硬直させるヴィヴィアン。

「おいおいカトリーナ、ヴィヴィアンはお姉さんだろ」

まだ正気に戻らないヴィヴィアンの代わりに苦笑しながらそう述べる俺。

が、カトリーナは俺の言っている意味が分からないらしく、可愛く首を傾げた。

「えーと、だからね。ヴィヴィアンは――」

「おばさんであっているわよカトリーナ」

ここでまた俺の部屋に乱入者登場。

その姿は儚く、消えてしまいそうな脆さを持っているがその中身は邪悪そのものだ。

「べ～ア～ト～リ～ク～ス～！！」

地獄の底から響いてくるような声音を発するのはヴィヴィアン。

まるで般若の如き表情をしている。

「あんた子供に何てことを教えているのよ！」

ヴィヴィアンは烈火の如く怒るのだがベアトリクスは涼しい顔で。

「あら、それならＢＢＡの方が良かったかしら？」

何てことをのたまうのでますますヴィヴィアンの怒りに油を注いだ。

おい、そろそろやめておけ。

カトリーナもビアンカも2人を怖がって俺の後ろに隠れているぞ。

「あらあら、大変ですね」

この事態をどうやって納めようかと悩んでいると今度はシクラリスが部屋へと入ってきた。

「ああ、ちょうど良かった。あの2人を止めてくれ」

俺がこれまでの経緯を説明するとシクラリスは分かりましたとばかりに頷く。

「ではご主人様。私はベアトリクスとヴィヴィアンを宥めますので、その間はこのシャルロットの面倒を見て下さい」

……はい？

俺が聞き返すより先にシクラリスは俺にシャルロットを渡し、自分はさっさと2人の間に入っていった。

そして後に残るのは俺とシャルロットとカトリーナとビアンカ。

「……はあ、仕方ないか」

ビアンカとカトリーナが「ズルイズルイ」と言いながら俺の周りを回っているのを横目に俺はシャルロットを肩車した。

番外編　余計な奇跡（後書き）

本当なら他も登場させたかったのですが、ネタが思い浮かびませんでした。

その器、まだ未熟なり

あれから3年の月日が過ぎた。

俺が下したあの決断が正しかったのかどうか分からないが、少なくとも世界の延命は図ることが出来た。

魔物大侵攻によって大陸人口の半分は削られてしまったが、それで済せることができたのは誇るべき点だろう。

と、言ってもユーカリア大陸の西側諸国はすでに壊滅的であり、魔物の領域はじわじわと東へと侵食していってるのだから安心するにはまだ早いがな。

表向きはラブレサック教国がトップなのだが、それを信じている者は余程傾倒した信者しかいなく、奴隷や浮浪者であってもこの大同盟の実質的トップというのが知れ渡っていた。

まあ、浮浪児だった俺がそんな立場にいることを快く思わない王もいるにはいるのだが、それを表だって言うことが出来ないのだが現状だ。

何故なら、ジグサリアス王国が同盟に動いたからこそここまでの被害で抑えられることができたのは周知の事実なのだから。

そして俺は今、ジグサールで何をしていたかというと。

「おお、勇者よ。死んでしまうとは情けない」

「勝手に殺すな！　そして俺はまだ負けてねえ！」

魔王を打ち倒すはずの勇者――カルベルト＝キーツ＝ダルムンクがクロスにボコボコにされたので、その屍に向かってそう言い放っていた。

１５歳の少年らしい体つきで、筋肉はそれほども無いのだから負けて当たり前だが、それでもそのことを言い訳にしない。

金色の髪と碧眼であり、全体的に整った顔つきからクールな要望を見せるが、その中身は熱く、負けず嫌いな性格をしている。

カルベルトはミドルネームに王国名が入っている通り、キーツ王国の王族である。

キーツ王国は森林が豊かな国で、年間多くの観光客が訪れる国だった。

そして、永世中立を誓っているので反ジグサリアス同盟に参加しなかった数少ない国でもある。

どの同盟に組みせず、ずっと中立を保ち続けることが出来るのは、偏にキーツ王国の王族のみが持つ力ゆえである。

これは不可思議な力で、火や風など7大属性のどれにも属さない属性を操ることが出来る代物だ。

その属性をあえて呼ぶなら『天』だろう。

その力は絶大で、昔侵略してきたある国の軍をたった一人で壊滅

させた事例もある。

『天』を現代風に表すと核兵器だな。

その威力の前には万物が塵芥となり、大地を砕き、海を割り、そして天空さえもその形を変えるという。

その圧倒的な力を持つがゆえにキーツ王国には厳しい戒律があり、さらにどの国からの侵略も侵攻もすることがなかった。

まあ、それでも負ける時は負けるんだがな。

今回の魔物大侵攻によってカルベルト以外の王族は助けられなかったのだから。

本当に組織だった行動というのは恐ろしいと感じる。

「くそっ、もう一回だ。俺はまだ負けていない！」

すでに体中痣だらけな上に肩で息している様子から、もう限界近いことは分かるのだがそれでもクロスと手合わせを願う。

「ええと、どうするユウキ？」

クロスもこれ以上相手にしても時間と労力の無駄だと分かっているのだが、この闘志溢れるカルベルトを前にすると中止と言えないようだ。

だから俺はため息をつきながらカルベルトの肩に手を置いて。

「今日は終わりだ。次の訓練はまた明日にしてくれ」

そう簡潔に述べる。

無論カルベルトは反対するが、俺が少しカルベルトの肩を強く握ると彼は顔を歪めて剣を取り落とした。

「ほら、もう体も無理だって悲鳴を上げているだろ。体を壊さない内にもう休め」

が、カルベルトは首を振って「まだやれる」と繰り返す。

どうしてここまで執着するのかというと、それは両親の復讐からきている。

魔物は『天』の恐ろしさを知っていたのか分からないが、魔物大侵攻の際においてキーツ王国は重点的に攻められていた。

救援に赴く際、これまでの戦いにおいて無傷であった『風』や『火』からも死傷者が出たことから、如何にキーツ王国の救援が苛烈な戦いだったのか分かるだろう。

ここから先はキッカの報告だが、キーツ王国の王族は長男であるカルベルトをこちらに任し、残りの王族はキッカ達の囮として残って最後まで戦ったらしい。

カルベルトは両親と妹の肉親3人を失って孤独の身となった辛さを俺には想像できない。

だからこそカルベルトは俺やクロスの言うことなど耳を貸そうと

しないのだろう。

仕方ない。

こういう時は彼女に任せるか。

俺は近くにいた衛兵を呼び寄せようとしたのだが、それより先に目的の彼女がこちらへ走って向かって来ていた。

その少女は１４歳なのだが、全体的にスラッと伸びており、ショートカットにした赤い髪や少し鋭い目つきから実際より年上に見える。その少女は瞳に怒りを浮かべて。

「ああ、ちょうど良かったメイア。カルベルトをと――」

「何やってんのこのバカが！」

俺がその先を続ける前にその少女――メイア＝ジャグリング＝アルガンはカルベルトにドロップキックを放った。

突然の出来事にカルベルトは受け身も取れず、もんどりうって転がる。

「あんたはまた恩人に迷惑をかけているわね！　もう少し自分の力量を鑑みなさい！　しかもそんなボロボロの状態で頑張っても他人に迷惑を掛けるだけよ！　それとも何？　俺はこんなに頑張っているんだぞっていう自己アピール？　はっ、下らない。盟主や大将軍に迷惑だからさっさと去りなさい！」

流れる様に捲し立てるのはカルベルトの幼馴染であるメイア。

「う、煩いメイア。お前に俺の気持ちが分かるも――」

「分かっているわよ。私だって両親や兄を殺されたのよ。何もできない無力さなんて嫌というほど理解しているわ」

カルベルトは痛む箇所を摩りながらそう反論しようとしたが、それより先にメイアが声のトーンを落としてそう呟く。

メイアの家はキーツ王国の侯爵であり、小さい頃からカルベルトと付き合っていた間柄である。

そして、メイアの両親もカルベルトの両親と同じくキッカ達を逃すために最後まで残って闘っていた。

そしてメイアはカルベルトの前に跪き、その頬に手を当てて。

「カルベルトはキーツ王国の希望なの。死んでいった者が今のカルベルトを見たらどう思う？　そんな自分を痛めつけているのを見てもお父さんやお母さん、そして妹も悲しむわ」

俺やクロスが何を言ってもカルベルトは聞かないが、同じ経験をしたメイアの意見は聞く。

メイアの言葉によって冷静さを取り戻したカルベルトはゆっくりと立ち上がり、俺とクロスに頭を下げた後、闘技場を去って行った。

「……悪いな、メイア」

カルベルトを押し止めたメイアに俺はそう礼を述べる。

「いえ、むしろこちらが謝らなければなりません。申し訳ありません盟主様。カルベルトは3年前のあの一件によって人が変わってしまいました。本当は心優しい人なんです。今はただ復讐に囚われているからあんな――」

「安心しろ、分かっているから」

メイアの弁解を俺は手を振ることで終わらせる。

「12歳という多感な時期に肉親を失えば誰だってああ言う風になるだろう。まあ、3年経っても一向に収まる気配が無いのは心配だが、俺はあまり気にしていないから心配するな」

俺の言葉でメイアはホッと安心した。

このまましんみりするのもあれなので俺は話題を変える。

「そちらはどうだ？　聞くところによるとルール将軍と打ち合っていたそうだが、その感想は？」

「まだまだですよ。まだ10本中3本しか取れません」

あっけらかんとそう答えるメイアだが、実際にやっていることは笑えない。

ルール将軍は元リーザリオ帝国の勇猛な将軍だったがゆえに、その力量も侮れない。

その実力はクロスと同程度なので、簡単に考えてもメイアはクロ

スと闘っても１０本中３本は取れる計算になる。

ちなみにカルベルトはクロスから一本取るどころか利き腕でない左手一本で相手にしていることから、メイアの実力というものが分かるだろう。

まあ、メイアはカルベルトの剣として活躍していたからそれぐらいの力はあるだろうな。

「カルベルトはあんなに頑張らなくても私が守ってあげるのに」

そんなことを呟くメイアだが、俺からするとメイアが強すぎるからカルベルトはムキになるのだろう。

俺はもう慣れたから何とも思わないが、やはり年頃の年齢としては女に守られるというのは耐えられないのだな。

カルベルトの本来の役目は剣を持って戦う兵士でなく、敵の軍団を殲滅させる戦略的兵器なのだからメイアと張り合う意味はないのだけど、やはり男としてのプライドが邪魔をしている。

「それにしても、どうしてカルベルトはあんなに自分を酷使するのでしょうか」

それはメイアが強すぎてカルベルトに立つ背が無いからだよ。

とはもちろん言えなく、腕を組んで唸っているメイアを俺とクロスは何とも言えない目で見守っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4709w/

ゲームの世界で第二の人生！？

2011年12月17日11時23分発行